

大阪市

大坂城跡 5

大手前立体駐車場建設工事に伴う大坂城跡発掘調査報告書

2015年3月

公益財団法人 大阪府文化財センター

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第254集

大阪市

大坂城跡 5

大手前立体駐車場建設工事に伴う大坂城跡発掘調査報告書

公益財団法人 大阪府文化財センター



1 調査地から大阪城を望む



2 2区 徳川初期の鑛冶炉



3 大坂夏の陣で焼けた瓦



4 大坂夏の陣で焼けた壁材、陶磁器他

序 文

1615年、大坂夏の陣から400年を迎えます。

「三国無双の城」と称えられ、秀吉の栄華の象徴ともいえる大坂城がついに陥落、徳川幕府によって、地中深くに眠ることとなります。

秀吉の大坂城が姿を現したのは昭和34(1959)年、「大坂城総合学術調査」によるものでした。地下7.3mから当時の石垣が発見されたのです。それから半世紀がすぎ、多くの発掘調査が実施され、本丸詰の丸の石垣、三の丸の石垣の発見など大坂城周辺の様子は徐々に明らかになって参りました。城下町での調査も進んでおります。

今回の調査地は三の丸西端に位置しています。秀吉晩年の三の丸造営は上町台地に多く残る谷地形を埋めたての大規模なものであり、それ以前の景観を大きく変えるものでした。調査では豊臣期の区画施設を検出、焼けた瓦やひずんだ陶磁器、焼土で埋まった溝は大坂夏の陣の様子を生々しく伝えます。また、その後の徳川期の大坂城再興に際して稼働したと考えられる鍛冶炉などが明らかになりました。

広大な大坂城下からみれば、今回の調査は小さな断片にすぎないかもしれません。しかしながら、これまでの調査研究成果をみると、多くの断片を紡ぐことによって、更なる知見、課題が明らかにされています。今回の調査成果もまた、その重要な1ピースとして、歴史復原に役立てることを願います。

最後になりましたが、発掘調査、遺物整理にあたりご理解、ご協力を賜りました周辺住民の皆様、大阪府警察本部、大阪府総務部庁舎周辺整備課、地方独立行政法人大阪府立病院機構、大阪府教育委員会をはじめ関係各位に深く感謝いたしますとともに、今後とも当センターの事業により一層のご協力とご理解を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

平成27年3月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長 田邊 征夫

例 言

1. 本書は、大阪市中央区大手前3丁目地内に所在する大坂城跡・難波宮跡の発掘調査報告書である。調査名称は「大坂城跡13-1」である。
2. 発掘調査は大手前立体駐車場の建設に伴い、大阪府警察本部から委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、公益財団法人 大阪府文化財センターが実施した。
3. 発掘調査、整理作業の受託契約、受託期間、および調査体制については以下のとおりである。

[発掘調査]

受託契約名

大手前立体駐車場建設工事に伴う大坂城跡発掘調査

受託契約期間 平成25年4月18日～平成26年3月31日

現地調査期間 平成25年8月1日～平成26年3月31日

調査体制 事務局次長 江浦 洋 調整課長 岡本茂史

調査課長 岡戸哲紀 調査第二課長補佐 市本芳三

副主査 島崎久恵 技師 新海正博(平成26年1月～3月)

[整理作業]

受託契約名

大手前立体駐車場建設工事に伴う大坂城跡発掘調査時の出土遺物整理

受託契約期間 平成26年4月18日～平成27年3月20日

整理期間 平成26年5月1日～平成27年3月20日

調査体制 事務局次長 江浦 洋 調整課長 岡本茂史

調査課長 岡戸哲紀 調査第一課長補佐 三好孝一 副主査 島崎久恵

専門員 片山彰一(写真室)

4. 本書で用いた現場写真は調査担当者が撮影し、遺物写真については写真室が担当した。
5. 調査にあたっては、大阪府警察本部総務部施設課、大阪府総務部庁舎周辺整備課、大阪府教育委員会文化財保護課をはじめとし、以下の方々にご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。(敬称略・現所属)

大澤研一・大庭重信・松尾信裕・豆谷浩之(公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪歴史博物館)・

小田木富慈美・川村紀子・黒田慶一・趙 哲済(公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研

究所)・佐藤 隆(大阪府教育委員会)・丸山真史(公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所)

6. 調査にあたっては、以下の委託分析を実施した。その結果は第4章に掲載した。
金属器生産関連遺物分析(日鉄住金テクノロジー株式会社 八幡事業所・TACセンター)
7. 本書の執筆・編集は島崎が行った。
8. 本調査に関わる図面・遺物・写真などの資料は、公益財団法人 大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 標高は東京湾平均海面（T.P.）を用いた。
2. 座標は世界測地系を使用し、平面直角座標系第VI座標系に準拠する。座標単位は全てmであるが、図中では単位を省略している。
3. 本書で用いた北は座標北である。
4. 現地調査ならびに遺物整理は、当センターの定めた『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。
5. 土色標記は小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』平成19（2007）年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠した。
6. 遺構番号は、調査区ごとに、遺構面・種類に関係なく、検出順にアラビア数字の通し番号を付与し、その後に遺構の種類を標記した。本書では1区は1遺構番号、2区は2遺構番号と遺構番号の前に調査区を付けて区別している。
7. 各遺構図・遺物実測図の縮尺は、それぞれの図に縮尺を明記したスケールを付している。原則として全体図を200分の1とし、個別平面図を40分の1、80分の1とし、必要に応じて他の縮尺を用いた。また遺物実測図の縮尺は4分の1を基本とした。
遺構図の柱穴のアミカケは柱痕跡を表している。遺物実測図では煤付着範囲、被熱範囲をアミカケして示している。
8. 土器の実測に関しては、破片で口径が確定できなかったものは、口縁のラインを破線で切って表現している。
9. 軒丸瓦実測図は丸瓦頂部の延長線上で切るが、瓦当内区は巴頭の最高点と中心点を結ぶ線の延長で測った。破片は断面図に切ったラインを入れた。
10. 遺物実測図および図版掲載の各遺物に付与した番号は一致する。

目 次

巻頭カラー図版

1. 調査地から大阪城を望む
2. 2区 徳川初期の鍛冶炉
3. 大坂夏の陣で焼けた瓦
4. 大坂夏の陣で焼けた壁材・陶磁器他

序文

例言

凡例

第1章	調査に至る経緯と調査方法	1
	第1節 調査に至る経緯	1
	第2節 調査の方法	2
第2章	位置と環境	5
第3章	調査成果	10
	第1節 基本層序	10
	第2節 徳川前期以降の遺構と遺物	17
	第3節 徳川初期の遺構と遺物	69
	第4節 豊臣期の遺構と遺物	83
	第5節 古代の遺構と遺物	143
第4章	理科学分析	147
	第1節 金属器生産関連遺物の分析調査	148
	第2節 金属器生産関連遺物のX線回折(XRD)分析	163
第5章	総括	167

插图目次

图1 调查位置图	1	图42 2013土坑 出土遺物②	59
图2 地区割図と調査区配置図	3	图43 徳川前期以降 出土瓦	60
图3 周辺遺跡分布図	6	图44 徳川前期以降 出土金属製品・石製品	61
图4 近代建物基礎	8	图45 徳川前期以降 出土竹角製品	61
图5 断面模式図	12	图46 徳川前期以降 時期別土坑分布	66
图6 1区 調査区南北断面図	13・14	图47 第4層、第5層、第6層上面 出土遺物	69
图7 1区 調査区東西断面図	13・14	图48 2区 第5・6層上面 検出遺構	70
图8 2区 調査区南北断面図	15・16	图49 柵列5 平・断面図	72
图9 2区 調査区東西断面図	15・16	图50 2038溝上層及び周辺遺構 出土遺物	73
图10 第3-1・3-2層 出土遺物	18	图51 2033・2034炉、2035土坑 平・断面図	75
图11 第3-2層 出土遺物	19	图52 2036炉 平・断面図	75
图12 第3-3・3-4層 出土遺物	20	图53 2053炉、2269土坑 平・断面図	76
图13 1区 第3-2・3-3層上面 検出遺構	22	图54 2053炉 鍛造剥片分布図	77
图14 1区 第3-4層上面 検出遺構	24	图55 2097炉、2017～2019土坑 断面図	79
图15 1040土坑と整地層、 1041・1042・1044・1046土坑 断面図	26	图56 溝、土坑 出土遺物	79
图16 1089・1091・1070土坑 断面図	27	图57 出土金属器生産関連遺物	80
图17 2・3区 第4層上面 検出遺構	28	图58 第6層 出土遺物	83
图18 2005・2025・3009・3010土坑 断面図	29	图59 第7・8-1・8-2層 出土遺物	84
图19 1081土坑 出土遺物	30	图60 2区 第7層上面 平面図	86
图20 1081土坑他 出土遺物	31	图61 柵列6、2100・2038溝、 2102落込み 平・断面図	87・88
图21 2011土坑他 出土遺物	32	图62 2038溝 出土遺物	90
图22 1091土坑 出土遺物①	34	图63 2100溝、2102落込み、土器溜り 出土遺物	91
图23 1091土坑 出土遺物②	35	图64 2101・2105溝 出土遺物	92
图24 1091土坑 出土遺物③	36	图65 2038・2101溝、2102落込み、 2107・2108土坑 出土瓦	95
图25 1091土坑 出土遺物④	38	图66 2038溝他 出土石臼①	96
图26 1091土坑 出土遺物⑤	40	图67 2038溝他 出土石臼②	97
图27 1091土坑 出土遺物⑥	41	图68 2038・2100・2101溝他 出土石製品	98
图28 1091土坑 出土遺物⑦	42	图69 土坑 出土遺物	98
图29 1091土坑 出土遺物⑧	43	图70 2268井戸 断面図	100
图30 1070土坑 出土遺物①	45	图71 2268井戸 出土遺物	100
图31 1070土坑 出土遺物②	46	图72 2268井戸 出土瓦①	101
图32 1区 第3-5層上面 検出遺構	47	图73 2268井戸 出土瓦②	102
图33 1151・1152・1174土坑 断面図	48	图74 2区 第8-1層上面 検出遺構	105
图34 2013・2037・2082土坑 断面図	49	图75 柵列7・8、2157・2158溝 平・断面図	106
图35 1151土坑 出土遺物	50	图76 柵列9他 平・断面図	107
图36 1152・1174土坑他 出土遺物	51	图77 2157・2158・2304・2303・2424・2233・ 2234溝 断面図 2304・2424溝 平面図	109
图37 1区 基盤層上面 検出遺構	53	图78 溝、土坑、ビット 出土遺物	110
图38 1177～1180・1175土坑 断面図	54	图79 北西部遺構 平・断面図(柵列9～13他)	113・114
图39 1177・1178土坑 出土遺物	55		
图40 1179・1180・1175土坑 出土遺物	56		
图41 2013土坑 出土遺物①	58		

図80	2305・2401ビット、 2160・2161・2266・2307土坑 平・断面図	115	図97	23310堀状遺構、2365溝、 2366・2426土坑 出土遺物	135
図81	北西部遺構 出土遺物	116	図98	2463ビット、2365溝、2310堀状遺構、 2426土坑 出土瓦	136
図82	北西部遺構他 出土瓦	117	図99	1区基盤層上面 遺構断面図	139
図83	2162・2144・2242・2243土坑 平・断面図	119	図100	1区 基盤層上面遺構 出土遺物	140
図84	2423・2249・2254土坑 断面図	120	図101	2区 基盤層上面 検出遺構	143
図85	土坑 出土遺物	120	図102	掘立柱建物3	144
図86	2144土坑 出土瓦	121	図103	掘立柱建物1・2	145
図87	2243土坑 出土瓦	122	図104	ビット他 断面図	145
図88	2308井戸 断面図	124	図105	出土遺物	146
図89	2308井戸 出土遺物	125	図106	試料No 1 椀形滓のX線回折図	165
図90	2区 第8-2層上面・基盤層上面 検出遺構	127	図107	試料No 3 被熱処理片のX線回折図	165
図91	柵列14・15・16 平・断面図	128	図108	試料No 5-1 椀形滓（ガラス）のX線回折図	165
図92	柵列17・18 平・断面図	129・130	図109	試料No 5-3 椀形滓（釉）のX線回折図	166
図93	柵列19 平・断面図	131	図110	試料No 7-1 ガラス質滓のX線回折図	166
図94	2357・2358ビット、 2300・2373・2386・2119土坑 断面図	132	図111	試料No 7-2 ガラス質滓（釉）のX線回折図	166
図95	2119土坑 出土遺物	133	図112	調査地周辺 豊臣後期の遺構面	168
図96	2426土坑、2310堀状遺構 断面図	134			

巻頭カラー図版目次

- | | |
|---------------|--------------------|
| 1 調査地から大阪城を望む | 3 大坂夏の陣で焼けた瓦 |
| 2 2区 豊臣初期の藏治戸 | 4 大坂夏の陣で焼けた壁材・陶磁器他 |

図版目次

図版1 調査区断面

- 1 1区 調査区西壁断面 北東から
- 2 1区 調査区南北断面 南東から
- 3 1区 調査区東西断面 南から
- 4 1区 西肩部整地層断面 北から
- 5 2区 調査区南北断面 東から
- 6 2区 調査区東壁断面 北東から
- 7 2区 調査区北壁断面 南から
- 8 2区 東側第7・8層 北から

図版2 徳川前期以降の遺構

- 1 1区 第3-5層上面・第4層上面全景 南から
- 2 1区 第3-4層上面全景 北から
- 3 3区 第4層上面東側 南西から
- 4 2区 第4層上面西側 南から
- 5 2区 2005土坑周辺 北東から

図版3 徳川前期以降の遺構

- 1 1区 1070土坑断面 西から
- 2 1区 1091土坑断面 南から
- 3 1区 1151・1152土坑 南東から
- 4 2区 2005土坑断面 西から
- 5 2区 2025土坑断面 東から
- 6 2区 2013土坑断面 西から
- 7 3区 3010土坑断面 南から
- 8 3区 3009土坑断面 南から

図版4 徳川前期以降の遺構

- 1 1区 基盤層上面全景 南東から
- 2 1区 1175土坑 東から
- 3 1区 北西瓦溜り検出状況 北東から
- 4 1区 1177土坑断面 南から
- 5 1区 1178土坑断面 西から

図版5 徳川初期の遺構

- 1 2区 第6層上面全景 南から
- 2 2区 第6層上面東端 全景 南から
- 3 2区 櫓列5検出状況 南から
- 4 2区 2111石組検出状況 南から

図版6 徳川初期の遺構

- 1 2区 2033・2034が、2035土坑検出状況 北から
- 2 2区 2033・2034が完掘状況 北から
- 3 2区 2033が断面① 東から
- 4 2区 2033が断面② 東から
- 5 2区 2036が検出状況① 東から
- 6 2区 2036が検出状況② 東から
- 7 2区 2036が完掘状況 北から
- 8 2区 2036が断面 南から

図版7 徳川初期の遺構

- 1 2区 2053が周辺 南西から
- 2 2区 2053が周辺 羽口出土状況 南から
- 3 2区 2053が断面 南西から
- 4 2区 2053が完掘状況 南から
- 5 2区 2269土坑検出状況 南から
- 6 2区 2019土坑断面 東から
- 7 2区 2018土坑断面 東から
- 8 2区 2063・2332・2362ピットの関係 西から

図版8 豊臣期1の遺構

- 1 2区 第7層上面全景 北から
- 2 2区 第7層上面東端全景 南から
- 3 2区 2038溝南隅遺物出土状況 西から
- 4 2区 2038溝 遺物出土状況 南から

図版9 豊臣期1・2の遺構

- 1 2区 2100溝遺物出土状況 南から
- 2 2区 2105溝と右列 西から
- 3 2区 2160土坑断面 西から
- 4 2区 2268井戸断面 西から
- 5 2区 櫓列11周辺 北から
- 6 2区 2311ピット断面 南から
- 7 2区 櫓列13 東から
- 8 2区 2314ピット断面 南から

図版10 豊臣期2の遺構

- 1 2区 第8-1層上面全景 北から
- 2 2区 第8-1層上面東半 南から

図版 11	豊臣期 2 の遺構
1	2区 2184 ビット礎石検出状況 西から
2	2区 2184 ビット断面 西から
3	2区 2182 ビット礎石検出状況 西から
4	2区 2182 ビット断面 西から
5	2区 2181 ビット断面 東から
6	2区 2181 ビットの切り合い 東から
7	2区 2199 ビット断面 北から
8	2区 2199 ビット完掘状況 北から
図版 12	豊臣期 2 の遺構
1	2区 2144 土坑断面 北から
2	2区 2162 土坑断面 西から
3	2区 2243 土坑断面 南から
4	2区 2242 土坑断面 南から
5	2区 2161 土坑断面 東から
6	2区 2267 溝断面 東から
7	2区 2308 井戸断面 東から
8	2区 2308 井戸土師質土器皿出土状況 北東から

図版 13	豊臣期の遺構
1	2区 2100 溝他断面 東から
2	2区 2038 溝他断面 北から
3	2区 2157・2158 溝断面 北から

図版 14	豊臣期 3 の遺構
1	2区 基盤層上面全景 北東から
2	2区 基盤層上面東端 南から

3	2区 2357 ビット断面 西から
4	2区 2358 ビット断面 西から
図版 15	豊臣期 3 の遺構
1	2区 欄列 17・18 東から
2	2区 2378 ビット断面 南から
3	2区 2362 ビット断面 西から
4	2区 2373 土坑 断面 西から
5	2区 2386 土坑断面 南から
6	2区 2300 土坑断面 東から
7	2区 2119 土坑断面 南から

図版 16	豊臣期 3 の遺構
1	2区 2310 堀状遺構完掘状況 北から
2	2区 2310 堀状遺構断面 北東から
3	2区 2426 土坑断面 南から
図版 17	豊臣期以前の遺構
1	2区 掘立柱建物 3 検出状況 南から
2	2区 掘立柱建物 1・2 検出状況 南西から
3	2区 2523 ビット断面 北西から
4	2区 2501 ビット断面 北東から

図版 18	出土土製玩具 1
図版 19	出土土製玩具 2・骨角製品他
図版 20	出土土鍾・焼土塊・金属器生産関連遺物
図版 21	出土金属製品
図版 22	出土瓦
図版 23	出土石製品・ガラス製品他

挿入表目次

表 1	鍛造剥片・粒状滓計測表	77
表 2	供試材の履歴と調査項目	156
表 3	供試材の組成	156
表 4	出土遺物の調査結果のまとめ	157
表 5	土製玩具類 観察表	172～174
表 6	骨角製品 観察表	175
表 7	金属製品 観察表	175
表 8	ガラス製品 観察表	176

挿入写真目次

写真 1	1区 近代建物基礎 北から	8
写真 2	1区 レンガ積基礎と竈 南から	8
写真 3	1区 建物基礎(古段階) 北から	8
写真 4	3区 レンガ積基礎 東から	8
写真 5	加工痕のある骨	61
写真 6	顕微鏡組織 1	158
写真 7	顕微鏡組織 2	159
写真 8	顕微鏡組織 3	160
写真 9	顕微鏡組織 4	161
写真 10	顕微鏡組織 5	162

第1章 調査に至る経緯と調査方法

第1節 調査に至る経緯

調査地は大阪市中央区大手前3丁目地内に所在する。調査地周辺は大坂城跡の三の丸推定地にあたる。昭和62（1987）年9月に発表された「庁舎・周辺整備計画」に基づき、平成元（1989）年10月に大阪府庁・周辺整備基本計画が策定され、庁舎周辺整備事業として府庁舎の建て替えが開始されることになった。これに伴い、大阪府総合部庁舎周辺整備室と大阪府教育委員会との間で協議が行われ、平成2（1990）年から同8（1996）年にかけて財団法人 大阪文化財センター・財団法人 大阪府文化財調査研究センター（現 公益財団法人 大阪府文化財センター）が6次にわたって発掘調査を行った（図1-1A～6A調査区）。調査では東西方向に幅60mにわたる開析谷が検出され、豊臣期以前では、丘陵上で古代の墓や掘立柱建物群が見つかり、豊臣期では低地部で「扇に月丸」の家紋瓦が出土し、佐竹屋敷に推定されるなど、多くの貴重な調査成果がある。

ところが、大阪府の財政状況の変化に伴い、庁舎建設スケジュールが見直され、行政棟、議会棟の建設が見送られることとなった。そのため発掘調査も中断されたが、老朽化が著しい上に府民の安全を守るための最新施設の導入が強く求められた警察棟については建て替えが実施されることとなり、平成11（1999）年にⅠ期工事に伴う発掘調査（図1-7A・7B調査区）を、さらに平成15（2003）年にⅡ期工事に伴う発掘調査（図1-03-1調査区）を財団法人 大阪府文化財調査研究センター・財

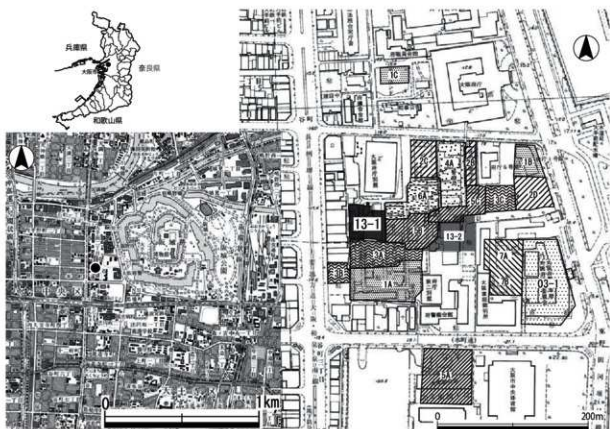


図1 調査位置図

団法人 大阪府文化財センター（現、公益財団法人 大阪府文化財センター）が実施した。調査では、古代の谷から「戊申年」銘の国内最古木簡が出土（7 A・7 B 調査区）し、豊臣期では大坂冬の陣で埋め戻された二の丸大手口を囲む堀の検出（03-1 調査区）など貴重な発見が相次ぎ、注目を集める成果となった。

これらの調査成果についてはすでに刊行されている報告書（大文セ2002 a・b・2006）に詳しい。

今回の調査は大手前立体駐車場の建設に伴って実施されたものである（図1-13-1）。大阪府立成人病センターが調査区の隣接地（図1-13-2）に移転されることとなり、大阪府警察本部の警察車両と成人病センターの共同駐車場として立体駐車場の建設が計画された。平成25年4月18日に大阪府警察本部から「大手前立体駐車場建設工事に伴う大坂城跡発掘調査」として公益財団法人 大阪府文化財センターが委託を受け、大阪府教育委員会の指導の下、平成25年8月1日より現地調査を実施、平成26年3月31日に現地調査を終了した。その後、遺物整理事業として平成26年5月より同10月まで中部調査事務所において整理作業を行った。平成27年3月に本書を刊行し、一連の調査を終了した。

第2節 調査の方法

発掘調査および整理作業は当センター『遺跡調査基本マニュアル』2010に準じて実施した。

当センターでは大阪府内の全調査域を統一した基準で区画できるよう、世界測地系に基づく平面直角座標系第Ⅵ系を基準とした第Ⅰ～Ⅵ区画までの6段階の地区割りを設定している。今回の調査地はH5-10-2・C D（第Ⅰ～Ⅲ区画）の範囲に位置している（図2）。

現地調査は平成25年8月に開始した。調査地内で掘削土を仮置きする必要があったため、調査区西側を1区、東側は南北に2分割し、北側を2区、南側を3区として1区、2区、3区の順に調査を進めた。4区は小さく張り出した範囲で道路であることから、短期間での実施、埋め戻し復旧が必要であったため、個別に区割りを設け実施した。調査区西端は崖状になっており、現状で石垣が設けられている。現地調査では、陸上水平磁気探査によって爆弾の有無を確認し、西端にある構造物を撤去、西側斜面にある石垣の撤去を行った。石垣は、隣接する住宅地に雨水が侵入するのを防ぐため、1m前後を残し、安全、防音、防塵対策として万能塼を設置した。なお、陸上水平磁気探査は掘削深度が2mを超える範囲については、再度探査を実施した。

構造物の撤去、石垣の撤去終了後、平成25年10月より表土、近代盛土を重機によって掘削、江戸時代の遺物を含む第3層より人力掘削を開始した。途中、明治期のレンガ基礎などを検出、必要な記録作成作業を行った。江戸期の盛土（第4層）については、機械による掘削（二次機械掘削）を行うこととなっていた。しかし、調査区南半は谷地形となっており（1区南半、3区）、工事影響深度がこの盛土内で収まるとの判断から、この範囲については盛土上面までが今回の調査対象となった。盛土の掘削に関しては、今後の工事内で大阪府教育委員会の立会調査によることとなった。北半の丘陵上については、徳川期の盛土上面の調査を行った後、二次機械掘削を行い、基盤層までの調査を実施している。なお、谷の肩口は、1m前後掘り下げて確認した。3区の西側3分の1は工事影響深度であるT.P.18mで調査を終了しており、人力掘削には至らなかった。また、1区北側の構造物、1区と2区の境界にある構造物については、撤去せず存置となった。なお、1区西端は西側に向かって更に傾斜しており、側溝内でも基盤層が確認できなかった。

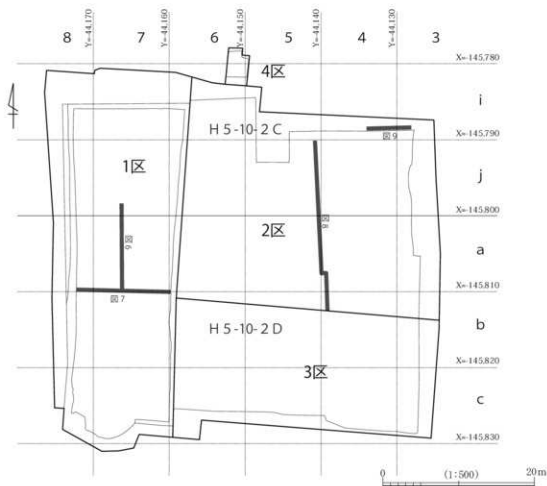
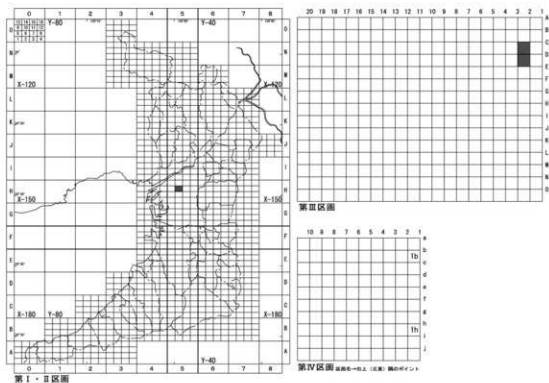


図2 地区割図と調査区配置図

主要遺構面は写真測量を実施し、その他の遺構面は平板測量、FARO社製Focus3Dによりデジタル測量を実施し、それをもとに平面図を作成した。また個別の遺構や断面図などの作成は、10分の1もしくは20分の1縮尺で実測を行った。調査に際しては3級基準点を2点、4級基準点を3点新たに設置し、それらをもとに調査地内に基準杭を設定した。写真測量や実測による図面作成は、それら基準杭を使用して行っている。

水準測量の際に用いた標高はT.P.値（東京湾平均海面）で、北は全て座標北を示す。土層断面や遺構等の写真は、35mmフィルムカメラ（白黒・カラーリバーサル）及びデジタルカメラを用いて、調査担当者が撮影した。調査区の全景写真や、特に重要な遺構写真は中形フィルムカメラ（6×7、白黒・カラーリバーサル）で撮影した。その一部を本報告書の写真図版に使用している。全景写真には高所作業車も使用した。

検出した遺構は、調査区毎に通し番号を付与しており、4ケタ目は調査区を表している。「調査区－遺構番号（アラビア数字）－遺構種類」とした。複数の遺構で構成される掘立柱建物や柵列は「遺構種類－アラビア数字」で表し、調査地を通して番号を付した。

発掘調査期間中ならびに発掘調査終了後は、適宜大阪府教育委員会の立会を受け、平成26年3月、現地調査を終了した。

調査中作成した各種図面や、出土した遺物、撮影した写真は、『遺跡調査基本マニュアル』に準拠してそれぞれ台帳を作成した。

整理作業は、平成26年5月より行った。現地で作成した遺構の実測図の一部を編集して、遺構挿図を作成した。出土した遺物は、報告書に掲載する遺物を選別、実測図を作成した。本稿で掲載した遺物挿図はその実測図をもとに作成したものである。陶磁器などは文様が描かれたものを中心に個別のデジタル写真を撮影、実測図にはめ込んだ。陶磁器の一部、瓦類、石白などは拓本により文様などを表した。なお、デジタル写真撮影は写真室が行った。抽出した遺物のうち土製品、金属製品、骨角製品、石製品については、一部を除いて実測図の作成は行わず、図版に写真を掲載し、観察表を付した。

本書に掲載した遺構・遺物挿図の浄書はAdobe社製イラストレーターCS2を用いてデジタルトレースを行い、編集作業を行った。

現地で撮影した写真は報告書に掲載するものを選別し、現像、焼き付け作業を実施した。また、選別した遺物のうち、実測図を作成しなかった遺物や特に写真撮影が必要なものを抽出し、デジタル写真を撮影して図版に掲載した。これらの作業は写真室が行った。

現地調査で採取した鍛冶炉周辺の土砂を洗浄、磁選を行い、鍛造剥片など微細遺物を採取し、検討を加えた。また、鍛冶炉に関連して、金属器生産関連遺物を抽出、分析調査を実施した。分析調査にあたっては、日鉄住金テクノロジ株式会社八幡事業所に委託した。結果は第4章に掲載している。

最終的に遺物は、報告書掲載遺物とそれ以外とに分類して収納した。なお掲載遺物は、基本的に報告書記載の遺物番号順に収納している。現地調査ならびに整理作業で作成した各種記録図面、フィルムは中部調査事務所で保管している。活用されることを希望する。

第2章 位置と環境

大坂城跡は、大阪平野を南北に延びる上町台地の北端部に立地する。約74haが国の特別史跡に指定されている。上町台地の北側は大川に面し、東側は縄文海進以降、淀川と旧大和川によってできた天満砂堆を主とする低地が上町台地に沿って北へとはしる。台地の西側は急崖によって画されている。また台地には大規模な侵食谷が発達しており、複雑な様相を呈している。今回の調査区は台地の西側に位置し、推定される三の丸の西限にあたるが、近接する調査区でも東西に延びる埋没谷（本町谷）が見つかっており、ここでも、徳川期に埋め立てられるまでは、現在とは異なった景観であったことが分かる。

上町台地の北端部は台地の中でももっとも高所にあたる。現在でも大阪府庁を中心とした官公庁が集まる地域であるが、古代よりこの地には公的施設がおかれ、政治的、外交的に重要な拠点であった。

古墳時代には応神天皇の大隅宮や仁徳天皇の高津宮があったと推定されている。これらは推定の域を出ないが、中央区法円坂で見つかった5世紀の大型倉庫群が整然と並んだ姿は、その高度な技術から国家権力によるものとされる。台地北端に掘削された「難波の堀江」や難波津といった港湾施設を含めた重要な拠点であったのであろう。

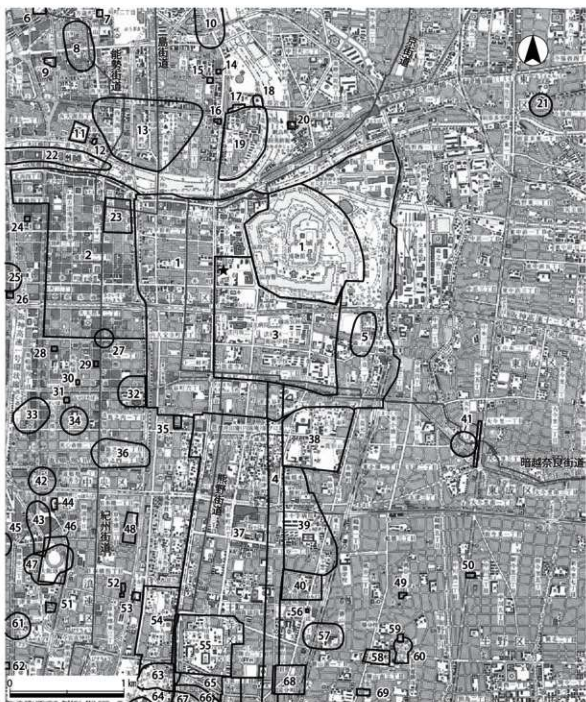
古墳時代後期～飛鳥時代初頭には難波宮下層遺跡で掘立柱建物群が現れる。同様の掘立柱建物群は広範囲に分布している。図1-5 B・6 A調査区でも丘陵上では掘立柱建物が検出され、谷の北斜面では鍛冶炉などの鉄器生産関連遺構、遺物が見つかった。「難波大郡」「難波館」といった外交関係の施設はその所在地は不明であるが、大坂城周辺の発掘調査では、新羅や百済の土器が出土しており、当地の外交の窓口であったことを示す。

古代には前期難波宮、後期難波宮が造営される。この頃は大小、多くの谷がまだ埋められておらず、谷内からは多くの遺物が出土する。調査区周辺は難波宮の西方に位置しており、図1-7 A・B調査区で検出した谷からは、漆壺や絵馬、木簡といった多くの遺物が出土し、特に「戊申年」銘の国内最古記年銘木簡を含む木簡資料群の出土は注目できる。また、東西方向の柱列が検出され、遺存していた柱の年輪セルロース酸素同位体比による年代測定の結果、7世紀前半に伐採された可能性が指摘された。宮城の北限を考える上で注視される。

長岡京遷都に伴って、難波宮は終焉を迎え、難波津の港湾機能も失われ始める。平安時代以降は大川沿いの渡辺津が代わって重要な港となる。また、大川南岸では平安時代の掘立柱建物群が検出されるなど、摂津国府の候補地のひとつとされる。

明応5（1496）年、本願寺第八世宗主蓮如によって大坂御坊が建立される。山科本願寺焼き討ちの後、大坂石山に本願寺が移され、一向宗の本拠地として強大な勢力を保持する。やがて織田信長との石山合戦の末、天正8（1580）年大坂本願寺は焼失する。石山本願寺の所在地については、「法円坂説」「現大坂城説」など諸説があり、確定するには至っていない。発掘調査では大坂城周辺で石山合戦の際と考えられる焼土層に覆われた礎石建物や防御施設と考えられる廬状の遺構などが検出されている。

天正11（1583）年、大坂城は賤ヶ岳の戦いで柴田勝家を倒した羽柴秀吉によって築城が開始された。わずか2年たらずの天正13（1585）年には本丸が完成し、関白となった豊臣秀吉は引き続き二の丸の工事に着手、文禄3（1594）年には防衛機能を強化するために城下町全体を囲う惣構を構築して、北は大川、南は空堀、東は猫間川、西は東横堀によって囲われた広大な大坂城が完成する。秀吉晩年の慶



- 1.大坂城跡 2.大坂城下町遺跡 3.難波宮跡 4.難波京朱雀大路跡 5.森の宮遺跡 6.茶屋町遺跡B地点 7.扇町遺跡
- 8.安曇寺跡推定地 9.曾根崎遺跡 10.同心町遺跡 11.佐賀藩蔵屋敷跡 12.天満蔵屋敷跡 13.天神橋遺跡
- 14.同心町遺跡D地点 15.同心町遺跡E地点 16.東天満遺跡 17.天満橋1丁目所在遺跡B地点 18.天満橋1丁目所在遺跡
- 19.天満本願寺跡 20.網島町遺跡 21.今福遺跡 22.中之島蔵屋敷跡 23.大坂魚市場跡 24.大坂城下町跡B地点
- 25.朝本町1丁目所在遺跡 26.朝本町1丁目所在遺跡B地点 27.馬喰町遺跡 28.大坂城下町跡C地点
- 29.南船場2丁目所在遺跡B地点 30.南船場2丁目所在遺跡 31.東心斎橋1丁目所在遺跡B地点 32.島之内1丁目所在遺跡
- 33.西心斎橋1丁目所在遺跡 34.東心斎橋1丁目所在遺跡 35.瓦屋町遺跡 36.島之内2丁目所在遺跡 37.上本町遺跡
- 38.幸稻山遺跡 39.細江谷遺跡 40.堂ヶ芝廃寺 41.大今里遺跡 42.難波1丁目所在遺跡 43.難波貝屋遺跡
- 44.難波1丁目所在遺跡B地点 45.湊連元町遺跡 46.難波御蔵跡 47.船出遺跡 48.高津御蔵跡 49.桃谷遺跡 50.中川遺跡
- 51.敷津遺跡B地点 52.日本橋東遺跡 53.下寺遺跡 54.俗人町遺跡 55.四天王寺旧境内遺跡 56.堂ヶ芝廃寺C地点
- 57.勝山北遺跡 58.勝山南遺跡 59.勝山遺跡 60.御勝山古墳 61.敷津遺跡 62.大國遺跡 63.茶白山古墳
- 64.天王寺公園遺跡 65.大道1丁目所在遺跡 66.河内川瀬江推定地 67.北河堀町所在遺跡 68.摂津国分寺跡
- 69.生野東遺跡

図3 周辺遺跡分布図

長3（1598）年には三の丸築造を命じるが、これは「大坂町中屋敷替」と呼ばれる大規模なものであった。工事は惣構内に三の丸を築いて伏見から大名屋敷を移転させ、既にそこにある町屋を惣構の外に新たに整備した船場へ移転させるというものである。しかし、秀吉はその完成を見ることなく同年8月、伏見城にて62歳でこの世を去った。

秀吉の死後、慶長19（1614）年、大坂冬の陣で徳川幕府軍に攻められ、本丸以外の堀は全て埋められ、三の丸も消滅する。さらにその翌年の慶長20（1615）年に起きた大坂夏の陣によって難攻不落を誇った大坂城はついに落城焼失してしまう。

废墟と化した大坂城は松平忠明が新城主となり、幕府の直轄地として元和6（1620）年から10年の歳月をかけて本丸と二の丸を再興したが、これは膨大な量の盛土に象徴されるように豊臣期の面影を払拭したもので、豊臣期の遺構は地下に埋没してしまうこととなる。

現在の天守閣は昭和6（1931）年に建て替えられたもので、現存する石垣や堀、門などの施設は徳川期に再興されたものである。豊臣期の大坂城は昭和34（1959）年の学術調査で地下約7.3mの深さから石垣が発見され、地中に深く埋められていることが明らかとなった。大坂夏の陣から400年を機に、豊臣期の石垣を再発掘して公開するプロジェクトが立ち上がり、これに先立ち発掘調査が実施されている。

地下深くに眠る豊臣期の遺構は、大坂城周辺の数々の発掘調査によって、当時の様子が徐々に明らかになってきている。調査区周辺の既往の調査では、図1-7 A・7 B調査区で二の丸大手口を囲う堀が発見された。図1-5 B・3 B・1 A調査区では、東西幅約60m以上の開折谷が見つかった。この谷は徳川期の大坂城再興の際に埋め立てられており、厚い整地層に覆われた豊臣期の遺構が良好に検出され、「扇に月丸」の家紋瓦の出土から佐竹氏屋敷地と推測されるなど多大な調査成果をもたらした。更に谷内内部では三の丸造成に伴うと考えられる整地層も確認され、整地層の下からは豊臣前期の状況も明らかにされている。

今回の調査区は推定される三の丸の西限近くに位置している。三の丸の外郭施設についてはこれまでの発掘調査でその一端が明らかになりつつある。北西部では石垣が東西150mにわたって確認されており、南東部では東端と考えられる石垣と堀状遺構が確認されている。西限については谷町筋地下駐車場建設に伴って実施されたOS97-1の調査成果が目に見える（市文協2002）。堀と溝状遺構によって、200m以上にわたって東西の境界線を形成しており、西外郭施設の可能性が指摘されている。

江戸時代には、大坂城の復興と共に城下町も発展し、「天下の台所」と称されるように商都として繁栄する。城下町での調査例も増加し、大坂魚市場跡では徳川初期の木簡や陶磁器類がまとまって出土した。なお、当調査区が位置する旧三の丸地域は御城代屋敷、京橋口御定番屋敷が置かれていた。

慶応4（1868）年、幕末の動乱期に城中大火となって大坂城は再び落城する。明治維新後、大阪城とその周辺地域は陸軍の軍用地として整備され、三の丸跡には第三高等学校（後の京都大学）の前身である舎密局が設置される。明治31（1898）年、調査区周辺には大阪陸軍地方幼年学校が新設された（大正9年には大阪陸軍幼年学校に改称される）。陸軍幼年学校は陸軍の特校となるために必要な素養を与える学校である。今回の調査では1区北半の重機による掘削の際に、大阪陸軍幼年学校に関連する施設を確認した他、「阪幼」と書かれた軍用食器を採取した。以下に概要を記す。図4に位置図を示した。合わせて写真1～4を参照されたい。

1区北半では石組みの溝やレンガ基礎を確認した（写真1）。南北方向に延びる石組みの溝は南から北に向かって段を有して低くなり、北端でレンガ組の集水枦に取り付いている。溝底部には段にあたる



図4 近代建物基礎



写真1 1区 近代建物基礎 北から



写真2 1区 レンガ積基礎と竈 南から



写真3 1区 建物基礎(古段階) 北から



写真4 3区 レンガ積基礎 東から

部分に石を置いている。南端は石が置かれたところで途切れており、一段高くなる南側では検出できなかった。溝の東側にはレンガ積基礎があり、中央付近に3×3mの石組みの竈がつくられている。レンガ積基礎は南側で途切れており、焚口と考えられる。焚口には石が置かれ、弧状に目の粗いコンクリートが置かれている。内側には焼土が多くみられた(写真2)。このレンガ積基礎を除去すると、根石が敷き詰められた柱穴を確認した。前身の建物の柱穴と考えられる。中央にはやはり方形の穴があり、石が敷き詰められていた。大阪陸軍幼年学校については小林和美氏による考察がある(小林2002)。これに掲載されている幼年学校校内配置図には、炊事・浴場とした施設がある。竈があることから検出した施設は、記載された浴場、あるいは炊事場であろう。

石組み溝の西にはレンガ積基礎が2か所で確認できた。北側のものは2.6m×1.5mの方形を呈し、その中の2か所に正方形の穴が開いている。この穴には大きな甕が据られていたようで、破片が出土している。便所と考えられる。南側のものは2.4m×1.6m以上の方形を呈するものである。用途は不明である。1区以外に3区でもレンガ積基礎が出土している。2.1m×1.9mのやや南北に長い方形を呈し、粗いコンクリート基礎の上に2段遺存している。中で南北に区画されており、モルタルで土間状に塗られていた。

周辺からは多くの軍用食器を採取している。これらの食器は石組み溝より西側で多くみられた。図版23に示したので参照されたい。食器は碗、蓋、皿、鉢があり、いわゆる硬質陶器「クリームウエア」である。

碗は高台内に軍徽章である星印が青色で付され、星印の肩には「阪幼」とプリントしている(図版23-962)。他に高台内に「硬陶」とプリントされ、外面に星印を付す碗がある(959・963)。蓋は1点のみであったが、つまみ内に「阪幼」とプリントされている(961)。蓋の文字の字体や文字の色は他のものとは異なっている。皿は複数枚みられた。いずれも、高台内に星印とその肩に「阪幼」とプリントし、その下には生産元のロゴがみられる(957)。上には「THE IRONSTONE CHAINA」、中段にはNとYを組み合わせたロゴ、その下段は不明で最下段には「Kanazawa」とある(358)。不鮮明ではあるが、金沢とあることから、石川県金沢市にあった日本硬質陶器株式会社で作られたものであろう。現在のニッコー株式会社の前身であり、明治41(1908)年に旧藩主前田家と当地の有力者によって創設され、一時期は釜山にも工場を構えていたようである。

大阪陸軍幼年学校は大正11(1922)年廃校となり、昭和15(1940)年、旧南河内郡千代田村に開設、その後昭和20(1945)年に解散となった。

大正15(1926)年には江之子島にあった大阪府庁舎が移転、昭和6(1931)年には市民の全額浄財によって大阪城天守閣が再建された。戦後、焼け残った天守閣と中部軍区司令部は大阪城天守閣博物館と大阪市立博物館に生まれ変わる。また、平成13(2001)年には法円坂に大阪歴史博物館が開館し、難波宮跡および大坂城一带は史跡整備され、緑豊かな都心のオアシスとして人々が憩う場所となっている。

第3章 調査成果

第1節 基本層序(図5～9)

調査区の南側2分の1は東西方向にはゆるい開析谷にあたる。既往の調査ではこの谷は幅約60m以上を測り、三の丸の造成および徳川期の造成によって埋め立てられている。現状では標高19m～20.3mを測り、西に向かって緩やかに下降するとともに、南から北に向かって下降する地形を呈している。調査区西端は谷町筋に向かって比高約3～4.5mの崖状になっており、現況では西斜面に石垣が築かれていた。

なお、基本層序の呼称は今回の調査区でのものであり、隣接する調査区とは一致していない。図2に断面位置を明示した。

第1層 現代の整地層である。

第2層 近代の整地層である。調査区は前述のように、谷町筋に向かって、崖状を呈しているが、以前は階段状に成形されており(1区南半)、第2層の整地によって平坦化し、石垣を築いている。この石垣の裏込めにはレンガがみられ、遡っても明治期のものと考えられる。

第1・2層は調査区全域で確認することができ、重機によって除去している。この際、1区北側、3区西側で近代の建物のレンガ積基礎、竈状の施設、排水溝、便所を確認した(写真1～4)。当調査区周辺は、明治時代には陸軍の軍用地として整備されるが、この地には明治31(1898)年、大坂陸軍幼年学校が建設されており、確認した遺構はこれに関連した施設と考えられる。レンガ積基礎の周囲からは「飯効」と書かれた軍用食器なども出土している(第2章参照)。

第3層 近世の整地層、および遺物包含層である。1区南半及び、2区・3区では上層までの削平により第3層の遺存状況は極めて悪く、一部遺存するものの第2層との区別はほとんどできなかった。一方、調査区北半の台地状では、基盤層が北西に向かって下降しており、一段低くなった1区北側では複数層に細分することができる。そのうち第3～2層とした黄色系粘質シルト層は基盤層を由来とする幕末期の整地層である。層厚約0.3mを測る。この整地層を境に上層を第3～1層、その下層を第3～3層～第3～5層に細分した。ただし、第3～5層はわずかに遺存するのみである。第3～1層は暗褐色のシルト混中細砂である。平坦面では遺存状況は悪く、1区西端の斜面地、特に南半の階段状に成形された範囲で確認でき、幕末～明治期の遺物を多量に包含する。なお、この部分では第3～1層より下層で黄色系の整地層を確認した。斜面地を西側に拡張したもので、肩部には礫を多く含んでおり、あるいは石垣などの施設があった可能性が考えられる。この整地層については、トレンチ調査を行い、全体の掘削は行っていないが、18世紀末頃の遺物が出土していることから、これより遡らない。第3～3層は黒褐色のシルト混中細砂で層厚約0.3mを測る。第3～4層は灰黄褐色のシルト混中粗砂で層厚0.2～0.3mを測る。いずれも近世陶磁器を多く含み、上面では畚も検出している。第3～5層は第3～4層よりやや明るい色調の類似した土層である。出土遺物より、第3～3層が19世紀前葉、第3～4層が18世紀後半～19世紀初頭の時期が与えられ、第3～5層は遺物が希薄であるが、概ね18世紀前半頃のものであろう。

第4層 近世前半の整地層である。徳川幕府によって元和6(1620)年から実施された大規模な大坂

城再建工事に伴う整地層と考えられる。基本的には基盤層を由来とする緑灰色・黄色系粘質シルト、砂礫層を基調としている。当調査区南半の谷部はこれによって大きく埋められていることが周辺の調査でも明らかになっている。調査区北半の台地上では東半では遺存するものの、西半は上層によって削平され遺存しない。この整地層によって地形が逆転し、谷があった南側が高くなっている。

なお、当層は大規模な整地層であり、遺物の包含も極めて少ないことから重機を用いた掘削となった。また、谷部分については工事の影響深度が当層の途中までと判断されたことから、基本的には当層の上面で調査を終了している。よって、第5層以下は2区の丘陵上で確認したものである。

第5層 第5層は第4層と大坂夏の陣の焼土層（第6層）との間にみられる近世初頭（徳川初期）の整地層である。2区東側3分の1で部分的に確認できた。小礫やくだいた瓦片を多く含む炭混橙色シルト・褐色系砂質土や炭混青灰色砂質シルトである。層厚は概ね0.1m前後を測る。

第6層から第8層は豊臣期の地層である。周辺の調査では主に、三の丸の整地層を鍵層とし、豊臣期を前期と後期に大分されている。調査当初は第6層直下の第7層を三の丸の整地層に相当する地層とし、第8層を豊臣前期の整地層と考えていた。しかしながら、第7層からは豊臣後期の組成に近い遺物が出土していること、第7層を除去したところで豊臣後期の遺物を含む遺構が検出されるなど、層序の理解を再度検討する必要がある。当調査地は厚い整地がされている谷内部の調査を行っておらず、丘陵上の調査であったことから、各層は薄く、また広範囲に広がり鍵層とできる整地層はない。範囲が限定された整地層や上層の攪拌が及んでいると考えられる地層であった。こういった状況から、由来は整地層であっても、既に純粋に上下の遺構面を豊臣前期・後期に分け得るような地層ではない、また、部分的な拡張に伴う整地層であり、三の丸の造成土と単純には結びつけられないと現時点では理解している。よって、今回の報告に際しては、各検出遺構面に対して前期、後期といった呼称はせずに、豊臣期1～3と呼称し、各層や遺構から出土した遺物に留意しつつ、各遺構面の時期を再度検討することとした（第3章第4節）。

第6層 大坂夏の陣による焼土層、これを攪拌した耕作土及び焼土、炭を多く含む地層である。2区東半で確認することができた。明瞭な焼土層はY＝－44.130ライン付近と谷肩部の斜面に限られる。他の部分は焼土層が攪拌された状況であった。層厚は東側が約0.05m、西側に向かって薄くなり、約0.01m程度となる。

第7層 豊臣期の地層である。2区東半で確認することができる。層相は場所により異なっている。谷肩部では第6層の焼土層直下にぶい黄橙色の粗砂～細礫を主とする整地層があり、これを第7層とした。層厚は約0.5mを測る。谷肩部に限定された整地層である。これより北側の台地部では暗灰黄色細礫混中粗砂で層厚は概ね0.1mを測る。第7層上面の遺構面を豊臣期1とする。層内からは豊臣後期の遺物が出土している。

第8層 豊臣期の地層である。2区東半で確認することができる。当層は大きく2層に大別でき、上層を第8-1層、下層を第8-2層とする。第8-1層は基盤層由来の黄色系・青灰色系シルト～粘土及び灰白色系粗砂からなる地層で層厚は0.05mから0.1mと薄い。第8-1層上面を豊臣期2とする。層内からの遺物の出土は瓦片がほとんどで陶磁器類は少なく、時期の特定は困難である。

第8-2層は基盤層由来の黄色系粘土及び褐色系砂質シルトと黄・橙色系シルトのブロック土から構成される整地層である。基盤層が谷部に向けて低くなるX＝－145.805以南を平坦化するもので、層厚は約0.2～0.3mを測る。出土遺物は希薄であるが、豊臣後期と考えられる遺物の出土はみられない。

第8-2層上面を豊臣期3とする。

第9層 古代～中世の包含層である。2区台地上の西端、1区台地上の東端の限られた範囲で確認できた黒褐～暗褐色系砂質シルトである。須恵器、土師器を少量ながら包含する。なお、比較的深さのある遺構からは瓦器片、須恵器片、土師器片などが出土している。層厚は約0.05mである。

第10層 基盤層である。黄色系シルトや灰白色系中～粗砂等である。上面を基盤層上面とした。

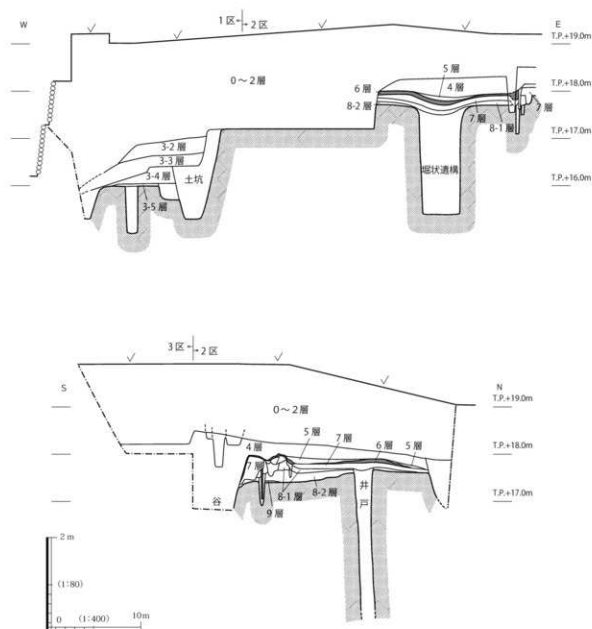


図5 断面模式図

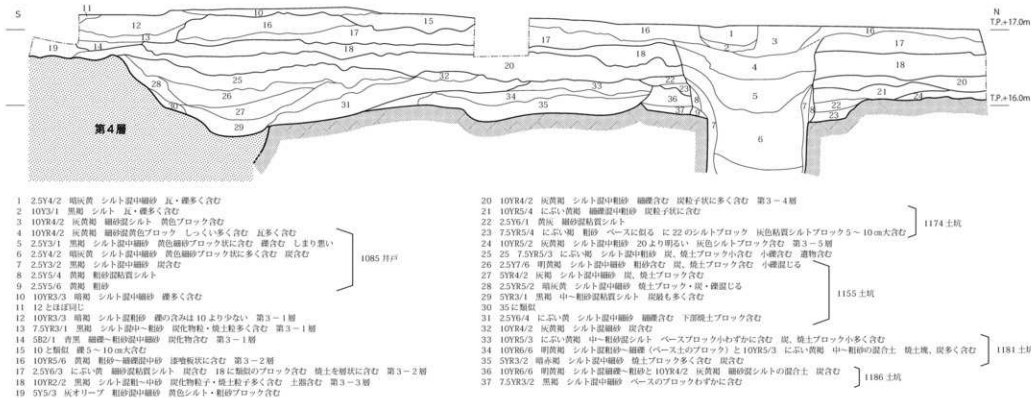


図6 1区 調査区南北断面図

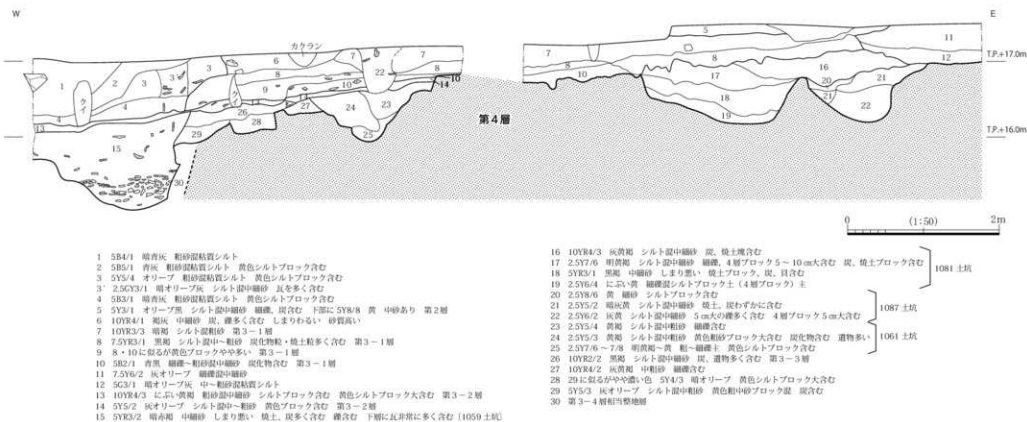


図7 1区 調査区東西断面図

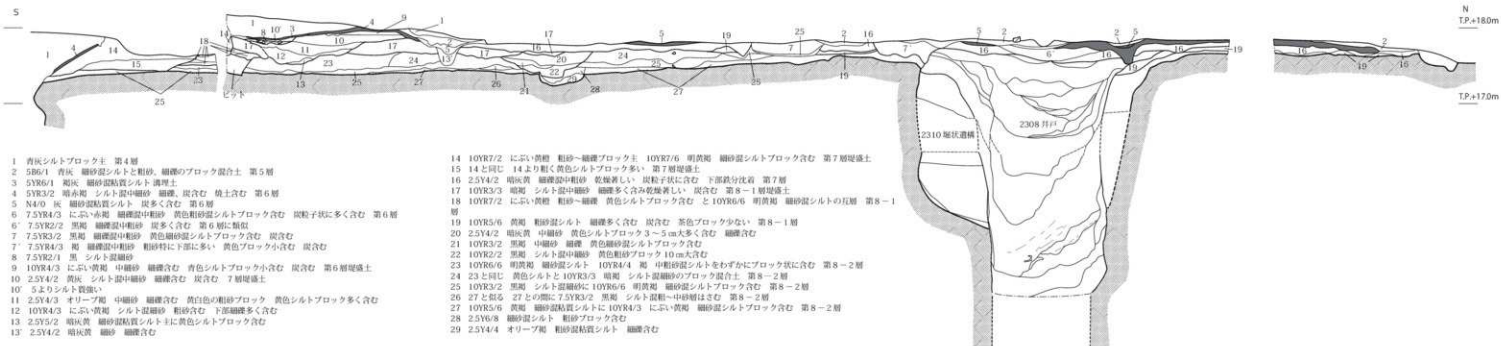


図8 2区 調査区南北断面図

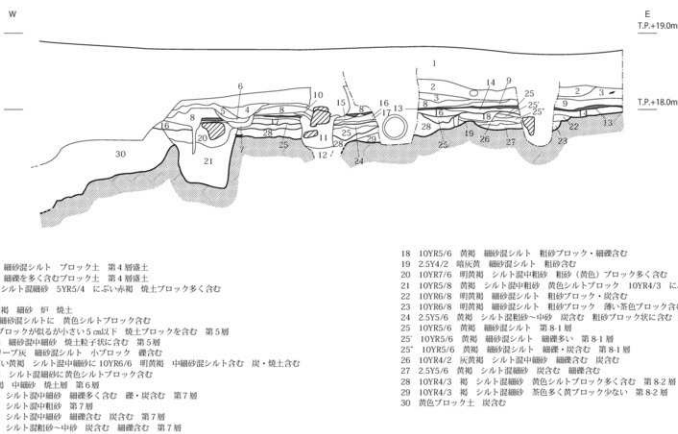


図9 2区 調査区東西断面図

第2節 徳川前期以降の遺構と遺物

当該期の遺構には多数の土坑があり多量の遺物が出土した。1区北半は当該期に相当する第3層が複数に細分でき、各層に対応して土坑を検出している。一方、1区南半、2区、3区では第2層までに削平され、第3層がほとんど遺存しておらず、第4層以下が露出する状況であった。3区西側3分の1の範囲は第3層相当層が遺存していたが、工事影響深度であるT.P.18mで調査を終了しており、第4面の検出には至らなかった。なお、4区は上層までの攪乱によって遺構面が遺存しない。調査地は、南半がもともと谷地形であったが、元和の整地層である第4層で埋め立てられている。整地の結果、谷地形であった南側が高くなり、北に向かって低くなっている。また、丘陵部は西に向かって下降しているため、1区北半が最も低地となっている。その結果、最も低地である1区北半では遺構面の遺存状況が良好で、他は上層に削平されたものと考えられる。そこで、最初に1区の第3層の細分層出土遺物を示し、1区北半の各遺構面で検出した土坑を元に時期的なグループに分け、記述を進めることとする。

第3層及び土坑からの出土遺物は多量であり、その内容も陶磁器類のみならず、土人形などの土製玩具類、金属製品、石製品、瓦類、骨角製品、貝類、羽口や鉄滓、炉壁といった金属器生産関連遺物など多岐に及んでいる。これらの内容を詳細に示すことは困難であることから、層位的に検出可能であった1区を中心に土坑を抽出し、それらの出土遺物を中心に示している。また、掲載した遺物は時期を示すことに重点を置いており、組成を示すものではない。なお、出土遺物のうち、陶磁器、土器以外のものは、後述することとする。

第3層の細分層は基本的には1区北半で確認した。ただし、第3-1層は1区南半の西斜面、肩部でも確認しており、1区北半の西側斜面では、2層系の整地層などによって第3-1層はほとんど確認できなかった。1区北半は第3-2層の整地によってほぼ平坦化していることが分かる。また、西端は谷町筋に向かって大きく段をもって低くなり、現状では前述のように石垣が築かれていた。

・第3-1層出土遺物(図10)

第3-1層からは多量の遺物が出土した。図示したのは1・2のみであるが、銅版型紙刷りの碗などが含まれており、幕末期～明治の時期が与えられる。

1は青花の小杯で、徳化窯のものである。口縁部は口禿げである。2は関西系陶器碗で磨茶碗である。

・第3-2層出土遺物(図10・11)

第3-2層からは多数の遺物が出土した。

磁器 3～13は磁器である。肥前、瀬戸美濃、関西系のものである。3は瀬戸美濃磁器で白磁型打ちの皿である。4は青磁鉢で三田産。焼き継ぎがされており、高台内には焼き継ぎ印がみられる。5・6は色絵碗である。いずれも染付に上絵を施す。瀬戸美濃産である。7は染付蓋で関西系である。8～12は染付碗である。8・9は瀬戸美濃で端反碗である。10は肥前で広東碗である。11・12は口縁部が端反の碗である。11は見込みに環状の松竹梅を施す。11は関西系と考えられ、12は瀬戸美濃である。13は蛇ノ目凹形高台を有する染付鉢である。肥前。

陶器 14～20は陶器である。肥前、関西系、萩などがある。14・15は関西系陶器蓋。いずれも蓋の内面に墨書がある。14は「弘化二(1845年)□□大呂(陰曆12月)初八」、15は「安政乙卯(1855年)三月己亥求之」とある。16は肥前陶器蓋である。「小倉名物三官館」の壺の蓋。17は萩焼でピラ掛け小碗である。18は関西系陶器碗である。19は関西系陶器で鉄漿容器として使用されている。中に内容



圖10 第3-1・3-2層 出土遺物

物が遺存しており、蓋が落ち込んでいた（図版19）。20は瀬戸美濃で皿である。21は鉢である。3色の釉を掛け分ける。高台脇に「末廣山」の刻印を有する。22は壺である。型つくりで肩部に波状文を有する。万古焼き。23は関西系陶器で灯明台である。23のような灯明台は第3-2層で出土が目立つ。24は焼締系の陶器壺である。緑色の自然釉がみられる。大型の壺で三耳壺か。口縁部は玉縁状を呈し、内面には沈線が一条めぐる。頸部と肩部の境に段を有するものである。タイのノイ川窯産と考えられる。他に陶器では図示していないが、関西系陶器のイッチン掛けの蓋などが目立ってみられた。

土師質土器 25・26は土師質土器である。25は涼炉である。白色の胎土を有し、風炉など他の大型の土師質土器とは異なる。26は塩壺である。コップ形を呈し、内面にはしぼりの痕跡が残る。底部は円板充填である。

以上の遺物は磁器では瀬戸美濃、関西系を含むこと、瀬戸美濃の型打ちの白磁皿や、三田産青磁、萩焼がみられるなど幕末期の様相を呈している。14・15の墨書の年代とも矛盾せず、第3-2層は19世紀中頃の整地層と考えられる。

・第3-3層出土遺物（図12）

27～38は第3-3層から出土した。青花、陶磁器類が出土した。

磁器 27～33は磁器染付である。27は皿で、高台内に放射状のケズリ痕跡が明瞭に残り、青花の可能性のあるものである。28・29は色絵で28は蓋、29は広東碗である。いずれも内外面ともに文様を施すものである。30は蓋、31～33は碗である。碗には31の丸碗、32の小広東碗、33の広東碗がある。32は外面に竜を描く。33は外面に寿字文をあしらう。

陶器 34は関西系陶器の碗である。見込みに小花を散らす。

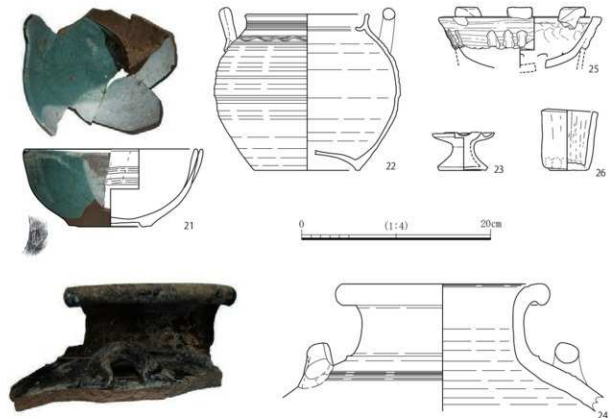


図11 第3-2層 出土遺物



圖12 第3-3・3-4層 出土遺物

その他 35～38は埴壇である(図版20)。35は他より小さく、内面に付着物がみられる。金の可能性が高い。36～38は外面が発泡しており、内面には緑色の付着物がみられる。銅か。なお、36・37は側溝からの出土であり、出土層位の詳細は不明である。

第3～4層からは掲載した遺物は少ないが、全体として小広東碗、広東碗が一定量出土している。第3～2層でみられたような瀬戸美濃の端反碗などは出土しないことから、18世紀末～19世紀前葉の時期が与えられる。

・第3～4層出土遺物(図12)

第3～4層は西側斜面では細分することができたが、大きな時期差はないものと考えられる。39～47は第3～4層から出土した。青花、磁器、陶器が出土した。

磁器 39は青花碗である。40～45は肥前磁器染付である。40～42は丸碗である。40は雪輪草花文の丸碗で波佐見焼である。41は外面、見込みに梵字文を配する。42は器高の高い碗で、高台内に「富貴長春」の銘款を有する。43～45は皿である。43は口縁部が玉縁状を呈する大皿である。高台内には「奇玉宝鼎之珍」の銘款を有する。44・45は見込みを蛇ノ目釉割ぎする。44は外面に折れ松葉をあしらう。波佐見焼。45は内面に格子文をあしらう。

陶器 46は瀬戸美濃で刷毛目碗。47は関西系陶器丸碗である。鉄銹がみられる。

第3～4層からは、肥前磁器碗では図化した以外に外青磁染付碗や筒形碗の出土が目立ち、小広東碗も一定量みられる。第3～5層に比して、広東碗はわずかにみられる程度である。このことから、18世紀後半を中心とする時期が与えられる。

第3～5層からはほとんど遺物が出土していない。

なお、南半の西側は4層に類似した整地層が認められた。この整地層について、トレンチ調査を行った。トレンチからは図12～48が出土した。48は関西系陶器碗で所謂、磨茶碗である。「寛政癸丑(寛政5(1793)年)」とあり、18世紀末頃に肩部を拡張したものと考えられる。他にトレンチからは外青磁染付碗などが出土した。

(1) 第3～2層上面の遺構と遺物(図13)

幕末の整地層上面の遺構面である。図13に第3～2層の範囲を示した。西端は第3～2層より濁った整地上で拡張されており、第3～2層との境界付近には板状の漆喰が多くみられた。1区北半では柵列、土坑を検出している。柵列は南北方向に2列検出した(柵列1・2)。柵列を構成するピットは直径0.25m前後の円形を呈し、深さは0.2～0.3mを測る。柵列は1区南半にも続いており、東西方向にも柵列がみられた(柵列3)。2区の第4層上面でも類似した柵列を検出しており(柵列4)、同様の時期のものと考えられる。1017土坑からは銅版型紙摺りの磁器碗が出土している。1019落込みからは、陶磁器類とガラス片、飾り瓦が出土している。幕末～明治期のものと考えられる。1区南北の境界には第3～1層相当層が溝状に延びており、北半と南半を画している。1区南半は西端が第3～1層段階にひな壇状に成形され、平坦面では第4層が露出していた。

2・3区でも銅版型紙摺りの磁器が出土する土坑が数基みられた。2016・2023・2024土坑などでこれらは明治期にかけてのものと考えられる。

(2) 第3～3層上面の遺構と遺物(図13)

1区北半では土坑、井戸を検出した。第3～3層上面は東から西に向かって段をもって下降しており、東端はT.P.17.1m、西端はT.P.16mと約1.1mの比高をもつ。土坑が位置する平坦部はT.P.+16.4m前

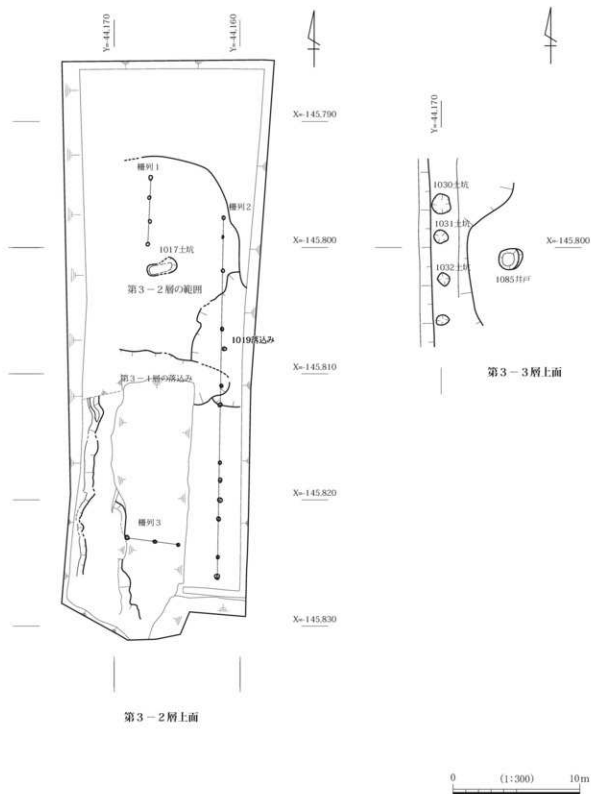


図13 1区 第3-2・3-3層上面 検出遺構

後を測る。土坑は南北に等間隔に4基並んでいる。直径1～1.5mの円形を呈し、深さ0.1～0.2mと浅い。埋土は第3～2層に類似した黄色土である。土坑付近からは獣骨などが目立って出土していた。第3～3層と第3～4層の年代から概ね19世紀前半～中頃の遺構と考えられる。1区北半中央付近では1085井戸を検出した。上層は第3～2層に類似した埋土で埋まっており、瀬戸美濃磁器端反碗などが出土している。下層からは19世紀前半頃の陶磁器が多く含まれており、井戸が機能していた時期は概ね19世紀前半頃まで、その後最終的に第3～2層の整地層によって埋没したものと考えられる。

3区で検出した土坑は出土遺物から比較的新しい段階のものが多く、19世紀代でも幕末期に近い時期が与えられる。

(3) 第3～4層上面の遺構と遺物 (図14・図17、図版2-2)

1区北半では畠の畝溝と考えられる溝、土坑を検出した。畠は調査区西端の最も低い部分で検出した。この範囲の東側はT.P. + 16.3m、西側溝付近ではT.P. + 15.8mを測り、西に下る斜面となっている。傾斜に平行して、幅約0.8～1m、深さは5cmに満たない程度の溝が4本平行しており、畠の畝溝と考えた。東側には幅の狭い溝が一条平行している。また、東西方向の細い溝が畠を切っている。1137溝は広い部分で幅約1m、深さ0.2mを測る。溝の埋土は砂質土で、18世紀後半頃の陶磁器類が出土した他、土人形が出土している。

多数検出した土坑のうち、大型の土坑は2か所に分布している。ひとつは1区北半東端で、1089～1093土坑が密集して掘削されている。土坑は、直径5m前後のいびつな円形を呈し、切り合いをもって密集する状況が窺われた。1089土坑は遺構の切り合いから最も新しい土坑と考えられるものである(図16)。深さは約1.5mを測る。1091土坑は1089土坑に先行する土坑で、やはり深さ約1.5mを測る(図16、図版3-2)。これらの土坑の埋土は類似しており、平面形は検出しにくい状況であった。土坑は途中、貝殻などが入ったしまりの悪い焼土、炭混じりの層があり、食物残渣などが廃棄されたものと考えられる。土坑の底部には複数の凹凸がみられ、断面の状況からも本来は更に複数の土坑が切り合っていたものと想定される。土坑からは先述の貝殻の他に多数の陶磁器類が出土している。1090土坑は1089土坑の東側に位置する土坑で、人頭大の礫が集積されていた。

もうひとつは、1区中央の土層観察用断面付近に分布する土坑である。1059土坑、1081土坑、1087土坑などの大型の土坑を検出した(図7)。1059土坑は平面形が2.6×1.8mの整った隅丸方形を呈する土坑である。深さ0.9mを測る。1081土坑は当初、大きな土坑と考えていたが、1087土坑と2基の土坑に分かれることが分かった。それぞれ、幅2m前後、深さは約0.9mを測る。上記の土坑と同様、多数の陶磁器類が出土した。

これらの土坑が分布するのは、南北方向では $Y = -44.160$ のラインで、東西方向では $X = -145.810$ のラインである。この南北、東西のラインは、地形が段を有している部分と一致している。 $Y = -44.160$ ラインを境に西側は一段下がっており、約0.5mの比高をもって東側が高い。東側は地山が露出していることから、本来はもう少し比高があったものと想定できる。 $X = -145.810$ ラインを境に南側はもともとの谷地形であったが、第4層の厚い盛土によって北側より高くなっている。1087土坑の南北では、南側は第4層が露出した状態でT.P. + 17.6m、北側はT.P. + 16.9mと約0.7mの比高を有している。

土坑は出土遺物より18世紀後半～19世紀前葉のものと考えられる。連続して掘削された廃棄土坑であり、細かい時期差があるものと考えられるが、厳密な堀分けが困難な部分もあり、大きく①18世紀

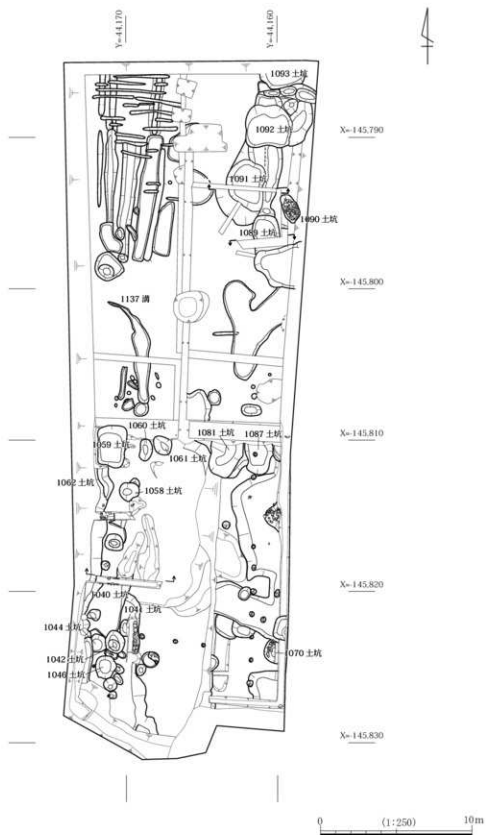


图14 1区 第3—4层上面 检出遗构

末～19世紀前葉を中心とする土坑（1089、1081、1087土坑）②18世紀後半～19世紀初頭を中心とする土坑（1091、1093、1061土坑）に2分した。第3～3層および第3～4層の年代を加味すれば、前者は第3～3層に近く、後者は第3～4層に近い年代を示している。

一方、1区南半の平坦部では第4層が露出しており、第3～2層上面で触れた柵列の他に土坑などを検出した。特筆できる土坑に**1070土坑**（図16、図版3-1）がある。東端は3区に伸びているが、工事により影響しない深度に達したことから3区での検出は行っていない。直径1.6mの円形を呈するものと考えられ、深さは約0.3mを測る。土坑の底部には礫がみられた。1070土坑からは鉄滓、羽口の他、炉壁の可能性がある黒色ガラス質滓が多量に出土している。他の土坑からも金属器生産に関連する遺物は多数出土しているが、1070土坑はその大部分がこれらの遺物、特に炉壁と考えられるガラス質滓で充填されている点で、他とは区別できるものである。

西端は、第3～1層上面段階に燻増状に成形されており、第3～1層を除去したところ、多くの土坑を検出した。最上段の肩部には石列が一部遺存しており、本来は段に沿って石列が並んでいたものと考えられる。石列は**1041土坑**より上位の層序に対応するもので、図15の**1046土坑**の断面でも分かるように、第3～1層はさらに細分できる可能性が高い。

土坑群の規模は、直径1m～1.5mの円形を呈するものが多く、北半の土坑に比して小ぶりである。土坑埋土には貝殻や、炭、焼土を多く含む黒褐色系の腐植土層がみられるものが多い。土坑内からは多くの陶磁器類などが出土した。先にも触れたように西端は第4層に類似した明黄褐色～オリーブ褐色のシルト混細砂の整地層で拡張されており、土坑はこの整地層上面で検出している。図15に**1040土坑**の断面図とともに、整地層の断面図を掲載したので参照されたい。土層6が整地層にあたり、礫が多くみられた（図版1-4）。この整地層については、前述のように、トレンチ調査を行っており、18世紀末頃の遺物が出土している。このことから、検出した土坑は19世紀前半～19世紀中頃の時期が与えられ、土坑から出土した遺物も概ねこの時期を中心とするものであった。

2区の第4層上面でも大型の土坑を密集して検出している（図17、図版2-4・5）。第4層上面は東から西に下降しており、西半では第4層がほとんど遺存しない。比高は、2区南端では1.8mと大きい。南北をみると、南側が高く、北側が低い。比高は0.4m前後を測る。土坑の分布をみると、1区との境で南北方向に分布するものと、 $X = -145,810$ ラインに東西方向に列をなしている傾向が伺われる。平面形はいびつなものが多い。先の①、②と同様の遺物を包含する土坑が多くみられた。①のグループに属するのは2005土坑、2011土坑、2079土坑、2074土坑など、②のグループに属するのは2025土坑、2096土坑、2072土坑、2073土坑などである。南北方向に分布する**2005土坑**（図18、図版3-4）は平面形がいびつで直径5m前後の不定形な土坑である。深さは約1mを測る。底部には複数の凹凸がみられ、本来は複数の土坑が切り合っていた可能性が高い。下層には漆喰がブロック状に含まれる点特徴的である。陶磁器類など多数の遺物が出土した。一方、**2025土坑**（図18、図版3-5）は上記の分布にはあてはまらない土坑である。平面形は7m×2.6mの東西に長く、整った方形を呈する点でも、他の土坑とはやや様相を異にしている。深さは約1.5mを測り、土坑の底部付近には礫が多くみられた。埋土の状況からは南側から埋められていることが分かる。上層には他の土坑と同様、炭や焼土を含むしまりの悪い埋土がみられた。また、土坑の壁には掘削した工具の痕跡がみられた。土坑内からはやはり多数の陶磁器類が出土しているが、②グループの中でも古相を示している。

3区の第4層上面は視乱が著しい事、西側3分の1が前述のように、T.P.18mで調査が終了している

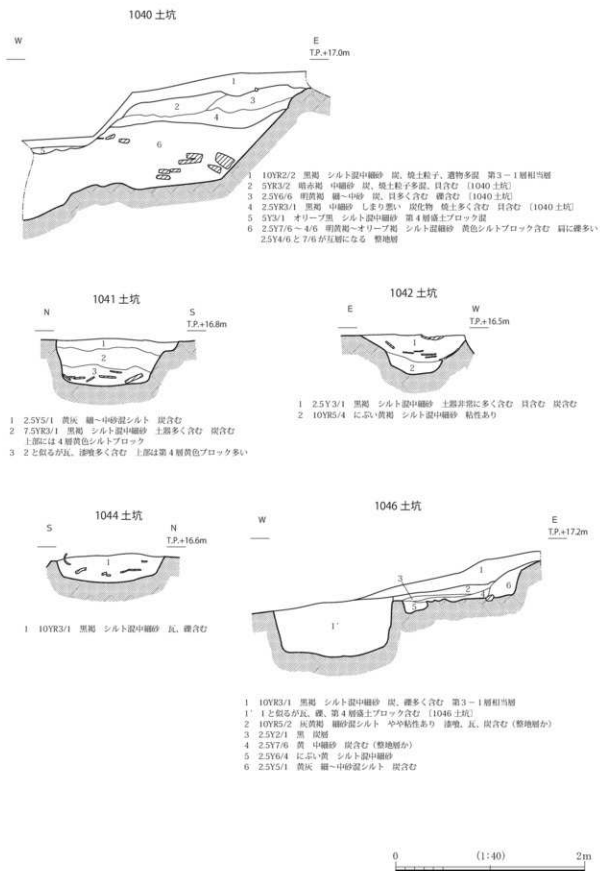


図15 1040土坑と整地層、1041・1042・1044・1046土坑 断面図

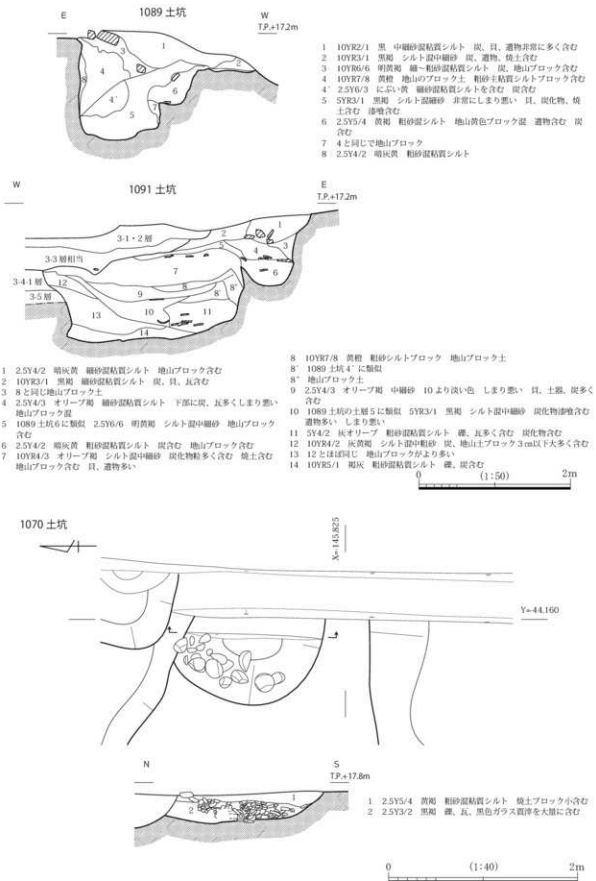


図16 1089・1091・1070土坑 断面図

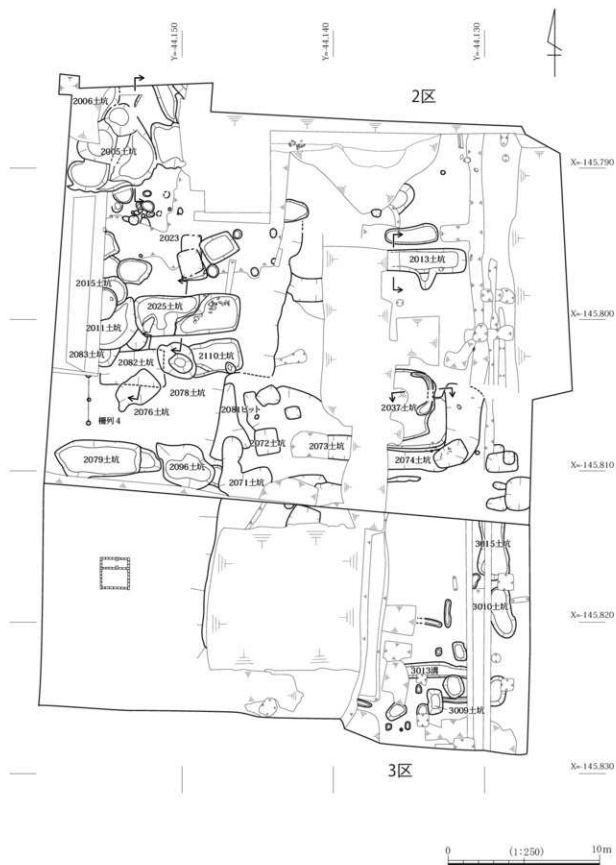
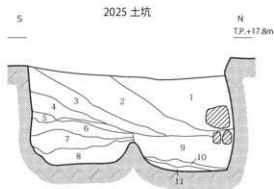
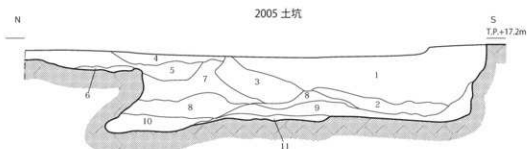


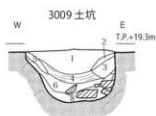
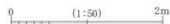
图17 2·3区 第4層上面 検出遺構



- 1 2.5YR3/2 暗赤黄 中細砂 しまり悪い 焼土を多く含む 炭を粒子状に含む 30cm大の礫を含む
- 2 10YR4/1 暗灰 シルト混中細砂 黄色シルトブロック3cm大を多く含む 炭を粒子状に多く含む 礫を含む
- 3 10YR5/6 黄褐 10YR6/6 明黄褐 粗砂ブロック多く含む 炭を粒子状に含む
- 4 10YR4/1 暗灰 2に似るが黄色シルトブロック小赤より多く含む
- 5 10YR6/6 明黄褐 粗砂混粘質シルト 地山ブロック状 炭を粒子状に含む
- 6 7.5YR4/1 暗灰 シルト混中細砂と黄色シルトブロックと灰色シルトブロックの3cm大多く含む 炭を粒子状に含む
- 7 7.5YR6/1 灰 細砂-シルト ブロックと5のブロック混合土 炭を粒子状に含む
- 8 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト混細砂 焼土ブロック含むと7.5Y6/1 灰 粘質シルトブロックの混合土 炭を粒子状に含む
- 9 5Y4/3 暗オリーブ 中細砂粘質シルト 焼土ブロック5cm大含む 灰色シルトブロック少量含む 10~20cm大の礫多く含む
- 10 2.5YR3/1 暗赤黄 中細砂 焼土層 炭を含む
- 11 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混シルトと10YR7/6 明黄褐 粗砂のブロック混合土 焼土粒子状にわずかに含む



- 1 2.5G7/1 明オリーブ灰 細砂粘粘質シルト (4層に類似) と7.5YR5/6 明黄 中粗砂 (地山) の5~20cm大ブロック混合土のブロック含む
- 2 5YR4/2 灰黄 シルト混中細砂 炭、焼土ブロック含む
- 3 10YR5/6 黄褐 細-中砂混シルト 粗砂ブロック状に含む 細砂含む
- 4 5Y7/1 灰白 細砂粘粘質シルト 2.5Y6/3 に近い黄 細砂混シルトのブロック土
- 5 10YR4/2 灰黄褐 シルト混中粗砂 炭、焼土ブロック多く含む
- 6 2.5Y5/3 黄褐 細砂粘粘質シルト
- 7 10YR6/6 明黄褐 細砂粘粘質シルト 黄灰色シルトブロック5cm大含む
- 8 1に類似するブロック土 1に比してブロックがやや小さい
- 9 10Y2/1 赤黒 シルト混中粗砂 炭粒子状に含む 漆喰ブロックを15~30cm大塊状に含む 遺物多く含む
- 10 8に類似するブロック混合土 10YR5/2 灰黄褐 粗砂 灰白シルトブロック含む
- 11 10YR7/3 ~ 6/6 に近い黄褐-明黄褐 粗砂 粘質シルトブロック含む



- 1 2.5Y2/1 黒 細-中砂混シルト 炭、焼土粒 1~2cmの小礫を含む
- 2 5Y7/2 ~ 7/3 灰白~浅黄 細砂混シルト 7.5Y7/1 灰白 粘土ブロックを含む (第4層が崩れたもの)
- 3 10YR3/1 黒黄 細-中砂混シルト 炭、0.5~1cmの小礫を含む やや粘性あり
- 4 2.5Y6/1 黄灰 シルト-5Y7/2 灰白 細砂 ラミナ有り 炭を僅かに含む
- 5 5Y6/2 灰オリーブ 細-中砂混シルト 2.5Y4/1 黄灰 シルトブロック(1cm)を含む (第4層が崩れたもの)
- 6 2.5Y4/1 黄灰 細-中砂混シルト 炭を僅かに含む
- 7 2.5Y7/3 浅黄 中砂混シルト
- 8 2.5Y4/1 黄灰 中-粗砂混シルト 10cm前後の角・半角礫が多く入る



- 1 2.5Y6/3 に近い黄 細-中砂混シルト 炭、10cm前後の礫、塊礫を含む
- 2 7.5YR4/1 暗灰 細砂混シルト 炭、瓦、10cm前後の礫を含む 焼土粒を多く含む 焼土の影響で赤味を帯びた色調となる
- 3 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂混シルト 炭を含む 粘性あり



図18 2005・2025・3009・3010土坑 断面図

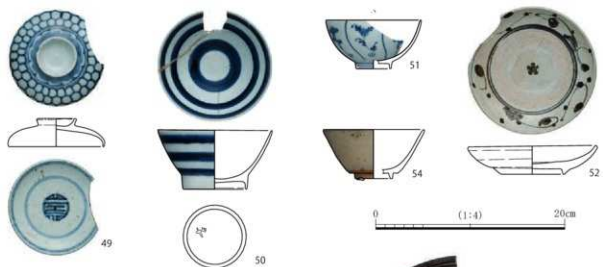


圖19 1081土坑 出土遺物

ため、詳細は不明であるが、東側3分の1で土坑、溝を検出している（図版2-3）。Y=-44.130ラインでは深さ0.3m前後、幅1.5～2mの土坑が南北方向に並ぶ。また、東西方向の3013溝を挟んで南側は約0.2m前後高くなっており、3009・3010土坑（図18、図版3-8・7）など1×1.5m前後の隅丸方形の土坑を検出した。これらの土坑、溝から出土した遺物はいずれも19世紀代と考えられ、①グループの中でもやや新しい様相がみられた。

以下に①、②の土坑出土遺物を示す。

① 18世紀末～19世紀前葉の土坑出土遺物

1081土坑出土遺物（図19・20）

1区中央、段差付近で検出した土坑である。検出当初は1081土坑を大きな土坑と考えていたが、1087土坑と2基の土坑に分かれることが分かった（図7参照）。1081土坑からは肥前磁器、肥前、瀬戸美濃、関西系の陶器などが出土している。主に下層から出土した遺物を示した。

磁器 肥前磁器が出土した。49～53は肥前磁器染付である。49は蓋、50は広島東碗、51は小広東碗である。50は高台内に焼き継ぎ印がみられる。52、53は皿である。52は呉須の発色が悪く、オリーブ色を呈する。見込みは蛇ノ目軸剥ぎで五弁花の印判を配する。53は輪花の大皿で高台内に「奇玉宝鼎之珍」の銘歌を有し、ハリの跡が確認できる。50や53のように焼き継ぎのみられる磁器が多く含まれる。

陶器 瀬戸美濃、関西系陶器の他、萩焼がみられる。54は碗で萩焼と考えられる。高台皿目付けに胎土目が付着している。碗類では関西系陶器が多く出土しており、小杉碗なども出土している。55～57は瀬戸美濃である。55は馬の目鉢。56は水甃で、内面には胎土目が残る。57は瓶拵である。軸は濃い緑色を呈し、裾には雷文を巡らす。底部中央に焼成後の穿孔があり、植木鉢として再利用されたものであろう。55～57のような瀬戸美濃の大型器種が②グループとした後述の1091土坑より目立つ。刷毛目鉢、三鳥手鉢など大型の肥前陶器は1091土坑と同様に出土している。59は関西系陶器で片口である。関西系陶器では土瓶、徳利類も多数みられた。58は焼締陶器匣鉢で備前か。焼き壺が著しい。焼締陶

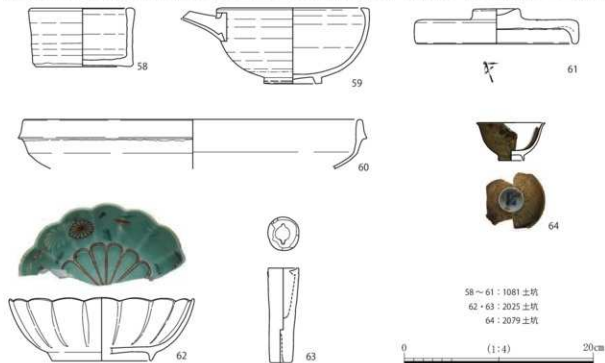


図20 1081土坑他 出土遺物



图21 2011土坑他 出土遺物

器では埴埴鉢も出土している。

土師質土器 60は炮烙である。口縁部下端が突出するものである。61は蓋である。その他、風炉、火鉢なども多く出土している。

2011土坑出土遺物(図21)

1081土坑と類似した遺物が出土する遺構として、2011土坑出土遺物を示す。肥前磁器、肥前陶器、瀬戸美濃陶器、関西系陶器などが出土した。土師質土器では風炉や炮烙などがみられた。

磁器 65は青花を模した芙蓉手の皿である。器壁は薄く、文様も非常に精緻である。高台皿付には砂が付着する。三田産と考えられる。66～75は肥前磁器である。66は色絵皿である。67は染付合子蓋である。68は染付碗蓋。69～73は染付碗である。69は鉄釉の横線をもつ筒形碗で、同様の碗は当該期の土坑から複数の出土がみられた。70は半球碗で内面に菊花をあしらう。内外面に文字が書かれている。71は小広東碗、72、73は広東碗である。土坑からは小広東や広東碗が主体的に出土している。68、72は見込みに鶯が描かれている。他にも見込みに鶯が描かれるものは多くみられた。71は見込みに形骸化しているが、環状に松竹梅を表しており、その内側には人物を描く。外面には漢詩及び、人物が描かれている。74は染付鉢である。呉須は淡く、外面には細い線画で花を表現する。高台内には焼き継ぎ印がみられる。75は油壺である。呉須の発色は悪く、オリーブ色を呈する。

陶器 76は瀬戸美濃腰銘茶碗である。78は瀬戸美濃片口鉢。77は関西系陶器碗で小杉碗である。陶器碗類の中では、小杉茶碗の出土が目立つ。79は萩焼碗か。80・81は関西系陶器である。80は汁注で半裁の菊をあしらう。81は土瓶でほぼ完形である。82は肥前陶器壺で、内面に鉄錆の付着が著しく鉄漿壺として使用されたものである。83は1087土坑出土のものであるが、同じく鉄漿壺として使用されたものである。丹波産。同様の壺は他の土坑からも出土がみられた。1081土坑と同様、馬の目皿も出土している。

以上、①グループとした土坑からは、磁器では肥前磁器の小広東、広東碗が主体となり、外青磁染付、筒形碗などは出土するものの主体的ではない。陶器では瀬戸美濃陶器の馬の目皿を含み、碗類では関西系陶器小杉碗の出土が目立つ、萩焼を含むなどの特徴を有している。これらの特徴より、18世紀末～19世紀前葉の時期が与えられる。その他、同様の時期が与えられる2079土坑から出土した青花小杯を図化した。図20～64は十錦手で外面には黄色の釉葉が塗られ、細かく線刻し、上絵をあしらう。高台内には焼き継ぎをしているため、不明瞭であるが、「乾隆年製」の銘款がみられる。①グループとした2074土坑からは見込みに五弁花を有する外青磁染付や筒形碗等が比較的、多く出土しており、②に類似するとも考えたが、「道光年製」の銘款を有する磁器碗が出土しており、①に含めた。連続する廃棄土坑という性格上、①・②の土坑の厳密な掘り分けが困難な部分もあった。

②18世紀後半～19世紀初頭の土坑出土遺物

1091土坑出土遺物(図22～29)

Y＝－44.160ラインの土坑では1091土坑が1089土坑より切り合い関係から前出であることが分かる。1089土坑は出土遺物より①グループに属しており、1091土坑はこれより古相を示すものである。1091土坑からは磁器、陶器、瓦質土器、土師質土器など多数の遺物が出土した。ここでは、時期を示すとともに、出土した遺物のバラエティーを示すことを目的として遺物の抽出を行った。よって、掲載した遺物は多いが、他の土坑より遺物の出土量が多いということではない。

磁器 84～90は白磁である。84は紅皿、85は猪口、86・87は小杯である。88は壺の蓋、89は鉢、



图22 1091土坑 出土遗物①

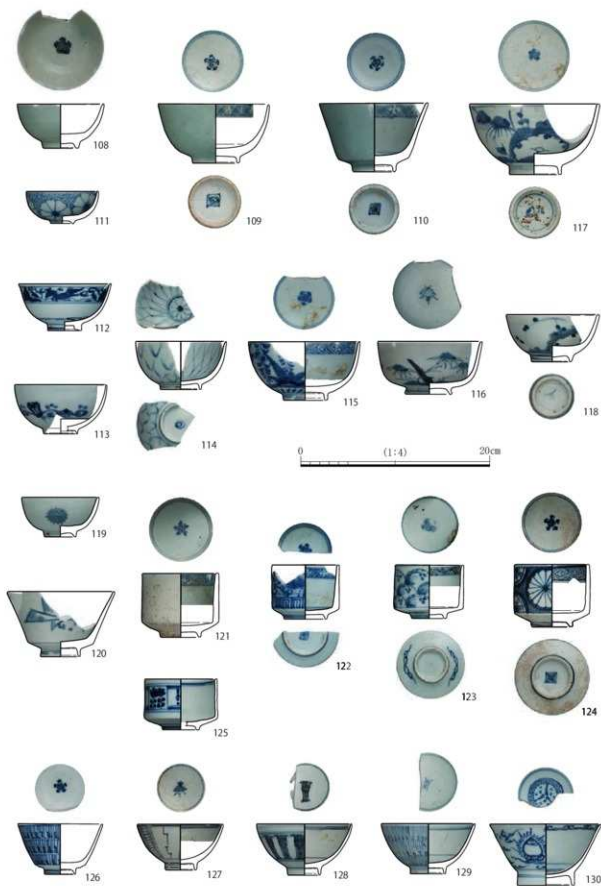


图23 1091土坑 出土遺物②

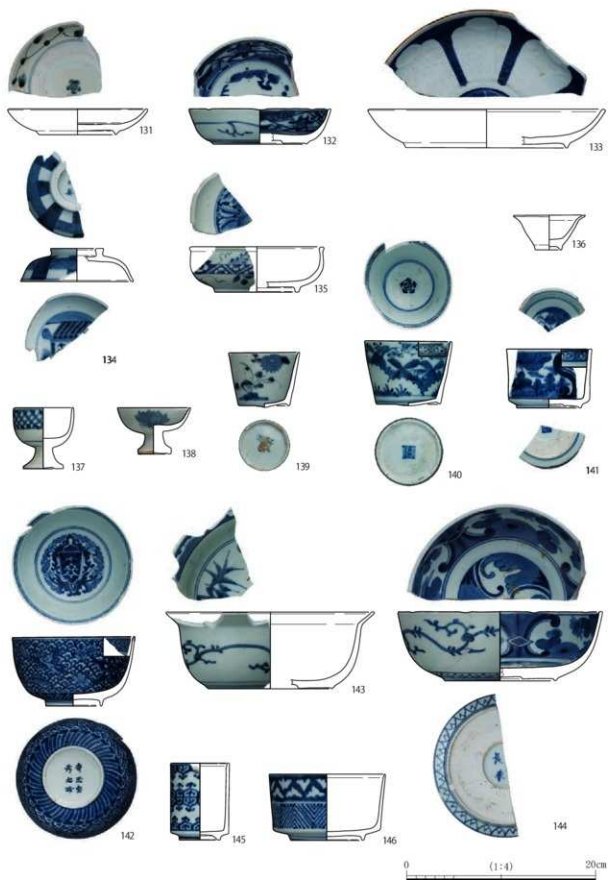


图24 1091土坑 出土遺物③

90は壺である。91は青磁鉢である。口縁部は輪花。92～98は色絵である。92は小杯、93は猪口で染付に上絵を施す。見込みには五弁花を有する。94・95は蓋、96は碗、97は皿である。いずれも染付に上絵を施すものである。96は見込みを蛇ノ目軸刺ぎし、無軸部分にも色絵を施している。98は型打成形で側面に輪花をつくる鉢で、外面に上絵を施す。99は水滴である。

100～146は肥前磁器染付である。100～107は蓋である。100・101はいずれもかえりがつくもので、100は合子、101は壺の蓋か。102～106は丸碗の蓋である。102・103は外青磁染付である。つまみ内面には102・103は角に渦福、105は「富貴長春」の銘款を有する。102～105は口縁部直下内面に四方禪文を巡らす。見込みには103の五弁花、104の環状松竹梅などがみられる。106は内外面に輪宝文をあしらう。107は広東碗の蓋である。

碗には108・109・112～119の丸碗、111の半球碗、110・120の直線的に外方に延びる碗、121～125の筒形碗、126～129の小広東碗、130の広東碗がみられる。そのうち、108～110、121は外青磁染付である。図化していないものも含めて、外青磁染付碗や丸碗、筒形碗が主体を占める。小広東碗は一定量認められるが、広東碗は出土するものの少ない。文様は外青磁、丸碗、筒形碗など、見込みに五弁花を施し、口縁部内面には四方禪文、高台内には角に渦福の銘款を有するものが目立つ。また、117・118のような雪輪草花文を描く波佐見焼が多くみられた。同様の文様をもつもので、118の法量の小さいもの、117の大きいもの、図示していないが、この中間の法量のものがあり、複数の規格が認められた。112は飛馬文が描かれる、胎土が非常に精緻なもので他とは区別できる。高台置付、高台内は無軸である。119・120のように印判手はみられるものの、全体としては少ない。111は水列菊花文を施す。111のような半球碗も比較的多くみられた。小広東は、127の見込みには昆虫文を、128・129には梵字文を配し、外面には寿字文、梵字文が施される。

131～133・135は皿である。131は見込みを蛇ノ目軸刺ぎし、五弁花を有する。132は蛇ノ目凹形高台である。133は口紅を施す皿で、内面には型打成形による文様が施され、放射状に壺の文様を白抜きで表している。135は口縁部が玉縁状になるものである。134は鉢の蓋である。

136は小杯である。137・138は仏飯具である。138は印判手。139～141はそば猪口である。139は印判と手描きを組み合わせた文様を施す。140は内面に五弁花を配する。141は蛇ノ目凹形高台で口縁部内面には四方禪文を巡らす。

142～146は鉢である。142は高台内に「奇玉宝鼎之珍」の銘款を有する。143・144は外面に比較的精緻な唐草を配し、底部は蛇ノ目凹形高台である。144は高台内に「長春」の銘款が残存する。145・146は口縁部内面が無軸となっており、蓋を有するものである。

陶器 陶器には瀬戸美濃、関西系、肥前、軟質施釉陶器、焼締陶器がある。

147～162・164は碗・蓋である。肥前陶器は少なく、瀬戸美濃、関西系陶器が主体となる。147～150・162は瀬戸美濃で、147は刷毛目碗、148はせんじ碗。149・150は甌茶碗で、蓋と身がセットとなるものであろう。関西系陶器には151・152の色絵蓋、153・154の色絵丸碗、155の丸碗、156～160の筒形碗、161の小杉碗などがみられる。164は磨茶碗である。

163・166～169は皿である。163は肥前で高台が高く、見込みは蛇ノ目軸刺ぎで鉄絵を施す。166は瀬戸美濃で変形の皿。169も瀬戸美濃であらう。全体の形状は不明であるが、底部は円形を呈し、削りて仕上げる。鉄軸を施す。167・168は関西系陶器。167は内面見込みが盛り上がるものである。内面に色絵を施す。その他、関西系陶器では170の鉄漿容器、172・173の汁注などがある。瀬戸美濃で

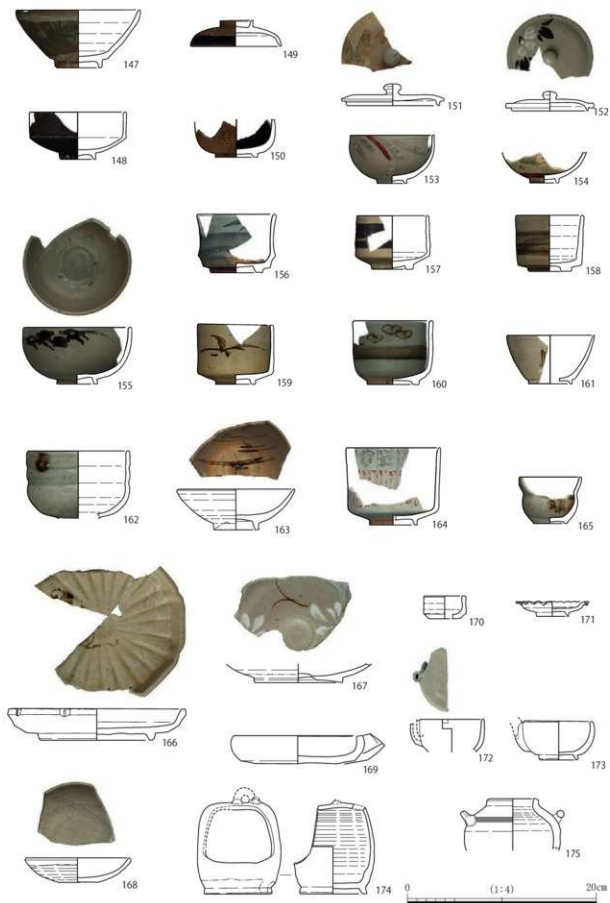


图25 1091土坑 出土遺物④

は165の鉢、171のひだ皿、174の胎軸を施した火もらい、175の双耳壺などがある。

大型の器種では挿鉢などの焼締陶器、関西系陶器の土瓶、土鍋、徳利、壺などがみられた。その他、肥前陶器の鉢などが出土している。

176～189は焼締陶器である。176は備前灯明皿である。177～180は鉢である。180は丹波、他は備前である。匣鉢のような同様の鉢は多く出土しており、図化したものも含め11点が出土している。178は底部の歪みが著しく、窯着している。口縁部も重ね焼きによる剝離痕跡が明瞭である。179は口縁部には煤の付着が認められる。火入れとして用いられたものであろう。180は器高が高く、体部上半には、沈線が多重に巡る。182は丹波徳利である。183～187は挿鉢である。183は非常に小さく、体部は丸みを帯びるものである。184～187は塀挿鉢で、187は口縁部内面に記号を刻む。186は高台を有するものである。188は鉢、189は甕である。備前。特筆できるものとして、181の壺屋焼徳利がある。口縁部は欠損しているが、肩部には沈線がめぐる。

191～198は関西系陶器である。191・192は土瓶蓋、196～198は土瓶である。196・197は灰釉で組み合わせるものの可能性が高い。193は土鍋類の蓋、194・195は土鍋である。194はミニチュアか。193・196・197は灰釉であるが、土瓶、土鍋類は鉄釉のものが目立つ。

200は獣の顔を把手に飾る壺である。鉄釉。199・201は壺、202～205は甕である。丹波産。

206～211は肥前陶器である。206は陶胎の染付で皿である。見込みは蛇ノ目軸刺ぎする。207は皿、208は壺、209～211の鉢である。いずれも刷毛目による文様を施す。207は特に暗褐色の胎土を呈する。207・209は見込みを蛇ノ目軸刺ぎし、209はその後、刷毛目による装飾を行う。いずれも高台置付付近には白い泥漿状の微砂を塗る。210は片口である。内面は白土を塗り、体部上半は白土による刷毛目、下半は鉄化粧を施す。211の鉢は、三鳥手であるが、印花文は不鮮明である。見込みには砂目が残る。底部に焼成後の穿孔がみられ、水琴窟、あるいは植木鉢として使用されたものであろう。208の壺は高台内も施釉される。置付は無釉。焼成後、体部中ほどに0.6cm程度の孔を向かい合って2か所に穿たれており、吊り下げて使用されたものか。211同様、二次的な使用がされている点で興味深い。

212～225は軟質施釉陶器で、灯火具が多くを占める。212～217は灯明皿である。口縁部付近に煤が付着するものが多い。213・214・215の受けを有するものと212・216・217の有さないものが認められ、それぞれに大小のものがある。底部には回転系切り痕がみられる。217は内面に刻印が認められるが、文字の判読はできない。222～225は乗燭である。底部にはいずれも回転系切り痕が残る。222～224は底部に釘孔を有する。バリエーションが豊富で、223・224は算盤玉形で大・小がみられる。225は中央に円筒形の突起を有する大きく開いた鉢形を呈する。円筒部には円形の窓が開く。222は中央の円筒部は欠損しているが、脚を有するものである。218は皿、220は壺である。219は不明製品である。小さい穿孔が3方に復元でき、「清山」の刻印がみられる。221は底部が欠損しているが土瓶である。土師質土器 226～228は土師質土器皿である。底部はいずれも回転系切り痕を残す。前述の軟質施釉陶器とともに、灯明皿として使用されたものと考えられる。229・230は焼塩壺である。229は蓋で内面に布目が残る。230は「泉淡伊織」の刻印を有する。底部は剝脱しているが、充填するものである。231～233は炮烙である。粘土を貼り付けて把手として、穿孔するものである。231は孔が貫通するもので、232は貫通しない。233は把手を横に拡張するもので、貫通する孔を有する。その他土師質土器には234の七輪、235の風炉といった大型の器種が多く出土している。235は比較的小型で、これより大型の個体もみられた。236は皿目である。237は十能、238は方形の火鉢である。237は煤の

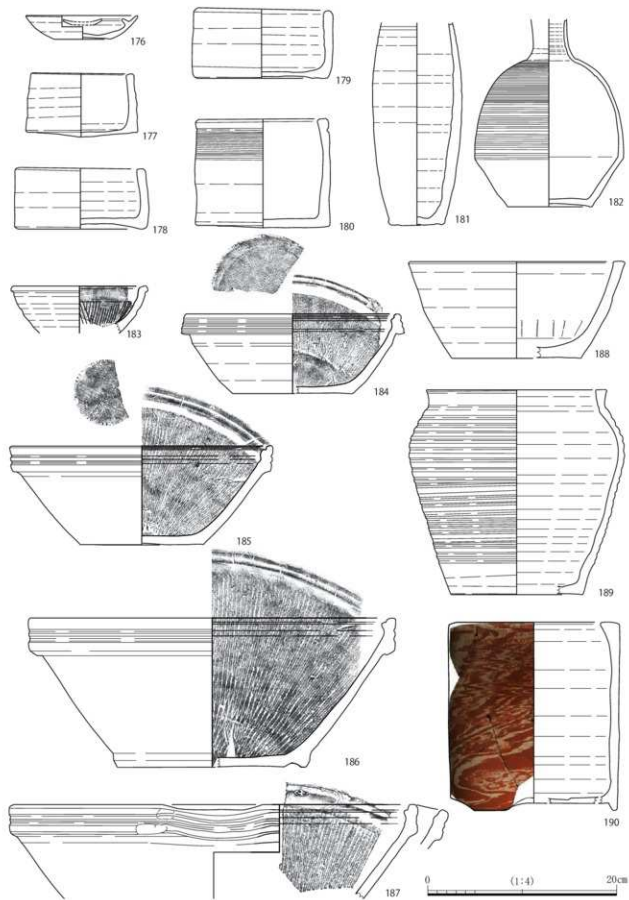


圖26 1091土坑 出土遺物⑤

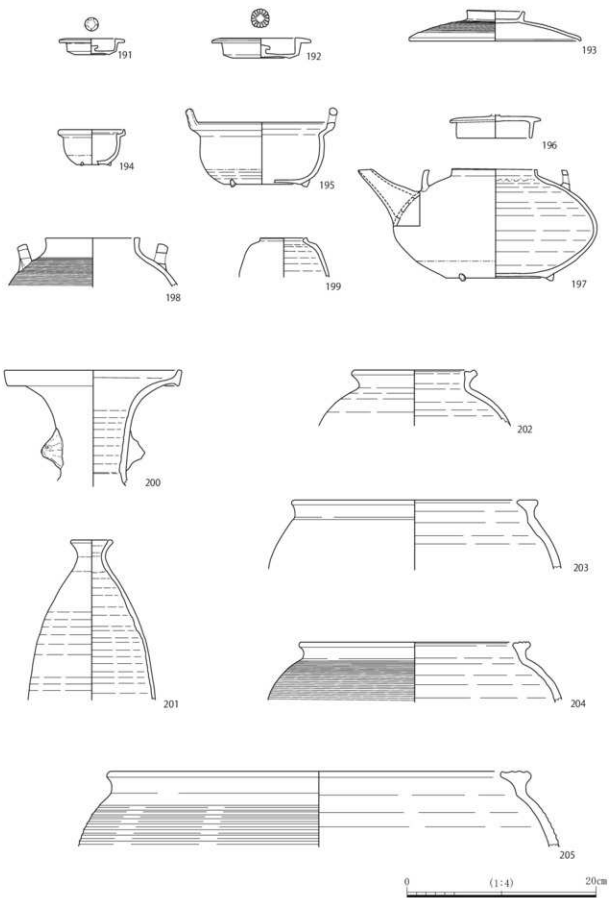


图27 1091土坑 出土遺物⑥

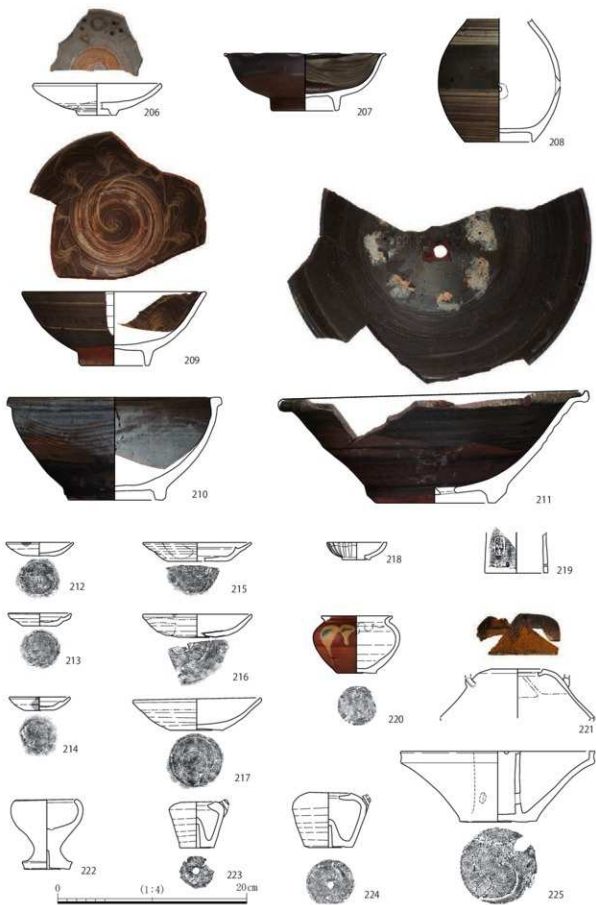


图28 1091土坑 出土遺物⑦

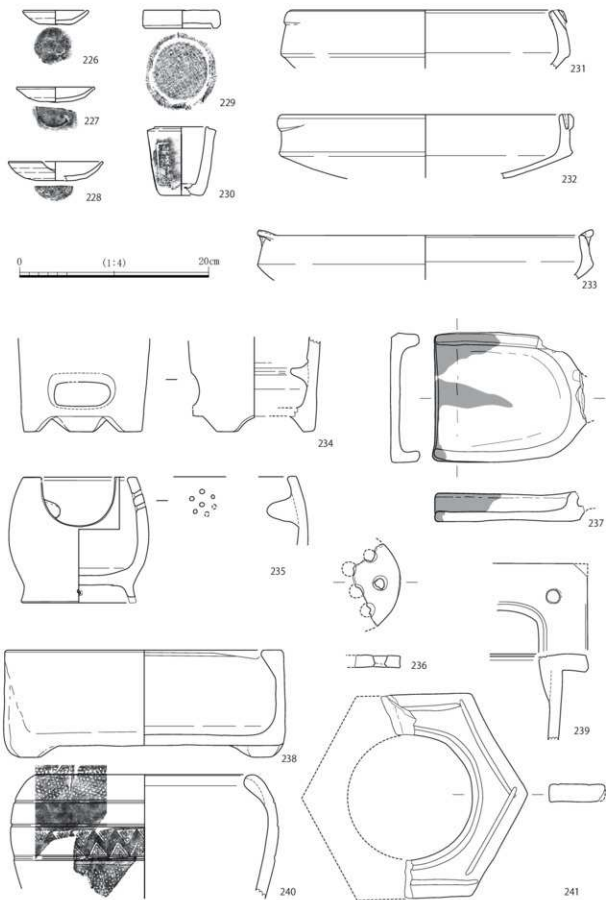


图29 1091土坑 出土遗物⑧

付着がみられる。190は土師器質土器で橙色と白色の絞胎の火入れである。底部は非常に薄い。なお、2078土坑からは器形は異なるが、同様のマール状を呈し、高台内に「松花山」の刻印を有する破片が出土している。深草産か。

瓦質土器 239～241は瓦質土器である。239は埴形土器である。方形を呈し、口縁部に鈔をめぐらすものである。体部は器壁が薄く、鈔は比して厚い。体部の内面に粘土を補充して接合している。鈔の上面には沈線を巡らせ、コーナー部には竹管文がみられる。鈔の側面には縦方向に細かい筋が平行してみられる。使用による擦痕か。240は火鉢である。丁寧に磨かれ、沈線で区画された中に文様を配する。241は六角形を呈するものである。

以上の出土遺物から、18世紀後半～19世紀初頭の時期を与えたい。

出土遺物の様相が類似する土坑には1区南半で検出した1070土坑がある。

1070土坑出土遺物 (図30・31)

磁器、陶器、土師質土器が出土した他、砥石、多量の羽口、鉄滓、埴壁と考えられる破片が出土した。**磁器** 242～250は肥前磁器染付である。242は外青磁染付蓋である。口縁部内面には四方禪文を、見込みに五弁花をあしらう。243～245は丸碗である。244は外青磁、245は印判手。246～248は筒形碗で、246は外青磁である。247は陶胎の染付で外面には唐子がみられる。249は皿である。250は鉢である。見込みに五弁花を配し、高台内に角に渦福の銘款を有する。

陶器 関西系陶器、瀬戸美濃、肥前、焼締陶器、軟質施釉陶器がみられた。251は関西系陶器蓋である。252は瀬戸美濃碗。253・254は関西系陶器。253は碗である。254は口縁端部及び口縁部内面は露胎で、蓋付鉢、あるいは合子。内面に小さい目跡が残る。高台内に墨書がみられるが、内容は不明である。255は肥前陶器鉢で刷毛目文を施す。口縁部内面は軸を剥いており、蓋を有するものであろう。高台は高く、高台豊付には白土を塗る。焼締陶器には256の埴摺鉢がある。257は軟質施釉陶器で皿である。底部外面には糸切痕が残る。口縁部に煤の付着が認められ、灯明皿として使用されたものである。

土師質土器 258～261は土師質土器である。258は土師質土器皿で底部外面には糸切り痕が残る。口縁部に煤の付着が認められ、灯明皿として使用されたものである。259は鉢。260・261は炮烙である。261は把手の肥厚はみられず、貫通しない孔が穿たれる。

以上の遺物より18世紀後半を中心とする時期を与えたい。

金属器生産関連遺物 羽口、鉄滓、埴壁などが出土した (図版20)。

262・263・923・924は椀形鍛冶滓である。264・265・918～922は埴壁と考えられる黒色ガラス質滓である。黒色のガラス質滓はいずれも湾曲しており、凸部が被熱、発泡が顕著であることから、凸部が埴壁内側で膨張した結果凸状を呈したものと考えられる。埴壁と考えられる黒色ガラス質滓は20kgに達した。これらについては科学的分析を行っており、合わせて第4章を参照されたい。

266・267・915は羽口である。266は直径6.8cm、孔径2.3cmを測る。267は直径6.9cm、孔径2.3cmを測る。267は先端部が斜めにカットされている。器壁が厚く、通風孔の小さい鍛冶用の羽口と考えられる。

以上、②グループからは、肥前磁器では外青磁染付、筒形碗、丸碗が主体となり、小広東碗は一定量含まれるが、広東碗の出土は①のグループに比して少ない。印判手の出土があるものの、少数である。文様は口縁部内面には四方禪文、見込みに五弁花や環状の松竹梅、高台には角に渦福が目立つ。陶器では碗類で関西系、瀬戸美濃などがみられた。碗皿類は肥前磁器が圧倒的に多いが、関西系陶器ではバ



图30 1070土坑 出土遺物①

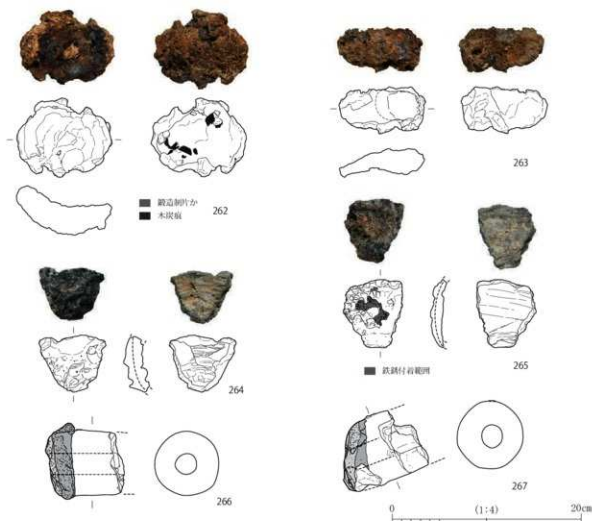


図31 1070土坑 出土遺物②

ラエティーが豊富な状況が認められる。大型の器種では、①グループ同様関西系陶器の土鍋、土瓶、徳利、焼締陶器の播鉢、叵鉢、肥前陶器の鉢、壺などがみられるが、①グループで目立った瀬戸美濃はほとんどみられない。1091土坑では、水甕の小片が数点みられた他、馬の目皿の小片が1点出土している。土師質土器、瓦質土器では大きな器種の違いは①②ではみられなかったが、焙烙は①グループでG類がみられるが、②グループではD類がほとんどであった。埋土も類似した連続した廃棄土坑という性格上、出土遺物の掘り分けが困難な部分もあり、多少の混入は避けられないものの、②グループは①より古相、18世紀後半～19世紀初頭の時期を与えたい。

2区で検出した2025土坑は先に述べたように土坑の形状が異なっていた。広東碗を含まず、②グループの中でも古相を示す土坑と考えられる。図20に出土遺物の一部を図化した。62は青磁鉢で色絵を施すものである。63は蠟燭形の灯明具である。

(4) 第3～5層上面の遺構と遺物 (図32、図版2-1)

第3～4層を除去して検出した遺構面である (図版2-1の北側)。第3～4層上面と同様、1区西端のもっとも低地部で畝の畝溝を検出した。溝の方向が第3～4面とはやや異なり西に振る。畝溝に沿うように小ピットを数基検出した。

調査区西端は段を有して西側に落ちている。西側側溝底部では基盤層に達しておらず、更に西に向かっ

て傾斜していることが分かる(図版1-1)。この西側斜面では豊臣期の区画施設などの検出が期待されたが、第3-4層までに攪乱され、豊臣期の遺物を含む地層は確認できなかった。更に斜面下方では、豊臣期の遺構、あるいは遺物を包含する地層が遺存する可能性があり、今後、周辺の調査に注目される場所である。また、西端の形状をみると、弧状になって2分割されていることが分かる。1区南半も同様に弧状を呈し、二分割されている。調査区と谷町筋にはさまれた現在の建物の区画が、この弧状になった幅にそれぞれ合致しており、当時の区画を現在まで踏襲しているものと考えられる。なお、北から2つ目の区画では、扇際に土坑が掘削されており、多くの遺物が出土した(1193土坑)。そのため、この部分では、落ち際の形状が不明であるが、土坑の底部で地山を確認している。調査区北西コーナー付近では瓦溜りを検出した(図版4-3)。瓦は被熱し、赤変するものが多くみられた。

その他、規模の大きい土坑を検出した。1151・1152土坑(図33、図版3-3)は一連の土坑と考えられる。上面で検出した土坑群に比して、平面形が比較的整っており、方形を呈している。底部では複数の方形の窪みとなっており、本来は複数の方形の土坑が切り合いをもって掘削されていたと想定できる。埋土は褐灰色の細砂混シルトを主体とし、1152土坑は下層に焼土層がみられた。また、人頭大の礫を多く含む。切り合い関係より、高遺構より前出するものである。1174土坑(図33)は1151・1152土坑の東側に位置する。深さは約1mを測り、埋土は黄灰色系を呈する。底部に人頭大の礫が多くみられた。これらの土坑からは遺物は出土するものの、第3-4層上面の土坑群に比して少ない。概ね18世紀前半の時期が与えられる。1155土坑は6×4mの不定形な大型の土坑である(図6)。深さ

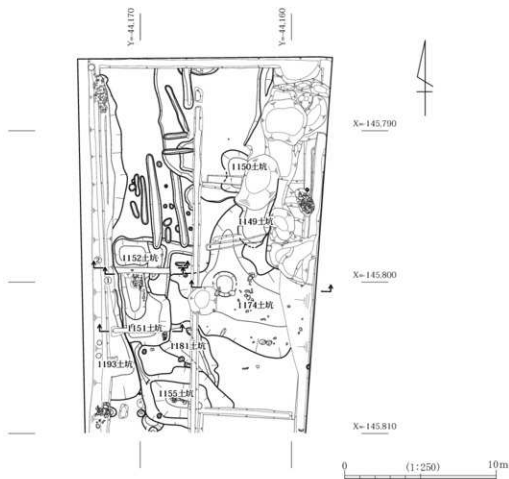


図32 1区 第3-5層上面 検出遺構

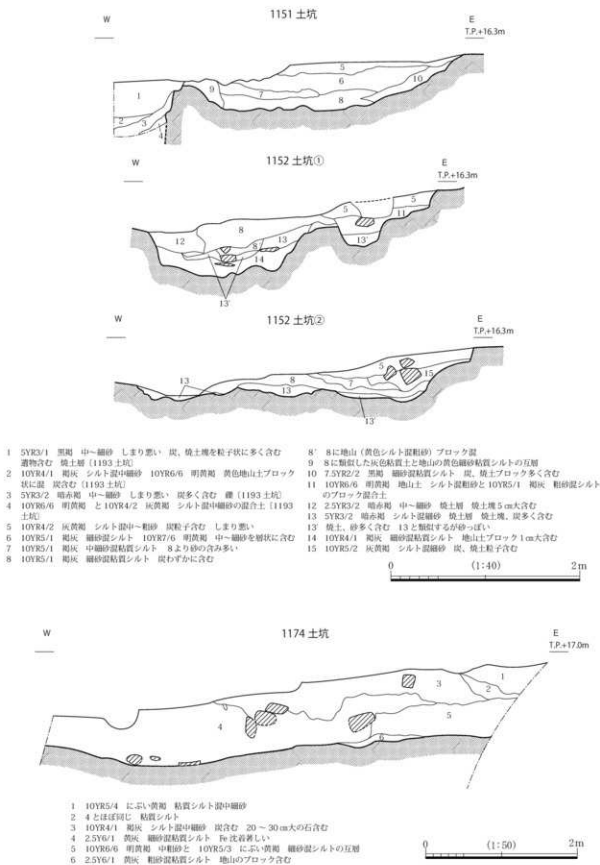


図33 1151・1152・1174土坑 断面図

は約0.9mを測る。埋土の内下層はふい黄色のシルト混中細砂で第4層の整地層に類似する。1193土坑は西肩部に位置する土坑である。切り合い関係より1151土坑より新しい。図33の土層1～4は1193土坑の埋土である。調査当初は西側に向かって傾斜する第3～4層の一部と考えていたが、土坑であることが分かった。上層は炭や焼土を含む黒褐色土で（土層1～3）、中層は黄色系の砂質土のブロック土（土層4）、下層は礫を多く含む。土坑からは多くの遺物が出土した。1155土坑、1193土坑からは、第3～4層上面で検出した②のグループと類似した遺物が出土している。1149・1150土坑も出土遺物より②グループに類すると考えられる。1181土坑（図9）は1155土坑に切られるもので、比較的浅い土坑である。埋土に焼土ブロックを多く含む点が特徴的である。遺物の出土は少ない。

以上、1区では18世紀前半の遺物を含む土坑と、18世紀後半を中心とする遺物を含む土坑がみられた。後者は第3～4層に関連する遺構であり、第3～4層下遺構と捉えられる。

2区では2082土坑、2037土坑などで18世紀前半の遺物が出土している。2082土坑（図34）は2.3m×4.5mと東西方向に長い長方形を呈し、深さは0.8mを測る。埋土はオリブ褐色の粘質シルト混中粗砂である。2037土坑（図34）は西半が攪乱により不明であるが、南北長5mの方形を呈する。深

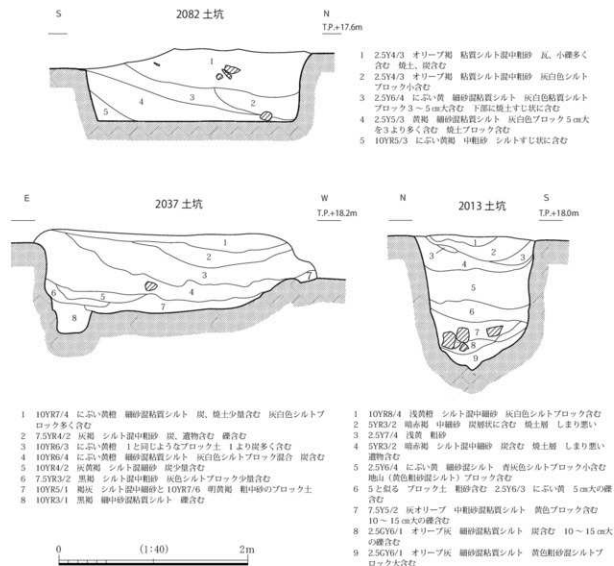


図34 2013・2037・2082土坑 断面図

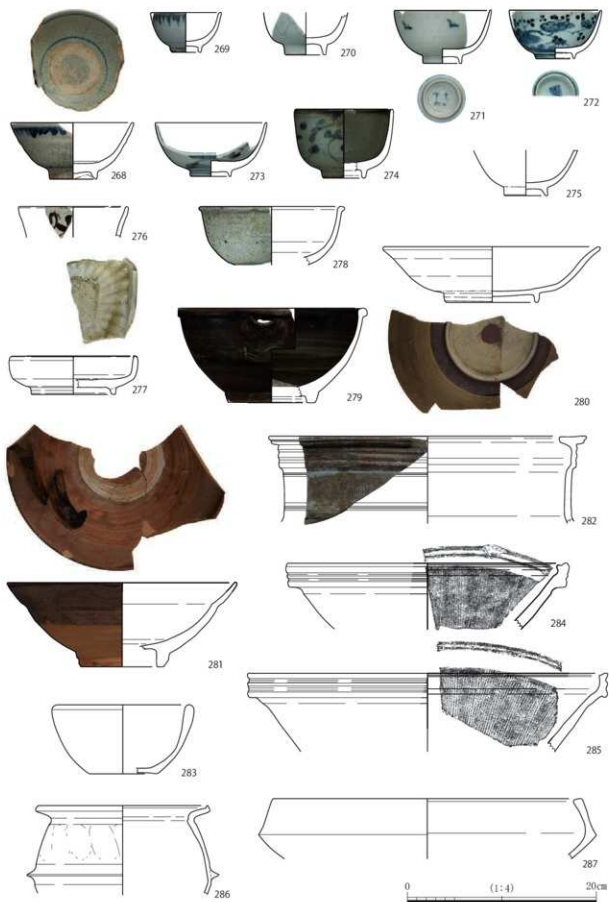


圖35 1151土坑 出土遺物

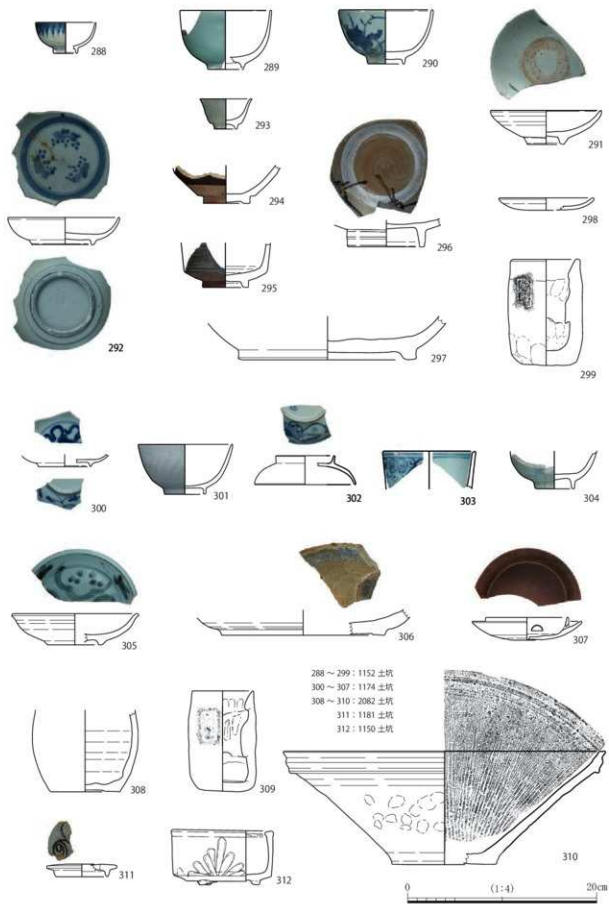


图36 1152·1174土坑他 出土遗物

さは約0.7mを測る。土坑の底部は輪郭に沿って幅0.3m、深さ0.2mの溝状に窪んでいる。いずれも土坑の規模に対して遺物の出土は少ない。2082土坑の東に位置する2110土坑からは肥前陶器の鉢が出土している。遺物の出土が少ないが、同時期の土坑の可能性が高い。これらの土坑の分布をみると、X＝－145.805ラインに直線的に並ぶ傾向が伺われる。

1区南半、3区ではこれらの時期が確定できる遺構は検出できなかった。

1151土坑出土遺物 (図35)

1151土坑からは青花、磁器、陶器、土師質土器などが出土した。

磁器 磁器は青花、肥前磁器が出土した。268は青花で陶胎の染付碗である。見込みは蛇ノ目軸刺ぎ、高台内は無軸である。269～273は肥前磁器染付碗。269は小碗で、雨降り文を施す。270～273は丸碗である。270は外面に一重網目文を有する。271は高台内面に崩れて判読不能な銘款を有する。「大明年製」か。272は梅樹文で高台内には角に満福の銘款を有する。274は肥前で陶胎の染付碗である。畳付には鉄泥を塗る。

陶器 瀬戸美濃、肥前陶器が出土した。276の碗は外面に鉄絵がみられる。産地は不明。277は瀬戸美濃で方形の皿である。275・278～282は肥前陶器である。278は口縁部が玉縁状になる鉢である。被熱により釉薬が著しく発泡している。279は片口で刷毛目文を施す。280は鉢である。高台内を釉刺ぎしているが、中央は丸く鉄軸が残る。281も鉢である。体部外面下半は露胎で、見込みを蛇ノ目軸刺ぎして、白土を塗る。内面に鉄絵がみられる。282は三鳥手の鉢である。283～285は焼締陶器である。283は備前鉢。青灰色を呈する青備前である。284・285は播鉢である。284は備前、285は丹波である。

土師質土器 286は羽釜。287は炮烙である。

1152土坑出土遺物 (図36)

1152土坑からは磁器、陶器、土師器、焼壺壺が出土した。

磁器 磁器は肥前磁器が出土した。288～292は肥前磁器である。288は染付小碗で雨降り文、289は外青磁丸碗、290は染付丸碗で外面にコンニャク印判と手描きを組み合わせた文様を有する。291・292は皿で、291は見込みを蛇ノ目軸刺ぎする。292は高台畳み付けに3か所の胎土目が残る。

陶器 瀬戸美濃、肥前、焼締陶器が出土した。294は瀬戸美濃で天目茶碗である。293・295・296は肥前陶器である。293は小杯で灰釉、295は刷毛目碗である。296は鉢で見込みは蛇ノ目軸刺ぎし、釉刺ぎ部分に白土を塗る。内面には鉄絵をあしらう。297は裏底部で瀬戸美濃であろう。高台畳付に窯着がみられる。

土師質土器 298は土師質土器皿である。299は焼壺壺である。磨滅しており、内容は不明であるが、刻印が押される。

1174土坑出土遺物 (図36)

1151・1152土坑の東側で検出した土坑である。1174土坑からは青花、磁器、陶器が出土した。

磁器 磁器は青花、肥前磁器が出土した。300は青花で皿である。301は色絵碗である。型打成形。上絵はほとんど剥離してしまっているがわずかに蝶などが残る。302～305は肥前磁器染付である。302の蓋は上層の遺物が混入した可能性が高い。303～304は碗である。303は筒形碗、304は丸碗である。305は皿である。

陶器 306は瀬戸美濃皿である。見込みには波状文を施す。307は備前灯明皿である。

2082土坑出土遺物 (図36)

磁器では290に類似したコンニャク印判に手描きを加えた文様をもつ肥前磁器染付碗が出土している。陶器では関西系陶器皿や308の陶器鉢、310の丹波播鉢が出土している。308は内外面に長石釉がみられ、底部は露胎である。志野と考えられる。土師質土器では309の焼塩壺が出土している。299に類似するもので、刻印は磨滅により不明。

以上の土坑からは、肥前磁器では18世紀前半の特徴を有するものが多く、289などはやや新しい。陶器では②の土坑群で多くみられた関西系陶器はほとんどみられず、肥前陶器、瀬戸美濃陶器で占められている。また、焼締陶器では丹波産播鉢が一定量出土している。18世紀前半の時期を与えたい。また第3-4層上面で検出した土坑群に比すれば、各土坑から出土する遺物の量は少なく、①、②グループで特徴的にみられた締りの悪い腐食土層はみられないなど、大型の土坑ではあるが、違いがみられた。これら、18世紀前半の土坑群を③グループとする。その他、1150土坑出土の312の瀬戸美濃筒型香炉、1181土坑出土の311の陶器蓋を図36に図化した。1150土坑出土遺物は外青磁染付などが出土しており、③グループより新しい。

(5) 基盤層上面の遺構・遺物 (図37、図版4-1)

基盤層上面では上面に比して規模の小さい方形の1177～1180土坑を検出した。1177～1180土坑 (図38、図版4-4・5) は幅1.2～1.3m、長さは1.5～2mの方形を呈する土坑である。深さは1177土坑が最も深く1.0mを測り、1180土坑は0.2mと浅い。1179土坑は西端で検出した。西半が第

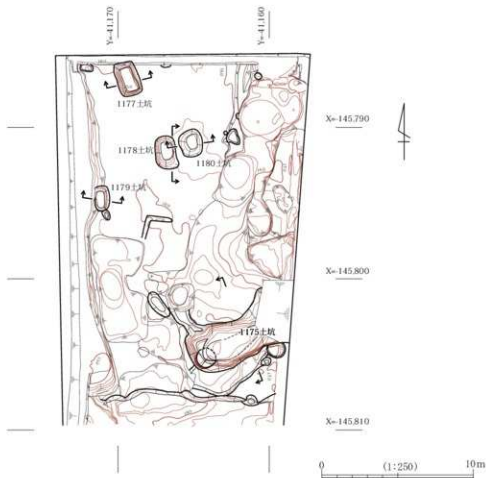


図37 1区 基盤層上面 検出遺構

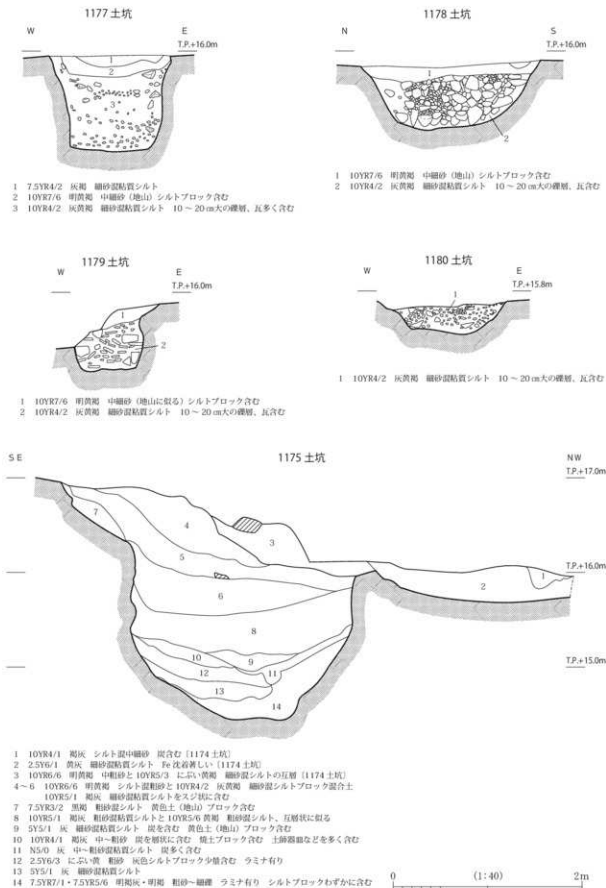


図38 1177~1180・1175土坑 断面図

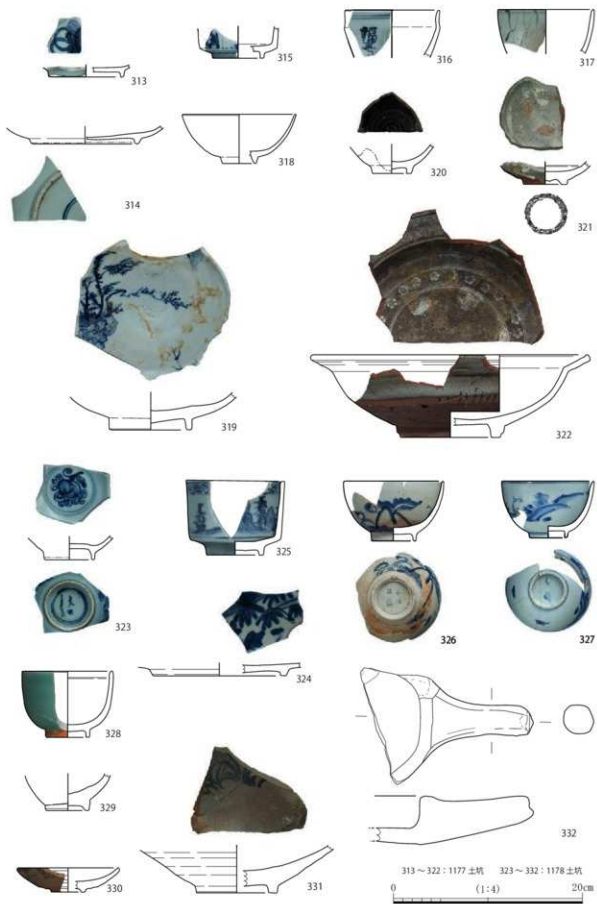


圖39 1177・1178土坑 出土遺物

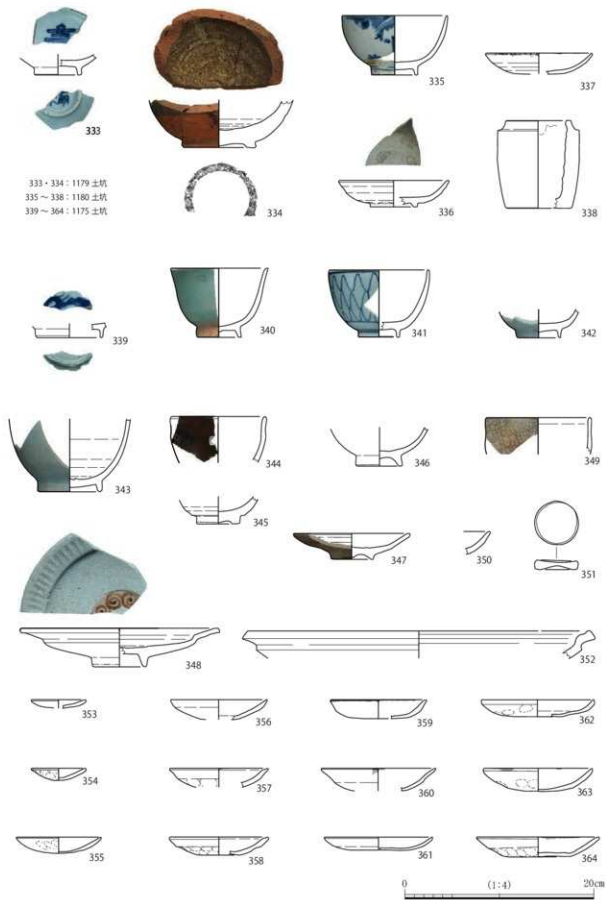


图40 1179·1180·1175土坑 出土遗物

3～4層に切られていることから、基盤層は更に西に延びていたことが分かる。いずれも埋土に多くの礫を含む点で類似している。また、礫を多く含んだ層の上層は地山に似た薄い黄色土がみられた。平面的には遺存していないが、上層に整地層が存在し、これがたわんでいる可能性が高い。

その他、1区中央付近で1175土坑を検出した。1175土坑(図38、図版4-2)は幅約3mを測り、深さは2.5mを測る大型の土坑である。2区側に延びているが、コンクリート擁壁が除去できず長さは不明である。上層は地山ブロックと茶褐色ブロック土が互層状になっており(土層4～6)、中層は灰色系粗砂混粘質シルトと地山ブロック層が互層になっている(土層8・9)。上・中層からの遺物の出土は少ない。下層の褐灰色の中～粗砂層(土層10)は炭を層状に含み、土師質土器皿などが多く出土している。最下層は灰色の細砂混粘質シルト、褐灰色の粗砂～細礫(土層12～14)で炭を多く含むが、遺物の出土は少ない。土層12・14でラミナがみられることから、一定期間、口が開いた状態で機能し、その後、中層、上層のブロック土で短期間に埋め戻されたものと考えられる。土坑の性格は不明であるが、水溜めといった性格が考えられよう。

これらの土坑は出土遺物より17世紀中葉～後半の時期が与えられる。なお、基盤層上面では豊臣期に関わる遺構をわずかながら検出している。これについては第4節で触れることとする。

2区では2013土坑と同様の特徴を有する遺物が出土した。1区の土坑からは遺物の出土は概して少なかったが、2013土坑からはまとまって遺物が出土している。2013土坑(図34、図版3-6)は2区中央付近で検出した。土坑の規模は大きく、1m×5m以上の東西に長い長方形を呈し、深さは約1mを測る。工事により影響される深度に達したため、全掘はできていない。断面観察からは底部付近に人頭大の礫が多くみられた。

1区南半、3区では当該期の遺構は検出していない。

1177～1180土坑出土遺物(図39・40)

313～322は1177土坑から出土した。青花、磁器、陶器がある。

磁器 313・314は青花皿、315～317・319は肥前磁器染付である。315は筒形碗で外面にソギをいれる。高台脇には点状の文様が描かれる。316は口縁部が外反する天目形の碗である。外面にはソギをいれ、福寿の文字を配する。口縁部には團線を巡らす。317は丸碗で外面に一重網目文を描く。319は大皿である。見込みが丸く窪んでいる。318は白磁碗である。

陶器 320～322は肥前陶器である。320は刷毛目碗である。321は碗で、見込みには目跡が残り、高台壘付には糸切り痕が残る。322は三鳥手の鉢で、印花文は鮮明である。見込みには目跡が残る。

323～332は1178土坑から出土した。青花、磁器、陶器、瓦質土器がある。

磁器 323・324は青花、325～327は肥前磁器染付である。323は碗である。見込みは覆頭心状を呈し、高台内には「大明年製」銘款を有する。324は皿である。高台壘付には粗い砂が付着する。漳州窯産。325は筒形碗で、口縁部外面に渦文を巡らす。高台壘付には砂の付着が著しい。326・327は丸碗である。高台内に「大明年製」、「大明」の銘款を有する。328は青磁碗である。高台は無軸である。

陶器 329～331は肥前陶器である。329は碗、330は皿である。331は鉢で鉄絵で草花を描く。

瓦質土器 332は十能である。

333・334は1179土坑から、335～338は1180土坑から出土した。

磁器 333・335は肥前磁器染付碗である。333は見込みには文字文を有し、高台内には大明の銘款が遺存する。

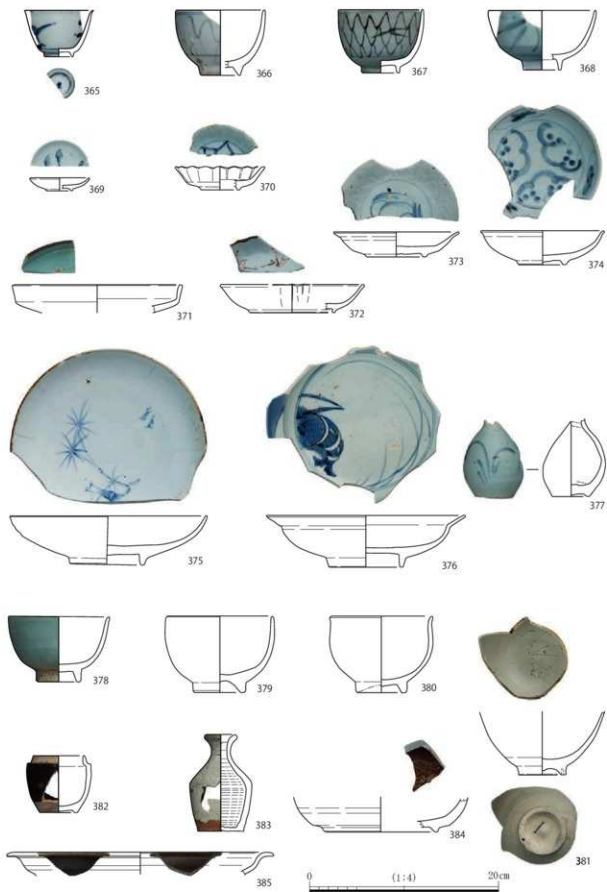


图41 2013土坑 出土遺物①

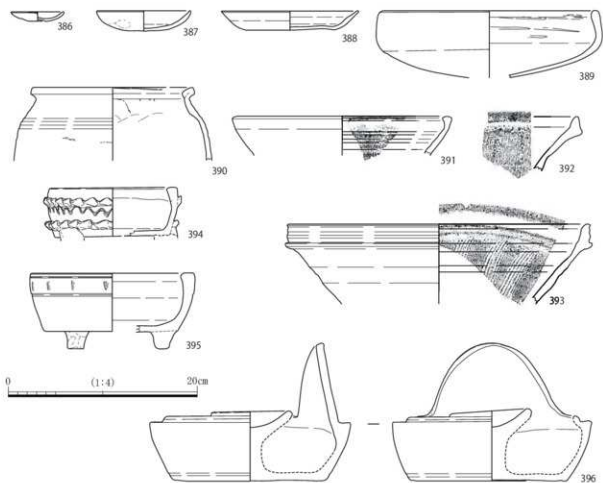


図42 2013土坑 出土遺物②

陶器 334は肥前鉢である。高台畳付に糸切り痕跡が残る。336は肥前皿である。見込みに目跡が残り、高台には胎土目が付着する。337は備前灯明皿である。口縁部に煤の付着がみられる。

土師質土器 338は焼塩壺である。

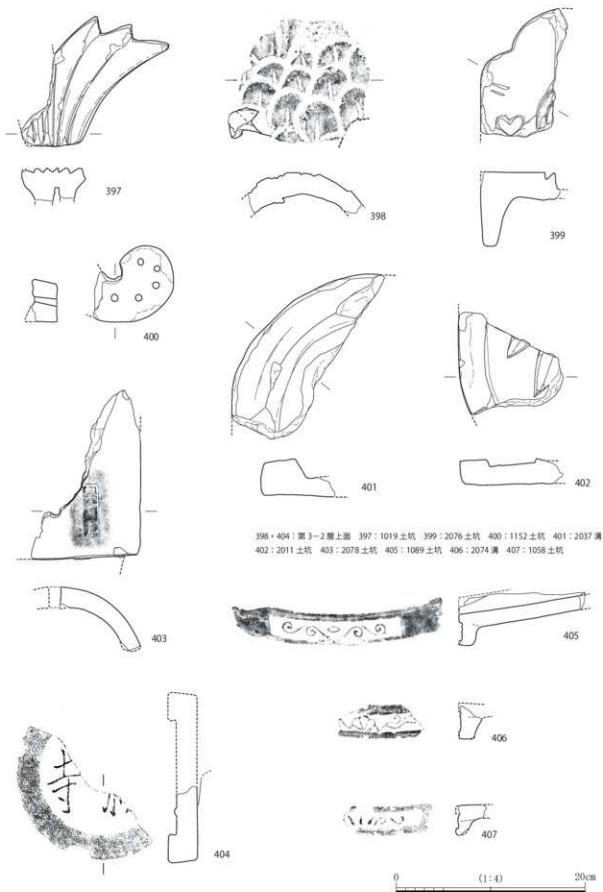
1175土坑出土遺物 (図40)

青花、磁器、陶器、土師質土器が出土した。

磁器 青花、肥前磁器が出土した。339は青花碗である。340～343は肥前磁器である。340は肥前磁器青磁碗である。高台は無軸である。341・342は肥前磁器染付丸碗である。341は一重網目文を描く。畳付は軸刺ぎで砂の付着が認められる。343は染付壺である。

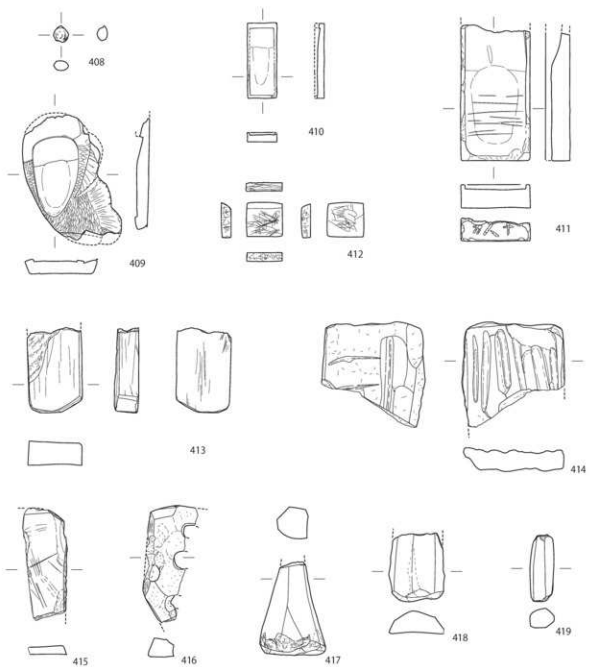
陶器 肥前、瀬戸美濃が出土した。344・345は鉄軸の碗で瀬戸美濃。346は肥前陶器で呉器手碗。347・348は肥前陶器皿である。347は兜巾が明瞭に残り、高台畳付には糸切痕と砂目が残る。見込みに砂目が3か所残る。348は見込みを蛇ノ目軸刺ぎし、軸を刺いだ部分に渦文を描く。胎土は非常に精緻である。349は瀬戸美濃碗。黒い貫入様の線が多くみられる。350は志野丸皿である。351は瀬戸美濃鉄軸碗の底部である。土製円板に転用されたものである。352は丹波鉢である。

土師質土器 353～364は皿である。1175土坑からは比較的多くの土師器皿が出土している。353は直径5.7cmと小さく、364は直径12.9cmと大きく、複数の法量のものが見られた。口縁部はヨコナデ、体部下半は指押えの厚痕が残る。口縁端部は尖るものも多くみられる。364は底部と体部の境が圏線状に窪む。これらの土師質土器皿は口縁部に煤の付着が認められるものも多く、灯明皿として使用された



398・404：第3～2層上面 397：1019土坑 399：2076土坑 400：1152土坑 401：2037溝
402：2011土坑 403：2078土坑 405：1089土坑 406：2074溝 407：1058土坑

图43 德川前期以降 出土瓦



408：1175土坑 409：東側例溝 410・411・415・416：1091土坑 412：1089・1099土坑
413・414：1070土坑 417：2074土坑 418：2072土坑 419：2073土坑

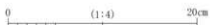
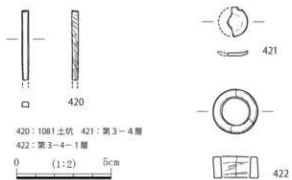
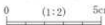


図44 徳川前期以降 出土金属製品・石製品



420：1081土坑 421：第3～4層
422：第3～4～1層



964：第3～3層
965・966：第2層～
第3～1層
967：石組溝

図45 徳川前期以降 出土骨角製品



写真5 加工痕のある骨

ものと考えられる。

以上の土坑は17世紀中葉～後葉の時期が与えられる。

同様の時期を有する遺構は全体に少なく、1区南半では検出できない。17世紀代の遺物が出土する土坑には2区中央付近で検出した2013土坑があげられる。2013土坑からは多くの遺物が出土しており、上記の同時期の土坑とはやや様相を異にしている。

2013土坑出土遺物（図41・42）

2013土坑からは青花、磁器、陶器、焼締陶器、土師質土器、瓦質土器が出土した。

磁器 肥前磁器が出土した。365～378は肥前磁器である。365は染付小杯である。366～368は染付丸碗である。366・367は一重網目文を施し、367は魚の表現がみられる。368は柳文を施す。366・368は高台内が無軸である。369～376は染付皿である。370は型打成形で側面を多角形につくる。373も型打成形で口縁部内面に文様を彫刻するものである。374は口縁部がわずかに外反する皿である。1174土坑の305と同様の文様を有する。376は口縁部が屈曲して外反する大皿で、海老が描かれている。375は口紅を施す。371は青磁皿、372は色絵の輪花皿である。いずれも口紅を施す。377は染付花瓶である。体部にえくぼ状の窪みがみられる。378は青磁碗である。高台は無軸である。

陶器 瀬戸美濃、肥前が出土した。379・380・383・385・390は肥前陶器である。379は呉器手碗。380は口縁部が弱く外反する碗である。383は壺である。385は鉢である。390は甕である。口縁部に重ね焼きの痕跡がみられる。381は肥前陶器鉢か。見込みに線刻で文様を施す。高台置付には砂目が付着する。また高台には穿孔がみられる。384は不明陶器。胎土は精緻で磁器質である。382は瀬戸美濃で鉄釉甕である。391～393は焼締陶器で搗鉢である。丹波産。

土師質土器 386～388は土師質土器皿である。2013土坑からは他にも多くの皿が出土している。388は平らな底部を呈する皿である。389は炮烙である。

瓦質土器 瓦灯、三足の火鉢がみられる。394は2段に凸帯を貼り付け、凸帯には刻みを施し、2段の凸帯間には波状文をあしらう。395は口縁部下に列点文を施す。396は瓦灯で風除けを有するものである。

以上の出土遺物は、17世紀中葉～後葉の時期を与えたい。その他、2083土坑からは青花、肥前磁器高台無軸の一重網目文碗などが出土しており、当該期の遺構と考えられる。

これらの土坑を④グループとする。肥前磁器では初期伊万里が認められる点が注目でき、高台無軸の一重網目文、青磁碗が安定して出土している。

(6) その他の遺物

徳川期～幕末の遺物は多岐にわたる。前項では主に陶磁器、土器類について記述を進めてきた。以下では、前項で取り上げられなかったその他の遺物について、概要を示すこととする。なお、骨角製品、金属製品、土製玩具類、ガラス製品に関しては、巻末に一覧表を付した。出土地など参照されたい。

・瓦類（図43・図版21）

瓦類は第3層の各層及び土坑等から、軒瓦の他、丸瓦・平瓦が多数出土している。陶磁器、土器類に次いで瓦類の出土が目立つ。軒丸瓦の多くは三巴文で、軒平瓦は中心飾りが橘で左右に唐草が転回する均整唐草文が多い。軒棧瓦の出土も多くみられた。その他L字状を呈する瓦質製品の出土も目立つ。これらの出土瓦については抽出、図化することができなかった。図43にはそれ以外の特徴的な軒瓦、鬼瓦、飾り瓦、刻印を有する瓦を図示した。

397・398は鯉瓦である。399・400は鬼瓦である。400は穿孔がみられるものである。401も鬼瓦か。

402は飾り瓦の一部である。文様は不明であるが、笹状の葉を表している。403は丸瓦部で釘穴を有する。「細工人大坂鬼辰」の刻印がみられる。404は軒丸瓦で瓦当に「〇〇寺」の文字を有する。第3～2層の整地層からの出土である。405～407は軒平瓦である。405は中心飾りが菱形で、左右の唐草が二転する。406は中心飾りが半裁した菊花で、左右に唐草を配する。文様は平坦な印象を与える。407は中心飾りが三葉である。402・407は下層の遺物が混入した可能性が高い。

・石製品 (図44、図版23)

石製品は第3層の各層及び土坑等から多数出土した。硯、砥石が特に多く、他に碁石が出土している。図44に特徴的なものを図化し、図版23にも掲載した。

硯は非常によく使い込まれたものが多く、中央が使用により大きく窪むものが多数みられた。大きさは大小のものがみられ、石材も様々である。409は魚の形を呈したものである。細かく線刻で鱗を表現している。410は小さく薄い硯で、朱が附着する。411は側面に「カハチ」と点描で刻まれている。人名か。

砥石も石材は多様で、仕上げに用いられるものから、目の粗い砥石までみられる。形状も413・415のように立方体を呈するものが大部分であるが、多面体を呈するもの、筋状の窪みが多数みられるものなどがある。図版23-949は円形の自然石で、平行する2本の筋状の窪みがみられる。第3～3層から出土した。414も筋状の窪みが多数あるものである。筋状の窪みは両面にみられる。金属器生産関連遺物を多数出土した1070土坑から出土した。417～419は多面体を有するものである。石の目は粗い。416は孔を多数有するものである。

412は不明石製品である。平面形は方形で、片方の側縁が片刃状になるものである。丁寧に研磨されており、側面には「谷町三丁目」と刻まれている。図版23-947は円板状の石製品で側面を削って円形に整えるものである。2073土坑から出土した。図版23-946は碁石である。橙色を呈する。第3～3層から出土した。

・骨角製品 (図45、写真5、図版19)

図45、図版19に製品を掲載した。905は横櫛、906は櫛払いである。910は一方の先端は平らで広くなり、もう一方の先端は断面円形状を呈する。簪と考えられる。908は桿秤である。907、909は棒状のもので、桿秤か。未製品の可能性もある。422・912はリング状を呈するもので双六の駒である。421の皿状に加工されたものと組み合わせて使用したものと考えられる。911も421と同様、双六の駒と考えられる。420は棒状の未製品である。1081土坑から出土した。断面方形を呈するもので、三面は丁寧に磨かれているが、一面には削痕が残っている。仕上げが全面に及んでいない点から未成品の可能性を考えた。他に同様の棒状で全面に仕上げが及んでいない未成品が1085井戸から出土している。

調査では切断痕のある牛の脛骨も出土している(写真5)。967は明治期の石組み溝周辺、965・966は第3～1層相当層から出土している。骨細工の廃材と推測できる。964は第3～3層から出土した。縦方向にも割られており、切断面は平滑である。同様に骨細工の素材となるものであろう。第3～2層からも素材となる切断痕のある牛骨が出土している。明治期の遺構から出土したものは、下層の混入遺物も多く、幕末～明治期の整地層である第3～2層からの出土遺物は現地性を明らかにできないが、420の未製品の存在も含めて、19世紀以降の周辺での骨細工を示唆するものといえる。

その他、土坑内から鳥、魚など食物残渣と考えられる骨が出土している。興味深いものにコウノトリの骨がある(2079土坑)。また、第2層～第3～2層では犬の骨が多く出土した。

・金属製品（図版22）

金属製品には鉄製品、銅製品が多数みられた。図版22に銅製品の一部を掲載したので参照されたい。927は置物で写実的に蟹を表している。929は小刀柄である。歪みが著しい。兜に太刀の文様を高彫する。鍍金がわずかに残る。茎が遺存している。930は刀の縁の天井金である。鍍金がわずかに残る。

煙管、簪も多く出土している。931～934は簪である。931は耳かきが付く。932も欠損しているが、円形の飾り部分に耳かきが付くものであろう。円形の飾りには細かい文様が刻まれている。934は先端が平たくなっており、細かい文様が刻まれる。935はピンセット状のものである。936、937は棒状の製品である。937はひねりがみられる。用途は不明である。938は杓子である。柄の装着部には孔が穿たれる。939・940は座金具である。941は薄い円板状を呈するものである。用途は不明。942～944は煙管である。942は火皿が碗状を呈し、肩部に段を有するものである。2013土坑から出土した。2013土坑からは他にも煙管が出土しているが、同様に火皿が碗状を呈するものである。944は吸い口に細かい文様が刻まれている。

図44-408は1175土坑から出土した火縄銃の弾である。

他に銭貨も多く出土している。種類が分かるものは寛永通宝であった。鉄製品も多く出土しているが、今回は抽出、掲載することができなかった。

・金属器生産関連遺物（図版20）

前項で1070土坑出土のものについて触れたが、他の土坑からも羽口や鉄滓、碗形滓、炸壁の一部と考えられる発泡ガラス質滓などが出土している。また、埴塙（図12、図版20）の出土もみられ、遺構は確認できなかったが、鍛冶、铸造が行われていたことが分かる。铸造に関連する遺物は18世紀後半以降にみられた。羽口は266・267・915など直径7cm前後、孔径2.5cm前後のものから、916のように直径5cm前後、孔径1.8cm前後と小型のものもある。916は端部が丸みを帯びている。266・267・915は1070土坑出土、916は1092土坑から出土した。917は17世紀後半の土坑、1175土坑から出土した。直径9cmの円形というよりは隅丸方形に近い断面形を呈し、孔径は2cmと直径に対して孔径が小さいものである。

・土製玩具類（図版18・19）

多数の土製玩具が出土している。人物、動物をかたどった土人形や、建造物などのミニチュア箱庭道具、日常雑器のミニチュアである飯事道具、面子類や独楽、土鈴などが出土した。出土した土製玩具の一部を図版18・19に掲載した。

図版18上は土人形である。801～818は人物をかたどったものである。地藏尊（815）、天神（805）、布袋（817）、大黒（816）、恵比寿（811）、西行（809・810）、虚無僧（804）の他、漁師（814）や力士（801）、おぼこ（803）などがある。素材は土師質が大半で彩色を施したものもみられた。818は他の人形類とは印象を大きく違えるもので、中空で浅黄褐色を呈し、胎土は緻密でキラコがみられる。他に軟質施釉のものもみられる（806・807・808）。磁器で同様の人物や動物をかたどったものもみられたが、図版19-902のように水滴の可能性が高いと考えここでは扱わなかった。

成形方法は型合せが大半で、手づくねによるものもみられる。

819～821・823～836は動物をかたどったものである。牛（832・833）、馬（829・836）、猿（827・828）、狐（830・834）、鳥（820・823～825）、獅子（826）、蛇（819）などがみられた。素材は土師質のものが大半で彩色を施したものもある。他に軟質施釉のもの（820、821）や、瓦質（833）

のものがみられた。成形方法は型合わせ、型押し他、手づくねがみられる。833の瓦質の牛は大型である。牛をモチーフにしたものは多く出土しており、832に類似した型合せものが多かった。

828・831は手づくねであるが、831は胎土が白色を呈し、他の人形とは胎土が異なる。猿をモチーフにしたものは、何かを抱いたものや、827のように服を羽織ったものなどあり、擬人化したもの、他のものと組み合わせたものなど、他の動物とは表現が異なっている印象がある。

図版18下は飯事道具、箱庭道具である。

837～859は飯事道具で碗(839)、鉢(838)、搦鉢(855)、急須(858)などの食器類や、甕(859)、土鍋(856)などの厨房道具、その他、壺(843)、煙管(845)や灯明具(846)などがある。素材も多様で、土師質、磁器、陶器、焼締陶器、軟質施釉のものがみられ、実用品と同じ素材のミニチュアも多くみられた。848の蓋は中心に金属の芯を入れており、複数の素材を組み合わせている点で他と異なっている。軟質施釉のものは濃い褐色を呈し、彩色を施す類似したものがみられた。

860～869は箱庭道具で家(866・867)、塔(863)、神輿(861・865)、屋形舟(864)、橋(860)などがみられた。素材は土師質で、彩色を施されるものもある。軟質施釉のもの(869)もわずかに出土している。

図版19上は面子類、独楽、土鈴などである。870・図版23-945は碁石形土製品である。

873～877は泥面子である。土師質で円形を呈しており、873・874は小さい。文字が描かれているもの(873、874、876、877)、家紋(875)がある。

871・872は2cm以下と非常に小さい面子である。879～885は芥子面子である。人面、猿、タコなどがある。881は猿が目が穿孔で表現されている。また、耳にも穿孔がある。880はタコを表現したものであろう。足には吸盤が表現されており、足を頭に巻きつけている。

886・887は面。886は芥子面より大型のものである。887は鬼で裏面には枝木があり、穿孔がされている。888はだるまか。

889～892は面模である。人物(890・891)、花(889)、建物(892)などがある。

878は独楽である。893は鳩笛で素材は軟質施釉である。894・895は鈴で素材は土師質である。895は鉄絵が施されている。

これらの土製玩具類は徳川期の出土遺物の特徴づけるものとも言え、本来であれば、これら出土遺物について、抽出、分類、検討という手順が望まれるところである。しかしながら、今回は数量的な分析、検討は行っていない。以下に出土土製玩具類を概観し、傾向について記しておきたい。

出土した土製玩具類には時期的な傾向が認められた。土製玩具類が爆発的に増加するのは①・②の18世紀後半～19世紀初頭とした土坑群からである。③・④とした17世紀後半～18世紀前半の土坑の出土遺物をみると、2013土坑から出土した895の土鈴の他、数点が認められるのみであった。土坑の性格の違い、出土遺物の量にも関係するかもしれないが、18世紀後半の土坑からは1091土坑をはじめ、複数の土坑から多数の出土がみられた。19世紀前半の土坑からも多くの土製玩具が出土している。また、その種類に注目すると、面子類、独楽などは、②の土坑ではほとんどみられず、①の土坑群、第3-2層からは一定量の出土が確認でき、面子類は19世紀以降、増加する傾向が窺われた。

また土人形は①と②でやや違いが認められた。②の18世紀後半～19世紀初頭では土人形のバリエーションが19世紀前半のそれに比して少なく、地藏尊や天神、虚無僧など類似したモチーフが多くみられた。一方、①の土坑群の土人形はバリエーションが豊富である。また、大きさも中空で非常に大きい人形や、



图46 徳川前期以降 時期別土坑分布

小さいもので豊富であった。

このような傾向はこれまでも指摘されており、今回の出土傾向もそれに矛盾するものではなかった。

・水滴他 (図版19)

水滴には図22-99のような方形のもの他、様々な造形のものが見られた。図版19-900～903にその一部を示した。いずれも磁器製である。900は第3-2層から出土した。901は1081土坑と1089土坑(1091土坑混りあり)から出土した破片が接合した硯箱を模したものである。903は1150土坑より出土した。鳥を模すもので、彩色が施される。902は第3-1層から出土した。大黒を模しており、彩色を施す。

図版19-896・897・898は磁器染付蓋で小さいものである。合子などの蓋と考えられる。896・898は第3-2層から、897は第3-3層から出土した。899は用途不明。土師質の板状を呈するもので、上部に吊り下げるための孔を有するものである。牛が型押しで表現される。

・ガラス製品他 (図版23)

ワインボトル、ポップン、容器類が出土した。19世紀代の遺構からの出土である。949は容器の口縁部か。淡い緑色を呈し、細かい文様が刻まれている。950は容器の底部であろう。カットガラスである。951は型押しによるもので、外面に文様がみられる。非常に薄い。952は乳白色を呈するもので、容器の底部。高台を有している。953は薄い緑色を呈した管状の製品でポップンであろう。956は青緑色を呈するプラスチック製のワインボトルでオランダ製のものである。955もワインボトルであろう。暗オリーブ色を呈するものである。

他に特筆できる遺物として954の硬質陶器の容器がある。体部下部に楕円形で囲まれた「POWELL BRISTOL」と記された刻印を有する。19世紀のイギリス製のジャム瓶であろう。

小結

徳川前期以降の遺構面では多数の土坑を検出した。当該期の調査区は城代屋敷、京橋口御定番屋敷であったとされるが、後世の削平で礎石などはまったく検出できなかった。しかしながら、徳川前期～幕末期にかけて、途切れることなく多くの遺構、遺物が出土している。特に大型の土坑を多く検出しており、①・②の18世紀後半～19世紀前葉の土坑は廃棄土坑と判断できる。これらの廃棄土坑はその分布に傾向がみられ、ある程度、敷地の境界を推測することが可能である。ひとつは $Y = -44,160$ のラインで、もう一つは $X = -145,810$ のラインである。このラインは先述のとおり段差を有しており、この段差付近に廃棄土坑が集中して形成されている。特に18世紀後半以降、19世紀前半ごろは連続して土坑が掘削、廃棄行為が繰り返されていた状況がみられる。このような廃棄土坑は屋敷地の周囲にあることが多く、段差を有する部分に一致することからも、敷地境であったと推測できる。加えて、 $Y = -44,130$ ラインも敷地境の可能性が高い。このラインは後節の豊臣期でも区画施設がみられるが、近現代にも暗渠等があり、踏襲されているものと考えられる。また、西端は斜面地となっているが、斜面の肩口は直線的に延びず、弧状を呈している。南北約11mの同じ幅で四分分割している。この単位は現在の谷町筋に面した現在の建物の区画にほぼ一致しており、区画がほとんど変わっていないことを示している。このようにみると、斜面下部と上部の区画は、上部の方が南北方向に約2倍の広さがあることが指摘できる。今回は当該期の様子を伝える多くの絵図との比較が行えなかったが、この斜面を境に西が町屋、東が屋敷地である可能性が高い。

17世紀中葉～18世紀前半の③・④グループの土坑は先の①・②グループの土坑に比して、全体に遺

物の出土量が少なく、平面形が整っているなど、上記の土坑とは様相を異にしている。③グループは複数の土坑が切り合った形状を示す点などは①・②グループと類似している。③グループの土坑分布はX=-145.810ラインよりやや北側で、①・②グループの分布とは少し位置が北にずれる。東西ラインはよくわからないが、①・②グループとはほぼ同じような敷地境であったと考えられる。17世紀代の土坑は2区では2基確認できたのみである。1区では北半に集中しており、調査区全体を通して、盛土がされた南半では検出できなかった。その後、多くの廃棄土坑が掘削された結果、分からなくなっている可能性もあるものの、出土遺物をみても当該期のものは混入としても少なく、18世紀を境に様相を異にしているのであろうか。

敷地内では、建物の痕跡等は検出できなかったが、最も低い北西の区画では第3-4層、第3-5層上面で畚を検出しており、同じような利用のされ方をしていたことが分かる。他に金属器の生産を行っていたことが窺われる。1070土坑をはじめ、轆の羽口は複数の土坑から多数出土しており、鉄滓や椀形滓も多数みられた。また鑄造炉の炉壁の可能性が指摘できるガラス質滓や埴場も出土している。また、切断痕のある骨や未成品の出土から、骨細工なども周辺で行われていた可能性が高い。当時の屋敷地内の利用のされ方を考える上で興味深いものである。

次に出土遺物をみると、江戸期の多種多様な遺物がみられ、当時の生活を窺えるものが多く出土した。多量に出土したこれらの遺物について、十分な検討、資料の提示をできず、今後の課題は大きい。

その一つとして灯明具について若干触れておくこととする。灯明具には多種、多様なものがみられた。いわゆる灯明皿をみても土師質土器、軟質施釉陶器、関西系陶器、備前(焼締陶器)とその素材は様々であった。また、灯明皿以外にも、乗燭、瓦灯、灯明台と様々である。時期的な傾向として、④グループでは土師質土器皿を灯明皿として使用しており、1175・2013土坑からは口縁部に煤が付着した皿がまとまって出土しているが、軟質施釉陶器の灯明皿はみられない。軟質施釉陶器の灯明皿は①・②グループでは大量にみられ、皿に受けが付くものもある。また、大きさも大小がみられる。皿状の灯明具は、土師質土器、軟質施釉陶器以外に、関西系陶器の製品や備前などが出土している。①・②グループでは軟質施釉陶器の乗燭類も多くみられた。形状も算盤玉形のものから、蠟燭形のもの、脚を有するもの、大きな鉢状の受けがあるものなど、バラエティーに富む。更に1091土坑でみたように、大小のものがみられる。軟質施釉陶器の灯明皿は第3-2層では少なくなっており、変わって図11-23のような関西系陶器の灯明台が多く出土している。図化していないが①以降、軟質施釉陶器で丸みを帯びた体部に垂直に把手が付くものも出土している。少し、変わったものに図版19-904の灯籠形瓦質土器がある。

以上のように18世紀後半以降、軟質施釉陶器を中心として、様々な灯明具が多く使用されていることが分かる。こうした多様化の背景には、需要の拡大があったものと考えられる。灯明具の需要の拡大は人々の生活スタイル、例えば、日が暮れてからの活動時間の増加といったことを反映するのかもしれない。

第3節 徳川初期の遺構と遺物

基本層序で述べたように、今回の調査では、谷部分については、第4層上面で調査を終了しており、下層の調査は行っていない。また1区北半の丘陵部は第3層除去面で基盤層が露出している。よって、第6～8層の調査を行ったのは2区のみとなる。

徳川初期の遺構面は第4層を除去した遺構面である。調査区西側は表土及び近代の層を重機で除去すると、概ね基盤層に達しているため、当該遺構面の状況は不明である。調査区東側は第4層を除去すると、部分的に焼土層（第6層）が露出する。明瞭な焼土層は調査区東端の高まり付近、及び、谷の肩部にみられたのみであった。第4層は徳川期の整地層であるが、これに覆われていた範囲であっても、純粋な焼土層としては遺存しておらず、焼土や炭が攪拌された状況であった。また、6層と4層の間には部分的に整地層、遺物包含層が確認できた（第5層）。

・第4層、第5層、第6層上面出土遺物（図47）

第4層、第5層及び第6層上面からの出土遺物を図47に示した。

423は第4層、424～427は第4層最下層出土遺物である。青花、志野、肥前陶器が出土した。423は青花碗である。高台置付、及び内側には砂が多く付着する。424は青花皿である。425・426は肥前陶器で、425は丸碗である。高台は低い。426は丸皿である。高台が低く、高台と高台脇の境界は不明瞭である。427は志野向付である。見込みに鉄絵がみられる。

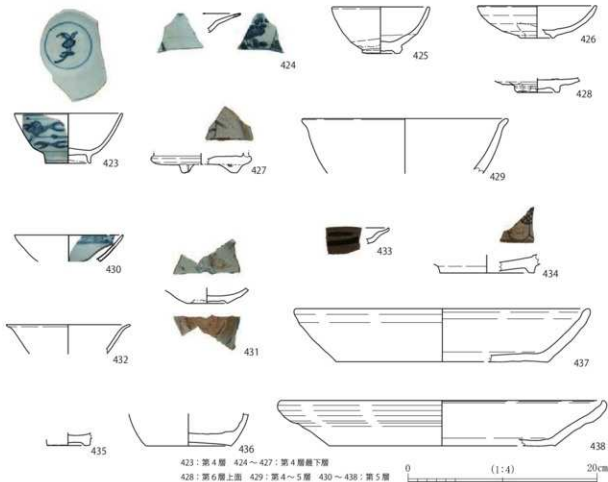


図47 第4層、第5層、第6層上面 出土遺物

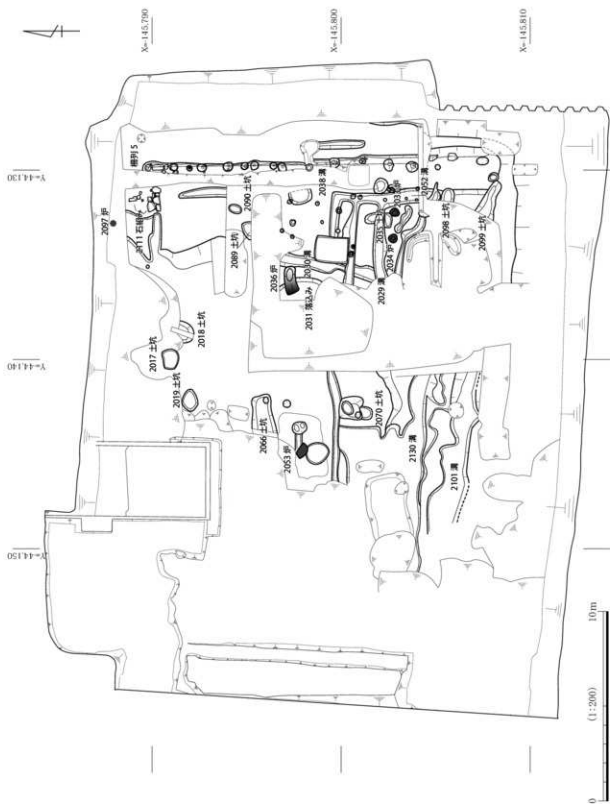


图48 2区 第5·6層上面 検出遺構

428は第6層上面で出土した肥前陶器皿である。見込みに小さい胎土目が3か所残る。429は第4層～第5層で出土した肥前陶器鉢である。釉薬は被熱により発泡している。

430～438は第5層出土遺物である。青花、白磁、織部、肥前陶器、備前、丹波が出土している。

430・431は青花碗である。430は器壁が薄く、口縁端部は尖る。431は鉢筒底を呈する。432は白磁碗である。被熱により器壁が荒れる。433は肥前陶器皿で口縁部に鉄絵をあしらう。434は織部向付である。見込みに鉄絵で花を描く。435は軟質施釉陶器で碗の高台部である。436は備前壺類の底部である。被熱により、内面は器壁が剝離している。437は備前、438は丹波の大平鉢である。底部外面には自然釉の付着が著しい。

(1) 徳川初期の遺構と遺物 (第5・6層上面) (図48、図版5-1)

大坂夏の陣の後、元和6年から行われた徳川による整地までの遺構面である。

調査区の南端付近で東西方向に延びる谷の肩を検出した。この谷は既往の調査でも確認されているもので、その北肩部の西延長にあたる。谷の埋土である第4層を除去すると、第6層の焼土層が谷の肩部で確認できた。調査区西半では第4面の廃棄土坑や攪乱によって肩部が削られており、第6層は確認できない。しかしながら、1区西端では谷肩部でわずかに第6層を確認しており、谷の北肩は直線的に延びていたと考えられる。2区南東隅では直角に北側に屈曲することから、コーナーを有していることが分かる。この谷肩部に平行して、溝を伴う堤を検出した。また、調査区東端で南北方向の柵列を伴う道路状遺構を検出している。その他、畠遺構、鍛冶炉を検出した。

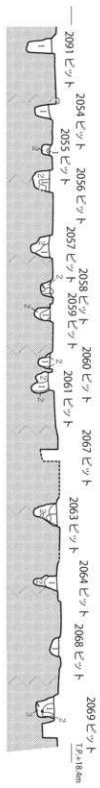
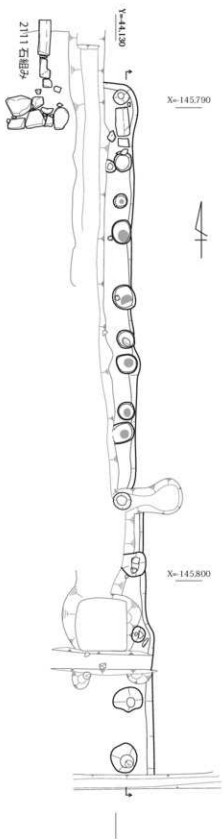
2038溝 (図49、図版5-2)

2038溝は調査区東端に位置する南北方向の溝である。第7層上面で検出した2038溝と同じ溝で、第6層上面では、溝というよりはむしろ、浅い窪みといった状況である。第7層上面の2038溝は夏の陣の焼土層である第6層で埋められており、これより上層を当該期の溝埋土として掘削した。第7層上面の溝と区別するため、以降、2038溝上層と呼称する。現代の攪乱により西肩は乱されるが、幅は約2m前後を測る。溝を境に東側は0.15～0.2m高く、西側では溝とほとんど差がなくなり、わずかな窪みとなる程度である。なお、2038溝上層は調査区北端までは延びない。溝が途切れた西側には2111石組みや浅い溝状の窪みが位置している (図版5-4)。2111石組みは2038溝上層埋没後の遺構である。2038溝上層の上部に石組みがあったと考えられ、いくつか礫が遺存していた。西側の石組み下部も浅い溝状を呈しており、2038溝上層はL字状に屈曲するものであった可能性も考えられる。なお、この石組みには石臼も使用されていた。2038溝上層からは多くの石臼が出土したが、石組みに関連したものの可能性が高い。

柵列5 (図49、図版5-3)

2038溝上層底部、つまり焼土層上面で柵列5を検出した。柵列5は2091・2054・2056・2057・2059・2061・2067・2063・2064・2068・2069ビットで構成される柵列である。2069ビットより南側では対応するビットを検出できなかった。延長約14mを測り、ビット間の距離は概ね1.4m前後を測る。ビットは直径0.5mを測り、深さ0.4mの円形を呈する。ビットからは瓦片の他、青花、白磁、肥前陶器や焼土塊などが出土している。これは下層の2038溝を攪乱しているためであろう。図50-452～454に出土遺物を掲載した。

2038溝上層より東側は先述のように一段高くなっており、明褐色の瓦の小片を多く含む整地層がみられた (第5層)。この整地層は道路状遺構に伴うものと考えられる。道路状遺構は東端が調査区外に



- 2091 ベース
- 1 2091/0/1 瓦 屋根瓦葺きスラブ
 - 2 2094/0/6 瓦 屋根瓦葺きスラブと10YR/3 に近い黄緑 シルト層+中継の存在
- 2094 ベース
- 1 10YR/6/2 瓦 屋根 屋根瓦葺きスラブ
 - 2 10YR/6/2 瓦 屋根 屋根瓦葺きスラブ
- 2095 ベース
- 1 10YR/6/2 瓦 屋根 屋根瓦葺きスラブ
 - 2 10YR/6/2 瓦 屋根 屋根瓦葺きスラブ
- 2096 ベース
- 1 2096/0/7 2099 ベース シルト層+中継の存在
 - 2 2096/0/7 2099 ベース シルト層+中継の存在
- 2098 ベース
- 1 5YR/6/3 瓦 屋根 屋根瓦葺きスラブ
 - 2 5YR/6/3 瓦 屋根 屋根瓦葺きスラブ
- 2099 ベース
- 1 5YR/6/3 瓦 屋根 屋根瓦葺きスラブ
 - 2 5YR/6/3 瓦 屋根 屋根瓦葺きスラブ
- 2001 ベース
- 1 5YR/6/3 瓦 屋根 屋根瓦葺きスラブ
 - 2 5YR/6/3 瓦 屋根 屋根瓦葺きスラブ
- 2003-2004 ベース
- 1 2003/0/4 瓦 屋根 屋根瓦葺きスラブと10YR/2 に近い黄緑 シルト層+中継の存在
 - 2 2003/0/4 瓦 屋根 屋根瓦葺きスラブと10YR/2 に近い黄緑 シルト層+中継の存在
- 2006-2009 ベース
- 1 7.5YR/5/2 瓦 屋根 シルト層+中継の存在
 - 2 7.5YR/5/2 瓦 屋根 シルト層+中継の存在
 - 3 7.5YR/4/2 瓦 屋根 シルト層+中継の存在



図49 欄列5 平・断面図

なり幅2m以上を測る。

堤状遺構と2101・2130溝（図8）

谷肩部に平行して堤状の高まりと2101・2130溝を検出した。基本的に第7層上面の堤状遺構、溝を踏襲したもので、溝は浅い窪み状を呈している。堤、溝は調査区西側では削平されて遺存しない。東側は大きな攪乱が位置しており、直交する道路状遺構との関係が良く分からない。道路状遺構に直交して接している2098・2099土坑は第4層で埋没しており、それぞれ、2130・2101溝に繋がる可能性が考えられる。

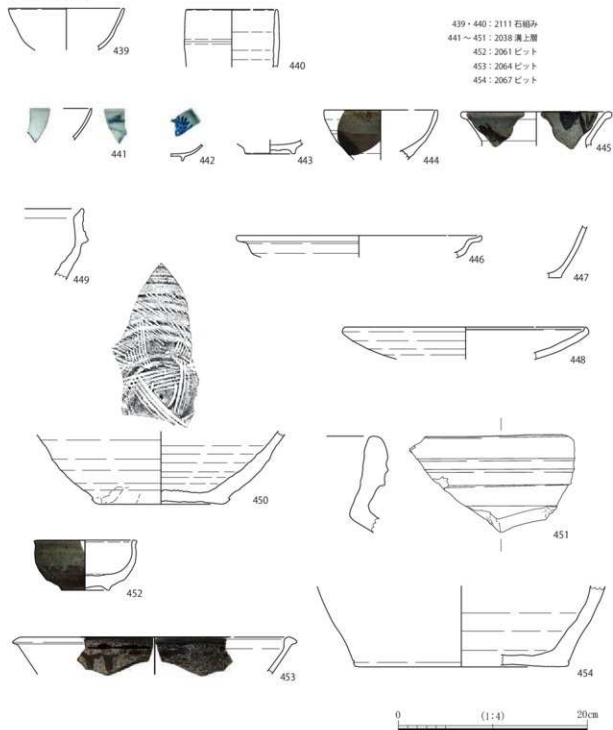


図50 2038 溝上層及び周辺遺構 出土遺物

2038溝上層及び周辺遺構出土遺物(図50)

2111石組みからは439・440が出土した。439は白磁碗である。口縁端部はわずかに褐色を帯びる。440は志野で向付である。

2038溝上層からは441～451が出土した。青花、瀬戸美濃陶器、肥前陶器がある。441・442は青花である。442は皿で内面に型押しによる文様がみられる。443は瀬戸美濃皿である。高台内に輪トチの痕跡が残る。444～447は肥前陶器である。444は丸碗、445は鉄絵向付である。446は皿。447は甕である。448～451は備前である。448は大平鉢。449・450は播鉢である。451は大甕である。

柵列5からは452～454が出土した。452は2061ピットから出土した肥前陶器碗である。器高は低く、器壁が厚い碗である。口縁部は短く外反する。鉄化粧を施し、体部下半と口縁部端部を露出させる。453は2064ピットから出土した陶器鉢である。454は2067ピットから出土した陶器大甕底部である。

その他、2038溝上層からは鉛のインゴットが出土した(図版21-926)。なお、図版21-925は火縄銃の玉で第6層から出土している。

畝遺構

2区東半で畝跡を検出した。同様の畝跡は周辺の既往調査でも検出されている。畝遺構を検出したのはX=-145.800より南側、Y=-44.140東側の範囲である。この範囲はT.P.17.9m前後を測る。作土は第6層の焼土層を攪拌しており、畝間溝は第4層で埋没している。東西方向の畝・畝間溝を検出した。溝の深さは5cm以下であった。

出土遺物(図56)

2029溝からは455の青花皿が出土した。高台皿の削りは明瞭で、見込みはやや凸状になる。2052溝からは458の白磁菊皿が出土した。皿付は無軸である。2030溝は畝の畝溝より前出の溝である。456の青花皿、457の肥前陶器碗が出土した。456は二次焼成を受ける。457は灰釉で胎土が淡い黄褐色を呈する丸碗である。

・鍛冶炉

5基の炉跡を検出した。2097炉は調査区北壁で確認したものである。側溝を掘削してしまい、平面的な検出はできなかった。2053炉、2097炉、2036炉はそれぞれ約9mの距離をもって位置している。一方、2033・2034炉は2基が近接して位置し、いずれも平面形は円形を呈する。2053炉、2036炉が隅丸方形を呈するのとは違いが認められた。炉はいずれも鍛冶炉と考えられる。

2033・2034炉(図51、図版6-1～4)

円形を呈する鍛冶炉を東西に2基並んで検出した。被熱範囲も含めて直径約0.5mのややいびつな円形を呈する。0.1m程度の浅い掘り込みが確認できる。炉の周辺は数cmにわたって被熱により赤変している(土層3・4)。炉の底部は固く締まり明黄褐色を呈する部分があり(土層2)炭層で埋まっていた。固く締まった範囲は側壁にも及ぶが、特に2034炉では南側、2033炉では北側と逆の側縁が固く締まっていることがわかる。このことから、竈による送風は2034炉が北から、2033炉は南からと逆の位置から行われたものと想定できる。

2035土坑(図51、図版6-1)

2035土坑は2033・2034炉の北側に近接する土坑である。切り合い関係より2033炉より新出である。0.4×0.7mの隅丸方形を呈する。北側は畝の畝溝にわずかに切られている。深さは約0.1mと浅く、上層は炭層で埋没する。出土遺物はみられない。

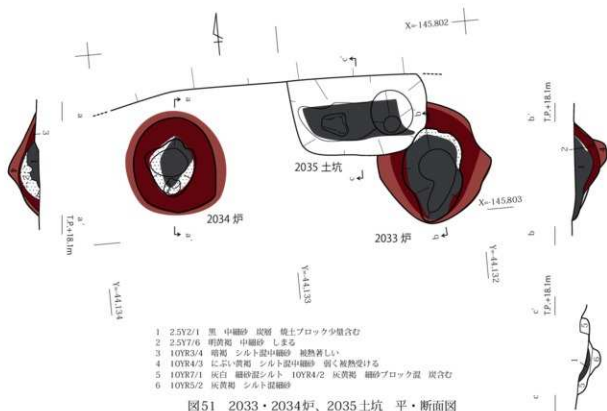


図51 2033・2034炉、2035土坑 平・断面図



図52 2036炉 平・断面図

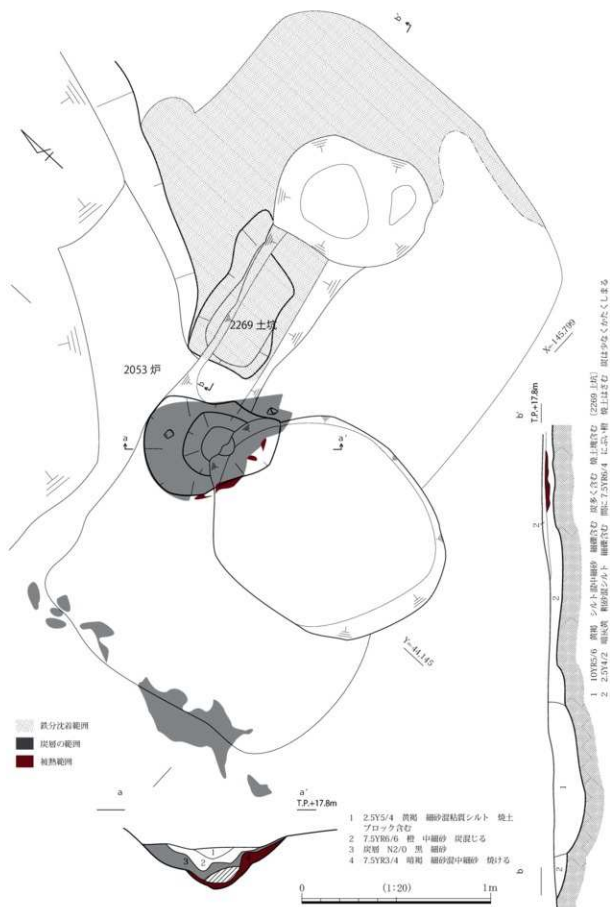


図53 2053炉、2269土坑 平・断面図

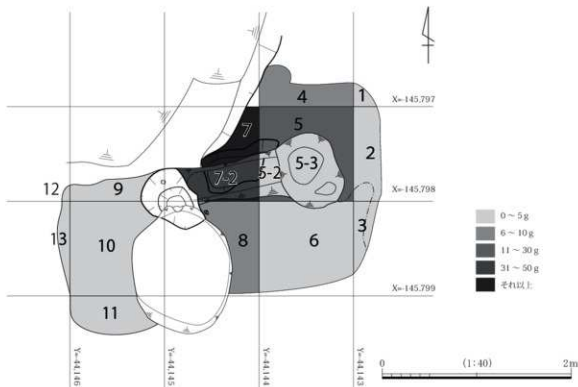


図54 2053号 鍛造剥片分布図

表1 鍛造剥片・粒状滓計測表

地区	鍛造剥片(重量)	粒状滓(重量)	粒状滓(個数)	小計(重量)	微細な小鉄片・スラッグ片等(重量)	スラッグ・小鉄片(重量)	ガラス質滓	計(重量)				
1	1.9	—	0.4	—	6	—	2.3	0.6	—	27.2	6.8	36.9
2	1.6	—	0.2	—	2	—	1.8	1.7	—	0	0	3.5
3	0.5	—	0	—	0	—	0.5	0	—	0	0	0.5
4	7	—	0.4	—	23	—	7.4	17.3	—	0	0	24.7
5	11.7	—	0.6	—	28	—	12.3	26.9	—	0	0	39.2
5-2	2.2	15.4	0	0.9	3	37	2.2	3.2	31.2	0	0	5.4
5-3	1.5	—	0.3	—	6	—	1.8	1.1	—	0	0	2.9
6	1	—	0	—	19	—	1	0.2	—	0	0	1.2
7	205.4	—	3.2	—	487	—	208.6	48.8	—	0	2.7	260.1
7-2	38.3	243.7	1.3	4.5	199	—	39.6	24.4	73.2	0	2.7	66.7
8	6.4	—	0.2	—	2	—	6.6	1.3	—	0	0	7.9
9	0.5	—	0	—	1	—	0.5	0.7	—	0	0	1.2
10	0.8	—	0.3	—	11	—	1.1	1.4	—	4.2	0	6.7
11	0.8	—	0.3	—	20	—	1.1	0.8	—	2.3	0	4.2
12	0.4	—	0	—	0	—	0.4	0.4	—	0	0	0.8
13	0.5	—	0.4	—	23	—	0.9	0.5	—	0	0	1.4
計	280.5	—	7.6	—	—	—	288.1	129.3	—	33.7	12.2	463.3

※鍛造剥片・粒状滓は1mmメッシュで篩をかけたもの
 1mmメッシュを抜けた微細遺物(7・7-2区以外)
 ・鍛造剥片3.2g
 ・粒状滓0.3g(39個)
 ・砂鉄や鍛造剥片等が混ざったもの84g

1mmメッシュを抜けた微細遺物(7-2区)
 ・砂鉄や鍛造剥片等が混ざったもの59.4g
 1mmメッシュを抜けた微細遺物(7区)
 ・砂鉄や鍛造剥片等が混ざったもの259.2g

2036炉 (図52、図版6-5~8)

平面形は被熱範囲も含めて0.65×0.55mの隅丸方形を呈する。中央はピット状に0.2m程度窪む。炭層(土層3)と、上部は第4層に類似した粘質シルト層(土層1・2)で埋没する。炉床は明黄褐色を呈し固く締まる(土層4・7)。炉床は土層4・7の2枚あると考えられ、間に薄い炭層が確認できた(土層5)。炉の周囲は数cmにわたり赤変している。土層9は炉の周囲で確認できるもので貼り床の可能性が指摘できる。また、周囲に鉄分の沈着した部分が見られた。

2097炉 (図55)

調査区北壁で検出した炉である。調査区東西断面図(図9)より、炉は第6層より上層に位置していることが分かる。炉は0.15m程度窪み、炭層で埋没している(土層2)。炉床は暗赤褐色を呈する(土層3)。その下部も窪んでおり、黄色シルトブロックを含む褐色の細砂混シルトが見られる(土層4)。これは、炉の下部構造と考えられる。炭層は図55の土層5の直上に広がっており、炉作業時の床面であることが分かる。土層5は第4層に類似したブロック土であるが、焼土が混じり、第4層よりは小さい5cm以下のブロック土である。この整地層は調査区全域で確認できるものではなく、部分的であることから、鍛冶炉周辺の限定的な整地と考えられる。土層2の炭層付近から鉄滓を採取した。これについては分析を行っている(第4章参照)。

2053炉・2269土坑 (図53・54、巻頭カラー2、図版7-1~4)

2053炉は平面形は被熱範囲も含めて0.7×0.5mの隅丸方形を呈する。深さは約0.25mを測る。炭層(土層3)と、上部は第4層に類似した粘質シルト層(土層1・2)で埋没する。炉の周囲は数cmにわたり赤変している。平面形、規模とも2036炉に類似する。炉は、隣接する2268井戸の輪郭に沿って一部が井戸内にずり落ちている。この井戸は、埋土に多くの瓦を含んでいたため、埋没後に沈下している。その結果、井戸の上部に位置する2053炉の一部が地滑りをおこしたものと想定できる。この地滑りの部分から、図57-469の羽口が出土した(図版7-2)。羽口は端部を炉本体とは逆向きにして出土していることから、原位置は保っていない。地滑りの際に原位置から動いてしまったと考えられ、もともとは2053炉に装着されたまま廃棄されたものであろう。

2053炉の周囲には3.4×2.2mの範囲で鉄分の沈着や炭の点在が認められた(巻頭カラー2)。周囲では鍛造剥片を採取しており、2053炉跡は鍛冶炉と判断できる。また、周囲の鉄分が沈着している範囲及び炭が点在している範囲は作業場と考えられる。

2053炉の北東側には第4層を埋土とする溝状の窪みと円形状の窪みがあった。溝状の窪みは垂直に壁が立ち、底部も平らである。また、底部および側面は鉄分の沈着が著しく、固く締まった状況が観察できた。その後、作業場とした範囲の鉄分の沈着層を全体的に薄く削いでいく過程で、2269土坑(図版7-5)を検出した。2269土坑は鉄分沈着層を撤去した段階で検出しており、2053炉に先行する土坑と考えられる。土坑は約0.8×0.3mの方形を呈し、深さ0.15mを測る。埋土に炭や焼土塊の他に非常に多くの鍛造剥片を含んでおり、現地調査の際にも肉眼で十分に観察できるほどであった。土坑の性格は不明であるが、鍛造剥片を意図的に集積していることが分かる。2053炉に先立つ炉が周囲に存在したか、あるいは2053炉の作業過程の中で、古い段階で生じた鍛造剥片を集積したものと考えられる。

なお、作業場と推定できた範囲について、図54のように1mのメッシュで区画して表面の土壌を採取、その後土壌洗浄、磁選を行った。土壌には多くの砂鉄が含まれおり、磁選したものを1mmメッシュの篩にかけ、これをすり抜けたものについては除外した。篩にとどまったものに関して、鍛造剥片、粒

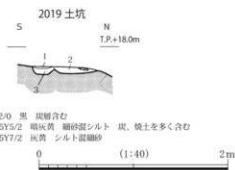
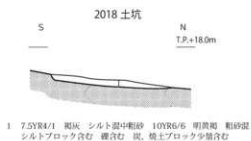
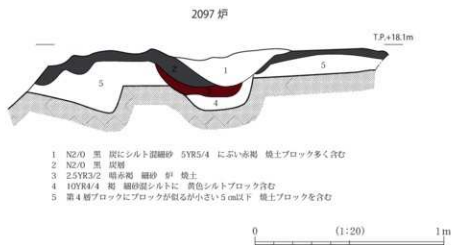


図55 2097坪、2017～2019土坑 断面図

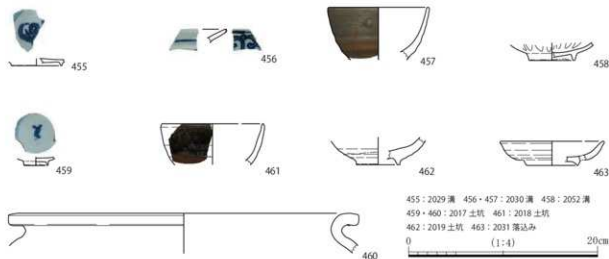


図56 溝、土坑 出土遺物

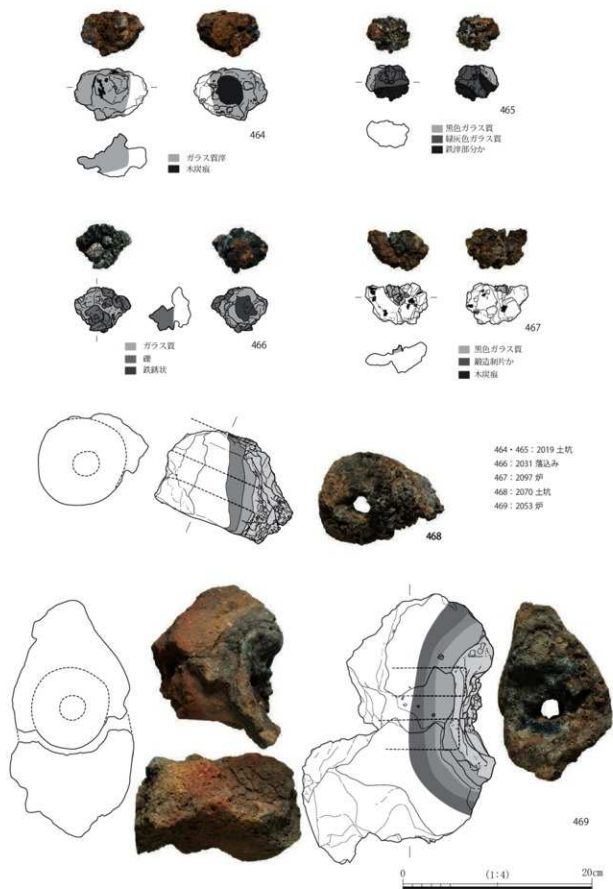


図57 出土金属器生産関連遺物

状滓に分け、それぞれ重量を計測した。表1に結果を示す。

鍛造剥片、粒状滓の炉周辺における分布は作業場の復元に多くの手掛かりを与えるものである。鍛造剥片の分布を見ると、7グリットが圧倒的に多く、次いで5グリットの範囲が多い。7グリットの範囲が異常に多いのは2269土坑による影響が大きいものと考えられるが、全体として、炉の北東側に分布の中心があることが分かる。これは鉄分沈着が著しかった範囲に一致する。また、炉の西側は炭が多く点在していたが、鍛造剥片は少ない傾向が窺われる。注意される点として粒状滓が13グリットに多くみられることがあげられる。

上記の結果もふまえ、作業場の復元を試みたい。炉の北東側、鉄分沈着の範囲のうち、グリット4・5・7のとした部分で鍛打作業を行っていたと想定できる。羽口は原位置を保っていないものの、装着した状況で炉が廃棄された可能性が高く、南からの送風が想定できる。南西の炭が多く点在している範囲は木炭状のものも確認できたことから炭置場であろう。このように考えると、横断はグリット6・8あたりとなる。溝状に落ち込んでいる部分は固く締まっており、金床が置かれていた可能性が考えられる。2269土坑は金床周辺の除湿を目的とするのが最も妥当ではないだろうか。

2017～2019土坑・2031落込み(図55、図版7-6・7)

2017～2019土坑はいずれも調査区北端で検出した不定形な土坑である。2017土坑は0.8×0.9mの隅丸方形を呈し、深さ約0.3mを測る。2018土坑も同規模の土坑で、深さは約0.1mと浅い。2019土坑も同規模の土坑で、深さは0.1m前後と浅い。埋土に焼土や炭を含む点で共通しており、2018・2019土坑からは鍛冶滓が出土している。先の鍛冶炉に伴う廃棄土坑と考えられる。2019土坑からはガラス質滓22点、碗形滓2点、不定形滓(鉄滓)16点が出土している他、焼土塊、炭化材、花崗岩の小礫が出土している。2018土坑からはガラス質滓1点、不定形滓2点、炭化材が出土している。この他2031落込みからガラス質滓が3点出土した。2018・2019土坑から出土した炭化材はマツ科であった。これらの土坑や落込みが位置する部分は、東側より0.1～0.2m低くなっている。ちょうど下層の2310堀状土坑上部にあたり、わずかな窪みが残っていたものと考えられる。

出土遺物(図56・57)

459・460は2017土坑から出土した。459は青花小杯、460は備前甕である。459は高台畳付のケズリが明瞭である。その他、金箔押鬼瓦(図82-695)が出土している。461は2018土坑から出土した肥前陶器丸碗である。胎土は褐色を呈する。462は2019土坑から出土した肥前陶器碗である。器壁が厚い。胎土は淡い黄褐色を呈する。463は2031落込みから出土した志野丸皿である。被熱により胎土が赤変している。

464～467は鍛冶滓である。464・465は2019土坑から、466は2031落込みから、467は2097炉周辺から出土した。これらの鍛冶滓については分析を行っており、第4章を参照されたい。

464・465はガラス質滓である。466は礫状のものを巻き込んだガラス質滓である。これらは分析の結果、流紋岩質組成のガラス質滓であることが分かった。これは、炉内の温度を急速に低下させるために火山ガラスが投入された結果生成された除熱排出滓であることが指摘されている。467は木炭や鍛造剥片を多く含む滓で、分析の結果、故鉄処理滓を含む再結合滓であることが分かった。

468は2070土坑から出土した輪の羽口である。2070土坑は2053炉の南東約3mに位置する土坑である。不定形な浅い土坑で、その中央がビット状に窪んでいる。埋土は第4層に類似したブロック土である。羽口は土坑の浅い窪み内から出土した。直径9.2cm、径孔2.6cm、残存長10.5cmである。炉壁

や障壁が付着していたが、取り上げの際に一部破損してしまった。端部にはガラス質滓が付着している。羽口の端部は斜めにカットされており、複数回使用されていることがわかる。469は2053炉に接する2268井戸から出土した鞆の羽口である。前述のように、本来は鍛冶炉に伴った状態であったと推測できるが、井戸の埋土が沈下し、井戸内に転落したものと考えられる。直径8.6cm、孔径2.4cmを測り、長さは8.5cm遺存している。羽口には炉壁や障壁が付着したままの状況で出土している。端部にはガラス質の滓が付着しており、特に下部は突き出したように付着する。

小結

第6層上面では南半で谷部の肩口を検出した。当該遺構面は大坂夏の陣の後、谷が大きく埋められるまでの比較的短期間の遺構面といえる。調査区東側では南北方向の柵列を検出した。柵列より東側は一段高くなっている。隣接する既往の調査地では(図1-5B調査区)では谷に向かうスロープ状の道路状遺構を検出しており、これに繋がる道と考えられる。柵列より西側では周辺の調査成果と同様に畠を検出した。その他に鍛冶炉を検出した点は特筆できる。2033炉・2034炉は畠を検出した範囲と重なっているが、畠より古い段階の遺構と考えられる。2036炉・2053炉は第4層に類似した黄褐色・明黄褐色土が最上層に認められるが、2033炉・2034炉には認められないことから、2033・2034炉は上部を削平されている可能性が高い。また、後者の炉が円形を呈しているのも、上部を削平されていることに起因すると考えられる。北側では畠痕跡は確認できず、あるいはわずかに窪地であったため、畠として利用しなかったのであろうか。北側に位置する炉が高遺構に前出するかは不明であるが、短期間の遺構面という点を考慮すれば、ほぼ同時期に、調査区一帯で鍛冶炉が操業していたと捉えられる。また、上層の攪乱により広範囲で当該期の遺構面が削られており、更に鍛冶炉があった可能性は十分に考えられる。

近年、難波宮の東方に位置する大阪府立青少年会館跡地の調査(NW10-4次調査)で、徳川初期の大規模な鍛冶工房が検出された(大文研2012)。工房は短期間の集中操業であり、内部での組織的作業や規模の大きさから、大坂城再興に際して稼働した可能性が指摘される。今回の調査では、NW10-4次調査区に比して、炉の配置密度は薄く、付属する施設や、整然と並んでいる状況はみられなかった。しかしながら、当調査区も鍛冶工房として位置づけることは可能であろう。旧三の丸地区が徳川期の大坂城再興のための工房域として利用されていたことを示す一例といえる。

第4節 豊臣期の遺構と遺物

豊臣期は第3節の徳川初期と同様、調査地南半が谷地形となっており、この部分は第4層上面で調査を終えている。また、1区北半は第3層までの削平によって、当該期の遺構はほとんど遺存していなかった。よって当該期の遺構面は2区が中心となる。豊臣期の遺構面は部分的ではあるが3面に細分することができた。第7層上面、第8-1層上面、第8-2層上面（基盤層上面）である。以後、豊臣期1、豊臣期2、豊臣期3として記述を進めることとする。3面に細分可能であったのは2区東半で、2区の西半は近代に相当する層を除去すると、大部分で基盤層が露出し、検出した遺構の帰属する層位は明確にできなかった。この範囲に関しては、豊臣期2でまとめて触れることとしたい。

また、各層からの遺物の出土は概して少なく、小片が多い。特に第8-1層、第8-2層では少なく、出土した遺物の大半は瓦片などであった。図58・59に図化可能な遺物を示した。

・第6層～第8-2層出土遺物（図58・59）

470～489は第6層から出土した遺物である。第6層からは他と比して比較的、図化可能な遺物が出土している。輸入陶磁器では青花、青磁、白磁が出土しており、国産陶器では肥前陶器、志野、備前や土師質土器が出土している。

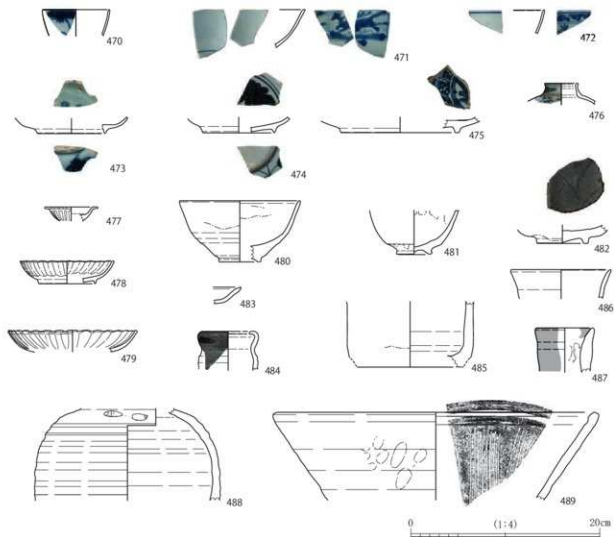


図58 第6層 出土遺物

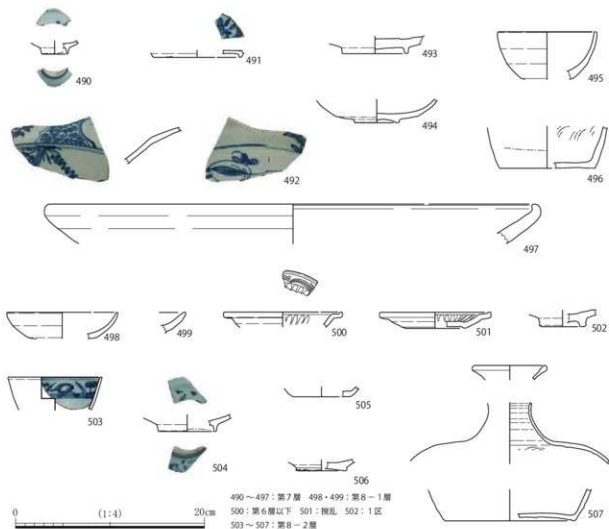


図59 第7・8-1・8-2層 出土遺物

470～476は青花である。470は小杯、471・472は碗である。471は飛馬文を描く碗で、内面に型押しによる文様がみられる。473～475は皿。474は呉須の発色が濃い。475は畳付には粗い砂が付着する。476は壺である。口縁端部は玉縁状を呈する。全面施釉である。被熱する。477は青磁で皿である。外面にソギをもつ。478・479は白磁菊皿である。480～485は肥前陶器である。480・481は丸碗である。いずれも高台は低い。480は胎土が淡い黄色系を呈する。482は内面に草花文の鉄絵が描かれる皿である。483は小杯か。484は向付。外面に鉄絵がみられる。485は水差か。鉄軸。底部は露胎で糸切り痕が残る。486は志野碗である。487は土師質土器で焼塩壺である。二次焼成を受ける。488・489は焼締陶器で、488は備前種壺、489は丹波摺鉢である。外面に指押え痕が明瞭に残る。

490～497は7層から出土した。輸入磁器では青花、白磁が、国産陶器では肥前陶器、備前が出土している。

490～492は青花である。490は小杯、491・492は皿である。491は畳付に砂が付着する。492は大皿で漳州窯産。493は白磁皿である。見込みは蛇ノ目軸剥ぎで、高台内は無軸、畳付には砂が付着する。494～496は肥前陶器である。494は皿。高台は低く、高台内に兜巾が残る。495は碗である。496は瓶底部で平底。内面は同心円状の当具痕をなで消す。497は焼締陶器で備前鉢である。

498・499は第8-1層から出土した。第8-1層からの遺物の出土は非常に希薄であり、ほとんど

が瓦片である。498は東西方向の堤盛土内からの出土である。肥前陶器丸皿。口縁端部に鉄軸を塗る皮鯨手である。499は瀬戸美濃丸碗である。

503～507は第8～2層から出土した。503・504は青花である。503は碗。504は皿。軸は青味を帯びる。高台畳付は削る。505は青磁である。見込みと体部の境は圈線状に窪んでいる。506は軟質施釉陶器碗の底部である。底部外面には糸切り痕が残る。507は朝鮮王朝産の可能性のある徳利である。器壁は非常に薄く、発泡して凸凹している。底部は中凹みとなり、体部内面にはわずかに当具痕が残る。土器片は細かく割れ、広範囲で出土している。500・501は瀬戸美濃折縁皿である。500は第6層以下の層から、501は攪乱より出土した。500は内面にソギを有し、口縁部直下には連弧文を有する。501は器高が低い。見込みは釉剥ぎである。502は1区で出土した。肥前陶器皿である。見込み、高台に目跡が残る。高台には糸切り痕が残る。

各層は薄く、出土遺物より各層の時期を特定するのは困難な状況であるが、第6、7層は豊臣後期の様相を、第8～2層は豊臣前期の様相を示すものと考えられる。全体的に瀬戸美濃の出土は少なく、豊臣前期に相当する遺物は希薄といえる。

(1) 豊臣期1の遺構と遺物 (第7面) (図60、図版8-1)

第7層上面は、第6層を除去した遺構面である。大坂夏の陣直前の遺構面であり、焼土、炭層で埋没した遺構がみられた。検出した遺構は、南北方向の溝と柵列、谷に平行する堤状遺構及び溝の他は、小規模な溝、ピット、井戸である。

2038 (2113) 溝・2100溝 (図61、図版8-2～4・9-1)

2038溝、2100溝は調査区東端で検出した南北方向に平行する溝である。2038溝は徳川初期の遺構面で検出した2038溝上層の前身の溝である。幅は北側の広い部分で約1m、南側の狭い部分で0.5mを測る。北側は現代の攪乱で溝の中央が遺存しておらず、深さは0.1m前後であるが、南側では0.3m前後を測る。溝は焼土で埋没している。南北方向に延びる溝は、谷肩部付近で直角に西に折れる。東西方向の溝を調査では2113溝としたが、ここでは同一の溝として扱うこととする。このコーナー付近には焼けた礫や瓦がまとまって出土した。礫に交じって、石臼も出土している (図版8-3)。2038溝からは多くの遺物が出土した。二次焼成を受けたものが多く、焼けた壁材なども出土している。

2100溝は幅1m以上、深さ0.15m前後を測る。道路状遺構の整地土と考えられる橙色土を除去して検出した。西肩は調査区外になる。炭や焼土を多く含んだシルト質土で埋没している。溝からは比較的多くの遺物が出土している。この2本の溝をつなぐ深さ5cm前後の溝を検出した。焼土、炭層で埋没している。

柵列6 (図61、図版8-2)

柵列6は2038溝の底部、肩際で検出した南北方向の柵列である。2154・2155・2123・2124・2126・2156ピットで構成される。ピットの埋土には2038溝と同様、焼土ブロックが多く含まれている。大部分のピットは先の徳川初期の柵列5とほぼ同じ場所に位置していることから、攪乱されているものが多く、詳細が不明なものもあった。柱間の距離は1.6m前後を測る。ピットからの出土遺物は少なく、2123ピットから瓦片と焼土塊が、2124ピットから焼土塊が出土している。2038溝を挟んで東西で概ね0.15mの比高があり、東側は盛土がなされて高くなっている。柵列はこの段差の部分に建てられたものであり、上面と同様といえる。2038溝からは、焼けた壁材や、瓦類が多く出土していることから、

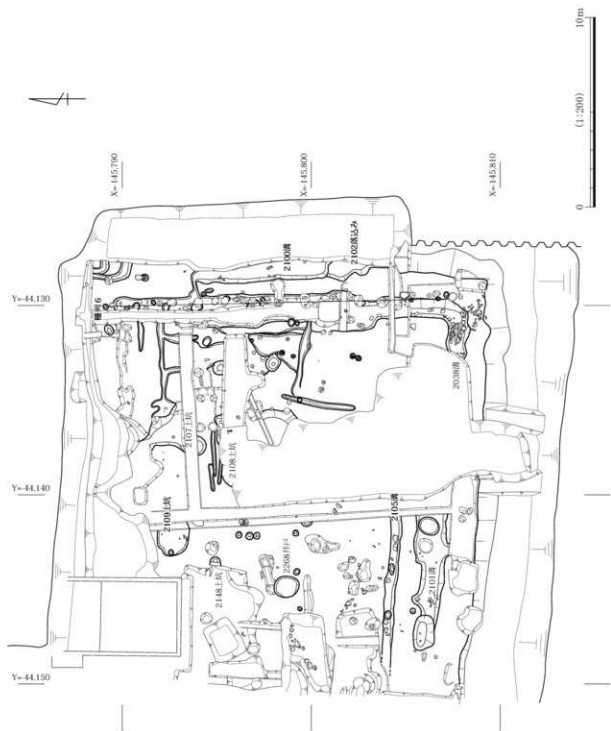
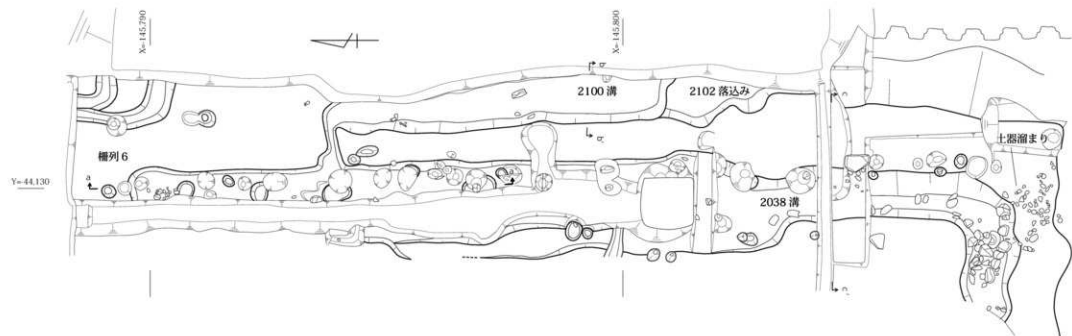


图60 2区 第7層上面 平面图

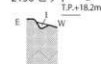


a 2154 ビット 2155 ビット 2123 ビット 2124 ビット 2126 ビット



- 1 10YR4/2 灰炭層 粘質シルト層中粗砂 焼土ブロック、炭多く含む 礫含む 地山ブロック（黄色粗砂）含む
- 2 1より焼土ブロック狭い
- 3 10YR5/6 黄砂 細砂粘粒シルト

2156 ビット a'



0 (1:80) 4m

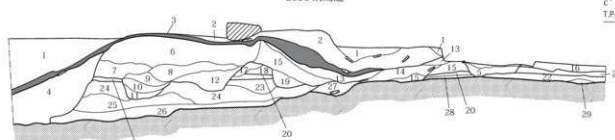
2100 溝 南アゼ



- 1 10YR4/3 に近い黄砂 細砂中粗砂 第6層相当 2より炭を多く含む
- 2 10YR4/3 に近い黄砂 細砂中粗砂 第6層相当 炭を多量に含む
- 3 7.5YR5/8 厚層 中砂粘粒シルト (2100溝)
- 4 10YR4/2 灰炭層 細砂シルト 炭を上部に多く含む 炭土含む (2100溝)
- 5 2.5Y4/3 オリーブ層 細砂粘粒砂 炭含む
- 6 10YR6/6 明黄層 シルト塗中粗砂 炭、焼土含む (2038溝)
- 7 10YR4/4 靑 細砂塗中粗砂 黄色シルト・粗砂の地山ブロック含む 炭含む 第7層

0 (1:40) 2m

2038 溝周辺



- 1 5B6/1 黄砂 細砂シルトを主体としたブロック土 第4層
- 2 2.5Y4/3 オリーブ層 シルト塗中粗砂 細砂含む 7.5Y5/8 明黄 細砂塗シルトブロック含む 第5層
- 3 5YR3/2 暗赤層 シルト塗中粗砂 炭含む 第6層焼土-炭6溝2038溝
- 4 5YR4/3 に近い赤層 細砂塗中粗砂 黄色シルト・粗砂ブロック含む 瓦多量に含む 2102落込み
- 5 5YR3/2 暗赤層 中粗砂 細砂含む 焼土、炭含む
- 6 10YR5/4 に近い黄砂 シルト塗中粗砂 黄砂、黄色シルトブロック小含む しまり悪い 6-8は第7層相当埋り土
- 7 10YR3/3 暗靑 シルト塗中粗砂 黄色シルトブロック多く含む
- 8 10YR4/2 灰炭層 シルト塗粗砂 青灰色シルトブロック小含む
- 9 10YR6/6 明黄層 粗砂 青灰色シルトブロック含む 0-11は2157溝
- 10 10YR4/3 に近い黄砂 シルト塗中粗砂 黄色シルト・粗砂ブロック多く含む 炭わずかに含む
- 11 10YR6/6 黄砂 細砂シルト
- 12 2.5Y4/3 オリーブ層 シルト塗粗砂 黄色シルトブロック小含む 2304溝
- 13 2.5Y4/3 オリーブ層 シルト塗中粗砂 細砂含む 2.5Y5/8 黄砂 細砂塗シルトブロック含む 13-15は第7層相当溝
- 14 2.5Y3/3 黄砂 細砂シルト 黄色シルトブロック含む 細砂含む
- 15 2.5Y4/2 暗灰層 シルト塗中粗砂 細砂含む 炭含む
- 16 2.5Y3/3 黄砂 シルト塗中粗砂 黄色シルト塗粗砂ブロック含む 細砂含む 第7層
- 17 10YR4/2 灰炭層 細砂塗中粗砂 17-18は第8層相当埋り土
- 18 10YR2/3 黒靑 シルト塗中粗砂 黄色粗砂塗シルトブロック含む
- 19 10YR2/2 黒靑 シルト塗粗砂 粗砂ブロック含む 溝溝
- 20 10YR5/6 黄砂 細砂塗シルト
- 21 10YR7/4 に近い黄砂 粗砂 第8層
- 22 10G6/1-8砂 細砂-黄砂 シルトブロック混合土 第8層(埋地層)
- 23 10YR4/4 靑 シルト塗中粗砂 粗砂ブロック層 炭含む
- 24 10YR3/2 黄砂 シルト塗中粗砂 黄色シルト・粗砂ブロック混合土 23-25は2384焼込み
- 25 10YR2/2 黒靑 中粗砂 黄色シルト・粗砂ブロック少量含む 炭含む
- 26 10YR2/2 黒靑 中粗砂 25より黄色シルトブロック大含む 焼土ブロック含む
- 27 2.5Y4/3 オリーブ層 細砂塗シルト 黄色細砂塗シルトブロック含む 2365溝
- 28 7.5YR2/2 暗靑 シルト塗粗砂 細砂含む 第9層
- 29 2.5Y3/1 黄砂 細砂粘粒砂

0 (1:40) 2m

図61 柵列6・2100・2038溝、2102落込み 平・断面図

築地塀などがあつた可能性も考えられる。

2102落込み (図61)

2038溝の東側で検出した。谷のコーナー部分に位置しており、埋土はにぶい赤褐色の細礫混中粗砂で焼土を多く含む。2100溝と同様、道路の整地層を除去して検出した。図61C-C'断面の土層4が2102落込みの埋土となる。2100溝とは切り合いをもつというよりは一連のものであつたと考えられる。二次焼成を受けた瓦が多く出土しており、瓦を廃棄した落ち込みと考えられる。

堤状遺構、2101・2105溝 (図8、図版9-2)

谷の肩部に平行して堤状の高まりを検出した。幅約4mを測る。高まりの中央には2101溝が、北側には2105溝が平行して延びる。調査区西側は上層までに攪乱されて遺存しない。東半は大規模な攪乱が位置しており、2101溝が2038溝に連続するか断定はできない。図8では2101溝の南側が第4層上面の遺構で切られているため表されていないが、2101溝の南側が北側に比して約0.1m高くなっている。2038溝も屈曲して西に折れ曲がった部分では、南側が北側に比してやはり0.1m程度高くなっており、同じような状況がみられた。このことから、この2本の溝が繋がっていた可能性は高いと考えられる。2105溝は幅約0.6m、深さ約0.1mを測る。溝の埋土は第6層相当層とした灰色の粘質シルト質土で炭を多く含む。溝内には人頭大の礫が数個残されており、同程度の大きさの窪みも並ぶことから、本来は石列があつたものと考えられる。周囲に点在する礫はこれが攪乱されたものであろう。溝からの出土遺物は少なく、志野碗 (図64-579)、土師質土器皿 (図64-580)の他に瓦片などが出土している。2101溝は2105溝よりは幅が広く1.7mを、深さは0.15mを測る。埋土は第6層相当とした褐色の粘質シルト、黒色のシルト混細砂である。溝内からは比較的多くの遺物が出土した。

溝、落込み出土遺物 (図62~68)

上記の溝、落込みからは比較的まとまって遺物が出土している。輸入磁器、国産陶器、土師質土器、瓦類などが出土している。陶磁器類は、被熱して釉が発泡しているものや、器壁が発泡、剥脱しているものが目立つ。また、瓦類も二次焼成を受ける個体が多い。石製の硯も被熱して発泡している。いずれも、夏の陣によって焼けたものであろう。巻頭カラー3・4に掲載した。特筆できる遺物としては土鍾があり、2038溝からまとまって出土している。破片を含め256個体を数える。やはり、被熱した個体が多い (図版20-913)。他に、2038溝からは壁材と考えられる焼土塊が多数出土した (巻頭カラー4)。木舞の痕跡が明瞭に残るものでは、痕跡が残る面と反対側は平らな面を有するものが多く、木舞付近で剥がれているようである。木舞は直径1cm前後を測る。なお、2038溝の埋土のうち焼土より上層で出土したものは原則、図50-441~451で記載した。

図62は2038溝から出土した陶磁器類である。輸入陶磁器では青花、白磁、国産陶器では瀬戸美濃、肥前、焼締陶器、その他土師質土器が出土している。508~511は青花である。508は皿。口縁部は屈曲して開き、四方禪文を描く。畳付は丁寧な削り、砂がわずかに付着する。509は皿。2147ビットから出土した破片と接合する。被熱により器面が痛み変色している。510は皿。口縁部が内湾するもので、口縁部内面に四方禪文を描く。二次焼成により器壁が痛む。511は鉢である。屈曲して外に開く口縁部を有する。見込みには宝づくし文が描かれる。高台畳付は丁寧な削り、わずかに砂が付着する。二次焼成を受け、器壁は痛む。512は白磁碗である。

513は瀬戸美濃丸碗。体部外面に連弁文風の印花文がみられるものである。出土遺物の中で古相を示し、下層の混入品と考えられる。514は志野向付である。碁笥底状を呈する。釉が二次焼成により、発泡し

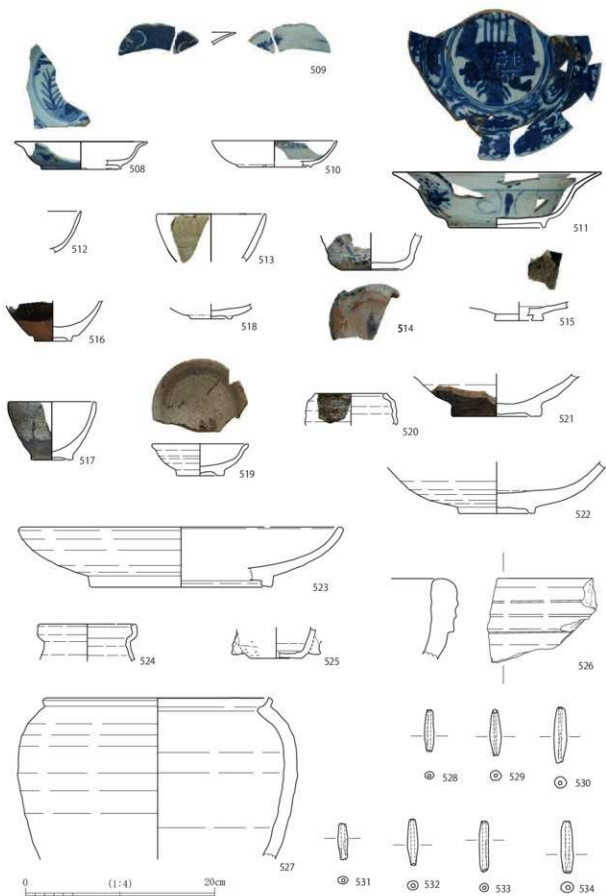


图62 2038沟 出土遗物

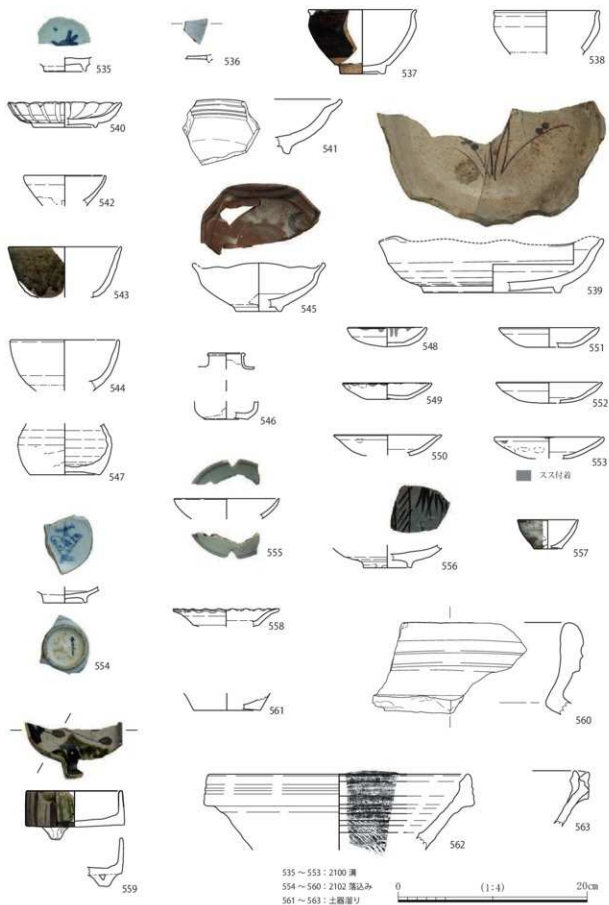


图63 2100溝、2102落込み、土器溜り 出土遺物

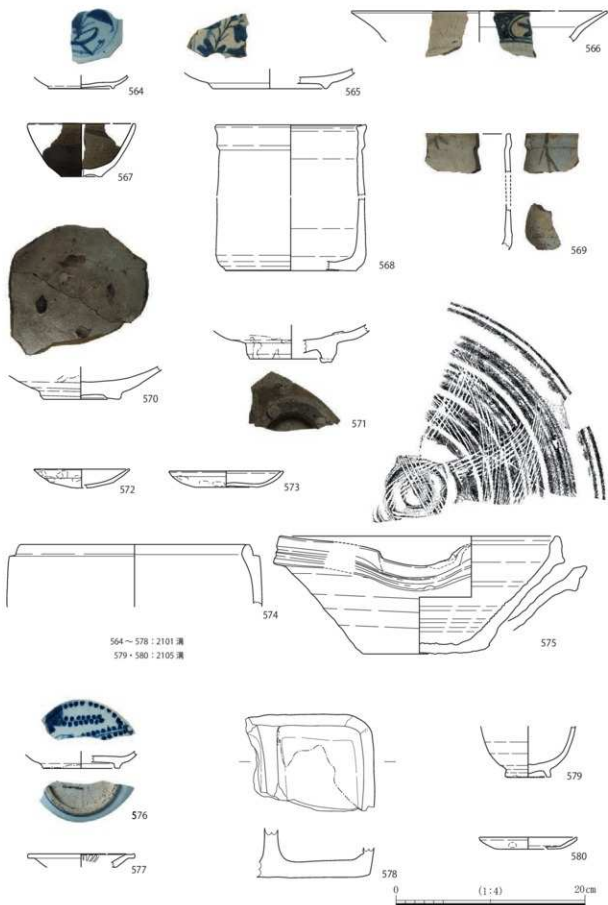


图64 2101·2105溝 出土遺物

ている。515は織部向付か。516～522は肥前陶器である。516・517は碗である。516は褐色の胎土を呈する。鉄軸。517は高台と体部の境界が不明瞭なものである。釉葉が発泡し変色している。518・519は皿である。519は口縁部が端反りになる皿である。高台は低く、内面には兜巾が残る。内面見込みには細長い目跡が残る。520は茶入れである。被熱による釉葉の剥離が認められる。521・522は皿である。521は畳付に糸切痕跡が残る。523は瀬戸美濃大皿である。釉葉が被熱により変色している。

524～527は備前である。524・525は同一個体の可能性がある。内面に鉄錆状の付着物が認められる容器である。破片のため、全体は不明であるが、底部の形状は円形ではなく、方形に近い。526は大甕の口縁部である。527は水屋甕。

528～534は土鍾である。これらはいずれも、管状のもので、両端が狭くなるものである。長さは4～6cm弱のものがあり、重さは3～8gのものがある。中には10gを測るものもあった。二次焼成を受ける個体が多い。孔部に繊維が炭化して遺存するものもみられた。漁撈具は他に、2100溝から釣り針と考えられる鉄製品が出土している。

図63-535～553は2100溝出土遺物である。輸入陶磁器では青花、国産陶器では瀬戸美濃、志野、肥前、焼締陶器、土師質土器が出土している。535は青花小杯、536は白磁で見込みに施釉前に細かい線刻で文様を描くものである。537～539は瀬戸美濃である。537・538は大目碗である。高台周辺が露胎である。539は大皿である。口縁部を輪花状に整え、内面には鉄軸で草花文が描かれる。540は志野菊皿である。被熱により釉葉が発泡する。2398ピット出土のものと接合した。541は志野大皿である。542～545は肥前陶器である。542は小杯で、口縁端部に鉄軸を塗る皮筒手である。543・544は碗である。543は体部下半は露胎で、轆轤によるケズリ痕が明瞭である。544は胎土がやや褐色を帯び、543は浅黄褐色を呈する。545は向付。口縁部を変形させるもので、内面に鉄銹をあしらう。見込みには胎土目が残る。546は茶入れである。胎土は非常に精緻である。底部外面には糸切痕が残る。高取。547は備前德利。548～553は土師質土器皿である。煤の付着がみられるものもあり、灯明皿として使用されたものであろう。

図63-554～560は2102落込み出土遺物である。2102落込みからは多くの瓦が出土しており、瓦を廃棄した落込みと考えられる。瓦類に混じって、土器、陶磁器類が少量出土した。輸入磁器では青花、国産陶器では瀬戸美濃、織部、肥前、焼締陶器が出土している。554・555は青花である。554は碗である。畳付には砂が付着する。555は皿である。556は肥前で鉄銹の皿である。高台脇まで施釉している。畳付、高台内は無釉。557は小杯で、二次焼成による釉葉の変色が著しい。558は瀬戸美濃ひだ皿である。559は織部向付である。粘土板を型打ちしたもので、内面には布目痕が残る。底部はヘラケズリで粘土紐で半環足を貼り付ける。内外面とも無釉部分には鉄銹で施文し、銅緑軸を掛け分ける。560は備前大甕である。

561～563は2038溝コーナー付近の南側で出土した。瓦の小片や備前播鉢の破片などが谷の肩部及び、斜面に貼りつくように出土している。561は備前德利、壺の底部である。二次焼成により器壁の痛みが著しい。562・563は備前播鉢である。

図64-564～578は2101溝出土遺物である。2101溝からは比較的多くの土器・陶磁器類が出土している。輸入磁器では青花、国産では肥前陶器、備前、土師質土器が出土している。564～575は溝上層遺物で、第6層相当層とした図8土層3から出土したものである。576～580は溝下層遺物である(土層10⁻・8)。564～566は青花皿である。564は高台内に放射状のケズリの痕跡が明瞭に残る。畳付

は削り、わずかに砂が付着している。565・566は漳州窯産と考えられる。567～571は肥前陶器である。567は碗で高台と体部の境界が不明瞭なものである。高台は低く、兜巾が残る。体部内面に鉄絵をあしらう。568は水差か。485と同一個体の可能性がある。鉄釉。底部外面には糸切痕が残る。569は向付である。藁灰釉。570は皿である。見込みには胎土目が4か所みられる。571は皿。高台畳付、及び見込みには胎土目が付着している。被熱により釉薬が発泡する。572・573は土師質土器皿である。574は土師質土器で火舎である。575は備前播鉢である。576は青花皿で、高台は無釉。高台内には放射状のケズリの痕跡が明瞭に残る。畳付は平らで砂の付着がみられる。577は瀬戸美濃で折縁皿である。体部内面にソギが入る。器高は低い。578は瓦質土器である。方形の容器で、中を板で仕切るものである。579・580は2105溝から出土した。2105溝からは遺物の出土は少ない。579は志野で丸碗である。580は土師質土器皿である。底部が平らなものである。

各溝の遺物は遺構間で接合するものもみられた。

上記の溝、落込みからは瓦類も多く出土している。2038・2101溝、2102落込みからは多くの瓦が出土している。平瓦が圧倒的に多く、二次焼成により橙色に変色した個体が多い。丸瓦は判別できるものではコビキBであった。

581～585は2038溝から、586・587は2101溝から、588～590は2102落込みから出土した。581・582・586・588はいずれも三巴文軒丸瓦である。581は小さく丸みのある巴頭を有し、尾は長く他の巴と接して圏線状を呈する。珠文は16個を数える。瓦当の中心にはコンパス芯と考えられる突起がみられる。瓦当には離れ砂の付着が認められる。582は581と類似した文様を呈し、同范の可能性が高い。586・588は二次焼成による変色が著しく橙色を呈する。586は小さく丸い巴頭を有し、尾は長く他の巴と接して圏線状を呈する。珠文は16個を数える。瓦当中心のコンパス芯の突起は不明瞭であるが581と同范と考えられる。588は扁平で比較的大きな巴頭を有し、巴の尾が他に比して短い。珠文は12個を数える。

583～585・587・589は均整唐草文軒平瓦である。583は中心飾りが三葉で左右の葉先は反外する。唐草は茎が短く二転する。瓦当側縁の幅が広い。585は583と同范と考えられる。584は中心飾りが不明で、二転する唐草が遺存する。587は中心飾りが大きな三葉で、屈曲の強い唐草が一転する。瓦当には離れ砂が付着する。二次焼成により、灰白色を呈する。589は中心飾りが不明である。文様は細い突線と表され、弛緩して三転する唐草が遺存する。内区は小さく、それに比して側縁幅が広い。二次焼成により橙色を呈する。590は不明瓦である。厚さ2.3cmの平らな板状を呈する。側縁は面取りを施し、2か所に繰り込みがみられる。二次焼成を受け橙色に変色する。

石製品では石臼、硯、砥石が出土している。図66・67には調査で出土した石臼をまとめた。調査で出土した石臼は礪白が最も多く、次いで茶臼、つき白も1点出土している。2038溝のコーナー付近では石臼が多く出土しており、被熱を受けたものが多い。破損して、破片となったものも多く、図化したのは599のみであるが、他につき白、茶臼が出土している。2038溝の焼土層より上面でも石臼が多くみられた(594・596～599)。他に2111石組みからも595が出土している。

593は第6～7層出土。茶臼である。砂岩製。8分割に復元できる。594は茶臼である。砂岩製。8分割。二次焼成を受ける。595は2111石組みより出土。礪白の下臼である。花崗岩製。8分割。596は2038溝最上部より出土。礪白の上臼である。6分割。他と比して、厚さが薄い。側面の横打込穴は2か所に確認できる。1か所は下面に達している。花崗岩製。597は2038溝最上部より出土。礪白の

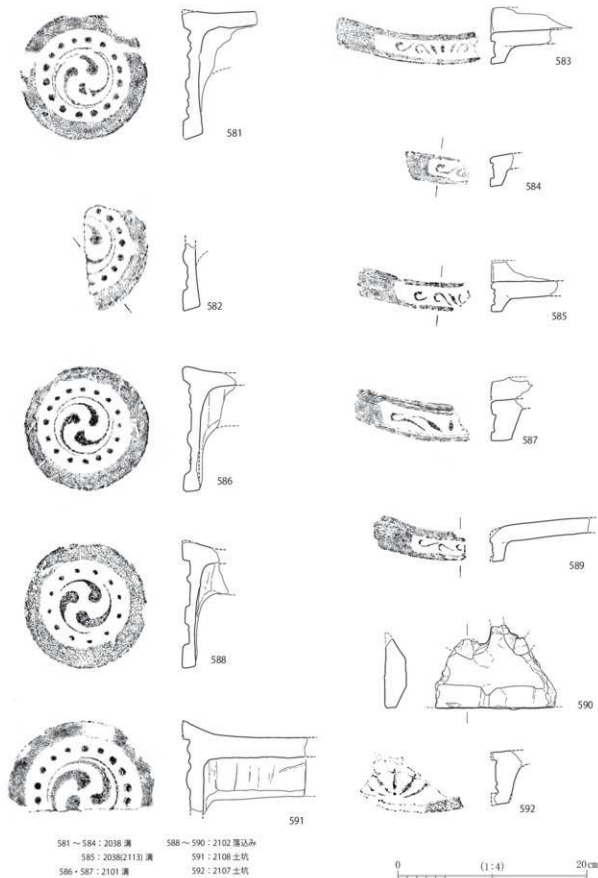
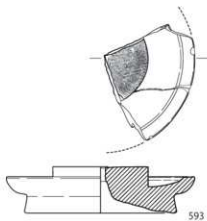
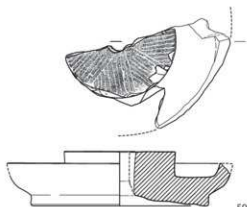


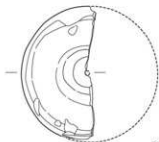
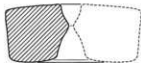
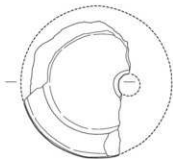
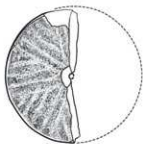
图65 2038·2101溝、2102落込み、2107·2108土坑 出土瓦



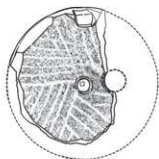
593



594



595



596



597

■ スス付着

593 : 第6~7層 594・596 : 2038溝線上層 597 : 2038溝上層 595 : 2111石組み

0 (1:8) 40cm

図66 2038溝他 出土石臼①

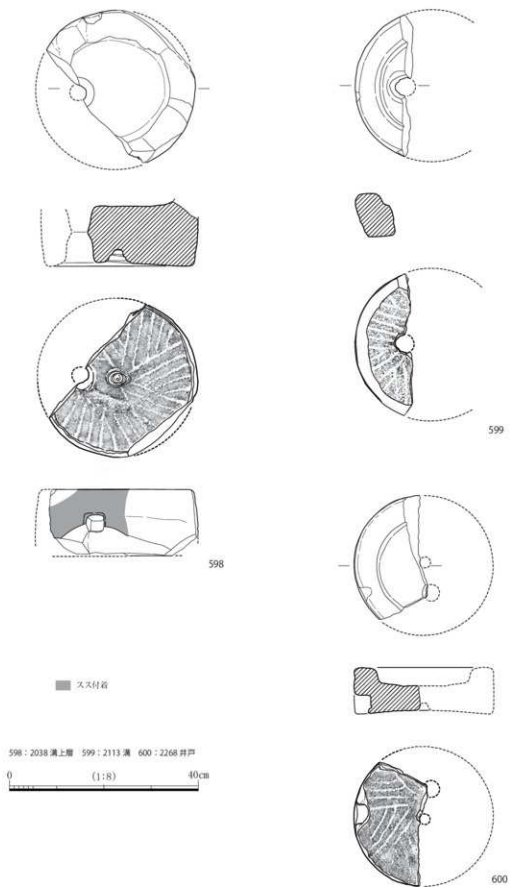


图67 2038溝他 出土石臼②

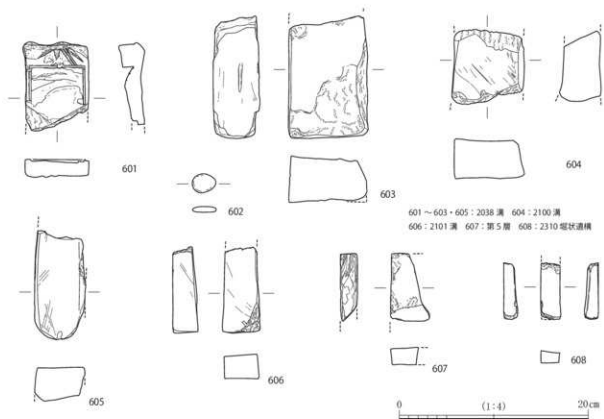


図68 2038・2100・2101溝他 出土石製品

上白である。8分割。砂岩製か。二次焼成を受ける。598は2038溝上層より出土。礫白の上白。8分割。側面には対向する横打込穴を2か所に有する。供給口に接してものくばりの窪みがみられる。花崗岩製。二次焼成を受ける。599は2038(2113)溝より出土。礫白の上白。8分割。600は2268井戸から出土した。礫白の上白である。8分割。花崗岩製。横打込穴が下面に達している。

図68に出土した石製品をまとめた。601は2038溝から出土した硯である。笹が陽刻されている。硯は被熱により、発泡が著しく、一部ガラス化している。602は碁石である。2038溝から出土した。603～608は砥石である。603・605は2038溝から、604は2100溝から、606は2101溝から、607は第5層から、608は2310堀状遺構から出土している。いずれも立方体を呈するものである。608は他に比して小さいものである。

・その他の遺構(図65・69)

上記の南北方向の櫛列6と2038溝、谷肩部に平行する東西方向の堀状遺構と2101・2105溝は区画

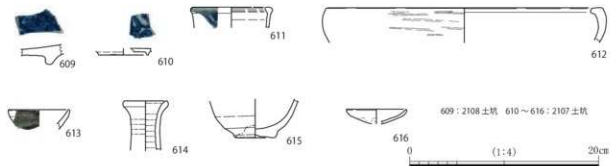


図69 土坑 出土遺物

施設と考えられる。柵列6と2038溝の東側も盛土がなされており、東西の堤状遺構と一連のL字状の高まりとなっていたと考えられる。この区画内は遺構が希薄で、規模の小さい溝や不定形の落込み状の土坑、小ピットが点在している。溝はいずれも5cm前後と浅く、焼土、炭を埋土に多く含むものである。東西方向、南北方向に延びている。

2107 土坑周辺は下層の2310堀状遺構があった部分にあたり、若干の窪地になっている。土坑からは瓦類が多く出土しており、陶磁器類の出土は少なかった。**2108 土坑**は、中央の規模の大きな攪乱に切られている。出土遺物に近代の遺物が混じっており、攪乱の影響によるものと考えたが、上層の遺構である可能性も否定できない。土坑から出土した陶磁器類を図69に掲げた。609は2108土坑から、610～616は2107土坑から出土した。609～611は青花である。609・610は皿である。611は内面が無釉である。香炉か。612は白質土器で火鉢である。二次焼成により赤変している。613は肥前陶器小杯である。614は備前徳利の口頸部である。二次焼成を受ける。615は肥前陶器碗である。高台と体部の境界が不明瞭な碗である。616は土師質土器である。その他、瓦類が出土している。図65～591は2108土坑から出土した三巴文軒丸瓦である。巴頭は扁平で大きく、尾は他の巴に接するように延びる。珠文は18個に復元できる。瓦当に離れ砂の付着がみられる。丸瓦部は瓦当のやや下方に取り付く。コピキはB類である。図65～592は2107土坑から出土した均整唐草文軒平瓦である。中心飾りは三葉一点珠で、葉先には蕾が表される。

2268 井戸 (図70、図版9-4)

調査区中央付近で井戸を検出した。井戸は直径約1.3mの円形を呈する。T.P.14.3mまで掘削を行ったが底部は確認できず、完掘には至っていない。断面形は下膨れ状になる。上部は第4層に類似した青色シルトで埋没しており、当初は第6層上面の遺構と考えていたが、2053炉が井戸の掘方に沿って滑り落ちていたことから、第6層より下層の遺構と判断した。埋土には焼土や炭に混じって、多くの瓦が含まれており、沈下したものと考えられる。瓦は二次焼成を受けたものが多い。特筆すべき点として、鬼瓦や桔梗紋軒丸瓦の出土があげられる。

2268 井戸出土遺物 (図71～73)

2268井戸は完掘していないが、埋土からは多量の瓦が出土した。一方、陶磁器類の出土は非常に少なく、細片が多い。図71に出土した陶磁器類を掲載した。青花、白磁、青磁、国産陶器では、志野、肥前、備前が出土している。617～621は青花である。617・618は小杯、619～621は皿である。617は高台内に放射状のケズリの痕跡を残し、高台畳付は削る。619は口縁部内面に四方譚文がみられる。高台内は放射状のケズリの痕跡が認められる。畳付には砂が付着する。620は見込みがやや盛り上がり、高台内には銘款を有する。622は青磁香炉である。腰部に三足が付くものと考えられる。井戸上部は上層が落ち込んでおり、622は上層の遺物が混入した可能性も否定できない。

623は白磁菊皿である。624は志野向付、625は鼠志野で皿。626～628は肥前陶器碗である。いずれも灰釉である。626は見込みに胎土目が残る。627は高台内の兜巾が明瞭に残り、畳付には胎土目が付着している。628は見込みに胎土目が残る。629は備前大甕である。

井戸からは先述のように多量の瓦が出土している。特に平瓦の出土が多い。平瓦は二次焼成を受け、橙色や白色に変色したものが多い。厚さ1.5cm以下の薄いものが目立つ。一方、丸瓦は少ない。平瓦同様、二次焼成を受け、橙色、白色に変色したものが多く、煤が付着するものもある。丸瓦は確認できたものはコピキBで内叩きのあるものも認められた。

図72・73に鬼瓦、軒瓦を掲載した。630・631は鬼瓦である。630は口が横に大きく開き、牙が張り出す。鼻は丸みを帯びて横に広がり、耳は非常に大きく表現されている。顎は直線的である。角は欠損している。631は頭上に宝珠がみられる。630より焼成は硬質である。630に比べて厚みがある。裏面には把手がみられる。632は不明瓦である。厚さ2.8cmと平らで多くの孔を穿孔している。孔は隣り合う列が互い違いになるよう配置されている。側面にはV字状の溝が切られている。用途は不明。類似した特徴を有する瓦は堺環濠都市遺跡でも出土している（大文セ2008）。633は桔梗紋軒丸瓦、634・635は

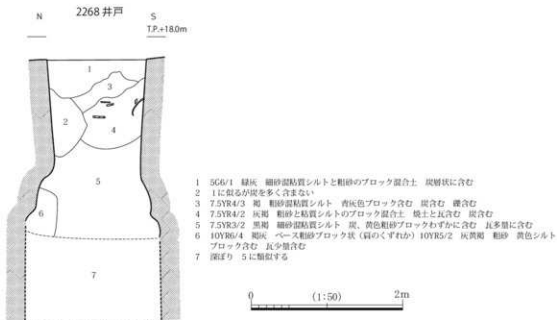


図70 2268井戸 断面図

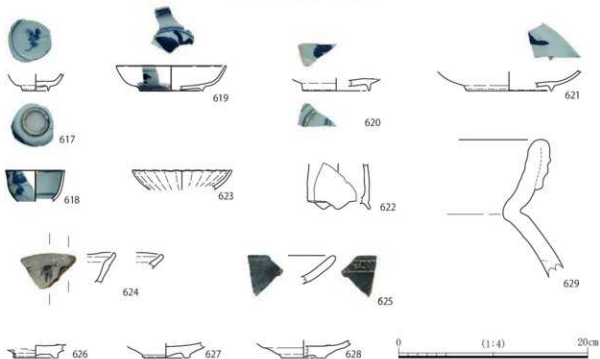


図71 2268井戸 出土遺物

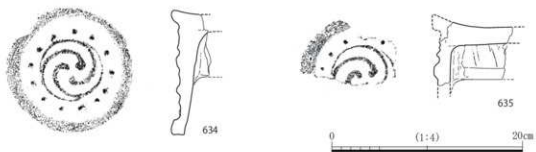
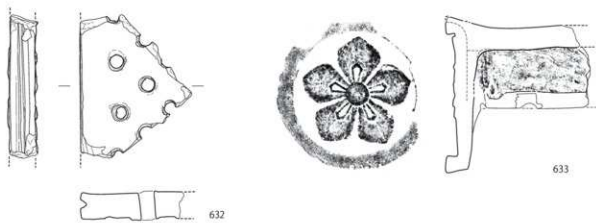
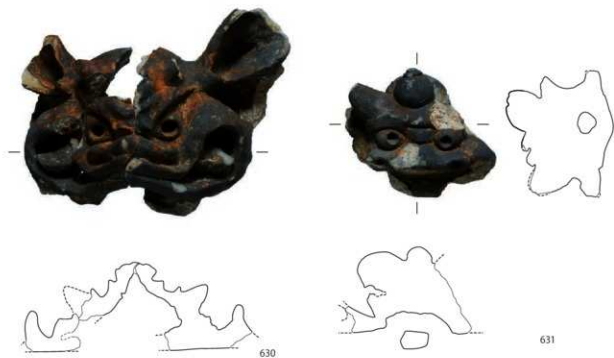


图72 2268井戸 出土瓦①

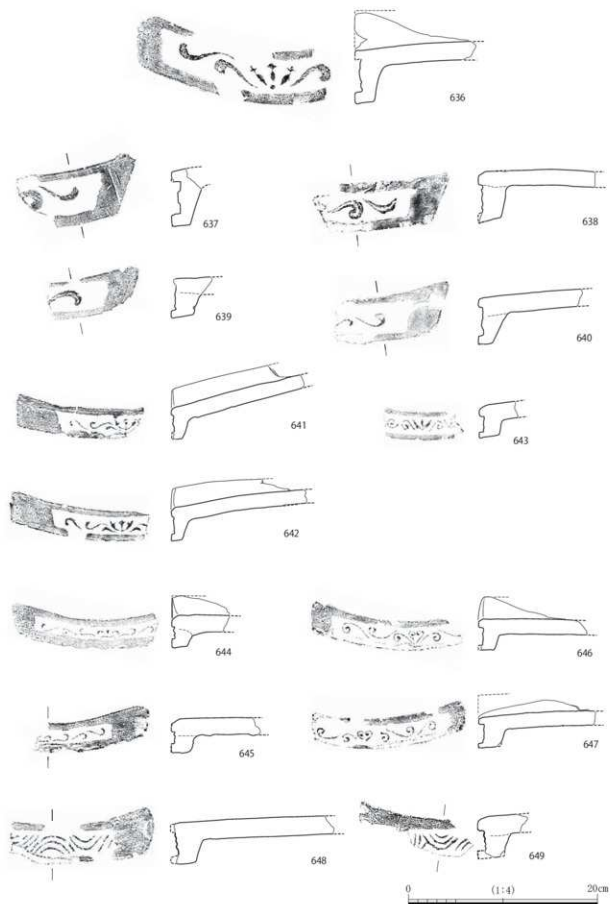


图 73 2268 井戸 出土瓦②

三巴文軒丸瓦である。桔梗紋を表す瓦は既往の調査でも出土がみられる。瓦当は粘土塊を二度に分けて押し込んでおり、一部剥離している。丸瓦部はコピキBである。凹面にはわずかに布目が残り、凸面は縦方向に板ナデを施す。二次焼成により橙色を呈する。634は丸く小さい巴頭から長い尾が伸び、尾は他の巴胴に接して圏線状を呈する。珠文は疎で13個配する。周縁の幅は一定せず、粗雑な印象を受ける。635は634に類似した巴を配する。ただし、634に比して文様が鮮明で高さがある。丸瓦部はコピキBである。

636～649は軒平瓦である。636～647は均整唐草文軒平瓦である。636～640の瓦当幅の広い軒平瓦と、641～647の狭い軒平瓦がある。636は中心飾りが点珠と三葉で先端に蕾様の表現がみられる。太い唐草が二転する。637～640はいずれも中心飾りは遺存しない。637～639は636と同様、唐草が太いものである。637は636と類似した唐草を有する。638は唐草が二転するが、外側は子葉を表現する。640は文様が細く、二転する唐草が遺存する。641・642は中心飾りが三葉でその下に萼を有するものである。左右の葉の先端は小さく分かれてY字状を呈する。唐草は二転する。瓦当側縁は幅広である。643は中心飾りが三葉で、茎の短い唐草が二転以上する。644は中心飾りが三葉でその下に萼を有するものである。左右の葉は大きく外反する。弛緩した唐草が三転する。645は中心飾りが欠損しているが、644と同様の文様と推測できる。644・645は内区幅が特に狭く、内区に比して側縁、上下の外縁が広い。646・647は中心飾りがC字状の唐草が対向するものである。左右の唐草は三転する。643～647は二次焼成によって橙色を呈している。648・649は水波文軒平瓦である。半弧の水波文を上下交互に配する。二次焼成により変色している。瓦当面には離れ砂の付着が認められる。瓦当幅は641～647に比して広い。

豊臣期1は大坂夏の陣直前の遺構面と考えられ、埋土に焼土、炭を含むものが多い。遺構から出土した遺物は被熱を受けたものが多く、夏の陣の罹災によるものと考えられる。国産陶器では肥前陶器が多くみられ、志野、織部が出土するなどの新しい様相がみられ、矛盾しないものと考えられる。

(2) 豊臣期2の遺構と遺物 (第8-1層上面) (図74、図版10-1)

第8-1層上面は第7層を除去した遺構面である。

豊臣期1と同様の区画施設を検出した。調査区東端で南北方向に平行する溝、柵列、及び谷の肩部に平行する溝を伴った堤状の高まりである。南北方向の柵列には礎石を有するものもある。区画内ではピットや土坑、溝などの遺構を多数検出した。豊臣期1に比して遺構の密度は高い。特に北西部では溝と柵列を検出した。礎石などは検出できなかったが屋敷地であったと考えられる。その他、大型の土坑や井戸を検出した。土坑には多数の瓦類が出土するものもみられた。

2157・2158・2303溝 (図61・77、図版10-2・13-3)

調査区東端では2157溝と2158溝の2条の溝が南北方向に平行して延びる。溝が位置する調査区東端は、北半ではほぼ基盤層が露出している。南端は東西方向の堤状の高まりが続いていたと考えられ、東西であり高さは変わらない (図61) が、基盤層が露出した部分では、溝を境に東が0.1m程度高い。2条の溝が位置する範囲は徳川初期の道路状遺構と一致しており、豊臣期2においても溝を境に段差を有していることがわかる。2158溝は上面の2038溝とほぼ同位置で検出した溝である。幅約0.8m、深さ0.2mを測る。溝からは瓦片の他、志野丸碗 (図78-652) が出土した。溝の底部で柵列7を検出した。2157溝は幅約0.6～0.8m、深さ0.25mを測る。溝からは瓦片の他、肥前陶器碗や備前鉢 (図78-650・651) が出土した。2条の溝は谷の肩部に平行して延びる2303溝にいずれもつながっている。

2303溝は幅0.5m、深さ0.2mを測る。溝からは瓦片などの他は時期を示す遺物は出土していない。

2304・2424溝 (図77)

2304溝及び2424溝はいずれも、先の溝に先行する溝である。2304溝は2157溝、2158溝の間に位置している。堆積状況から2304溝は2157溝及び2158溝に先行するものと考えられる。2304溝は幅約0.9m、深さ0.2mを測る。両肩が2157・2158溝に切られているため、平面的には浅い窪みとして検出している。溝はX=-145.800付近で太さが変わり、これより南側では幅約0.3～0.4mと細くなる。

2424溝は2303溝に先行する溝である。幅0.3m、深さ0.2mを測る。調査では、第8-2層上面で検出したが、検出した遺構の中では切り合いから最も新しく、2304溝と同時に機能していた可能性が高い。2303溝の北肩と南肩とは地層が異なっており、北肩はブロック土が多くみられた(図77土層2)。この土層2を第8-1層としていたが、2303溝の埋土であったと考え、この下位にある2324溝も、第8-1層上面に帰属すると判断した。溝の底部のレベルは2304溝より約0.1m、2424溝が低い。瓦片などが出土するものの、時期を示す遺物は出土していない。

柵列7 (図75)

2157溝の西側に平行して位置する柵列である。2158溝の底部、および肩口で検出した。ピットを検出した大部分は基盤層が露出しており、調査当初、基盤層上面に帰属させたが、断面観察用のアゼ部分に位置する2291ピットの切り込み面を検討した結果、第8-1層上面に帰属すると判断した。

柵列7は2326～2332ピット、2518、2301、2302、2291、2292、2289ピットで構成される南北方向に延びる柵列である。総延長17.6mを測り、柱間は約1.6mを測る。ピットは直径0.4～0.5mを測り、深さは浅いもので0.6m、深いものでは1mを超える。掘方の埋土は基本的に地山と黒褐色系、あるいは茶褐色系のシルト質土のブロック土であり、互層になるものもある。柱は遺存しないが、黒褐色系の細砂混粘質シルトの柱痕跡がみられる。ピットからは瓦片が出土したものの、時期を示す遺物はない。なお、柵列7の東側には小ピットが平行して並ぶ。

柵列8 (図75)

柵列7の西側に平行して位置する柵列である。2207・2264・2353・2513・2527ピットで構成される。総延長12.4mを測り、柱間は約3mと柵列7に比して広い。ピットは直径0.3～0.4mを測り、深さは0.3～0.7mを測る。掘方内に礫がみられるピットが多い点特徴的である。礫は底部に根石として置かれているのではなく、2513・2527ピットでは掘方の上部に、2264・2353ピットでは掘方の中程にみられた。礫は礎石のような平たい面を有するものではなく、柱を固定するためのものと考えられる。2513・2527ピットなどは、柱を抜き取った後に廃棄されたものであろう。各ピットからは瓦片は出土するものの、時期を示す遺物の出土はない。

柵列9と周辺のピット (図76、図版10-2・11-1～8)

柵列8の西側に平行して位置する柵列である。柵列9は礎石を有するもので、南北方向に2182～2185ピットと4基のピットからなる。2185ピットは調査区の北側断面で確認しており、更に北側に延びる可能性が考えられる。南側延長上には2199ピットが位置する。柱穴の規模は少し小さいが、柱間がほぼ同じであることから、南側にもう1間展開する可能性が高い。2199ピットより南には延びない。総延長8.5m以上、ピット間の距離は約2mを測る。礎石を検出していることから、周辺はあまり大きく削平されていないと考えることができる。2182ピットでは礎石を固定するために、もう1つ石を置いている(図版11-3・4)。柵列は礎石を用いる以前は、掘立柱であったと考えられ、直径0.8～1m、

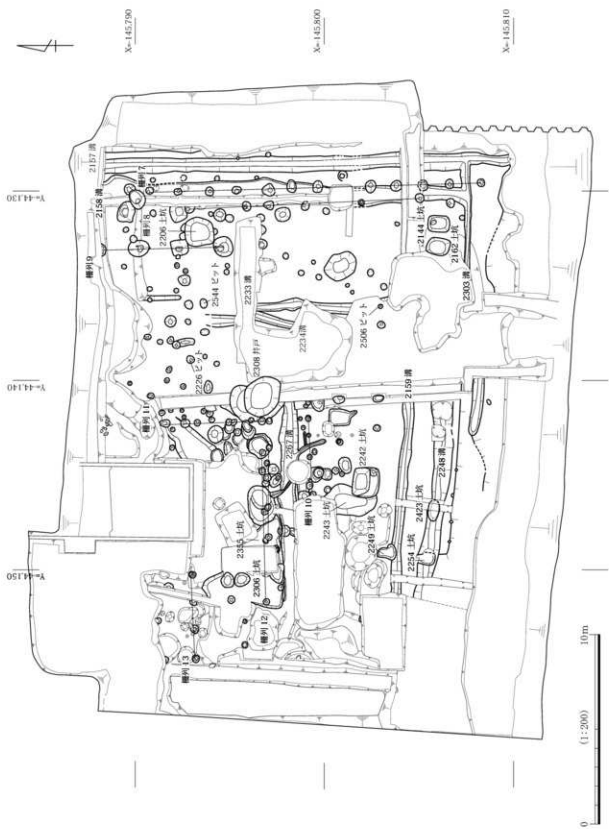


図74 2区 第8-1層上面 検出遺構

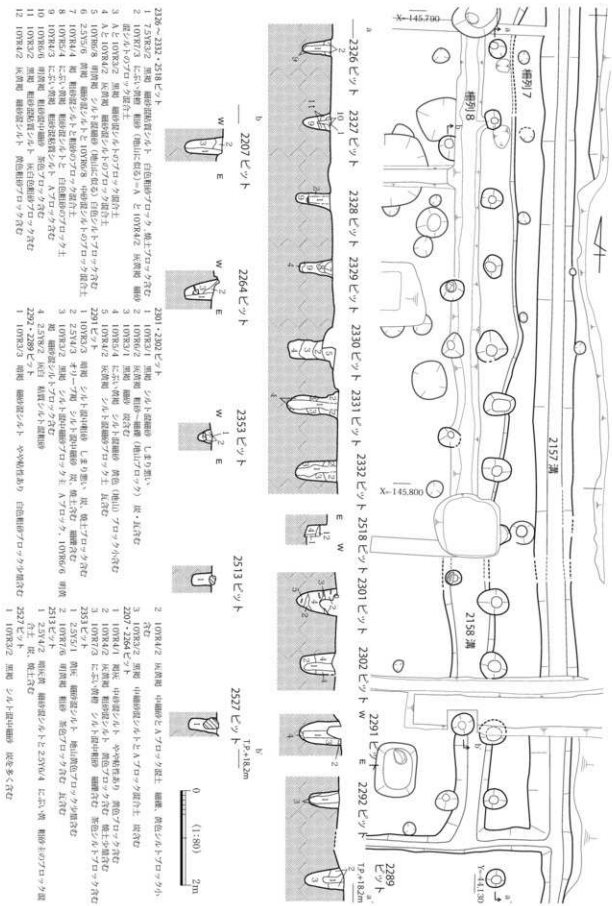


図75 柵列7・8、2157・2158溝 平・断面図

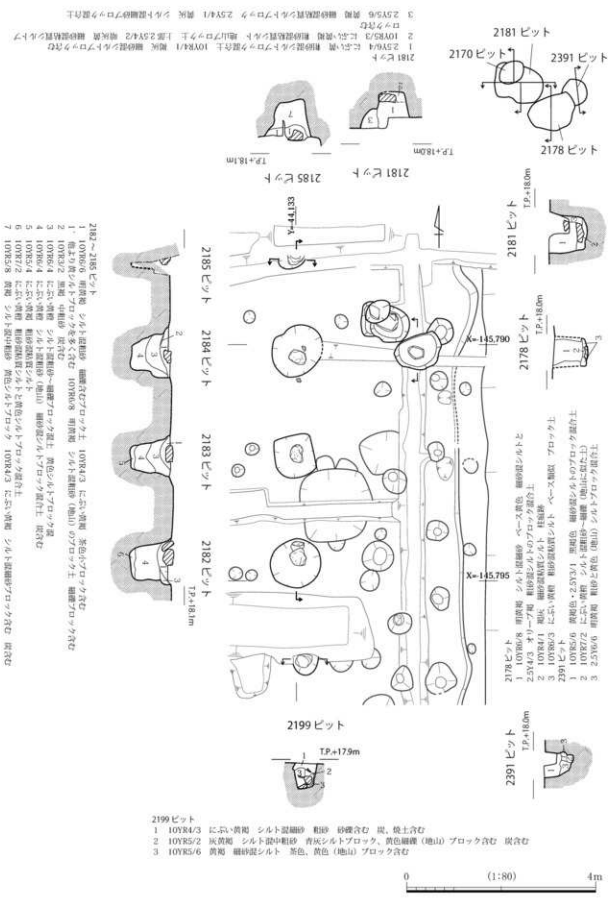


図76 柵列9他 平・断面図

深さ約0.8mの掘方の上部に置かれていた。2183ピットは円形というよりは隅丸方形を呈していた。掘方には柱痕跡はなく、ブロック土で埋め戻されている。2199ピットは直径約0.4mと他より小さい円形を呈すると考えられ、深さは0.6mを測る。ピットの底部には掘方にちょうど収まる、大きく平たい根石が置かれていた(図版11-7・8)。掘方中程にも大きな礫があるが、これは柱を固定するものである。各ピットからは、瓦片等が少量みられた他、2182ピットから図78-658の青花碗が1点出土した。

柵列9の東側では、規模の大きい掘方を有するピットを検出した。

2178ピットは2184ピットの東側2.6mに位置する。0.7×0.9m、深さ0.7mのややいびつな隅丸方形を呈し、掘方の底部には平たい根石を置く。2178ピットの南北には、組み合う柱穴は確認できない。2181ピットは2178ピットの北西に近接するもので、平面形は0.9×1mのややいびつな隅丸方形を呈し、深さは約0.8mを測る。2178ピット同様に掘方の底部に平たく大きな根石を有している(図版11-5)。柵列4の延長上に位置しており、柵列4を構成する柱穴の可能性も考えたが、柱間が3.3mとやや長いこと、ピットの規模が大きく異なることから、同等のピットとは考えにくい。このピットは西側に張り出しがみられた。柱痕跡が遺存しないことから、柱は抜き取られたと考えられ、この張り出しは抜き取り穴の可能性が考えられる。2181ピットは第7層上面で検出した2170ピットに切られる(図版11-6)。2170ピットは直径0.3m前後の円形を呈し、深さは0.4mを測る。掘方底部には根石を有する。

2178・2181ピットは規模が大きく、柵列9に類する柱穴である。2178ピットは柵列9に直交し、柱間も通ることから、これと関連して何らかの施設を構成するものであろうか。本来は礎石建物であった、他は礎石が失われてしまった可能性もあるものの、先行する規模の大きな柱掘方に対応するピットも検出していない。このことから、柵列9は直線的に延びると考える方が妥当であろう。柵列9は近接して平行する柵列や溝があることから、区画施設の一部であると推測できるが、礎石を有していること、これに先行して規模の大きな掘方を有していることから、柵列7・8とはその規模が大きく異なり、単なる柵列、塀とは言いがたい。門等の施設である可能性が考えられる。

2233・2234溝(図77)

柵列9の西側に位置する南北方向に延びる溝である。2233溝は幅0.3～0.4m、深さ約0.1mを測る。2234溝は幅0.4m、深さ約0.1mを測る。2234溝は直線的には延びず、やや屈曲している。いずれも南側は大きな攪乱によって検出できず、谷肩部に平行する2248・2303溝との関連は不明である。北側は浅くなり、検出できない。2233溝からは肥前陶器沓掛碗(図78-653)が、2234溝からは備前片が出土している。

堤状遺構と2248・2159溝

谷肩部にあたる調査区南端では溝、堤状遺構を検出した。堤状の高まりは約0.15m周囲より高い。堤状遺構の南側には2159溝が、中央には2248溝が平行して延びる。堤状の高まり及び溝は上面の第6・7層上面でも踏襲されていたものである。図9に断面図を示した。堤状遺構は第8-1層上面を基底面として構築され、その後、拡張、踏襲していることが分かる。谷肩部は平坦ではなく、2248溝のすぐ南側で、一旦平坦面をもつものの、段をもって南の谷側に傾斜しており、第7層のにぶい黄橙色の砂～細礫層(図9土層14・15)で埋めて堤を拡張している。2248溝の南側は垂直に落ちているが、これは第7面の整地の際に一旦堤肩部を削って整えたためと考えられ、第8-1面段階の堤本来の肩部は攪乱されてしまっている。

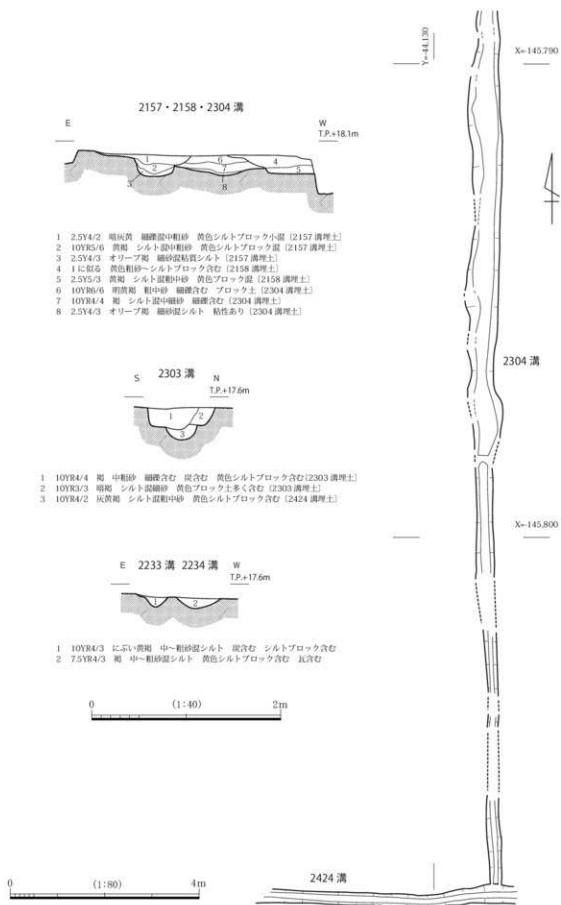


図77 2157・2158・2304・2303・2424・2233・2234 溝 断面図、2304・2424 溝平面図

2248溝は幅1.3m前後、深さ約0.3mを測る。埋土は最下層には暗灰黄色の粘質シルトがみられ、中・上層は砂質土である(図8土層11~13)。埋土から瓦片が多く出土した他、白磁皿、肥前陶器皿(図78-654)、備前壺(図78-655)、土師質土器皿、鉄製品などが出土した。鉄製品は棒状を呈するもので、錆が著しい。2159溝は幅0.5m前後、深さ約0.3mを測る。埋土は暗灰色の細砂である(図8土層13)。2248溝に比して幅は狭い。埋土からは瓦片が出土した他遺物の出土はない。

2248溝及び2159溝の東側には大規模な攪乱が位置しているため断定はできないが、先述の東西方向の2303溝や2233溝、2234溝とつながるものと考えられる。2233溝、2234溝はいずれも直線的に延びてはならず、2233溝は谷に向かってやや東に、2234溝は谷に向かってやや西に屈曲している。この点を重視すれば、2159溝は調査区東側には対応する溝がないことから、途中北に屈曲して、2234溝に繋がり、2303溝が2233溝に繋がる可能性が高い。また、2248溝は2303溝とはやや軸がずれること、溝の規模が異なることから、直接繋がるとは考えにくい。2233溝を介して東西に繋がる可能性が考えられる。

溝出土遺物(図78)

650・651は2157溝から出土した。650は肥前陶器丸碗である。胎土は淡黄色を呈し、銅緑釉を施す。651は備前鉢である。652は2158溝から出土した志野丸碗である。653は2233溝から出土した肥前陶器番掛碗である。灰釉。高台内には兜巾が残る。654・655は2248溝から出土した。654は肥前陶器皿である。胎土は橙色を呈する。見込みに胎土目が残り、高台内には明瞭に兜巾が残る。655は備前壺である。

上記の区画施設内は豊臣期1に比して遺構の密度が高い。特に調査区北部に顕著であった。以下に北西部、北東部に分けて記述する。

・調査区北東部

調査区北東部では多くのピットを検出した。ピットを多く検出した部分は下層に2310堀状遺構が位置しているため、0.2m程度窪んでいる部分である。調査区東西断面を境にして、北側にピットが集中している傾向が認められる。ピットは直径0.3m前後を測り、深さは深いものでは0.5mを測る。柱痕跡が残るものもみられた。2544ピットなどは根石を伴っており、建物、櫓を構成するものであろう。

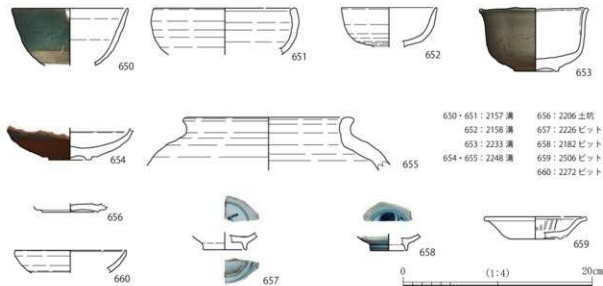


図78 溝、土坑、ピット 出土遺物

各ピットからは遺物の出土は少ないが、2226ピットからは図78-657の青花碗が出土している。

2206土坑は柵列9の西側に位置する土坑である。約1.5mの隅丸方形を呈する0.1m前後の浅い土坑である。土坑内からは多くの瓦片が出土している。瓦は小さく割れているものが多い。図78-656の瀬戸美濃折縁皿が出土した。

出土遺物（図78）

656は2206土坑から出土した瀬戸美濃折縁皿で、内面にソギを有するものである。見込みは軸剥ぎである。657は2226ピットから出土した青花碗である。見込みは饅頭心で、見込みと体部の境が圏線状に窪む。658は2182ピットから出土した青花碗である。見込みは饅頭心。659は2506ピットから出土した瀬戸美濃折縁皿である。内面にソギがはいるものである。660は2272ピットから出土した肥前陶器皿である。

・調査区北西部（図版9-5）

北西部では柱穴を複数基検出した。柱穴は直線的に並ぶものがみられ、建物や柵を構成するものと考えられる。東西方向に延びる2267溝を区画溝とした屋敷地が想定できる。なお、Y=-44.145より西側では機械掘削終了面で、既に基盤層が露出しており、徳川前期以降の大型土坑が密集して掘削されるなど、遺構面の遺存状況は極めて不良であった。調査区南北断面付近では第6～8層が遺存していたものの、各層は薄く、層境は不明瞭であったため、検出した遺構の帰属面の確定は困難である。ピットの一部は第6層を除去した段階で検出したものもあり、ピットから出土した遺物が2100溝出土遺物と接合するなど、豊臣期1に帰属するものも含まれる可能性もあるが、ここでまとめて報告することとする。

2267溝（図79、図版12-6）

東西方向に延びる溝である。第7層を除去して検出した。溝は調査区の東西断面を挟んで東側は近代の攪乱が位置しており不明で、西側は徳川期の土坑などによって攪乱されて不明である。約11mを確認した。幅0.8～0.9m、深さ0.25mを測る。溝底部の高さは比高約0.15mをもって、西側が低い。溝の埋土は下層が黄灰色の粘質土で、上層は砂質土である。溝からは軒瓦を含む瓦片の他、白磁、青花、瀬戸美濃、肥前陶器、土師質土器、砥石片などが出土した（図81-661～668・図82-687・688）。

柵列10・11（図79）

柵列10は2267溝の南側に平行して東西方向に延びる。2270～2272ピットで構成される柵列である。西側は徳川期の土坑が位置しており検出できない。調査区東西断面より東側は攪乱により一段下がっており更に東に延びるかは不明である。これらのピットは第6層を除去して検出しており、豊臣期1に帰属する可能性も考えられる。ピットは直径0.3m前後の円形を呈し、深さ0.6m前後を測る。柱間は約2mを測る。

柵列10に直交して柵列11がある。2260・2274・2275・2276ピットで構成される南北方向に延びる柵列である。ピットは直径0.3m前後の円形を呈し、深さは0.5m前後を測る。2274ピットは深さ0.25mと浅い。柱間は柵列10とほぼ同じで1.8～2mを測り、直交することから、同時期のものと推測できる。

柵列12（新・古）・13（図79、図版9-6～8）

柵列12は2267溝の北側に平行して東西方向に延びるものである。ほぼ同じ位置にもう一列復元でき、新旧がある。2397・2398ピットの切り合いから2315・2316・2318・2398ピットで構成する柵列が新しく、2321・2397・2319・2317・2408ピットで構成される柵列が古い。柵列が位置する部分は近代に攪乱されており、その攪乱底部、あるいは2047土坑、2355土坑、2266土坑、2307土

坑の底部で検出した。そのため、検出レベルが低く、ピットの遺存状況は悪い。ピットはいずれも直径0.3m前後の円形を呈する。2397ピットでは根石が確認できた。このピットからは骨角製品が出土した。図版19-911はボタン状の薄い円形を呈する骨製品で、双六の駒である。ピットからの遺物の出土は少ないが、2398ピットから出土した志野菊皿は2100溝出土のものと同接した(図63-540)。

柵列13は柵列12の北側3.8mに平行して東西方向に延びるものである。2311～2314ピットで構成される。ピットは直径0.3～0.4mの円形を呈する。この範囲は3層以下が遺存しておらず、上部の削平が著しかったと考えられ、ピットの深さは浅く0.15～0.4mを測る。2312ピット以外は根石を有している点が特徴的である。柵列12・13は柵列10・11に比して柱間が狭く、1.5～1.6mを測る。柵列12・13は柱間がとおることから、建物を構成する可能性も考えられる。その場合対応するのは柵列12(古)であり、2273・2294ピットも一連の建物を構成すると考えられる。ピットからは瓦片は出土するものの、時期を示す遺物はない。2313ピットからは鉄製品が出土した。破損し、錆が著しいが刀子と考えられる。

その他のピット(図80)

その他、柵列を構成するピットに比して規模の大きいピットを2基検出した。2401・2305ピットである。直径約0.5mの円形を呈し、深さは0.8～0.9mを測る。埋土は細砂～粗砂、細礫を主体とするブロック土で締りは悪い。周辺には同様のピットはなく、性格は不明である。2305ピットからは少量の瓦片が出土した。

2250・2160・2161・2266・2307土坑(図79・80、図版9-3・12-5)

北西部では土坑も多く検出した。2250土坑は直径約0.5mの円形を呈し、深さ0.3mを測る。埋土上層は黄褐色の砂質土で炭を含み、下層はブロック土である。2160土坑は直径約0.6mの円形を呈し、深さは0.25mを測る。埋土には炭を含む。2161土坑は直径約0.8mの円形を呈し、深さは0.6mを測る。埋土上層は明黄褐色の細礫を含む砂質土で、下層はブロック土である。切り合い関係から、いずれも2197溝より新しい。2266土坑は直径約1.1mの円形を呈し、深さは0.6mを測る。2307土坑は直径1.5×2.1mの楕円形を呈し、深0.3mを測る。2266土坑、2307土坑はいずれも、先の柵列13より新しく、2315・2408ピット、2318・2139ピットは土坑の底部でそれぞれ検出している。土坑から出土した遺物は図81-671～680・685に示した。

2197溝(図80)

2160・2161土坑に先行する溝である。幅1.5m前後、深さ約0.2mを測る。第7層上面の2109土坑はこの溝の上部の窪みの可能性が高い。

2306土坑・2355土坑

2267溝の北側で検出した不定形の大型土坑である。この部分は第4面の平面図でも明らかのように、近代までの攪乱が著しく、また、徳川期の大型土坑も分布していることから、遺存状況は悪く、平面形は不明瞭である。切り合い関係より2267溝よりは新しい。2306土坑からは軒瓦、飾り瓦を含む瓦類が多く出土した他、青花、肥前陶器、土師質土器皿などが出土している(図81-681～684)。2355土坑からは飾り瓦、軒平瓦、青花、瓦質円板などが出土した(図81-686、図82-692・693)。

出土遺物(図81・82)

661～668は2267溝から出土した。661は白磁碗である。高台豊付は削り突る。662～664は肥前陶器。664は碗。胎土は橙色を呈する。灰釉で、見込み中央が丸く窪み釉薬が溜まる。高台豊付には糸切り痕

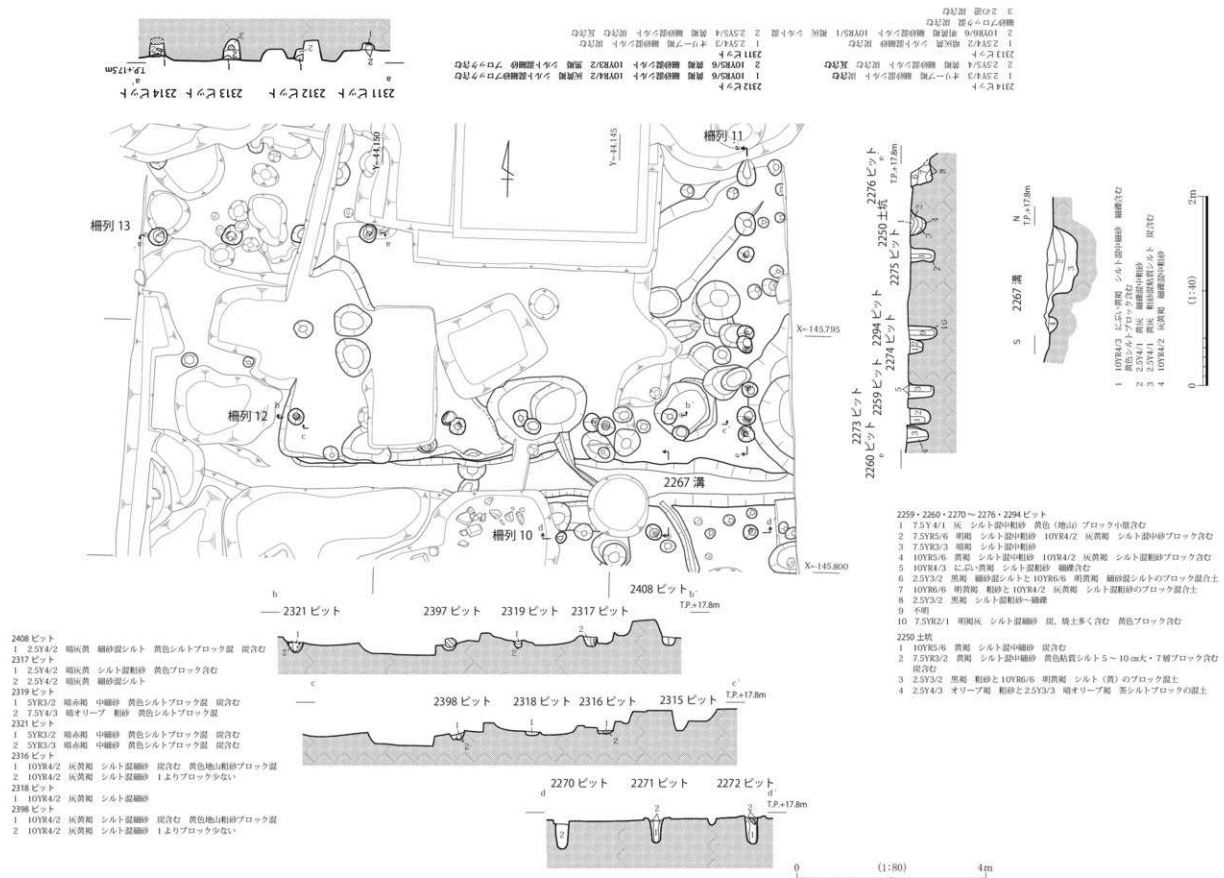
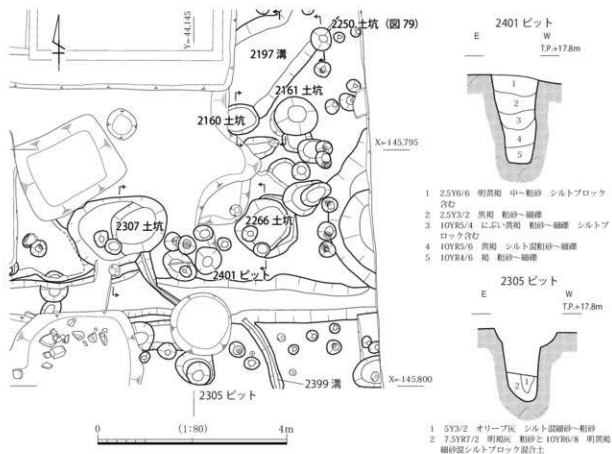
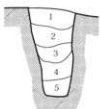


図 79 北西部遺構 平・断面図(柵列 10～13 他)

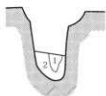


2401 ビット
E W
T.P.+17.8m



- 1 2.5Y6/6 明黄褐色 中～粗砂 シルトブロック含む
- 2 2.5Y3/2 黒褐色 粗砂～細礫
- 3 10YR5/4 に近い黄褐色 粗砂～細礫 シルトブロック含む
- 4 10YR5/6 黄褐色 シルト混粗砂～細礫
- 5 10YR4/6 褐色 粗砂～細礫

2305 ビット
E W
T.P.+17.8m



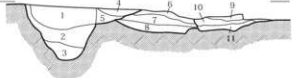
- 1 5Y3/2 オリーブ灰 シルト混細砂～粗砂
- 2 7.5YR7/2 明褐色 粗砂と 10YR6/8 明黄褐色 細砂混シルトブロック混粘土

2160 土坑
N S
T.P.+17.8m



- 1 10YR5/4 に近い黄褐色 細礫混中砂 シルトブロック含む 炭含む
- 2 10YR5/6 黄褐色 細礫混中砂 シルトブロック含む 炭含む
- 3 10YR6/6 明黄褐色 シルト混粗砂 細礫含む シルトブロック含む 炭層状に含む 土層含む 炭土ブロック含む

2161 土坑
S N
T.P.+17.8m



- 1 10YR6/6 明黄褐色 細礫混中粗砂 地山シルトブロック含む
- 2 2.5Y3/2 黒褐色 粗砂と 10YR6/6 明黄褐色 シルトブロック混粘土
- 3 2.5Y4/5 オリーブ褐色 粗砂と 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルトブロック混粘土
- 4 10YR6/6 明黄褐色 粗砂～細礫混中砂 ブロック混
- 5 10YR6/6 明黄褐色 1と非常に近い 炭土含む (1～5: 2161 土坑)
- 6 10YR4/2 灰黄褐色 細礫～粗砂混中細砂 黄色ブロック含む
- 7 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粗砂混シルト 細礫含む
- 8 10YR6/6 明黄褐色 粗砂混細砂 黄色ブロック含む
- 9 2.5Y4/3 オリーブ褐色 細礫混中細砂
- 10 10YR6/8 明黄褐色 細礫混シルト
- 11 10YR3/2 黒褐色 細砂～細礫混粘質シルト (6～8: 2197 溝)

2266 土坑
S N
T.P.+17.8m



- 1 2.5Y6/6 明黄褐色 シルト混中粗砂 炭含む 茶ブロック含む ブロック混粘土 (1: 2266 土坑)
- 2 2.5Y6/6 明黄褐色 細砂混シルト
- 3 2.5Y5/4 黄褐色 中粗砂 細礫含む 黄色 (地山) ブロック含む (2・3: 2315 ビット)

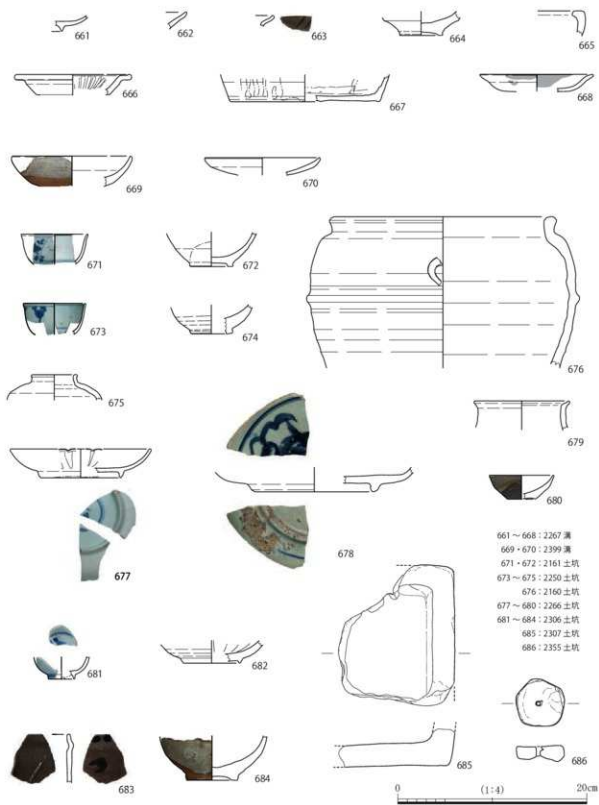
0 (1:40) 2m

2307 土坑
N S
T.P.+17.8m



- 1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混中粗砂 細礫多く含む 炭含む 黄色シルト (地山) ブロック多く含む
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混粘質シルト

図 80 2305・2401 ビット、2160・2161・2266・2307 土坑 平・断面図



661~668: 2267 漢
 669~670: 2399 漢
 671~672: 2161 土坑
 673~675: 2250 土坑
 676: 2160 土坑
 677~680: 2266 土坑
 681~684: 2306 土坑
 685: 2307 土坑
 686: 2355 土坑

图81 西北部遺構 出土遺物

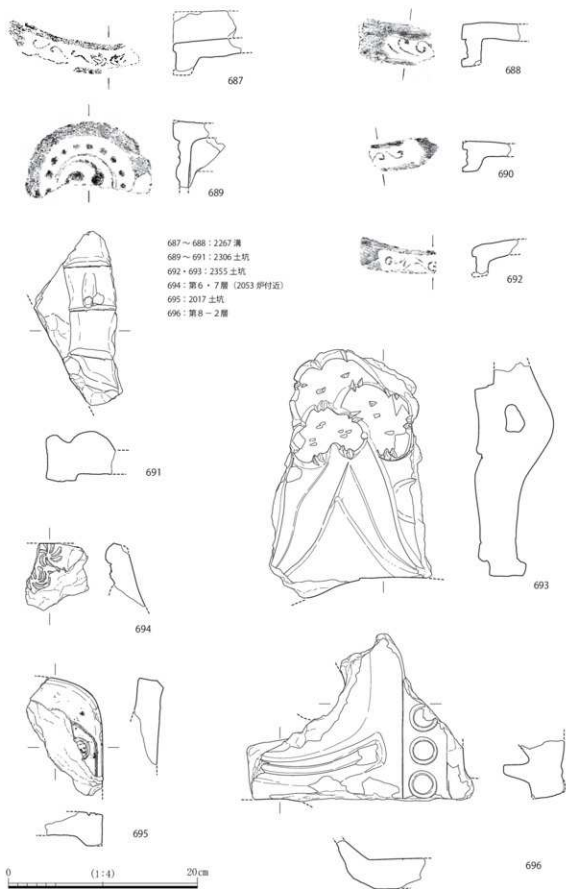


图82 西北部遺構他 出土瓦

が残る。663は内面に鉄絵を施し、口縁端部も鉄軸がみられる。665は土師質土器火鉢である。666は瀬戸美濃。内面にソギがみられる折縁皿である。軸は被熱により発泡している。667は丹波甕。668は土師質土器皿である。口縁部に煤の付着がみられ、灯明皿として使用されたものであろう。

669・670は2399溝から出土した。669は肥前陶器皿。670は土師質土器皿である。

671～680は土坑から出土した遺物である。671・672は2161土坑から出土した。671は青花小杯である。672は肥前陶器丸碗である。灰釉、高台は低く、兜巾の突出はみられない。673～675は2250土坑から出土した。673は青花小杯である。674は肥前陶器丸碗である。胎土は褐色を呈し、比較的緻密である。内面には鉄軸を施す。675は瀬戸美濃茶入れである。676は2160土坑から出土した備前裏である。リング状の耳を有する。677～680は2266土坑から出土した。677・678は青花皿である。677は輪花口縁で、高台内に圈線を巡らせ銘款がみられる。大明か。678は畳付の砂の付着が著しい。体部外面下半にも砂が付着している。漳州窯産。679は不明陶器。680は肥前陶器小杯。681～684は2306土坑から出土した。土坑からは他に瓦類が出土している。681は青花小杯、682は志野菊皿である。683・684は肥前陶器である。683は向付で内外面鉄軸、外面には鉄絵がみられる。684は灰釉の丸碗である。高台は低く、兜巾はあまり明瞭ではない。685は2307土坑から出土した。瓦質で方形の容器である。四隅に脚は欠損している。686は2355土坑から出土した瓦質円板である。

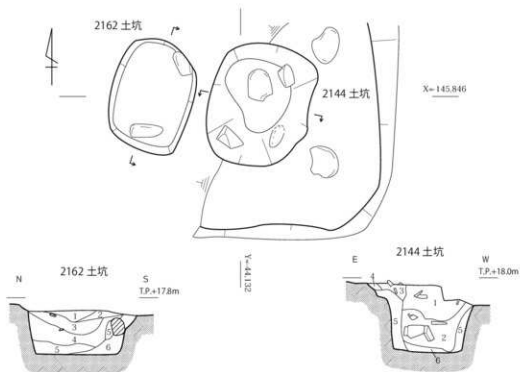
2267溝、2047土坑、2355土坑からは軒瓦や鬼瓦などの飾り瓦も出土している。図82に示した。

687・688は2267溝から出土した。687は均整唐草文軒丸瓦で、中心飾りは葉脈のある二葉である。葉の先端は3つにそれぞれ分かれている。唐草は三転する。688は中心飾りが不明で、三転する唐草が遺存するが、外側の唐草は文様の途中で切れている。切断された范が使用されたものと考えられる。

689～691は2306土坑から出土した。689は三巴文軒丸瓦である。丸く大きい巴頭から長い尾が伸び、他の巴の尾に接し圈線状を呈するものである。瓦当中央にはコンパス芯と考えられる突起がある。瓦当面には離れ砂が付着する。690は軒平瓦である。中心飾りは不明で、二転する唐草が遺存する。691は飾り瓦で竹を表している。節の表現も丁寧になされる。竹に斜交して端面を有する。おそらくは類似した飾り瓦と組み合わせて使用するものと考えられる。被熱により赤変している。竹を表した類似する飾り瓦は図1-5 A 調査区でも出土している。692・693は2355土坑から出土した。692は均整唐草文軒平瓦である。中心飾りは不明瞭であるが、宝珠か。693は鬼瓦である。下部には列り込がみられる。文様は笹状の葉を下に向け、花が三輪重なって表される。花は三弁に表現され、刺突による文様が施されている。葉の形状より笹竜胆文か。裏面には縦方向の把手を有する。

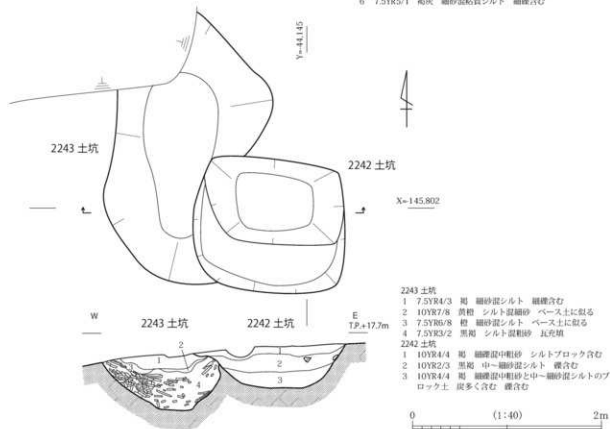
その他、調査区からは鬼瓦が出土している。出土層位は異なるが、ここでまとめて記すこととする。694・695は漆、金箔がみられる鬼瓦である。694は2053榎付近の第6・7層より出土した。赤漆がわずかに残る。695は2017土坑より出土している。赤漆と金箔がわずかに残る。周囲に溝を掘り、竹管による連珠を描く。696は東西土手付近第8-2層相当層から出土しており、豊臣期3に帰属する。宝珠文の鬼瓦である。宝珠は欠損しているが、周囲には竹管による連珠が並ぶ。下端中央には列り込みがみられる。

2306土坑、2355土坑は近接しており、いずれも平面形の不明瞭な落込み状を呈している。2267溝や2268井戸出土瓦も含めて、調査区北西部では軒瓦の他、鬼瓦や飾り瓦が出土している点で注目できる。周辺の屋敷地で使用されたものの可能性が高い。



- 1 10YR3/2 黒期 シルト混中粗砂 地山黄色ブロック含む
 2 2.5Y6/3 に近い黄 中粗砂 青灰シルトブロック含む 7期に似る
 3 10YR4/4 黒 シルト混中粗砂 黄色粗砂ブロック混 炭含む
 4 10YR4/2 灰黄期 細砂混シルト 炭含む 瓦含む
 5 10YR7/6 明黄期 粗砂 灰色シルトブロック含む
 6 10YR7/2 に近い黄橙 中粗砂

- 1 10YR4/4 黒 シルト混中粗砂 白色粗砂ブロック状に含む
 黄色シルト混細砂ブロック5cm多く含む 瓦含む
 2 10YR4/2 灰黄期 シルト混中粗砂
 黄色シルトブロックが1より少ない 瓦含む
 3 10YR4/3 に近い黄期 シルト混中粗砂 瓦含む
 4 10YR5/6 黄期 細砂混粘質シルト 炭含む
 5 10YR7/3 に近い黄橙 粗砂〜細砂
 7.5YR4/1 期灰 細砂混シルトブロック含む
 6 7.5YR5/1 期灰 細砂混粘質シルト 細砂含む



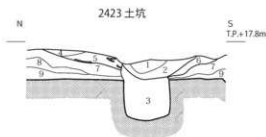
- 2243 土坑
 1 7.5YR4/3 黒 細砂混シルト 細砂含む
 2 10YR7/8 黄橙 シルト混細砂 ベース土に似る
 3 7.5YR6/8 橙 細砂混シルト ベース土に似る
 4 7.5YR3/2 黒期 シルト混粗砂 瓦片埋

- 2242 土坑
 1 10YR4/4 黒 細砂混中粗砂 シルトブロック含む
 2 10YR2/3 黒期 中〜細砂混シルト 炭含む
 3 10YR4/4 黒 細砂混中粗砂と中〜細砂混シルトのブロック土 炭多く含む 炭含む

図83 2162・2144・2242・2243土坑 平・断面図

2144・2162土坑 (図83、図版12-1・2)

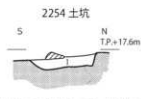
谷肩部付近で土坑を検出した。2144・2162土坑はほぼ同規模の南北に長い隅丸方形の土坑で、2基ならんで検出した。2144土坑は1.3×1.1mの方形を呈し、深さは0.7mを測る。2144土坑の埋土5は褐色の粗砂～細礫で、他の埋土とは大きく異なっており、一連の埋戻しとは考えにくい。再度内側が掘削され、埋められたものと考えられる。2162土坑は1.1×0.9mの方形を呈し、深さは0.45mを測る。いずれも土坑内からは人頭大の礫が出土している。礫は土坑の底部や側面に張り付くように出土している。2144土坑の周囲には同様の礫が点在していた。礫は平たな面を有するもので、礎石であった可能性が高い。土坑内に廃棄されたものであろう。なお、2144土坑からは遺存状況の良い軒瓦が出土している。



- 1 10YR5/6 黄褐 シルト混中細砂 黄色シルトブロック含む 礫含む (2248 測)
- 2 10YR4/4 褐 シルト混細砂 礫含む (2248 測)
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混粘質シルト 粗砂混粘質シルトブロック含む 遺物含む (2423 土坑)
- 4 10YR6/6 明黄褐 粗砂～細礫 第8-1層
- 5 10YR5/4 に近い黄褐 シルト混中細砂 5B5/1 青灰 細砂混シルトブロック含む 瓦多く含む 第8-1層
- 6 10YR3/3 暗褐 シルト混細砂 黄色シルトブロック含む 第8-1層
- 7 10YR3/2 黒褐 シルト混細砂 灰含む 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混シルトブロック含む 第8-2層
- 8 10YR3/2 黒褐 シルト混細砂 黄色シルトブロック、暗灰黄色ブロック大含む 第8-2層
- 9 10YR3/2 黒褐 シルト混細砂 黄色シルトブロック含む 灰含む 第8-2層



- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐 中細砂と灰色・黄色シルトブロック混合土
- 2 10YR6/8 明黄褐 中細砂混粘質シルトブロック状



- 1 10YR6/8 明黄褐 中細砂混粘質シルト 茶褐色細砂ブロック混



図84 2423・2249・2254土坑 断面図

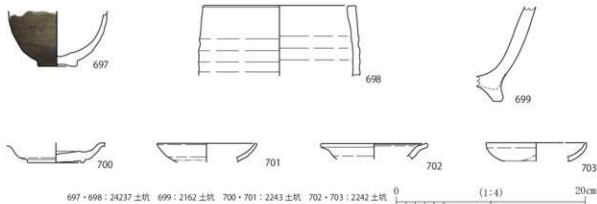


図85 土坑 出土遺物

2242・2243土坑 (図83、図版12-3・4)

谷肩部付近で検出した。2242土坑は1.4×1.6mの東西に長い隅丸方形を呈する土坑である。深さ約0.5mを測る。2243土坑は3×1.3mの南北に長い不定形な土坑である。深さは0.5mを測る。切り合い関係から2242土坑が新しい。2243土坑内は多くの瓦が充填された状況であった(図版12-3)。瓦を多く含む層の上部には地山土に似た橙色～黄橙色土が薄く堆積しており、上層が落ち込んだ状況が想定される。

2423・2249・2254土坑 (図84)

2423土坑は2248溝底部で検出した土坑である。1×2.3mの隅丸方形を呈し、深さは0.6mを測る。埋土は暗灰黄色の粘質土である。土坑内からは肥前陶器、備前が出土した。2243土坑の周辺では2249・2254土坑を検出した。土坑は南北1m前後、東西0.8m前後の隅丸方形を呈し、深さは約0.1～0.2mと浅い。

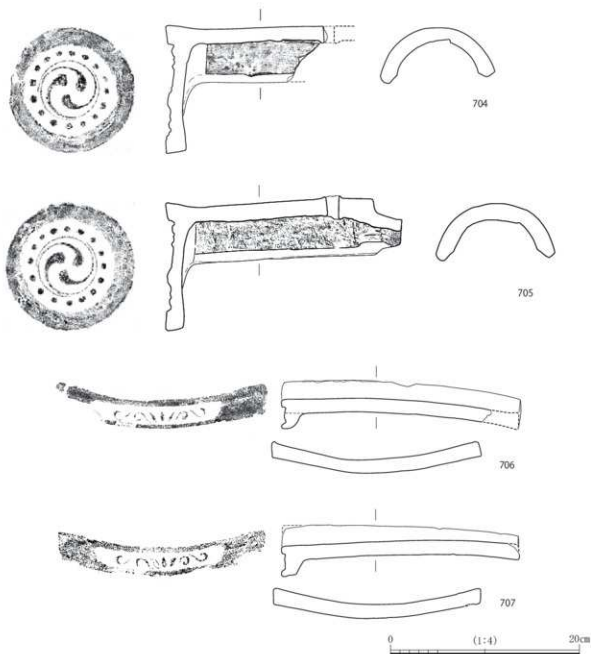


図86 2144土坑 出土瓦

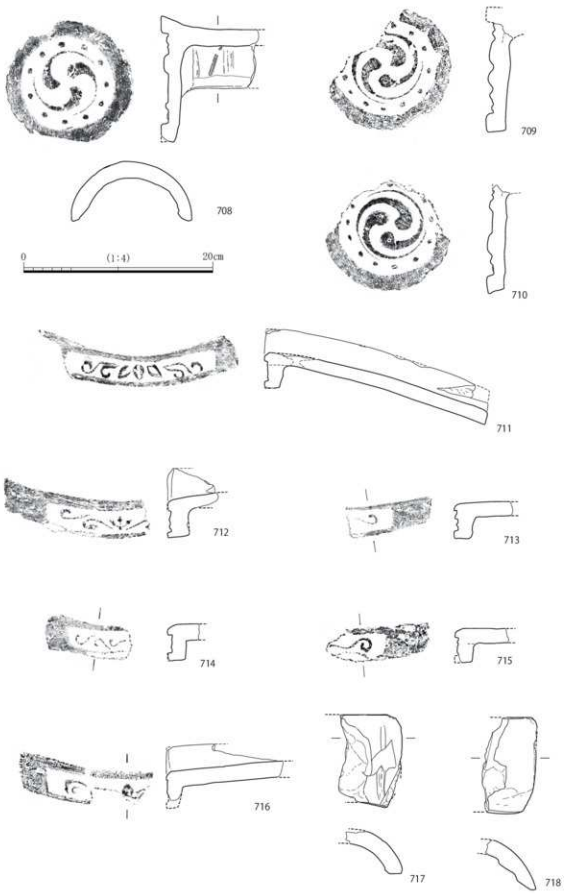


图87 2243土坑 出土瓦

2基の土坑は2248・2159溝にそれぞれ位置しており、溝に直交して並んでいる。性格は不明であるが、堤と関連するものであろう。土坑からは遺物の出土はみられない。

土坑出土遺物 (図85～87)

上記の土坑からは瓦類の出土は多いものの、陶磁器類の出土は極めて少ない。細片ではあるが出土遺物を図85に図示した。697・698は2423土坑から出土した。697は肥前陶器丸碗である。698は備前水差しである。699は2162土坑から出土した土師質土器火鉢である。体部外面にはハケメが残る。700・701は2243土坑から出土した。700は瀬戸美濃折縁皿である。見込みは釉刺ぎである。高台内に輪ドチの一部が付着する。701は瀬戸美濃丸皿である。体部下半は露胎である。702・703は2242土坑から出土した。702は瀬戸美濃折縁皿である。703は肥前陶器皿である。

2144土坑からは遺存状況の良い軒瓦の他、丸瓦、平瓦が出土した。平瓦は厚さが1cm程度の薄いものがあり、二次焼成を受けて橙色に変色しているものや焼けてちぎれたようになっているもの、ひずんでいるものが含まれる。704・705は三巴文軒丸瓦である。同范の可能性が高い。丸い巴頭から長い尾が伸びる。尾は他の巴に接し圏線状を呈する。珠文は16個を配する。コンパス芯と考えられる突起を有する。瓦当面には離れ砂の付着が認められる。705は完形に復元でき、丸瓦部は玉縁で全長25cmを測る。瓦当から約12cmのところ釘孔を有する。コピキはいずれもB類である。706・707は均整唐草文軒平瓦である。同范の可能性が高い。ほぼ完形である。全長25.1cm、幅22cmを測る。中心飾りは三葉で唐草が二転する。内区の幅は狭く、それに比して側縁は広い。平瓦部は凹凸面ともに側縁、端面側の面取りはみられない。

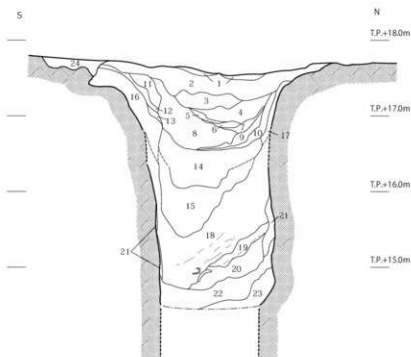
2243土坑からは多数の瓦が出土した。先述のように瓦が充填された状況であった。出土した瓦の重量は平瓦が149kg、丸瓦が48.6kgである。平瓦が丸瓦に比して圧倒的に多く、重量にして約3倍となる。

丸瓦はコピキA、コピキBのいずれのものもある。明らかに二次焼成を受け、変色しているような個体は少ない。軒瓦、面戸瓦も出土している。

708～710は三巴文軒丸瓦である。708は右巻きの巴文である。先端のやや尖った巴頭を有し、巴胴との境は不明瞭である。尾は他の巴とは接しない。珠文は疎で11個を数える。丸瓦部はコピキBである。709・710は同范の可能性が高い。左巻きの巴文で、大きく高さのある巴頭から長い尾が伸びる。瓦当中心にコンパス芯と考えられる突起がある。范の傷みが進んでいるようで、瓦当に木目が転写される。709は胎土に1cmを超える礫が混じっており、瓦当面に礫が露出している。

711～716は均整唐草文軒平瓦である。711は全体が復元できる個体である。全長23.5cmを測り、平瓦部は厚さ約1.5cmと薄い。中心飾りが周囲を縁どった三葉で、葉は下向きに開く。唐草は根元で接して二転する。平瓦部には瓦当から3cm程度離れた中央に穿孔がみられた。孔は焼成後に両側から穿ち、そのため、孔の周囲は剥離している。孔の性格は不明である。凹面の狭端面側にはわずかに面取りがみられる。712は中心飾りが点珠に三葉で、葉の先端は膨らむ。磨滅のため不明瞭ではあるが、左右の葉は小さく分かれてY字状を呈するようである。左右の唐草は二転する。側縁の幅は広い。713～716は中心飾りが不明である。713は712と類似した唐草である。714は細い唐草が三転するものと推定できる。

717・718は面戸瓦である。丸瓦の生地を裁断したものと考えられる。切断した凹面側を面取りし、隅を斜めにカットしている。717は凹面にはコピキBの痕跡が残る。718は凹面に布目が残る。



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混中粗砂 炭、粘土含む
- 2 10YR5/6 黄褐 細砂混シルトと 10YR4/2 灰黄期 シルト混細砂のブロック混合土、細砂含む 炭含む
- 3 10YR5/6 黄褐 細砂混シルトブロック 2の灰黄褐色土わずかに含む 細砂含まない
- 4 10YR5/6 黄褐 細砂混シルトと 10YR4/2 灰黄期 シルト混細砂のブロック混合土
- 5 10YR5/6 黄褐 細砂混シルトに 10YR7/4 に近い黄褐色 粗砂ブロック含む 細砂含む
- 6 2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂混粘質シルト 粗砂、細砂含む
- 7 10YR5/6 黄褐 細砂混シルトと 2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂混粘質シルト混じる 細砂含む
- 8 10YR5/6 黄褐 細砂混シルトに 10YR7/4 に近い黄褐色 粗砂ブロック 10YR4/2 灰黄期 シルト混細砂ブロック含むブロック混合土
- 9 10YR5/6 黄褐 細砂混シルト わずかに 10YR4/2 灰黄期 シルト混細砂ブロック
- 10 10YR4/2 灰黄期 シルト混細砂 細砂含む 黄色シルトブロック小わずかに含む 炭含む
- 11 10YR5/8 黄褐 細砂混シルト 細砂含む 炭含む
- 12 10YR6/2 灰黄期 粗砂・細砂
- 13 14に似たブロック土
- 14 10YR6/8 明黄期 細砂混粘質シルトと 10YR3/2 黒期 シルト混細砂の 10 cm前後のブロック混合土
- 15 10YR4/2 灰黄期 細砂混中細砂 10YR6/8 明黄期 シルト混中細砂地山ブロック含む
- 16 10YR3/3 暗褐 中細砂 黄色シルトブロック多く含む 炭含む
- 17 10YR5/6 黄褐 細砂混シルト 細砂多く含む 10YR4/2 灰黄期 シルト混細砂わずかに含む
- 18 10YR6/6 明黄期 中細砂混粘質シルト 遺物、細砂含む 10YR5/1 褐灰 中粗砂・粗砂をスズ状に含む
- 19 10YR4/3 に近い黄褐色 中細砂混シルト 地山黄色シルト混粗砂を下部にスズ状に含む
- 20 10YR4/2 灰黄期 シルト混中細砂 炭含む 瓦含む
- 21 10YR7/6 明黄期 中粗砂 地山崩落土 炭片含む
- 22 10YR4/2 灰黄期 中細砂混シルト 10YR7/6 明黄期 細砂混シルトブロック 15 cm大含む 炭含む
- 23 10YR7/6 褐・10YR6/8 明黄期 細砂混粘質シルト 10YR4/2 灰黄期 中細砂混シルトブロック含む
- 24 7.5YR 4/3 褐 細砂混中粗砂 特に粗砂下部に多い 炭含む 黄色ブロック小含む

図88 2308井戸 断面図

2308井戸 (図88、図版12-7)

調査区中央で検出した井戸である。断面漏斗状を呈し、上面では直径約3mの円形を呈し、一段下がったところで直径約2mの円形を呈する。井戸側は遺存しないが、埋土の状況から、井戸側があったものと想定できる。土層18までは地山を主体として灰黄褐色土ブロックを多く含むブロック混合土で埋め戻されており、それ以下は灰黄褐色土を主体とする。井戸は深さ3.7m以上を測る。TP.13.8m付近まで掘削したが、井戸の底は確認できなかった。井戸からの遺物の出土は概して少なく、図化した遺物を図89に示した。土師質土器皿724・725はT.P.15.9m付近で2枚重なった状態で出土したものである(図版12-8)。軒瓦を含め瓦も出土している。

出土遺物 (図89)

719～721は青花である。719は口縁部内面が釉刺ぎで、蓋を有する鉢と考えられる。720・721は同一個体の可能性が高い。胎土が褐色を呈する漳州窯産の皿である。底部外面は無釉で放射状のケズリ

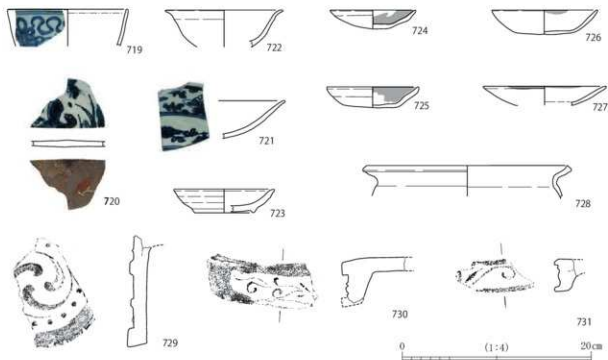


図89 2308井戸 出土遺物

痕が明瞭が残る。722は白磁碗である。朝鮮王朝産と考えられる。723は瀬戸美濃丸皿である。724～727は土師質土器皿である。煤の付着が著しく、灯明皿として用いられたものであろう。728は土師質土器羽釜で大和型である。その他、下層の混入遺物と考えられる瓦器、須恵器の細片などが出土した。

井戸からは瓦類も出土した。丸瓦は確認できたものはコピキBである。完形の丸瓦も出土している。729～731は軒瓦である。729は三巴文軒丸瓦である。730・731は均整唐草文軒平瓦である。730は中心飾りは不明で、唐草が蔓状に伸びるものである。731は中心飾りが三葉である。

その他、金属器も出土した。図版21-928は小刀柄である。先端は丸みを帯びるものである。遺存状況は不良で表面の装飾などは不明である。

豊臣期2は第8-1層が遺存する範囲で検出した各溝からわずかではあるが、豊臣後期の遺物が出土している。また、調査区北西部で検出した屋敷地はその大半で基盤層が露出しており、遺構の帰属面の判断は困難であったが、2267溝やビット・土坑の出土遺物から豊臣後期に比定できる。櫓列については時期を確定する遺物は少ないものの、当該面を豊臣後期の遺構面と考えると大きな矛盾はないものと考えられる。

(3) 豊臣期3の遺構と遺物(第8-2層上面・基盤層上面)(図90、図版14-1)

第8-1層を除去した遺構面である。第8-2層は調査区南端の谷肩部付近では比較的厚く遺存している。この部分はもともと窪んでおり、この窪みを埋めて、平坦にしたものと考えられる。この整地層の上面で谷の肩部に平行する柵列などの遺構を検出した。また、調査区東端では、上面と同様の平行する南北方向の柵列を検出している。これらの柵列で区画された西側では、堀の可能性が考えられる遺構や、土坑を検出した。第8-2層は部分的な窪みを埋めるものであり、大部分では基盤層が露出する。このような状況から、現地調査では基盤層上面と合わせて写真撮影等を行っている。なお、図90で薄く示している遺構は基盤層上面で検出した遺構の内、豊臣期2で触れた遺構である。

柵列14・15・16(図91、図版14-2)

調査区東端では南北方向の柵列を3列検出した。

柵列14は調査区東端で検出した南北方向の柵列である。2337～2340・2350～2352・2369ピットで構成される柵列である。総延長17.3mを測る。柱間の距離は2～2.1mを測る。ピットは直径0.2～0.3mと小さく、深さも0.2～0.3mと浅い。埋土はいずれも茶褐色系を呈している。上層で検出した付近の柵列とはピットの規模や埋土の様子を異にしている。ピットからの遺物の出土はなかった。

柵列15は柵列14の西側で検出した南北方向の柵列である。柵列15は2333ピット～2336ピットで構成される。総延長5.4m、柱間は約1.8mを測る。いずれもピットの規模は小さく、平面形は2336ピットが円形に近いが、他は一辺0.3m前後の隅丸方形を呈し、深さは0.2～0.4mと浅い。掘方の壁は比較的垂直である。柱痕跡はみられない。埋土は黄色系を呈するものである。ピットからの遺物の出土はなかった。

柵列16も柵列14の西側で検出した南北方向の柵列である。柵列15とは軸がわずかにずれること、ピットの規模、形状、埋土の状況が異なることから別の柵列と判断した。2389・2517・2364・2509・2394・2390・2480ピットで構成される。ピットは直径0.3～0.4mを測り、深さも先の2列に比して深い。2389ピットは深さ約0.5m、2394ピットは約1mを測り、南側に位置するピットが深い。ピットからの出土遺物は概して少なく、瓦や土師器片、白磁、須恵器片がわずかにみられる程度である。埋土は地山を主体としたブロック土で柱痕跡は黒褐色土である。柵列16を構成するピットは上面で検出した柵列と規模や埋土の状況などが類似している。しかし、柵列の軸は上面までのものより東に振る点で異なる。先の14・15柵列もやはり軸は東に振っており、3本の柵列はほぼ平行している。

柵列17・柵列18(図92、図版15-1・2)

谷に平行する東西方向の柵列を検出した。Y=-44.140～44.150・X=-145.800～145.810付近は基盤層が窪んでおり、第8-2層で整地している。その結果、第8-2層上面では比較的、平坦になっている。柵列を構成するピットの一部は第8-2層上面で検出していることから、柵列は第8-2層上面の遺構と判断した。西側は第8-2層がなく、第9層の薄層の上面でピットを検出している。

柵列17は谷肩部に平行する東西方向の柵列である。柵列の西側は1区に延び、1191ピット(図91)に繋がる。1191ピットを含め、総延長29.2mを測る。柱間は1.5m前後を測る。2378～2382・2385・2430～2433・2438・2441～2444・2446～2448・2540・2463・2465ピットで構成される。第8-2層が遺存している中央部分では掘方は直径0.7m前後と大きく、深さも0.8m前後と深い。埋土は地山を主体としたブロック混合土の互層となる。西側のピットは直径0.3～0.4mと小さく、深さも0.4～0.5mと浅い。埋土も暗オリーブ褐色を主体とするシルト質土で、中央の深いものと

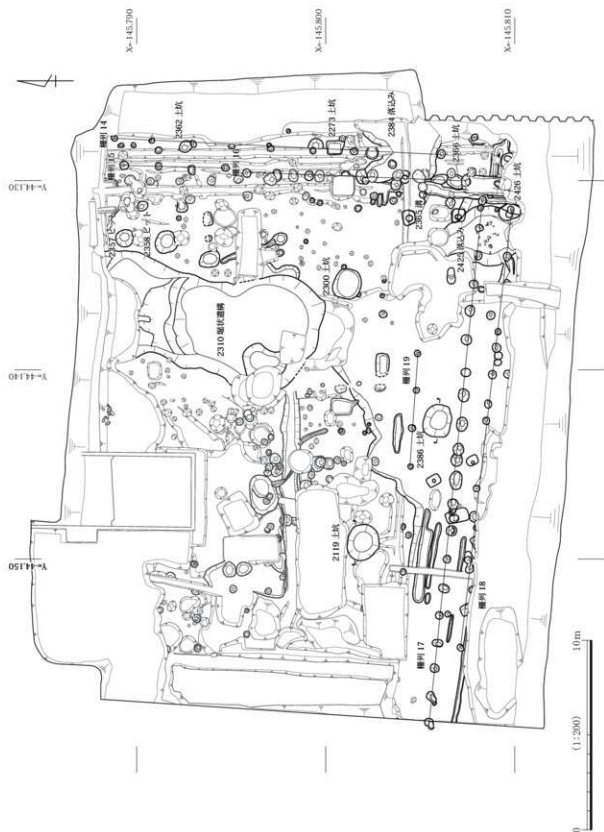
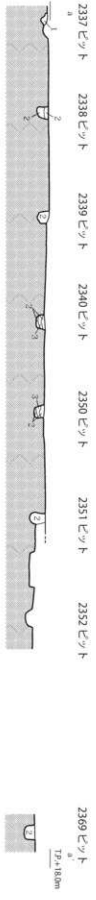
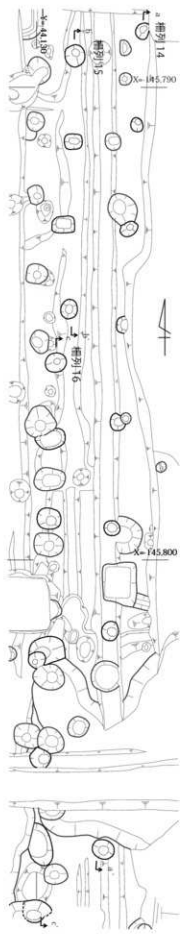
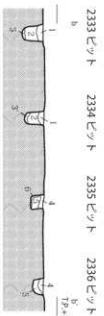


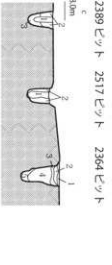
图90 2区 第8—2層上面・基礎層上面 検出遺構



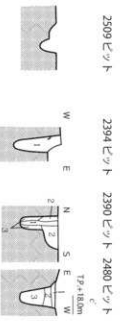
- 2337 ヒット 2338 ヒット 2339 ヒット 2340 ヒット 2350 ヒット 2351 ヒット 2352 ヒット
- 1 10YR6/8 黄褐色 細粒砂シルト 堆土に埋没した痕跡上 黄色テラコッタ管状瓦
 2 2.5Y3/4 黄褐色 細粒砂シルトと10YR5/9 黄褐色 細粒砂シルトのテラコッタ管状瓦
 3 10YR6/8 黄褐色 細粒砂シルト 埋没瓦
- 2 2.5Y3/4 黄褐色 細粒砂シルト
 3 2.5Y3/4 黄褐色 細粒砂シルト
- 2 2.5Y3/4 黄褐色 細粒砂シルト
 3 2.5Y3/4 黄褐色 細粒砂シルト
- 2 2.5Y3/4 黄褐色 細粒砂シルト
 3 2.5Y3/4 黄褐色 細粒砂シルト
- 2 2.5Y3/4 黄褐色 細粒砂シルト
 3 2.5Y3/4 黄褐色 細粒砂シルト



- 2333-2336 ヒット
- 1 2.5Y3/6 黄褐色 細粒砂シルト 埋没あり 2.5Y4/2 黄褐色 細粒砂シルト
 ロマ管状瓦
 2 2.5Y3/1 黄褐色 細粒砂シルト 10YR5/9 黄褐色 細粒砂シルトのテラコッタ管状瓦
 3 10YR6/3 紅色 埋没瓦 埋没
 4 10YR6/3 紅色 埋没砂シルトのテラコッタ管状瓦
 5 2.0Y7/6 黄褐色 粗粒砂シルトと埋没瓦
 6 10YR6/3 紅色 埋没瓦 埋没砂シルトのテラコッタ管状瓦
 7 10YR6/3 紅色 埋没瓦 埋没砂シルトのテラコッタ管状瓦

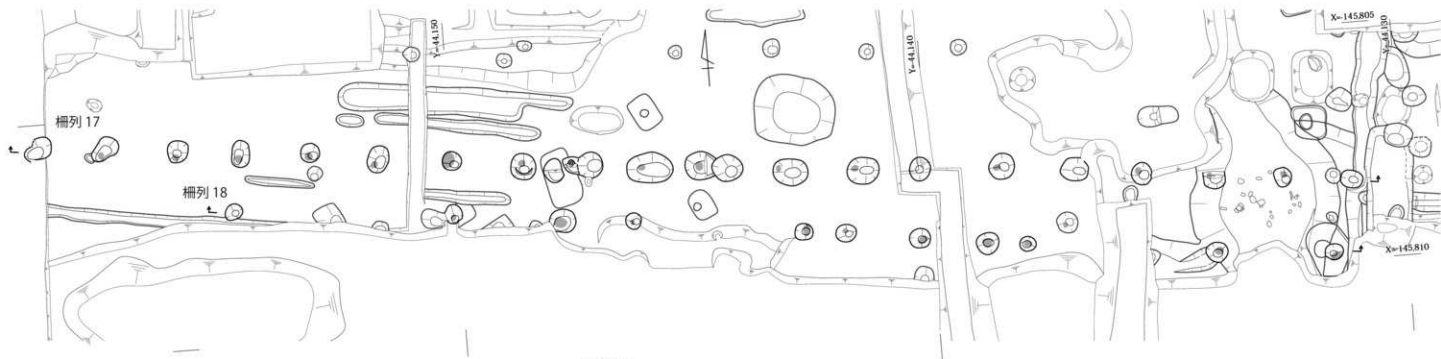


- 2389 ヒット
- 1 7.5YR/2 黄褐色 シルト埋没砂 埋没多量瓦
 2 10YR5/6 黄褐色 細粒砂シルト 白色埋没テラコッタ管状瓦
 3 10YR5/4 紅色 埋没瓦 2.5Y3/4 黄褐色 同土5.9cmテラコッタ
 2392 ヒット
- 1 7.5YR/2 黄褐色 埋没砂シルト 白色埋没テラコッタ管状瓦
 2 2.5Y3/6 黄褐色 埋没砂シルトのテラコッタ管状瓦
 3 2.5Y3/6 黄褐色 埋没砂シルトのテラコッタ管状瓦
- 2394 ヒット
- 1 7.5YR/2 黄褐色 埋没砂シルト 埋没瓦
 2 1.0Y7/6 黄褐色 埋没砂シルトのテラコッタ管状瓦
 3 7.5YR/2 黄褐色 埋没砂シルトのテラコッタ管状瓦
 4 7.5YR/2 黄褐色 埋没砂シルトのテラコッタ管状瓦
 5 7.5YR/2 黄褐色 埋没瓦 埋没瓦 黄色埋没砂シルトのテラコッタ管状瓦



- 2394 ヒット
- 1 7.5YR/2 黄褐色 埋没砂シルト 堆土に埋没した痕跡上
 2390 ヒット
- 1 7.5YR/2 黄褐色 シルト埋没砂 埋没瓦
 2 7.5YR/2 黄褐色 シルト埋没砂 埋没瓦
 3 7.5YR/2 黄褐色 シルト埋没砂 埋没瓦
 2400 ヒット
- 1 10YR6/7 黄褐色 シルト埋没砂 埋没瓦
 2 10YR6/7 黄褐色 中埋没に埋没したテラコッタ管状瓦
 3 10YR6/7 黄褐色 埋没瓦 埋没瓦 10YR6/3 黄褐色 シルト埋没砂のテラコッタ管状瓦

断面図 平・14・15・16 埋没 14



2448 ビット 2447 ビット 2446 ビット 2444 ビット 2443 ビット 2442 ビット 2441 ビット 2385 ビット 2439 ビット 2382 ビット 2380 ビット 2379 ビット 2378 ビット 2540 ビット 2433 ビット 2432 ビット 2431 ビット 2430 ビット 2463 ビット 2465 ビット

2438 ビット
2440 ビット 2381 ビット

T.P.±18.0m



2442 ~ 2444, 2446 ~ 2448 ビット

- 1 2.5Y 4/1 黄灰 細砂混質シルト
- 2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粗砂混シルト
- 3 10YR6/6 明黄褐色 シルト混質砂
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄 粗中砂
- 5 2.5Y4/2 暗灰黄 黄色アロク含まない 炭を含む
- 6 10YR5/1 黒褐色 中細砂 黄色シルトブロック 炭を含む ぼり方と似る
- 7 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト混質砂 黄色シルトブロック含む
- 8 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 中細砂 黄色シルトブロック含むが少な
- 2378 ~ 2382, 2438 ~ 2439 ~ 2440 ~ 2385 ~ 2441 ビット
- 1 10YR3/2 黒褐色 粗砂混シルト 粘り有り
- 1' 粗砂ブロック含む
- 2 10YR6/6 明黄褐色 粗砂とシルトの混合土 茶色シルトブロック小含む

- 3 10YR7/3 に近い黄褐色 粗砂とシルトの混合土
- 4 10YR7/3 に近い黄褐色 粗砂混質シルト 粗砂ブロック含む
- 4' 粗砂混シルトブロック混合土
- 5 2.5Y4/1 黄灰 粗砂混質シルト
- 6 10YR5/6 黄褐色 粗砂混質シルトブロック
- 7 10YR6/3 明黄褐色 粗砂 (地山) と 10YR4/1 暗灰 粗砂混シルトのブロック混合土
- 8 7.5YR5/3 黒褐色 シルト混質砂 粗砂多く含む 炭を含む
- 9 7.5YR6/8 黒褐色 粗砂混質シルト (地山ブロック) に 1 に類似したブロック含む
- 10 7.5YR3/2 黒褐色 粗砂混シルト 地山ブロック混入
- 11 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粗砂混シルトブロックと黄色粗砂ブロック
- 12 10YR5/4 に近い黄褐色 粗砂 地山に似る 黄色シルトブロック含む
- 13 2.5Y3/2 暗灰 粗砂混質シルト
- 14 7.5YR5/6 明黄褐色 粗砂と 7.5YR6/1 暗灰 シルト混質砂のブロック混合土 (8 と似る 地山 混ブロック土)

2540 ビット

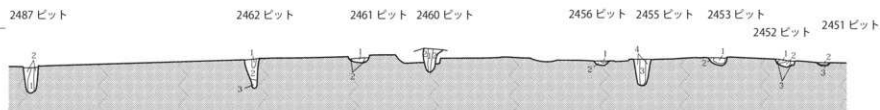
- 1 2.5Y4/1 黄灰 粗砂混質シルト
- 2 10YR6/6 明黄褐色 粗砂混シルトブロック
- 3 10YR7/2 に近い黄褐色 粗砂ブロックと 黄色シルトブロック含む
- 4 7.5YR5/2 灰白 粗砂と茶 黄色ブロック混合土 8 に似る
- 5 7.5YR6/3 に近い暗褐色 粗砂ブロック
- 2431 ~ 2433 ビット
- 1 10YR4/2 灰黄褐色 粗砂混質シルト
- 2 10YR7/2 に近い黄褐色 中細砂 ブロック土 茶色シルトブロック含む
- 3 10YR4/3 に近い黄褐色 シルト混質砂 2の粗砂ブロック含む 炭含む

2430 ビット

- 1 2.5Y6/6 明黄褐色 シルト混質砂ブロック土 粗砂 炭含む
- 2 10YR3/3 暗灰褐色 シルト混質砂 炭含む

2463 ビット

- 3 10YR6/6 明黄褐色 粗砂混シルト 黄色ブロック土 茶色土混じる
- 4 5Y4/3 暗オリーブ 粘質シルト 下層粗砂ブロック含む
- 5 7.5YR3/1 黒褐色 粗砂 黄色シルトブロック小 炭含む
- 6 7.5Y2/1 オリーブ褐色 シルト混質砂 炭含む
- 7 10YR6/3 に近い黄褐色 粗砂 炭含む 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂混シルト ブロック含む
- 2463 ビット
- 1 10YR2/2 黒褐色 粘質シルト混中細砂
- 2 10YR6/3 に近い黄褐色 粗砂 炭含む 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂混シルトブロック含む
- 2465 ビット
- 1 10YR7/2 に近い黄褐色 粗砂と 10YR3/3 暗褐色 粗砂混質シルト



2487 ビット

- 1 10YR3/2 黒褐色 中細砂 黄色シルトブロック含む
- 2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粗砂混シルト 黄色粗砂混シルトブロック含む
- 2453 ~ 2455 ~ 2456 ~ 2485 ビット
- 1 7.5Y2/1 黒褐色 粗砂混質シルト
- 2 2.5Y5/6 黄褐色 粗砂混質シルトに 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂混シルトブロック含む
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂混質シルト 黄色アロク少含む
- 4 10YR6/6 明黄褐色 粗砂混シルトと粗砂のブロック混合土 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂混シルトブロック含む

2460 ビット

- 1 10YR4/1 暗灰 粗砂混質シルト
- 2 10YR6/6 明黄褐色 中細砂 粗砂含む 10YR4/3 に近い黄褐色 粗砂混シルトブロック含む
- 2461 ビット
- 1 7.5Y2/1 黒褐色 粗砂混質シルト
- 2 2.5Y5/6 黄褐色 粗砂混質シルトに 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂混シルトブロック含む

2462 ビット

- 1 10YR4/1 暗灰 粗砂混質シルト
- 2 10YR6/6 明黄褐色 中細砂 粗砂含む 10YR4/3 に近い黄褐色 粗砂混シルトブロック含む
- 2452 ~ 2451 ビット
- 1 5Y5/3 灰オリーブ 粗砂混質シルト

2485 ビット 2486 ビット

- 2 7.5Y2/1 黒褐色 粗砂混質シルト
- 3 2.5Y5/6 黄褐色 粗砂混質シルト 2.5Y3/2 暗灰黄 粗砂混シルトブロック含む
- 2486 ビット
- 1 10YR3/3 黒褐色 中細砂 黄色シルトブロック混 粗砂含む

0 (1:80) 4m

図92 柵列 17・18 平・断面図

は雰囲気異なっていた。おそらくはベース土の違いに起因するものと考えられる。柱痕跡も多くのピットで確認できたが、掘方に対して柱痕跡は直径0.15m前後と非常に小さい。なお、第8-1層上面でもほぼ同じ場所で同様の柱痕跡を確認している。しかしながら、掘り方は第8-1層を除去して検出できるものであった。調査区の南北断面に接する2540ピットの断面を検証したが、やはり掘方は第8-1層までは立ちあがらず、柱痕跡だけが第8-1層に達していた。このことから、柱は抜き取らずに根本を残して切断され、第8-1層上面ではその上に盛土をして堤とした状況を想定した。2463ピットからは青花、三巴文軒丸瓦(図98-773)の他銭貨が出土した。773は三巴文軒丸瓦である。やや尖った巴頭から長い尾が伸び、尾は高さを減しながら他の巴胴に接して圏線状を呈する。珠文は18個を数える。その他、ピットからの遺物は少量の瓦片、土師器片、備前甕などの体部片などがわずかにみられるのみである。

柵列18は柵列17の南側に平行する柵列である。2485・2486・2451～2453・2455・2456・2460・2461・2462・2487ピットは直線上に位置している。しかし、ピットの深さにはばらつきがみられ、非常に浅いものもみられた。浅いピットは中央に特徴的な黒色の粘質シルト層がみられ、深いピットとは埋土も異なる。このことから、比較的深さがある、2486・2455・2460・2462・2487ピットで構成される柵列である可能性が高い。これらの深いピットは直径約0.4mの円形を呈し、深さは0.5m前後であった。ピットからの遺物の出土はほとんどなく、わずかに土師質土器皿、須恵器片が出土している。周辺では2488・2468・2450ピットなど他にも比較的深いピットがみられた。柵列は谷の肩際に位置しており、これより南にもピットが位置していることから、当該期は南の斜面がなだらかにもう少し張り出していたと推定できる。

柵列19 (図93)

柵列17の北側に平行する東西方向の柵列である。2375～2377・2409ピットで構成される柵列である。ピットの規模は小さく直径0.25mの円形を呈し、深さも0.25～0.3mと浅い。柱間は約2mを測る。上面の2159溝のちょうど下部で検出した。ピットからは瓦片などが少量出土した。

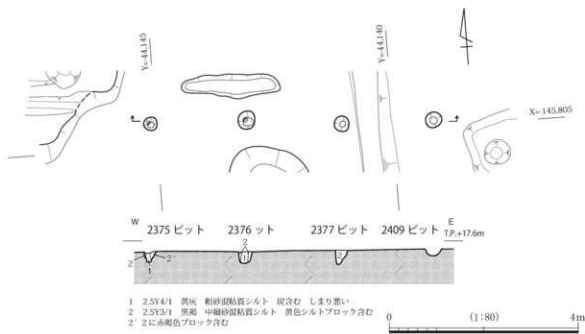


図93 柵列19 平・断面図

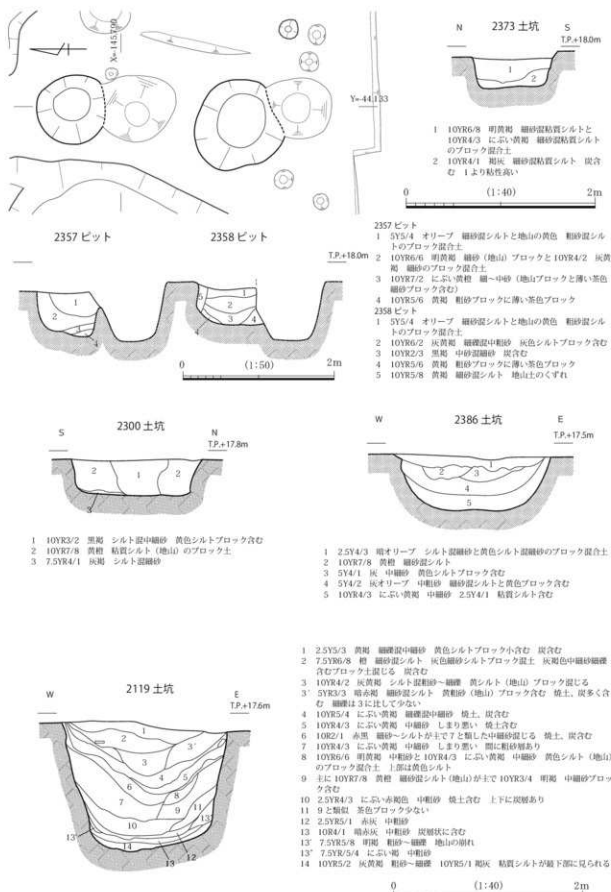


図94 2357・2358ピット、2300・2373・2386・2119土坑 断面図

2357・2358ピット (図94、図版14-3・4)

柵列15の西側で検出した。2357ピットは直径0.8mの円形を呈し、深さ0.6mを測る。2358ピットは直径0.9m前後のややいびつな円形を呈し、深さは0.5mを測る。ピットの規模は類似し、埋土もオリープ色細砂混シルトと地山ブロックの混合土で埋められている。2基のみの検出であるが、上面の礎石を有する柵列9と切り合い関係にあり、これに先行する同じ性格の柵列である可能性が高い。ただし、柱痕跡、根石、礎石等は確認できなかった。北には延びず、南側に延びる可能性が高い。遺物は瓦片の他は出土していない。

2365溝

16柵列の東に位置する溝である。2426土坑を切る。幅0.5～0.7mを測り、深さは0.1～0.2mを測る。溝底部の深さは南側に向かって低くなっている。溝内からは瓦や土師質土器皿、釘とみられる鉄製品が出土した。

出土遺物 (図97-761-766、図98-774)

761-766は土師質土器皿である。762・763は口縁部端部をかるくつまみあげる。764は口縁端部に煤の付着が認められ、灯明皿として使用したものであろう。774は三巴文軒丸瓦である。巴頭は非常に大きく、細い尾が伸びる。小さい珠文を密に配し、25個に復元できる。

2365溝の東側に位置する2366土坑からも759・760の土師質土器皿が出土している。

他に比較的大型の土坑を数基検出した。

2373土坑 (図94、図版15-4)

調査区東端で検出した。0.9×0.7mの方形を呈し、深さは0.35mを測る。土坑からは土師器片、瓦器片、須恵器杯蓋片の他、備前大甕の体部片が出土した。

2300土坑 (図94、図版15-6)

直径約1.7mの円形を呈し、深さ0.5mを測る。埋土は中央に円形に黒褐色シルト混中細砂(埋土1)がみられ、両側は黄褐色のブロック土である。底部にはわずかに灰褐色のシルト質細砂が確認できた。

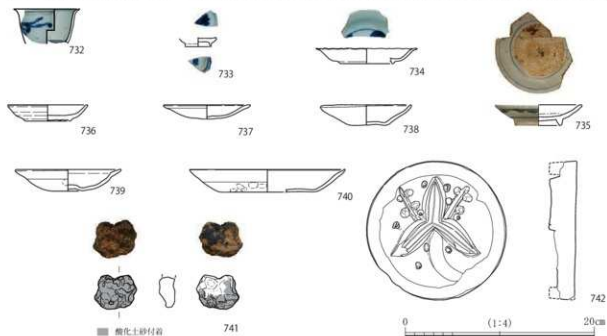


図95 2119土坑 出土遺物

ブロック土で人工的に埋め戻されているが、埋土1の範囲は再度掘削されたか、あるいは中央に何らかのものが埋まっており、廃絶後埋まったものか、いずれにしても一連の埋戻しではないと考えられる。土坑からは遺物の出土が少なく、瓦、備前の破片、須恵器、瓦器片などが出土した。

2386土坑 (図94、図版15-5)

2386土坑は柵列17の北側で検出した。1.7m×1.4mの東西方向に長い隅丸方形を呈し、深さ0.6mを測る。土師質土器皿、瓦、須恵器片が出土している。

2119土坑 (図94、図版15-7)

1.6×1.8mの楕円形を呈し、深さ1.4mを測る。土坑を検出した範囲は第4層除去後、概ね基盤層が露出していた。埋土は下層は焼土や炭を含んだ粗砂・細礫(土層13・14)で中層も焼土を多く含む砂質土で締りが悪い(土層3~10)。下層と中層間には地山が崩れたような堆積が認められる(土層11・13)。上層(土層1・2)は地山に類似した橙色、黄橙色のブロック土で埋められている。遺物の出土は少ないが、特筆できる遺物に沢溝紋飾り瓦がある。

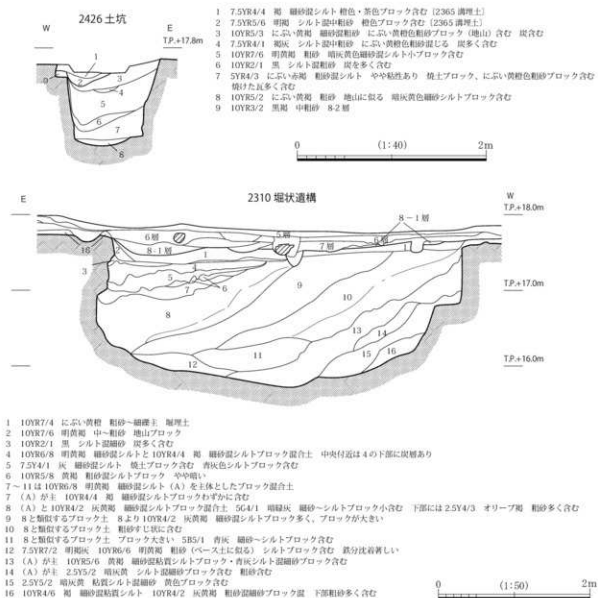


図96 2426土坑、2310堀状遺構 断面図

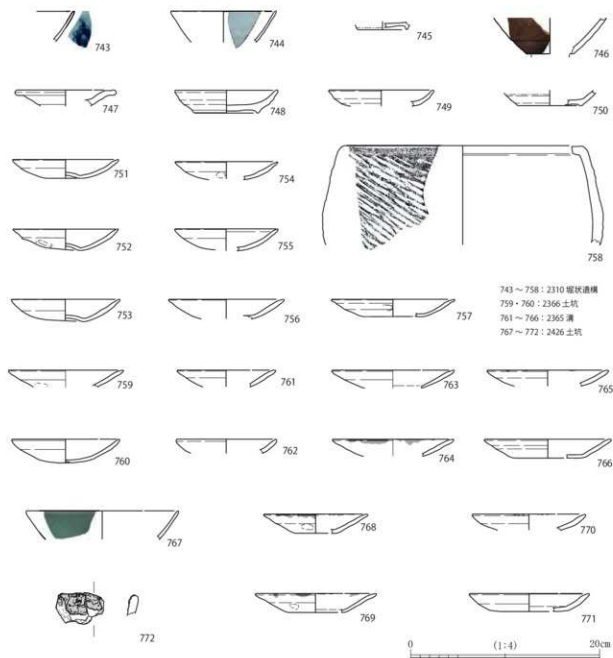


図97 2310堀状遺構、2365溝、2366・2426土坑 出土遺物

出土遺物 (図95)

青花、瀬戸美濃、土師質土器皿が出土した。732～735は青花である。732・733は小杯である。733は高台内に「福」の銘款が残る。734は口縁部を外反させる輪花皿である。735は胎土が黄色を呈する陶胎の染付皿である。見込みは軸刺ぎ、高台内は露胎である。736は瀬戸美濃、灰軸の丸皿である。737～740は土師質土器皿である。739は底部がへそ皿状に窪み、739・740は口縁端部をかるくつまみあげる。他に鉄滓、瓦類が出土した。741は鉄滓である。上層で出土したものに比して重量感がある。分析を行っており、詳細は第4章を参照されたい。特筆できる遺物に742の沢瀉紋飾り瓦がある。文様は箆ではなく、粘土塊を貼り付けて作り出している。軒丸瓦の瓦当と同様に周縁をもった円形を呈し、大きさ、厚さなども軒丸瓦と大差ない。しかし、裏面は平らになっており、丸瓦部はとりつかない。焼成前に表面から穿孔した孔が複数みられる。孔は文様を避けるように穿たれており、規則性は認められ

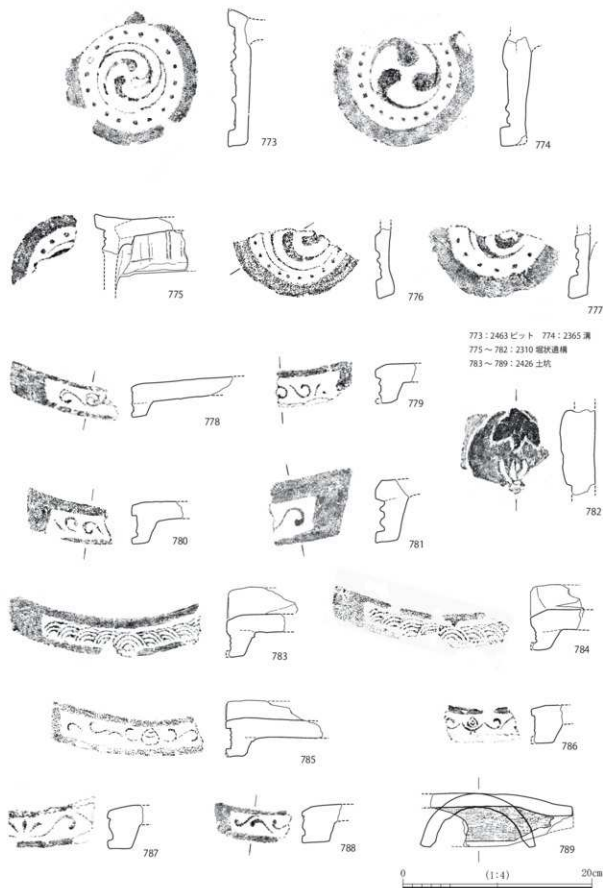


図98 2463ピット、2365溝、2310軀状遺構、2426土坑 出土瓦

ない。いずれも裏面に貫通しておらず、瓦を留めるための釘孔とは異なるものである。飾り瓦は円筒状のものにはめ込んで使用するものであろう。

2310 塚状遺構 (図96、図版16-1・2)

調査区中央で検出した大型の土坑である。図示した部分では幅4.6m、深さ2mを測る。土坑の南壁は直線的に落ちるが、北壁は階段状を呈して、その北側はT.P.16.8～17mの浅い窪みとなって調査区外に延びる。図96に示した断面図は北壁に近い部分で作成しており、中央付近では底部はT.P.15.4m前後となり、幅は約5.5mを測る。浅い窪みは調査区外北側に続いており、全長は不明であるが、深い部分は約8mを測る。土坑は基本的にはブロック土で埋戻されている。堆積状況を見ると、西から東に向かって埋められていることが分かる。上層には、2枚の炭を多く含む層を介しており(埋土3、埋土4の下部)この炭層から土師質土器皿が比較的多く出土している。このことから、土坑は人工的に短期間に埋戻されたと考えられるものの、完全に埋まっておらず、上部は窪みとなっていたと考えられる。炭層から出土した土師質土器皿は豊臣前期の特徴を有していることから、前期のある段階には既に埋められていたと考えられる。

土坑の性格は不明であるが、底部は比較的平らであり、自然地形を埋めたといった状況も考えにくい。人工的に掘削、埋められた可能性が高いと考えられる。また、近接する2308井戸の底はこれより深く、湧水層には達していないことから、井戸ではないと考えられる。水溜めとしても、底部付近にもほとんどシルトや砂層といった水成堆積層が認められないことから考えにくい。人工的にこのような大型土坑を掘削したとなると、北側に続く可能性を含め、堀状の施設が考えられる。また、西側から東に向かってブロック土で埋められている状況は、西側に土塁があった可能性を示唆するものと言える。

出土遺物 (図97・98・68、図版20)

青花、白磁、瀬戸美濃、土師質土器皿が出土した。遺構の規模に対して遺物の出土は極めて少ない。特に瓦片を除けば非常に希薄である。743は青花である。744・745は白磁碗。744は内面に文様が隔刻される。746～750は瀬戸美濃の陶器である。746は天目茶碗。高台周辺に濃い錆釉がみられる。747は折縁皿。748・749は灰釉の丸皿である。748は被熱により変色している。750は鉄釉の皿で体部が直線的に延びる。外面下半は露胎である。751～757は土師質土器皿である。胎土は精緻である。751～753のように底部がへそ状に窪むものが目立つ。751～753は口縁端部をかるくつまみあげる。756・757はやや胎土が粗い。758は土師質土器の火鉢である。外面に叩きがみられるものである。

埋土のブロック土のうち、茶褐色土は第9層以下の本来存在していた遺物包含層と考えられ、須恵器片などが出土している。他に砥石、銭貨、鉄釘、焼土塊が出土した。砥石(図68-608)は小さい立方体を呈するものである。銭貨は、損傷が著しく内容は不明である。焼土塊は図版20-914に掲載した。すざを含んだ粘土塊が焼けたもので、大きさは5cm前後を測る。

瓦類も出土した。丸瓦はコビキA・Bの両方がみられた。完形のものも含まれている。二次焼成を受ける個体も多い。

775～777は軒丸瓦である。775は文様の全容が不明であるが、おそらく三巴文軒丸瓦であろう。珠文は非常に小さい。丸瓦部を接合した際の瓦当裏面の補充粘土がきれいになてられておらず、凸凹が目立つ。コビキB。胎土に1.5cmと大きい礫がみられる。776は先端のやや尖った巴頭を有し、ほとんどくびれをもたない。尾は長く、先端に行くほど高さを減じている。珠文は775と同様に小さく、密に配する。777も先端が尖った巴頭を有し、ほとんどくびれを持たない。小さい珠文を疎らに配する。

778～781は軒平瓦である。軒平瓦はいずれも中心飾りが遺存しない。778は周縁の高さがほとんどなく、文様も不鮮明である。781は瓦当幅の厚いものである。離れ砂が付着する。780は2267溝出土遺物と同様の唐草で、外側の唐草が途切れている。切断した筈を使用したためと考えられる。

782は飾り瓦、あるいは鬼瓦の一部である。花を表したものと考えられるが、破片につき詳細は不明である。板状の瓦に花卉を表すと考えられる凸部を貼り付け、図上下に竈で線を3条描く。上部には、先端が3つに分かれる尊を表現したような粘土を貼り付けている。

2426土坑 (図96、図版16-3)

調査区北肩部で検出した土坑である。1×2mの南北方向に長い方形を呈し、深さは0.9mを測る。南端は谷肩部の地滑りのため、不明で更に南に延びる可能性がある。埋土中層(土層5)に明黄褐色粗砂層を挟んで上・下層は焼土ブロックや炭を多く含む。土坑からは焼けた瓦が多く出土している。その他、埴壇、釘と考えられる鉄製品が多数出土している。切り合い関係から2365溝に切られる。

出土遺物 (図97・98)

767は青磁碗である。外面に連弁が陽刻される。器壁は薄い。768～771は土師質土器皿である。底部は欠損しており不明であるが、769・771は口縁端部をかるくつまみ上げるものである。768・769は口縁部に煤の付着がみられることから、燈明皿として利用されたものと考えられる。772は被熱により発泡しており、埴壇と考えられる。同様の破片は他にも1片出土している。他には鉄製品が多く出土している。錆の付着が著しいが、鉄釘と考えられる。また、須恵器片など下層遺物の混入がみられる。

その他、軒平瓦を含む瓦類が出土した。軒丸瓦は出土していない。丸瓦・平瓦は多数出土したが、二次焼成を受けて、脆くなっているものが多くみられた。丸瓦はコビキAが確認できた。

783・784は水波文軒平瓦である。左右から内側に向かうもので、中心の水波がもつとも上部になる。

785～788は均整唐草文軒平瓦である。785・786は中心飾りに宝珠を配するものである。785は唐草が四転する。786は宝珠の下に台を有するものである。本願寺期とされる基壇構築土壌中出土の軒平瓦と同範と考えられる(市立大・難波宮址研究会1958)。785に比して文様はシャープである。787は中心飾りが三葉を呈する。788は三転する唐草が遺存する。いずれも顎は厚みがある。これらの軒平瓦も二次焼成を受けている。789は行基式丸瓦である。2426土坑から出土した軒平瓦は783・784・786とこれまで本願寺期とされる調査で出土している軒平瓦と同様の文様をもち、二次焼成を受けている点で興味深い。豊臣前期の中でも古相を示すか、あるいは本願寺期まで遡る可能性も有する。

その他、調査区南東コーナー付近には2384落込み、2425落込みがある。落込みは平面形が不定形で、埋土は第8～2層に類似した地山と茶褐色土のブロック混合土である。深さは2384落込みは0.4m、2425落込みは0.6mを測る。柵列17のピットはこの落込みの下層上面で検出している。2365溝は、図61の断面観察では落込みに先行する。2384落込みからは瓦片が出土した他、土師器や瓦器片、瀬戸美濃天目碗の細片が出土している。2425落込みからは瓦片が多く出土した。他に図化していないが、備前揉鉢・大甕などの体部片、同安窯青磁碗の細片などが出土している。

豊臣期3の遺構から出土した遺物は磁器では青花や白磁、青磁などがあり、国産陶器では肥前陶器を含まず、瀬戸美濃、備前が出土している。また、土師質土器皿の出土が目立つ。皿は口縁部内面に面を有するものや底部がへそ状に窪むなど、豊臣前期と考えて矛盾しない。柵列からは時期を示す遺物の出土はないが、豊臣期3は豊臣前期の時期を与えたい。

なお、1区中央付近では豊臣期に属する井戸、ピットを検出している(図99)。いずれも基盤層上面

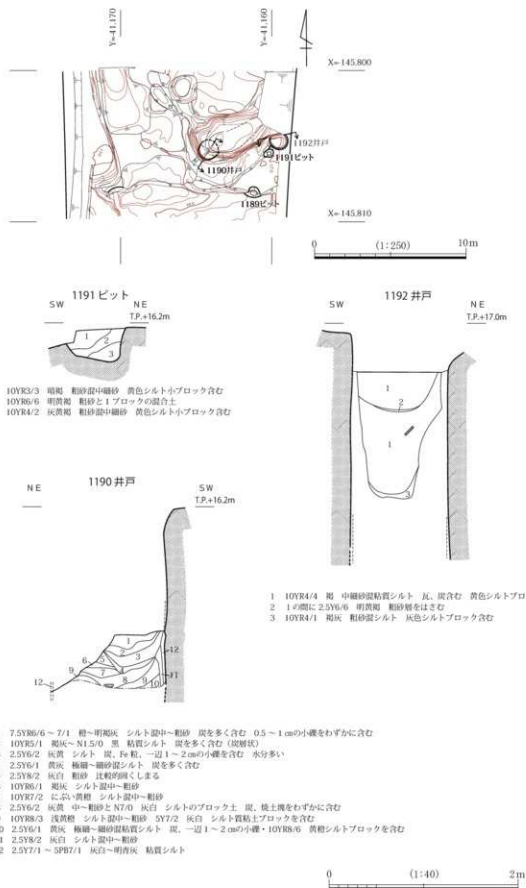


図99 1区基盤層上面 遺構断面図

で検出したものである。1区でも谷の肩部を検出したが、徳川期の大型土坑等に攪乱されて、肩部の焼土層は西端のわずかな部分でのみ確認した。また、北半の丘陵部は第3層を除去した段階で基盤層が露出し、第4層以下の層は確認できなかった。豊臣期の遺構の大半が削平されていると考えられる。検出できた遺構は井戸などの深い遺構と削平を免れた中央付近のピットのみである。

1190・1192井戸（図99）

1190・1192井戸の2基を検出した。井戸はいずれも徳川期の遺構である1175土坑に切られている。

1190井戸は1175土坑の底部付近で検出している。直径約1.2mの円形を呈し、T.P.14.3mまで掘削したが、底部は確認できなかった。掘方に沿って灰白色の粘質シルト層がみられ、井戸側を有していた可能性が高い。埋土からは瓦が多く出土した他、土師質土器皿が出土した。

1192井戸は北半が1175土坑に切られる。直径約1mを呈する。井戸はT.P.14.6mまで掘削したが、底部は確認できなかった。なお、断面は図に示した位置で作図したものを合成している。埋土の状況から井戸側を有していた可能性が高い。埋土からは多数の瓦の他、わずかに青花、備前などが出土した。

1191・1189ピット（図99）

1191ピットは先述のとおり、柵列17に繋がるものである。直径0.6m、深さ0.35mを測る。1189ピットは柵列より2.5m南に位置するピットである。南半分が削平されているが、直径1m程度を測ると考えられる。ピットからは青花皿が出土した。

出土遺物（図100）

1189ピットからは790の青花皿が出土した。口縁部が外反する皿である。1192井戸から791・792・793が出土した。791は青花皿、792は青花碗である。見込みを円線で画する。793は備前鉢である。内面には口縁部の下に波状文を施す。794～796は1190井戸から出土した土師質土器皿である。797は軒平瓦である。中心飾りは細い楕円上を呈しているが、宝珠を表したものである。左右の唐草は二転する。側縁の幅は広い。

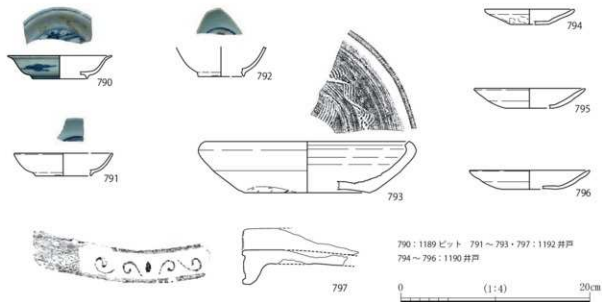


図100 1区 基盤層上面遺構 出土遺物

小結

豊臣期は3面の遺構面として捉えることができた。豊臣期1・2を豊臣後期、豊臣期3を豊臣前期と考えて大きな矛盾はないものと考えられる。豊臣期1で検出した遺構は、夏の陣直前に窪み状になっていた溝がほとんどであり、豊臣期2で検出した遺構は、第8—1層の上面遺構というより、第7層の下面遺構が大部分と捉えるほうが妥当であろう。従来、豊臣期の前期と後期は三の丸の整地層を鍵層として分けられており、当調査区周辺の調査でも同様である。特に谷部では約3～5mの厚い整地層がみられる。しかしながら、当該面の調査を行った2区は丘陵部にあたり三の丸造成に伴う大規模な整地層は確認できなかった。豊臣期2では礎石を有する柵列を検出しており、当時の地表面と近い状況が推測できる。この礎石の据えられた高さはほぼ基盤層上面の高さに等しく、このことから厚い整地層がもたらされた状況は考えにくい。東側の区画施設が一段高くなっていることから、擁壁状に平坦面を作り出すような、どちらかという、高い部分を削るような造作があったものと考えられる。

当調査区を特徴づける遺構として、3期を通して踏襲される谷の肩口に平行する柵列や堤と溝、調査区東端の柵列、溝といった区画施設がある。これらの区画も細部をみれば、前期と後期で軸が異なっている事が分かる。豊臣期3の南北方向の柵列はいずれもやや東に軸が振っている。谷肩部の柵列はこれに完全には直交しないものの、近い軸を有している。しかしながら、豊臣期2や1では南北方向の柵列の位置はほぼ同じでありながら、軸を北に揃えている。一方、谷肩部では軸は豊臣期3以降軸はほぼ変化しないため、豊臣期2以降、南北と東西の区画はややいびつな印象を与える。豊臣期3ではある程度地形に沿った形で柵列を建て、豊臣期2以降は南北方向の区画は明らかに南北方向を指向した軸に変更されていることが指摘できる。

区画内部でも明らかに違いをみることができる。豊臣後期では北西部で屋敷地が復元でき、周囲には井戸などもみられる。また、鬼瓦、飾り瓦、金箔押瓦も北西側に分布の偏りがみられ、礎石建物などは復元できなかったが、少なくともこの一角は屋敷地であったと考えることができよう。豊臣期2で検出した溝などは明らかな焼土層はみられない。夏の陣の際には2267溝などは既に埋没していた状況も考えられる。夏の陣直前の屋敷地内の様子は良く分からないが、少なくとも後期の段階に屋敷地があったことが分かった。また、この屋敷地は先にふれた豊臣期2以降の軸に一致する。

一方、豊臣前期では2310堀状遺構や沢瀉紋飾り瓦を出土した2119土坑の他は谷肩部付近で落込みや土坑を検出したにとどまり、遺物も希薄である。削平されていることもあろうが、土地利用が異なっていたことが考えられる。この中で特に2310堀状遺構が目できる。人工的に掘削された規模の大きい遺構であること、更に北に続く可能性が高いこと、井戸や水溜めとは考えにくいこと、西側から埋め戻されていることから、西側に土塁を有する堀である可能性を指摘した。更に豊臣期3の東端の柵列の軸と近いことは重要である。2310堀状遺構に平行するように東側に多重の柵列があることから、東側が内側、西側が外側といった防衛施設といった性格も見てとれる。このように考えると、当調査区で前期相当の遺構が少なく、遺物が希薄であることも理解しやすいのではないだろうか。2310堀状遺構は前期の間に既に埋没しており、後期にかけて屋敷地が西側に拡大した状況を考えたい。

次に出土遺物に目を向けると、多数の瓦類の出土が目にとまる。特に桔梗紋軒丸瓦、沢瀉紋飾り瓦の家紋瓦が目を引く。家紋瓦は屋敷地の主を推測する有効な手段のひとつとなるものである。旧中央体育館跡地で検出された前期の大名屋敷では沢瀉紋の金箔押飾り瓦が出土し、豊臣秀次の屋敷地との推測もある。当調査区からは、南東に約3km離れており、更に谷地形を挟んでいるが、前期の遺構から出土

したことと併せて興味深い遺物といえる。桔梗紋軒丸瓦は2点の鬼瓦とともに北西部の井戸から出土した。この井戸は屋敷地の区画溝とした2267溝より新しい遺構であるが、夏の陣で被災した瓦が廃棄されたものと考えられる。調査区北側にはこの屋敷地の主要遺構が展開する可能性が高い。桔梗紋の家紋瓦は他の調査地点からも複数出土しており、1点の家紋瓦からの推測は控えたいが、重要な遺物といえる。

他に2426土坑から出土した軒平瓦が目できる。2426土坑は谷肩部に平行する柵列より先行するもので、豊臣期3の中では古相の遺構である。出土した軒平瓦はこれまで本願寺期とされる調査で出土した軒平瓦と同様の文様を有している。陶磁器類の出土が少なく、時期の詳細は不明であるが、豊臣前期より遡る可能性も指摘しておきたい。

第5節 古代の遺構と遺物

2区、基盤層上面で掘立柱建物を検出した(図101)。いずれも調査区南側の谷肩部付近で検出している。この状況からは、丘陵部は豊臣期以前にはもう少し、南に張り出していたものと考えられる。建物を検出したのは、いずれも谷肩部付近であり、もともと低くなっており、第8—2層の整地層が遺存していた範囲といえる。調査区北側は地形的に高く、削平され遺存しないのであろう。出土遺物は希薄ながら、古代に帰属する可能性が高い。

なお、谷肩部付近では小規模な地滑りが確認できた。建物3の2523ピットは南側にずり落ちた状況で検出しているが、この部分は第4層が谷肩部にオーバーハングするようになっていた。同様のことは建物1・2の南側でもみられた。基盤層上面では建物1・2周辺でこの抉れに沿うような弧状の亀裂が認められ、地盤がずり落ちた結果と考えている。第4層が確認できることから、少なくとも、地割れが生じたのは17世紀以降であることがわかる。

掘立柱建物3(図102、図版17-1・3)

調査区東側、谷肩部付近で検出した。2521～2524ピットで構成される南北の方位を指向する掘立柱建物である。北側には柱穴は検出できず、北には広がらないものと考えられる。南側は谷の肩部にあたり、一部地滑りを起こしている。そのため、2523ピットは南側がずり落ちたような状況であった。西側には対応するピットは検出できず、東側では2524ピットを検出しており、現状では南北2間、東西1件以上の掘立柱建物と復元できる。なお、2525ピットは非常に浅く、ピットというよりはむしろ、鉄分の沈着した範囲といった状況であったが、他のピットも柱痕跡の下部に鉄分の沈着が認められるものもあり、建物を構成するピットの可能性を考えたい。掘方は0.6～0.8mの隅丸方形を呈し、深さは0.15～0.4mを測る。柱は遺存していないものの、柱痕跡は明瞭である。直径約0.3mを測り、底部は

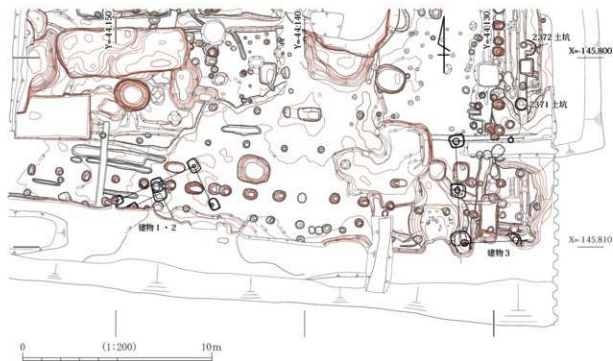
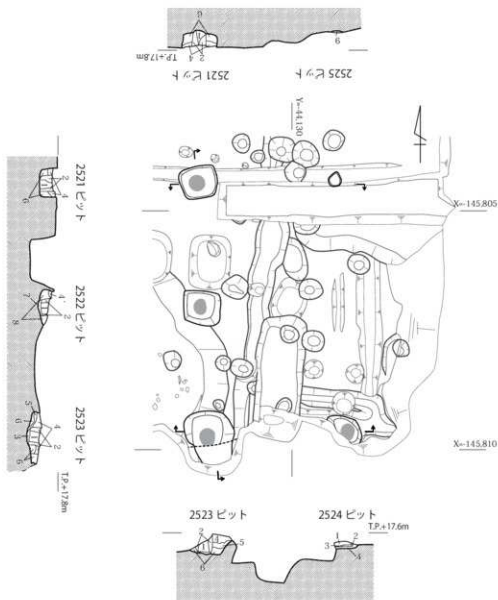


図101 2区 基盤層上面 検出遺構



- 1 2.5Y/6/1 黄灰 細砂混粘質シルト 柱の底面非常に平ら
- 2 10YR7/6 明黄褐 細砂混シルト 7.5YR/1 褐灰 細砂混粘質シルトブロック混 細礫混
- 3 10YR7/6 明黄褐 シルト混細礫-粗砂 地山土が混じったような上
- 4 7.5YR6/6 橙 粗砂混シルト 細砂多く含む
- 4' 4と類似 細礫を多く含む
- 5 7.5YR5/6 明黄 細砂混シルト 粗砂ブロック状に含む
- 6 7.5YR6/4 に近い橙 粘質シルト混粗-細砂 細礫含む
- 7 10YR8/1 灰白 細砂混粘質シルト 中粗砂ブロック状に含む
- 8 5・6と類似 7.5YR5/6 明黄 粘質シルト混粗-細砂
- 9 5YR5/8 明赤褐 細砂 灰白色シルトブロック含む 鉄分沈着

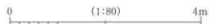


図102 掘立柱建物3

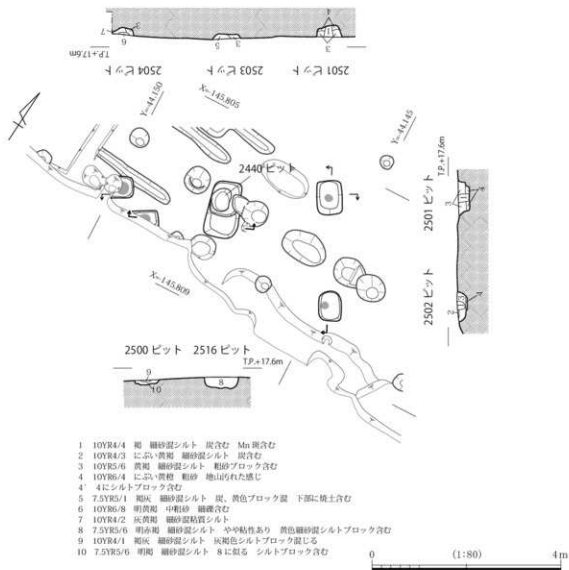


図103 掘立柱建物1・2



図104 ピット他 断面図

非常に平らになっている。柱間は南北が2.6～2.7mを、東西は約2.9mを測る。掘方からは遺物の出土はほとんどなく、土師器の細片が出土したが、時期は不明である。

掘立柱建物1・2 (図103、図版17-2・4)

掘立柱建物1は2501～2504ピットで構成される建物である。座標北に対して、西に約25度振る掘立柱建物である。谷の肩部にあたり、南側に広がる可能性が高く、掘立柱建物と判断した。現状で2間以上×1間以上の建物に復元できる。掘方は0.5m前後×0.6m前後の隅丸長方形を呈し、深さは0.1～0.25mを測る。柱は遺存せず、柱痕跡は直径0.15m前後を測る。柱間は約2.25mを測る。掘方内からは遺物の出土はなく、時期は不明である。

掘立柱建物2は2500・2516ピットで構成される掘立柱建物である。大部分が削平されており、詳細は不明であるが、2516ピットと2503ピットの切り合いから、建物1に先行する掘立柱建物と判断した。柱間は約1.8mを測る。

2371・2372・2362土坑 (図104、図版15-3・4)

他に豊臣期の遺構とは異なる埋土を有する土坑がある。いずれも調査区東端で検出した。2371土坑は埋土が黒褐色を呈するもので、特徴的である。直径0.7mの円形を呈し、深さは約0.3mを測る。2372土坑は直径0.7m、深さ0.2mを測る。須恵器、土師器の細片が出土している。2362ピットは直径約0.7m、深さ0.5mを測る。埋土1は柱痕跡の可能性が高い。須恵器、土師器の細片が出土した。これらの土坑は出土遺物からは時期の特定は困難であるが、古代に属する可能性が高い。

出土遺物 (図105)

各遺構からは図化できる遺物は出土していない。当該期の包含層ほとんど遺存していないが、上面の特に深さのある土坑などからは、古墳時代～古代の須恵器片が散見している。ここで示した遺物はこうした上層の遺構出土の須恵器である。798は2310堀状遺構から出土した須恵器杯蓋である。799・800は須恵器高坏で799は2503ピットを切る2440ピットから、800は2119土坑から出土した。

小結

建物2・3の軸が振れる建物は周辺で多く検出されている難波宮下層建物群に類似しており、6～7世紀前半のものである可能性が高い。建物1の正方位をとる建物は難波宮に関連する時期の可能性が高い。当該期の包含層は確認できなかったが、上層の深い遺構埋土からは須恵器や土師器片が出土しており、周辺に古墳時代後期～古代の遺構が広がっていたことは十分に考えられる。特にもっとも低地である谷の肩部付近で建物を検出している点からも、北側の高所ではさらに遺構が濃密であったことも予想される。

また、直線的に見える谷の肩口は豊臣期に整えられたものであることが分かった。

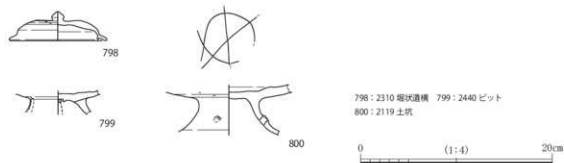


図105 出土遺物

第4章 理科学分析

徳川初期の遺構面では炉を5基検出した。この遺構面は徳川期の盛土によってバックされていたため、作業面が残る部分のみ見られた。2053炉を中心とした作業面の土壌を洗浄した結果、鍛造剥片、粒状滓、スラグなどが出土し、2053炉は鍛冶炉であることが確定できた。他の炉についても、鍛冶炉の可能性が高い。大坂城周辺では難波宮の東方地域の調査（NW10-4）で同時期の鍛冶工房が良好に検出されている（大文研2012）。この鍛冶工房で出土した鍛冶滓について科学的な分析がなされており、その結果、火山ガラスを投入していることが指摘された。火山ガラスの投入は炉内の急速冷却清浄をよりよく展開するための新技術とされた。

当調査区の鍛冶炉も同時期のものであり、類似した現象が指摘できるものか、出土した鍛冶滓について分析を実施した。試料には2019土坑、2031落込み、2097炉の断面からの計4点を抽出した。試料No.4、試料No.5は2019土坑から出土した滓である。2019土坑は廃棄土坑と考えられ、抽出試料も合わせて、ガラス質滓22点、椀形滓2点、不定形滓9点が出土している。試料No.6は2097炉周辺から出土した滓である。試料7は2036炉に隣接する2031落込みから出土したもので、2031落込みからは抽出試料を合わせて、ガラス質滓が3点出土している。

また、調査ではこれより新しい18世紀後半～19世紀前半の土坑から、多くの金属器生産関連遺物が出土した。特に18世紀後半の1070土坑では黒色のガラス質滓が20kgと大量に出土している。形状は湾曲しており、凸側がガラス質化している。炉壁が膨張、剥脱したものである可能性を考え分析を実施した（試料3）。1070土坑からは他に鍛冶滓と推定できるものも多く出土しており、同様に分析を実施した（試料1・2）。他に、豊臣期の土坑からも数点ではあるが出土しており、2119土坑から出土した鍛冶滓を試料8として分析を実施した。分析内容の詳細は第2・3節を参照されたい。

分析の結果、徳川初期では（NW10-4）調査で分析されたものと類似した「流紋岩質火山ガラス」の炉内への投入の結果、発泡ガラス質滓が形成されたことが分かり、これらの滓は鍛冶炉内の内容物の急速冷却を目論んだ除熱排出滓と想定された。次作業の為に急速な冷却清掃工程は炉の連続操業に不可欠であり、同一炉の連続操業を示唆するものである。当該期は徳川大坂城再興の時期にあたり、操業は大坂夏の陣以降、元和6年から約10年間の短期間のものである。流紋岩質火山ガラスの投入が連続操業、大量生産を意図したものであり、特殊な現象であるとするれば、離れた場所で操業していた鍛冶工房で、共通の技術を使用しているとも言え、更に組織的な操業を示唆するともいえる。こういった技術が当該期には一般的なものであるのか、今後の試料の蓄積を待ちたい。

また、18世紀後半の試料3は鍛冶炉の炉壁の可能性が高い結果が得られた。時期的には新しくなるが、埴塙も出土している。このことから、徳川期には鍛冶のみでなく、鍛造も行っていた可能性が指摘できる。

第1節 金属器生産関連遺物の分析調査

1. 分析調査概要

豊臣期・徳川初期、徳川期に属する大坂城跡出土の鍛冶関連遺物の分析調査を行った。3世代にわたる鍛冶活動は、鍛冶滓組成からみて鍛錬鍛冶（高温沸し鍛接、低温素延べ）からの鉄器製作である。これに故鉄：iron scrap 処理鍛冶が加わる。ここで注目すべきは、鉄器の大量生産を目指した鍛冶炉のフル稼働を証拠づけた発泡ガラス質滓の発見である。鍛冶作業は、一仕事、一片付が必須条件となる。鍛冶炉本体は高温を保持しつつ、冷ました炉内残渣物（塊形滓など）を迅速に取り除けばタイムロス無くして作業効率を高める。発泡ガラス質滓は「流紋岩質火山ガラス」の投入により派生した。火山ガラスは600℃前後で発泡し初め、800～900℃で極度に達する。この温度での発泡は急激に膨張し、炉内空気を遮断して温度降下は著しい（第2節 井澤英二先生考察）。大坂城跡の鍛冶関連遺物の発泡ガラス質滓が存在する理由が明らかになった。なお本調査は大坂城跡（NW10-4次調査）に続くもので、発泡ガラス質滓の組成は今回の調査品に準ずるものである^(註1)。

2. 調査方法

2-1. 供試材

表2に示す。8点の鍛冶関連遺物の分析調査である。

2-2. 調査項目

(1) 肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

(2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の5倍で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

(3) 顕微鏡組織

鉄滓の鉱物組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3μmと1μmで鏡面研磨した。また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。

(4) ビッカース断面硬度

鉄滓中の鉱物と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

(5) X線回折

X線回折（XRD）は、井澤英二九州大学名誉教授に依頼した。（九州大学地球資源工学部門のX線回折装置 理学Ultima IV）を使用した。X線はCu Kα₁（40Kv、20mA）を用い、全自動モノクロメーター、発散スリット2/3°、受光スリット0.3mm、データ取得幅0.02°（2θ）、走査速度2°/minの条件で2.65°（2

θ)を走査範囲とした。

(6) 化学組成分析

出土鉄滓の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化珪素 (SiO₂)、酸化アルミニウム (Al₂O₃)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K₂O)、酸化ナトリウム (Na₂O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO₂)、酸化クロム (Cr₂O₃)、五酸化磷 (P₂O₅)、バナジウム (V)、銅 (Cu)、二酸化ジルコニウム (ZrO₂) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

(7) 資料観察表の見方

資料観察表の見方は次のとおりである。

- ・遺物種類 金属学的な分析を行う以前に、考古学的な観察によって判定した遺物の種類である。
- ・法量 資料の残存する最大長、最大幅、最大厚、重量を計測したものである。
- ・磁着度 鉄滓分類用の「標準磁石」を用いて資料との反応単位を1から順に数字で表現したもので、数値が大きいほど磁性が強い。(歴博報告書第58・59集「日本・韓国の鉄製産技術」資料編国立歴史民俗博物館1994に準じた)
- ・遺存度 資料が破片の場合、破面がいくつあるかを記す。
- ・メタル度 特殊金属探知機によって判定された金属鉄の残留度を示すもので、最も金属鉄が依存しないものから遺存するものまで6段階に分け、「なし」、「錆化 (△)」、「H (○)」、「M (◎)」、「L (●)」、「特L (☆)」と表示した。
- ・分析 分析実施項目を○印で示す。
- ・所見 分析前の外形や破面・断面の状況、木炭痕や気孔の有無、及び付着物やその他の状況について詳細に記す。
- ・分析個所 資料をどのように調査・分析するか記す。

3. 調査結果

No.1 梃形滓

(1) 肉眼観察 : 平面は不整楕円形状の中型 (351g) の梃形鍛冶滓である。上下面は凹凸が激しく、酸化土砂が付着する。地肌は緻密質で僅かに1mm前後の気孔を発す。上面は酸化土砂の剥落後に赤褐色鉄錆を滲ませる。下面は木炭の噛み込みと鍛造剥片の付着が目につく。色調は茶褐色。

(2) マクロ組織 : 写真6の①に示す。断面は緻密質で気孔少なく、偏析は殆んど認められない。左上側に1ヶ所空洞化して白色輪郭線で囲まれた鉄片痕跡を留める。表層には付着鍛造剥片を残す。

(3) 顕微鏡組織 : 写真6の②③に示す。②は付着鍛造剥片^(註2)である。被膜は3層構造をとる。外層は微厚の白色ヘマタイト (hematite: Fe₂O₃)、中間層マグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄)、大部分は内層ウスタイト (wüstite: FeO) は非晶質となる。③は主要鉱物相の白色粒状結晶のウスタイトと淡灰色柱状結晶のファヤライト (fayalite: 2FeO・SiO₂) が晶出する。高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓の晶癖が観察できる。

(4) ピッカース断面硬度 : 写真6の③に白色粒状結晶の硬度測定の際の圧痕を示す。値は429Hvが得られた。

ウスタイトの文献硬度値446～503Hv^(註3)の下限値を僅かに下回るがウスタイトの同定で大過なからう。

(5) X線回折結果:図106に示す。ウスタイト、磁鉄鉱(magnetite:Fe₃O₄)、および針鉄鉱(goethite:α-FeO(OH))を主とし、少量のヘルシナイト(hercynite:FeO·Al₂O₃)、石英(quartz:SiO₂)を伴う。

(6) 化学組成分析:表3に示す。全鉄分(Total Fe)が58.08%と高く、造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+N₂O)は13.87%と少ない。また、脈石濃度の低下は鍛冶滓に分類できる成分系といえる。矽鉄特有元素の二酸化チタン(TiO₂)0.07%、バナジウム(V)0.01%、二酸化ジルコニウム(ZrO₂)<0.01%などの低減傾向と共に、酸化マンガン(MnO)0.10%も低値である。銅(Cu)の0.02%は鉄素材が矽鉄原料が塊状鉱石か、はたまた放鉄(廃鉄器)などか微妙に揺れる数値となる。いずれにしろ高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓に特定できる。

No.2 含鉄碗形鍛冶滓

(1) 肉眼観察:平面は不整形円形の中型碗形滓であるが、長軸片側の側面は欠損し、破面を露出。欠損部分を補填すると資料番号No.1に近似する。上下面は茶褐色の酸化土砂付着。横断面形は底面が丸く、火窟の形状を残す。厚みは不均一で、吹溜り側は肥大し、こちらが含鉄部分となる。但し含鉄部分は錆化。上面の局部に赤黒鉄錆汁を滲ませる。

(2) マクロ組織:写真6の④に示す。断面左側の明白色部に錆化鉄が遺存する。右側の滓部は中小の気孔を発するが、緻密質で大きな偏析はない。

(3) 顕微鏡組織:写真6の⑤～⑧に示す。⑤は付着鍛造剥片で0.1mm未満の3層構造剥片である。⑥は錆化鉄で風化侵食が激しくて、金属鉄組織の痕跡も留めず、ゲーサイト(goethite:α-FeO(OH))となる。⑦は付着木炭片である。鍛冶炭の可能性が高いが樹種は不明。⑧は鉄滓の鉱物相でウスタイト+ファヤライト組成であった。高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓の晶癖が捉えられた。

(4) ピッカーズ断面硬度:写真6の⑧に白色粒状結晶の硬度測定印痕を示す。値は366Hvと低値を呈した。文献硬度値の範囲から外れた風化による異常値となる。本来は446～503Hvに収まる鉱物相(ウスタイト)と見受けられる。

(5) 化学組成分析:表3に示す。前述資料No.1よりも若干純度の低い鉄素材を使用した鍛冶である。全鉄分(Total Fe)が46.80%、造滓成分25.22%を含む。矽鉄特有成分の二酸化チタン(TiO₂)0.19%、バナジウム(V)0.01%、酸化ジルコニウム(ZrO₂)0.01%などチタン濃度僅かに高めとなり、酸化マンガン(MnO)0.06%は低下し、銅(Cu)は変化なし。成分的にも高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓に分類される。

No.3 被熱炉壁片?

(1) 肉眼観察:鋳造溶解炉の炉壁破片であろうか。内面は酸化雰囲気から局部的に小豆色発色部をもち、1～5mm厚みのガラス化と発泡がみられる。外面はスサ状痕跡が顕著で、最表層は剥落の可能性ある。現存厚みは約20mmで炉壁厚みは当然もっと増加する。ガラス化部分は鉄錆が付着するが、もし溶解炉としても2次付着錆もあって鉄・銅の判別は難しい。胎土は精製されている。耐熱対策の石英混入はみられない。

(2) マクロ組織:写真7の①に示す。断面の上部が被熱ガラス化部分である。溶解炉であれば炉頂側の溶融ガラス化の軽度部分が想定できる。しかし、実測図の緩い円弧をみれば大口径送風管の可能性も看過できない。胎土の精製度からみて土器転用鍛冶炉壁によるガラス化を考えたが、外面のスサ状痕跡はこちらを否定せざるを得ない。

(3) 顕微鏡組織：写真7の②はガラス化最表層に鍛造剥片を付着する。素地を形成する粘土鉱物は加熱変化を起しムライトを生成しているが、小粒の石英・長石類には亀裂が無い。1000℃前後の被熱温度が想定される。③はムライトの生成を示す。被熱度の高い表層部と溶融組織に大差がない。鉄溶解炉の炉壁は否定的ながら、銅になると溶融点が降下するので、望みを保つ。

(4) X線回折結果：図107に示す。ガラスと石英が主要な相である。クリストバライト (cristobalite: SiO_2) とムライト (mullite: $3\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{SiO}_2$) を作る。花崗岩質の炉材が被熱した場合、1000℃付近でカリオンからムライトが生成する反応が始まる^(註4)。一方、石英は1027℃付近でクリストバライトへ転移する^(註5)。被熱温度は1000℃をやや上回る程度であろう。

(5) 化学組成分析：表3に示す。全鉄分 (Total Fe) は3.58%と低値で、鉄系物質の影響は少ない。二酸化珪素 (SiO_2) 71.50%、酸化アルミニウム (Al_2O_3) 13.95%、酸化ナトリウム (Na_2O) 0.78% は、やや風化した花崗岩の組成である。二酸化チタンは0.66%、バナジウム0.02%、二酸化ジルコニウム0.04%など自然界の砂鉄混入はわずかに認めれる。括目すべきは銅 (Cu) の0.03%で無視できない。銻銅に関係する炉壁もしくは送風管あたりを視野に入れておくべきだろう。

No.4 ガラス質滓

(1) 肉眼観察：平面は不整楕円形状の発泡ガラス質滓で、38.4gの小型品。大半が灰色及び黒色ガラス質滓ながら重量感をもつ。茶褐色(鉄錆?)側より供試材を採取した。木炭の噛み込みも認められない。

(2) マクロ組織：写真7の④に示す。断面は白黒色ガラス化斑状の発泡を呈する。該品は鍛冶滓特有の白色粒状鉱物相は認められない。純然たるガラス質滓である。

(3) 顕微鏡組織：写真7の⑤~⑧に示す。⑤は非晶質ガラス地に黒色気孔をもつ発泡部分である。ガラス地には⑦⑧にみられる淡灰白色の不定形状の結晶が備かながら認められる。

(4) ビッカース断面硬度：写真7の⑥は黒色ガラス地の硬度測定の変痕である。値は576Hvが得られた。ガラスの文献硬度値は639~884Hvである。下限を遥かに下回るが非晶質なので、ガラス以外に何物にも特定できない。⑧はガラス地に晶出した不定形の淡灰白色結晶の硬度測定の変痕である。値は121Hvと頗る軟質となる。雲母類ではなかろうか。

(5) 化学組成分析：表3に示す。全鉄分は3.78%と低値である。68.19% SiO_2 -12.56% Al_2O_3 -5.61% K_2O は前述 NO.3資料に準ずる。流紋岩質の組成としておきたい。該品の銅は0.01%と低減値である。

No.5 発泡ガラス質楕形滓

(1) 肉眼観察：平面が不整楕円形状の発泡ガラス質楕形鍛冶滓である。ほぼ完形品で小型の98.8gを測る。上面左側は灰色ガラス質の滑らか肌、中央は発泡瘤状突起の白黒斑模様を呈する。上下面は木炭痕を残して、下面はより著しい。

(2) マクロ組織：写真8の①と⑥の2ヶ所の断面を示す。5-1は左側滑らかガラス部分、5-2は中央発泡瘤状突起部分である。両者の溶融ガラス質鉱物相は大差ない。

(3) 顕微鏡組織：写真8の②~⑤は5-1断面である。②③は黒色ガラス地に微細な明白色金属鉄粒が点在する。④⑤は凝集気味金属鉄粒をナイトル (5%硝酸アルコール液) 腐食 (etch) している。白色フェライト (ferrite: α -鉄、純鉄) 素地に極く微量の黒色層状のパーライト (pearlite: フェライトとセメントタイトの共析組織) を析出した亜共析鋼である。パーライトの面積比により炭素量の推定が可能となる。該品は炭素量が0.01%以下の極軟鋼に分類される。5-2断面を⑦~⑨に示す。こちらはガラス素地に銹化物のゲーサイト (goethite: α - $\text{FeO}(\text{OH})$) が認められる。淡灰白色の粒状から凝集しつつ

あるフェライト錆化物。

(4) ビッカース断面硬度：写真8の⑤は5-1断面に晶出した金属鉄粒の硬度測定の影響を示す。値は177Hvが得られた。製造直後のフェライト素地に比較すると硬質である。埋蔵鉄は時効にかかり内部変化がみられた。⑥は5-2断面の錆化鉄粒の硬度圧痕を示す。値は532Hvを呈した。この値は参考値であり特別の意味はない。

(5) X線回折結果：5-1断面側の解析図を図108に示す。ガラス (glass) と石英が主要な相である。微量の雲母 (黒雲母あるいはイライト) とカリ長石 (K-feldspar: $K_2O \cdot Al_2O_3 \cdot SiO_2$) を伴う。ムライトとクリストバライトが生成している。針鉄鉱 (ゲーサイト) および鱗鉄鉱 (lepidocrocite: γ -FeO(OH)) の両種の水酸化鉄は遺物の埋没後、鉄系遺物の酸化 (錆化) によって生じたものであろう。5-3 (瘤部分) の解析図は図109に示す。ガラスと石英が主要な相である。著量のクリストバライトと少量のムライトが生成している。試料は弱い磁性を示すので、微量の磁鉄鉱が存在すると推定される。

(6) 化学組成分析：表3に5-1 (滑らかガラス質部分) の分析結果を示す。50.22% SiO_2 ・9.19% Al_2O_3 ・3.94% K_2O の流紋岩質組成に酸化鉄 (5.75% FeO + 17.75% Fe_2O_3) を加えたものと見なせる。該品は鍛冶滓組織のウスタイト (FeO) + ファヤライト ($2FeO \cdot SiO_2$) などの鉄鉱物は検出されず、化学組成も流紋岩質組成の原組成とあまり変化していない。また鍛冶炉粘土に混入した砂鉄特有元素の0.19% TiO_2 、0.01% V 、0.01% ZrO_2 など低濃度である。流紋岩質組成は顕著であった。

No.6 再結合滓

(1) 肉眼観察：平面は不定形状で雑多遺物破片の集合体で、再結合滓の可能性をもつ。鉄滓鉱物破片をはじめ、ガラス質滓や炉材粘土 (羽口破片を含む) 更には鉄器片や鍛造剥片など見受けられる。全体に重量感に欠け、緻密さがなくスカスカの強い遺物で75gを測る。底面から側面にかけて、1辺10mm前後の小礫が多くみられる。

(2) マクロ組織：鉄滓鉱物を主体とする断面を6-1とし、黒色ガラス質滓や酸化土砂の多い6-2断面の2視野を観察している。写真9の①は6-1断面を示す。断面の左下部の明灰色部に滓組織が集中する。その右側は中核部が空洞化した風化鉄器の輪郭を留める。当滓部分は故鉄：iron scrap 処理滓の可能性が高い。一方、6-2断面の⑥は表層に鍛造剥片を付着し、木炭を噛み込み、錆化鉄器片 (両刃刀子片) などを酸化土砂が固着する。

(3) 顕微鏡組織：6-1断面を写真9の②～⑤に示す。②③は白色粒状結晶ウスタイトの凝集晶出である。故鉄 iron scrap 処理滓の晶癖が大過ない。④は右下に明白色方形の棒状鉄器断面を残し、その周囲をウスタイト + ファヤライト相で囲まれる。当組織も故鉄処理の片鱗をのぞかせる。⑤はウスタイトの島状晶出で作業時の温度不均一と解釈できる。

次に6-2断面を写真9の⑦～⑨に示す。⑦は付着鍛造剥片である。被膜は3層構造 (外層へマタイト、中間層マグネタイト、内層ウスタイト) をもち、鍛錬鍛冶の作業を裏付ける。⑧は溶融しきれなかった故鉄錆化物で風化が顕著。⑨は噛み込み木炭である。

(4) 化学組成分析：表3に示す。全鉄分 (Total Fe) は31.87%に対して、錆化鉄の酸化第2鉄 (Fe_2O_3) を30.59%と多く含む。造滓成分は左程多くなくて45.67%に留まる。これらは本来の鍛冶滓成分より趣を異にして、特に酸化第1鉄 (FeO) の13.37%は濃度が低い。有機物を多く含む、炭素 (C) 量の1.12%と高値は再結合滓を裏付ける。

No.7 発泡ガラス質滓

(1) 肉眼観察：平面は不定形状の発泡ガラス質滓である。破面はなく45g弱の小塊。上面は2cm大の灰白色発泡（瘤）がみられる。下面は黒色ガラス素地に赤褐色鉄銹を留める。供試材は左手ガラス質部と灰白色発泡（瘤）部からX線回折用としてのみ採取した。

(2) マクロ組織：写真10の①に示す。断面は灰白色発泡部と黒色ガラス質滓に二分される。後者は2種の鉱物相の晶出をみた。

(3) 顕微鏡組織：写真10の②～⑤に示した。②③は黒色ガラス質滓の表層部である。ガラス素地には淡灰色長柱状結晶のファヤライト (fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) が晶出する。800℃前後の温度が想定できる^(注6)。また、視野を変えると④⑤にみられる白色多角形結晶のマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) が少量認められた。1200℃前後が推定される。温度のバラツキにもとづく現象である。

(4) ビッカース断面硬度：写真10の⑤は白色多角形結晶の硬度測定印痕である。硬度値は581Hvが得られた。マグネタイト文献硬度値は505～592Hvで、この範囲に収まる。

(5) X線回折結果：No.7-1のガラス質滓の回折図を図110に示す。主にガラスからなるが、著量の石英とクリストバライトおよび少量のムライトが含まれる。この他に微量の磁鉄鉱 (magnetite: Fe_3O_4) が存在する。顕微鏡組織との矛盾はない。ただしファヤライトの未検出は5%以下の量的問題を抱えているからであろう。次に7-2の瘤の発泡部分の回折図を図111に示している。ガラスと石英が主要な相で、クリストバライトとムライトを伴う。7-1のガラス質滓に近似する。発泡瘤は火山岩ガラスの投入で被熱膨張した状態を示している。

(6) 化学組成分析：表3に示す。7-1黒色ガラス質滓の化学組成である。全鉄分が4.05%と低値で、鍛冶鉄の影響は少なく、投入火山岩組成を伝える。71.72% SiO_2 -12.30% Al_2O_3 -3.89% K_2O は、流紋岩質の組成といわれる（井澤英二先生コメント）。黒色ガラス質滓や灰白色発泡瘤は流紋岩質火山ガラスに由来する。

No.8 鉄滓

(1) 肉眼観察：本来は楕円形状で半分に割れた欠損品。小型品で50g弱を測る。酸化土砂に覆われるが上面の地肌は風化により一度むけて緑灰色を呈する。上面は比較的滑らかで、下面は多少の凹凸をもつ。破面は緻密質で1～3mm径の気孔がみられる。

(2) マクロ組織：写真10の⑥に示す。小気孔が点在するが緻密質で、鉱物相の偏析は殆んど認められない。

(3) 顕微鏡組織：写真10の⑦⑧に示す。⑦は淡灰色盤状結晶のファヤライトを主とし、白色粒状結晶のウスタイトを伴う。鉄器製作に際して加熱時の酸化目減り防止を目論んだ低温素延べ鍛錬鍛冶滓の晶癖である。⑧は未凝集金属鉄粒である。ナイタル腐食でフェライト単相が現われた。炭素 (C) を殆んど含まない極軟鋼が確認できた。

(4) ビッカース断面硬度：写真10の⑦は淡灰色盤状結晶の硬度測定印痕である。硬度値は693Hvが得られた。ファヤライトの文献硬度値は655～713Hvで、この範囲に収まる。⑧はフェライト単相の硬度測定印痕である。値は123Hvと現代鉄であれば70～80Hv程度が想定されるものが硬質であった。時効による影響であろう。

(5) 化学組成分析：表3に示す。全鉄分は50.62%に対して造滓成分が30.96%の組成である。砂鉄特有成分は0.22% TiO_2 、0.01% V、0.01% ZrO_2 の低値傾向は鍛冶滓組成に見做せる。0.21% MnOや0.01% Cuの低濃度は砂鉄由来素材の鍛冶操業排滓と認定できる。

まとめ

個々のまとめを表4に示す。特筆すべきは徳川初期に属する大坂城跡（13-1調査区）から検出された鍛冶炉周辺（2053、2033、2034、2036）からは鍛錬鍛冶滓（高温沸し鍛接、低温素延べ）らに共伴して、「発泡ガラス質滓」が出土する。白黒斑模様の特異な滓である。この「発泡ガラス質滓」は他遺跡ではあまりみかけぬ遺物であった。物質は火山ガラス塊と考えられる。鉱物相はガラス(glass)で、化学組成は71～72% SiO₂・12～14% Al₂O₃・2～4% K₂Oから流紋岩質に帰属する。原物質は流紋岩質火山ガラスと、X線回折結果から井澤英二先生が考察された。「発泡ガラス質滓」は鍛冶炉内の内容物の急速冷却を目論んだ除熱排出滓に想定できる。鍛冶操業における新炭充填は絶対条件となる。徳川新政権下の新技術開発だったのだろうか。鍛冶炉のフル回転操業の証が「発泡ガラス質滓」と評価できた。因みに古墳時代から古代にかけて炉内急速冷却を計ったと考えられる礫噛み込み滓が官衙鍛冶工房から出土している。その事例を以下に挙げておく。

(1) 岡山県鬼城山^(註7)、(2) 鳥根県寺田I遺跡^(註8)、(3) 鳥取県坂長第6遺跡^(註9)、(4) 群馬県諏訪ノ木(VI)遺跡^(註10)

日鉄住金テクノロジー株式会社
八幡事業所・TACセンター
大澤正己

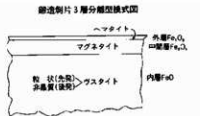
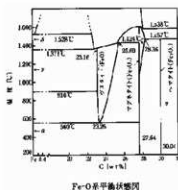
注

(1) 大澤正己・井澤英二2012「大坂城跡(NW10-4次調査)出土鍛冶関連遺物の分析調査」『難波宮址の研究』第18 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所

(2) 鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌(金肌)やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色(光沢を発する)へと変化する。粒状滓の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を推える上で重要な遺物となる。

鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト(Hematite:Fe₂O₃)、中間層マグネタイト(Magnetite:Fe₃O₄)、大部分は内層ウスタイト(Wüstite:FeO)の3層から構成される。このうちのヘマタイト相は1450℃を越えると存在しなく、ウスタイト相は570℃以上で生成されるのはFe-O系平衡状態図から説明される。

(3) 日本学術振興会製鉄第54委員会(1968)『焼結鉱組織写真および識別法』日刊工業新聞社 ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは505～592Hv、ファイヤライトは655～713Hv、ヘマタイト



トは1020～1084Hv、ガラスは639～884Hvの範囲が提示されている。また、ウルボスピネルの硬度値範囲の明記がないが、マグネタイトにチタン(Ti)を固溶するので、600Hv以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ(Al)が加わり、ウルボスピネルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため700Hvを超える値では、ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体の可能性が考えられる。

(4) 吉木文平(1959) 鉱物工学、技法堂：東京、P. 426～431

(5) Moseman, M. A. and Pitzer, K. S. (1941) Thermodynamic properties of the Crystalline forms of silica. Journal of American Chemical Society, Vol. 63, No.9, P.2348～2356.

(6) ファヤライトの低温安定に関する実験論文と筆者(大澤)はホーロー焼成実験から割り出した推定温度である。

(6) -1 Womes, D. R. and Gilbert, M. C. (1969) The fayalite - magnetite - quartz assemblage between 600° and 800°C American Journal of Science, Schairer Vol. 267 - A, p. 480 - 488

水熱反応実験で600°のファヤライト生成を示す。

(6) -2 O'Neill, H. S. J. C. (1987) Quartz - Fayalite - iron and quartz - fayalite - magnetite equilibria and the free energy of formation of fayalite (Fe₂SiO₄) and magnetite (Fe₃O₄). American Mineralogist, Vol. 72, p. 67 - 75.

電気化学反応で1000K (700°C) 前後のファヤライト生成を確認。

(6) -3 Roedder, E. (1952) A reconnaissance of liquidus relations in the system K₂O · 2SiO₂ - FeO - SiO₂. Amer. Jour. Science, Bowen Volume, P. 435 - 456

金属鉄と平衡する条件で、800°Cまでファヤライト生成が「推定」されている。(カリの存在でファヤライトの生成温度が低下する)

(7) 大澤正己2013「鬼ノ城山出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『史跡鬼城山2』「甕る！古代吉備の国～謎の鬼ノ城」城内確認調査 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 236 岡山県教育委員会

(8) - ①大澤正己・鈴木瑞穂2007a「寺田1遺跡2区出土鍛冶・鋳造遺物の金属学的調査」：雲南市教育委員会編『ゴマボリ遺跡・寺田1遺跡』一尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7-第2分冊、雲南市埋蔵文化財調査報告書2、国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所

②大澤正己・鈴木瑞穂2007b「寺田1遺跡5区出土製鉄関連遺物の金属学的調査」：雲南市教育委員会編『ゴマボリ遺跡・寺田1遺跡』一尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7-第2分冊、雲南市埋蔵文化財調査報告書2、国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所

(9) 大澤正己・鈴木瑞穂2009「坂長第6遺跡出土鍛冶・鋳鋼関連遺物の金属学的調査」：(財)鳥取県教育文化財団編『坂長第6遺跡<一般国道181号(岸本バイパス)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書11>』(鳥取県教育文化財団調査報告書111)

(10) 大澤正己2006「諏訪ノ木(VI)遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」：財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編『諏訪ノ木VI遺跡渋川都市計画道路3.3.1号中村上郷線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第361集、群馬県渋川市土木事務所

表4 出土遺物の調査結果のまとめ

番号	調査番号	遺物名	遺物名称	発見年代	調査場所・検出地	化学組成 (%)				所産				
						Total FeO	FeO	SiO ₂	MnO					
No.1	282	第4層上面 70土瓦	被印書 赤鉄粉磁器片	徳川初期 (17世紀後半)	sw, f, mt, bc, g, 付着磁器片	58.02	38.87	1.74	0.07	0.01	0.1	13.87	0.02	高濃赤土磁器・磁器磁器片
No.2	293	第4層上面	赤鉄粉磁器片	徳川初期 (17世紀後半)	sw, f 付着磁器片・木皮片	46.6	47	1.05	0.19	0.01	0.06	25.22	0.02	高濃赤土磁器・磁器磁器片
No.3	265	第4層上面	磁器磁器片?	徳川初期 (17世紀後半)	sw, g, s, ml, dss, 付着磁器片	3.85	2.87	1.78	0.66	0.02	0.09	90.34	0.03	磁器磁器片もしくは高濃赤土磁器片
No.4	445	第6層上面 2019土瓦	ガラス磁器	徳川初期	dss, s, h, f, cm, s, st, lo, h, s, f, s, c, ml, glass	3.78	3.34	3.71	0.15	0.01	0.22	91.43	0.01	流紋岩質組成のガラス磁器(火山ガラス)
No.5-1 (ガラス)	464	第6層上面 2019土瓦	粉部ガラス質粉部	徳川初期	dss, st	17.06	17.7	3.45	0.19	0.01	0.3	67.68	0.01	流紋岩質組成のガラス磁器(火山ガラス)
No.5-2 (磁器)	467	第6層上面 2019片周辺	再結合層	徳川初期	sw, dss, f, st	31.87	30.59	2.16	0.27	0.02	0.21	45.67	0.01	磁器系高濃赤土磁器(多種磁器磁器物の集合)磁器磁器片を含む
No.7-1	466	第6層上面 2011瓦込み	赤土ガラス質	徳川初期	st, 付着磁器片・木皮	4.06	3.65	2.03	0.27	0.01	0.13	91.19	0.01	磁器系高濃赤土磁器(火山ガラス)
No.7-2	741	第6層上面 2119土瓦	磁器	徳川初期	dss, mt, s, ml, s, c, ml, dss, f, w, h	50.63	49.34	3.21	0.22	0.01	0.21	30.99	0.03	流紋岩質組成のガラス磁器(火山ガラス)

w: white FeO, f: fayalite (FeO), mt: magnetite (Fe₃O₄), h: hematite (FeO), q: quartz (SiO₂), se: sericite (微細な矽片状鉱物), c: cristobalite (SiO₂), ml: mullite (3Al₂O₃・2SiO₂), g: glass (SiO₂・Al₂O₃・CaO・MgO・Na₂O・H₂O), f: k-feldspar (KAlSi₃O₈), K₂O・Al₂O₃・6SiO₂), m: mica (雲母), st: stishovite (α-FeO), lo: lepidocrocite (γ-FeO), h: hematite (α-FeO), dss: dss (鉄燐)

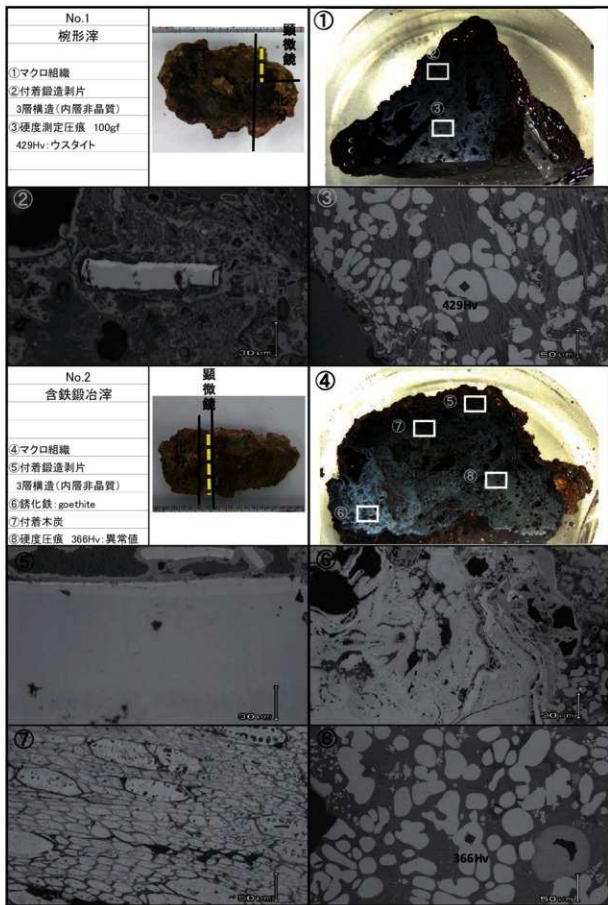


写真6 顕微鏡組織 1

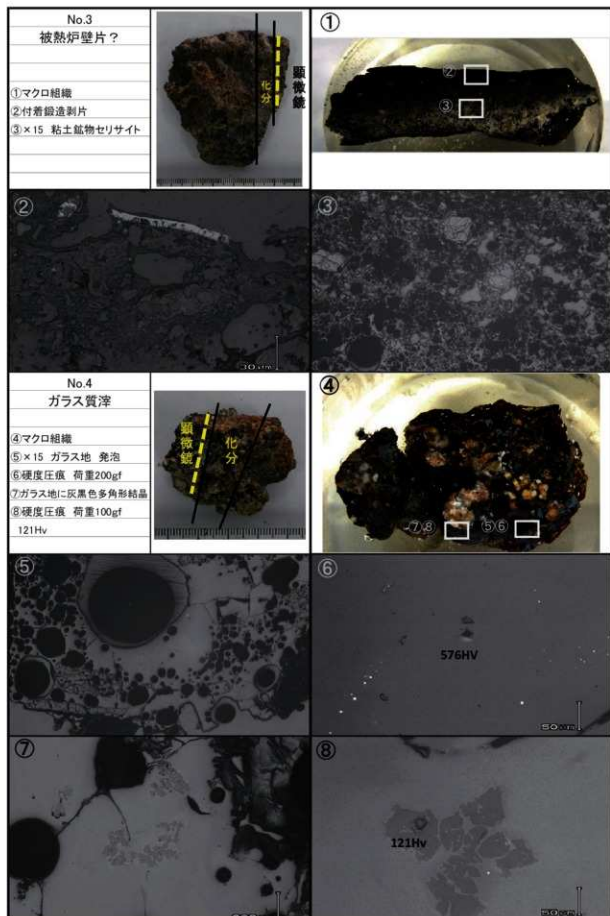


写真7 顕微鏡組織2

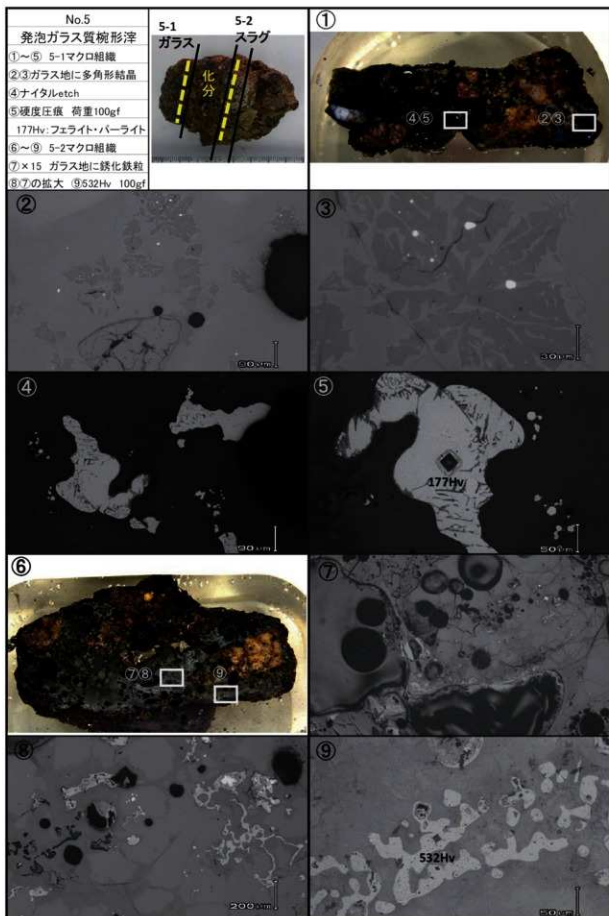


写真8 顕微鏡組織3

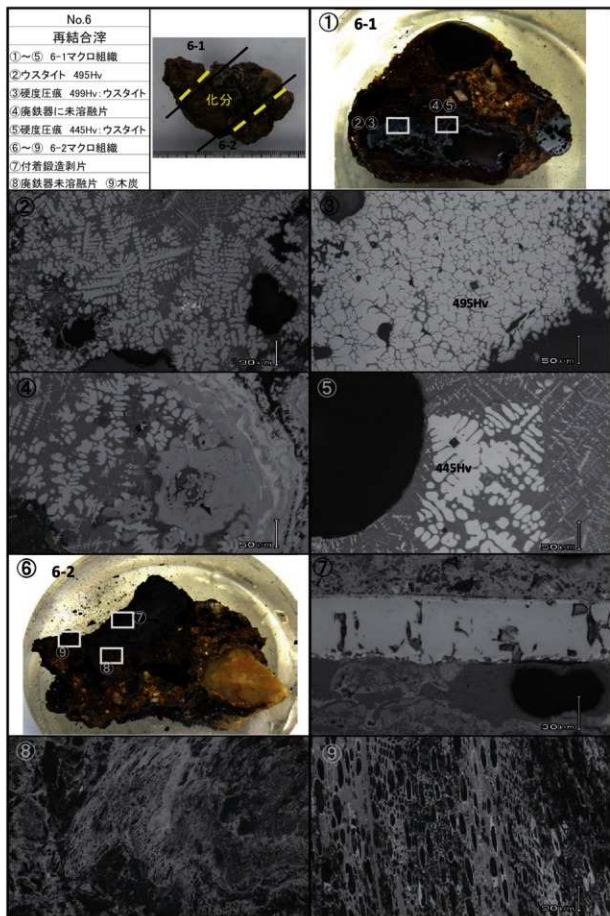


写真9 顕微鏡組織4

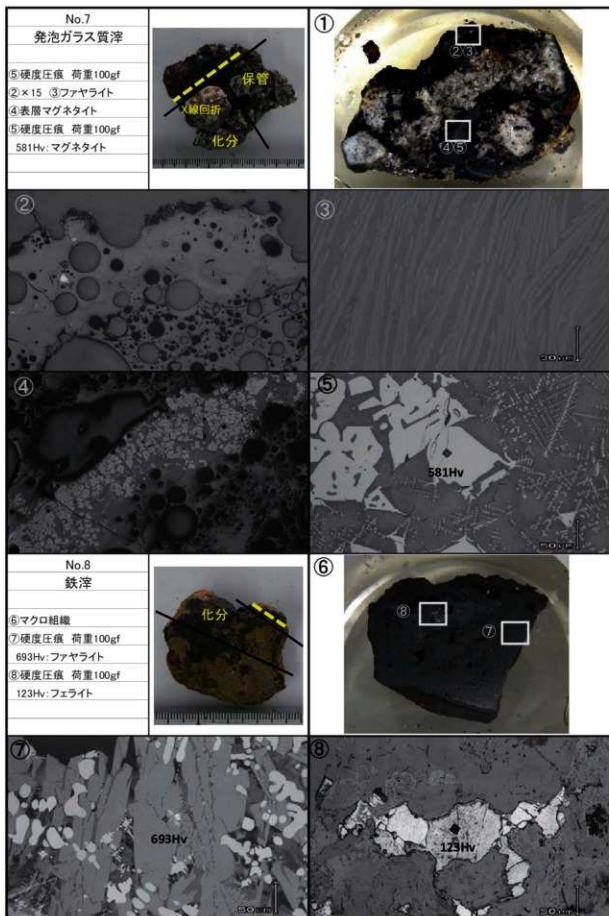


写真10 顕微鏡組織5

第2節 金属器生産関連遺物のX線回折(XRD)分析

1. 試料と分析条件

大坂城跡13-1出土の試料についてX線回折(XRD)で鉱物組成を調査した。以下の粉末試料6点である。

- No. 1 椀形滓：粉末は暗褐色で磁性は強い。
- No. 3 被熱燻壁片？：粉末は灰色で磁性は微弱である。
- No. 5-1 椀形滓(ガラス)：粉末は褐色で磁性は弱い。
- No. 5-3 椀形滓(瘤)：粉末は淡褐色で磁性は弱い。
- No. 7-1 ガラス質滓：粉末は淡灰色で磁性は微弱である
- No. 7-2 ガラス質滓(瘤)：粉末は灰白色では磁性は極微弱である。

X線回折(XRD)には、九州大学地球資源工学部門のX線回折装置(理学Ultima IV)を使用した。X線はCu K α 1(40 kV, 20 mA)を用い、全自動モノクロメータ、発散スリット2/3°、散乱スリット2/3°、受光スリット0.3 mm、データ取得幅0.02°(2 θ)、走査速度2°/minの条件で2.65°(2 θ)を走査範囲とした。(注：X線回折線図に認められる2 θ = 44.5°のピーク[図中で*を付す]は、アルミニウム製試料保持枠に由来する混入回折線である。)

2. X線回折結果

No. 1 (椀形滓)：ウスタイト、磁鉄鉱および針鉄鉱(ゲーサイト)を主とし、少量のヘルシナイト、石英を伴う(図106)。

No. 3 (被熱燻壁片?)：ガラスと石英が主要な相である。クリストバライトとムライトが生成している(図107)。

No. 5-1 (椀形滓(ガラス))：ガラスと石英が主要な相である(図108)。微量の雲母(黒雲母あるいはイライト)とカリ長石を伴う。ムライトとクリストバライトが生成している。針鉄鉱(ゲーサイト)および鱗鉄鉱の両種の水酸化鉄は遺構の埋没後、鉄系遺物の酸化(錆化)によって生じたものであろう。

No. 5-3 (椀形滓(瘤))：ガラスと石英が主要な相である(図109)。著量のクリストバライトと少量のムライトが生成している。試料は弱い磁性を示すので、微量の磁鉄鉱が存在すると推定される。

No. 7-1 (ガラス質滓)：主にガラスからなるが、著量の石英とクリストバライトおよび少量のムライトが含まれている(図110)。このほか、微量の磁鉄鉱が存在する。この磁鉄鉱は、格子定数(a = 8.385 Å)からマグヘマイト成分を25%程度含んでいると推定される。

No. 7-2 (ガラス質滓(瘤))：ガラスと石英が主要な相で、クリストバライトとムライトを伴う(図111)。

3. 考察

No. 1 (椀形滓)はウスタイトを主として、著量の磁鉄鉱と針鉄鉱を伴っている。このほか少量のヘルシナイトと石英が検出された。X線回折ではガラス(非晶質物質)の存在は認められない。

No. 3 (被熱燻壁片?)ガラス質で、石英とクリストバライト、ムライトが検出されている。試料の顕微鏡写真(写真7②③)からは、0.1mm弱サイズの砂状粒子が認められ、化学組成(SiO₂71%)を考慮すれば、マサ土を原料とした土製品が被熱したものと考えられる。

今回の調査で出土したガラス質滓は、2012年に報告したNW10-4次調査出土の礫付着滓(582と583)の2試料と酷似している。いずれも発泡した火山ガラス塊と考えられる。今回のガラス質滓の

うち No. 7-1 は、全鉄が 4 % 程度と低い値で、鉄系物質の影響が少ないことから、化学組成は元の火山岩の性格を保持していると考えられる。化学分析値からは、珪酸 (SiO_2) 71-72 %、アルミナ (Al_2O_3) 12-14 %、カリ (K_2O) 2-4 % と典型的な流紋岩質の組成である。原物質は流紋岩質火山ガラス (黒曜石、パーライトなど) である^(註1)。

椀形滓 No. 5-1 の組成は、流紋岩組成に酸化鉄 ($\text{Fe}_2\text{O}_3 + \text{FeO}$) を 20 数 % 加えたものと見なせる。また、No. 5-3 および No. 7-2 も X 線回折の結果からはファヤライト、ウスタイトなどの鉄鉱物は検出されず、化学組成も原組成 (流紋岩質組成) とあまり変化していないと推測される。磁性も弱～微弱であり、鉄分 (酸化鉄) はせいぜい 10 % 程度と予想される。

上記の火山ガラスが炉内で滓となる過程で、クリストバライトとムライトが生成している。このことから、1000℃以上の被熱温度^(註2)が推定される。ただし、著量の石英が残存していることから、温度は 1100℃をこえてはいない、あるいは、短時間の被熱であったと考えられる。

前回 (2012 年) 報告したように、細礫状の火山ガラスを加熱した場合、600℃前後で発泡が始まり、800-900℃で短時間 (数分間) 加熱することにより、急激に膨張 (容積は 4 ~ 20 倍になる) する^(註3)。今回の試料 (No. 5 および No. 7) でも、火山ガラスが被熱膨張して相互に熔着した状態を示している。

九州大学名誉教授
井澤英二

注

(1) 2012 年の報告では、デイサイト質火山ガラスと考えたが、珪酸 (SiO_2) の値から流紋岩質火山ガラス (黒曜石、パーライトなど) と訂正する。参考のため、珪酸 (SiO_2) の含有量 (質量 %) にもとづく火山岩の簡単な分類を付記しておく: 玄武岩 45-52 % (あるいは 53.5 %)、安山岩 52-62 %、デイサイト 62-70 %、流紋岩 70-77 %。

(2) 石英がクリストバライトへ転移する温度は 1,027℃である (Moseman, M.A. and Pitzer, K.S. (1941) Thermodynamic properties of the crystalline forms of silica. Journal of American Chemical Society, Vol. 63, No. 9, p.2348-2356.)。

(3) 神津俊祐 1930, 「黒曜石 (十勝石) の岩石学的研究より浮石の成因を論ず」: 岩石礦物礦床學第三卷第一號, p. 1-11

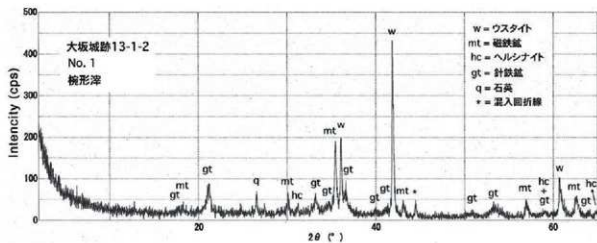


図106 試料 No. 1、椀形滓の X 線回折図

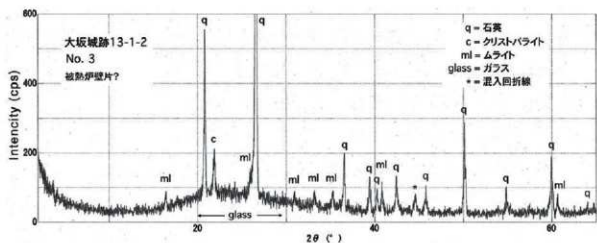


図107 試料 No. 3、被熱炉壁片?の X 線回折図

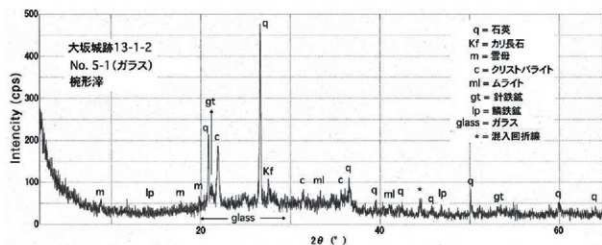


図108 試料 No. 5-1、椀形滓 (ガラス) の X 線回折図

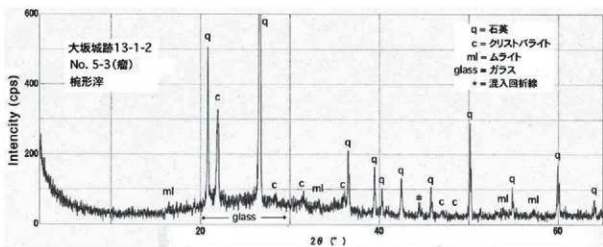


図 109 試料 No. 5-3、楕形滓 (瘤) の X 線回折図

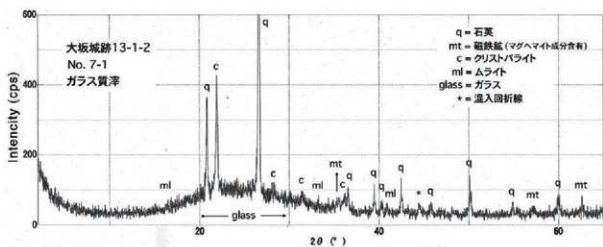


図 110 試料 No. 7-1、ガラス質滓の X 線回折図

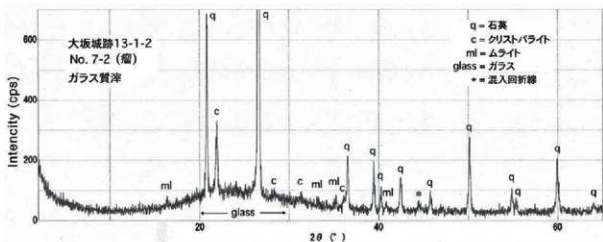


図 111 試料 No. 7-2、ガラス質滓 (瘤) の X 線回折図

第5章 総括

今回の調査では周辺の調査で検出されている東西方向の開折谷に続く谷の北肩を検出した。谷の北側の丘陵部は隣接する図1-6A地区同様、近代の削平により遺構の遺存状況は不良であろうと思われていたが、当初の予想に反して、2区西半では良好に遺存していた。このことは、当調査区が西側に向かって低くなっており、徳川期以降の削平を免れたことに起因する。

古代では、掘立柱建物を検出した。建物は谷の肩際で検出しており、当該期の丘陵部は更に、南側に張り出していたことが予想される。検出した建物は3棟のみであるが、この範囲は第8-2層の整地層に覆われていたために遺存したもので、本来は丘陵上に建物が広がっていた可能性が高い。建物は軸が南北方向を指向するもの、西に軸が振るものがみられた。各建物の時期は出土遺物が希薄であり、確定できなかったが、周辺の調査成果を踏まえれば、西に軸が振る建物は図1-5B・6A地区で検出された建物との類似性が指摘できる。建物群は5B・6A調査区の西半では確認されていないが、今回の調査成果を加味すれば、広い範囲に分布していたことが推測できる。これらの建物は難波宮下層建物群と同様の時期と考えられる。南北方向を指向する建物はそのピットの規模等からは難波宮との関連が窺われる。

豊臣期では3面の遺構面を確認し豊臣期1、2を豊臣後期に、豊臣期3を豊臣前期の遺構面とした。当調査区を特徴づける遺構として谷肩部、及び調査区東端の区画施設があげられる。この区画施設は3時期を通して変わることはなく、更に言えば、徳川初期においても踏襲されている。ただし、細部をみれば、南北方向の軸の変化を指摘することができた。前期の区画は地形に規制されたものと考え、後期のそれは広範囲にわたって計画的に屋敷地を配するための変更点とみたい。

豊臣後期の区画について、周辺調査区との関連を若干整理することとしたい。図112は周辺調査区の豊臣後期の遺構面である^(註1)。地形的には大きく北側の丘陵部、南側の低地部に区分することができる。南側の低地部は三の丸の造成に伴う大規模な整地層によって谷の底部は埋め立てられ、南側の高い部分とほぼ同じ高さに平坦化されている。しかしながら、当調査区の位置する丘陵部とは未だ、3~5mの比高を有している。一方、北側の丘陵部は西に向かって低くなり、1区西端では段をもって西側に落ちる。

まず、当調査区の東端の南北の区画施設をAとし、この延長上をみると低地部の柵列に一致する(1A調査区)。この柵列の東には2本の平行する溝が延びる(A[〓])。徳川初期の遺構面では、当調査区の東側に隣接して、丘陵部から低地に降りるスロープ状の道が検出されており(5B調査区)、豊臣後期のA-A[〓]は道として機能し、それを踏襲したものと考えられる。こういったスロープ、あるいは階段施設が豊臣後期段階にあったのか、再検証が必要である。

次に丘陵部に目を向けると、Aより東側約32.5mの5B・6A調査区で南北方向の区画施設をみるることができる(B)。当調査区と同様、溝と柵列による区画施設となっている。この区画施設は2列平行しており、Aと同様の道路とみる事が可能であろう。Bの東側にやはり32.5mの位置にCを引くと、北側の柵列と一致する。これより西側は遺構の残存が不良で、良く分からない。東西幅約26mの類似した区画を復元することができる。また、低地部へ向かう肩部の形状をみると、この区画に対応するように凹凸になっており、当調査区でも南東部でコーナーが作りだされている。このことから、肩口は丘陵上の区画に合わせて加工されたと考えられることができる。

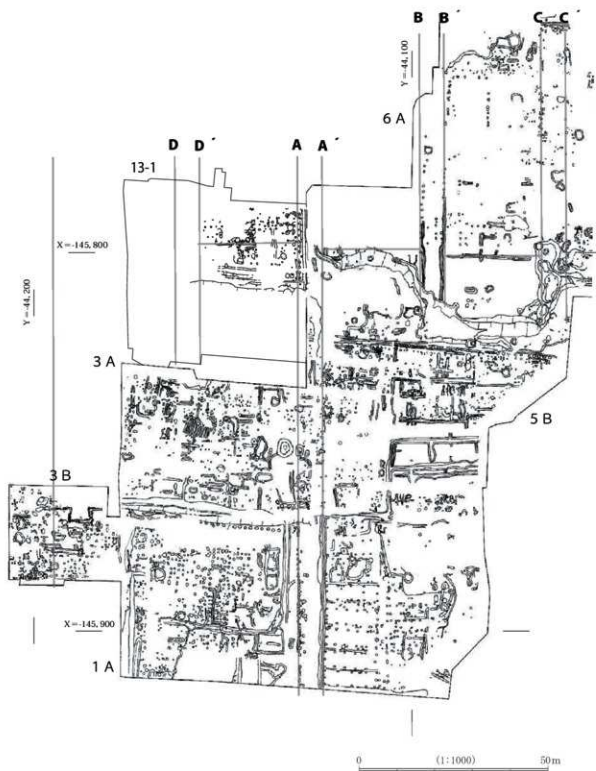


図112 調査地周辺豊臣後期の遺構面

ここで更に細かくみると、東西方向の2267溝と同じように、B¹ - C間にも東西方向の溝が位置する。このラインより北側が区画内の主要建物が存在した範囲にならうか。礎石を伴う柵列9がこれより南には延びないこともそのように考えれば理解しやすい。溝から谷までの範囲は遺構の分布がまばらであり、建物が存在しない空間地であった可能性が指摘できる。

次にAラインから西側について考えてみたい。当調査区では西側の1区では当該期の遺構は削平され、検出できなかった。しかし、AラインからBラインの距離と同様に、約32.5m西方にDラインをひくと第3層に削られてはいるものの、現状で約1mの段差を有する地点、徳川期の敷地境とほぼ一致する。これより西側は不明であるが、Aラインより約100m西側では谷町筋地下駐車場の調査で検出された三の丸外郭施設の可能性が指摘される塀が検出されており(市文協2002a)、関連が興味深いところである。

以上のように、丘陵部では東から西に向かって雛壇状に同規模の平坦面をつくりだしているものと考えられる。谷部は三の丸の造成に伴い大規模な盛土がなされ、広い平坦面がつくれ、屋敷地となっている。しかし、当調査区が位置する丘陵部とは3~5mの高低差は未だ存在している。こうした高低差がある中でも、丘陵上の南北の区画が低地部と一致していることは重要で、東西方向の区画は、もともとの谷地形にある程度規制されてはいるものの、三の丸南西部一帯に計画的な区画が施されたのではないだろうか。なお、Aの柵列は1A調査区の南に接するOS86-34調査区の北端で延長が確認されている(市文協2002b)。

周辺ではこれまで多くの調査が実施されている。これらの成果を今回は十分に検討できず、また、図112に示した各遺構との関連や前期との比較が不可欠である。また、これらの区画が更に大きな区画の中の小区画であるのかといった検討も必要となろう^(註2)。今回はこういった指摘にとどめ、検討を今後の課題としたい。

豊臣前期では堀の可能性のある2310堀状遺構の存在が重要である。前期の遺構、遺物が希薄であることから、この遺構を境に東側に屋敷地が存在する可能性が考えられる。また、谷肩部で検出した2426土坑は、当該期で最も古い遺構と考えられるが、その出土遺物が被熱した軒平瓦であり、これまで本願寺期とされる調査地点で出土している瓦と同じ意匠をもつ。周辺調査では本願寺期の様相は不明であるが、あるいは土坑の時期が遡る可能性を指摘しておきたい。

徳川初期では鍛冶工房として機能していたことが分かった。徳川期の大阪城再興時の状況を示すものとして、興味深い成果となった。また、同時期の鍛冶工房であるNW10-4次調査の出土鍛冶滓との比較から、同様の技術が使われていることが分かった。こういった技術が当該期の一般的なものであるのか、あるいは、大阪城周辺で特徴的なものであるのかは重要であり、今後の資料の蓄積が望まれるところである。

徳川前期以降では17世紀後半から途切れることなく遺構、遺物がみられた。当該期の様子を示す絵図は多く、城代屋敷あるいは京橋口御定番屋敷の敷地とされている(内田1980・大阪城天守閣2008第4章大阪市街図の中の大坂城)。調査地は現状では西側に石垣があり、大きく段差を有していたが、この段差は少なくとも江戸期に遡ることが分かった。調査地を境界に西側は町屋であったと考えられ、その区画は現在と同様であったことが指摘できた。また、礎石など、建物跡を復元できるような成果はなかったが、18世紀以降の廃棄土坑の分布から屋敷地の復元を試みた(第3章第2項参照)。18世紀後半~19世紀前半はほぼ同じラインに廃棄土坑が分布し、ほぼ同じ区画、利用状況であることが分かる。徳川期の厚い盛土によって、本来谷地形であった南側が高くなり、北側が低くなる地形の逆転が起きて

いる点が興味深い。この段差をもってひとつの敷地境となっていることが廃棄土坑の分布からも分かる。この高くなった範囲では17世紀～18世紀前半の土坑を検出することができなかった。特に3区では遺構面に達しなかった範囲や、大きな攪乱があったことも要因のひとつと考えられる。少なくとも、整地の結果、地形が逆転していることには、なんらかの意図があると考えられる。今回の調査成果では、その意図を推し量ることができなかったが、高くなった南側により主要な屋敷地があったのであろう。また、17世紀代の土坑は18世紀以降の土坑とその分布が異なっている点が指摘でき、これを境に土地利用が変化している可能性も考えられる。絵図や文献との比較をとおしての検討が今後の課題となった。

18世紀後半以降、その遺物量は爆発的に増加している。多量に消費された遺物は当時の生活を多く物語るものである。それにしても、その物量と多種多様さには圧倒される。今回は概要を示し、各遺構の時期を示すことに終始することとなってしまった。今後、これらの出土遺物についても、さまざまな視点からの研究材料として活用されることを期待してまとめたい。

注

(1) 大文セ2002 a 所収図を編集した。

(2) (松尾2014)で、大阪城南部法門坂一帯の道路には約250mの方画地割があり、三の丸の地割との関連が指摘されている。

主要参考文献

- ・ 赤松和佳 2002 「大阪府下出土の肥前陶磁について」『国内出土の肥前陶磁 西日本の流通をさぐる』九州近世陶磁学会
- ・ 市川 創・松田順一郎・小倉徹也・趙哲洋・辻本裕也・平田洋司 2014 「古墳境と人間活動の関係把握に向けて—大阪市上町台地北部を題材にして—」『大阪上町台地の総合的研究』公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所・大阪歴史博物館
- ・ 江戸遺跡研究会編 2001 「図説 江戸考古学研究事典」
- ・ 内田九州男 1980 「新出の寛永廟大阪城図について」『大阪城天守閣紀要』第8号 大阪城天守閣
- ・ 大阪市立大学・難波宮址研究会 1958 「難波宮址の研究」研究豫察報告書第二
- ・ 財団法人 大阪市文化財協会 1988 「大阪城跡」Ⅲ
- ・ 財団法人 大阪市文化財協会 1992 「難波宮の研究」第九
- ・ 財団法人 大阪市文化財協会 2002 a 「大阪城跡」Ⅳ
- ・ 財団法人 大阪市文化財協会 2002 b 「三ノ丸西部の調査」『大阪城』Ⅵ
- ・ 財団法人 大阪市文化財協会 2003 「広島藩大阪蔵屋敷跡」Ⅰ
- ・ 財団法人 大阪市文化財協会 2004 「広島藩大阪蔵屋敷跡」Ⅱ
- ・ 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所 2012 「難波宮の研究」第18
- ・ 大阪城天守閣 1993 「特別展 城下町 大阪」
- ・ 大阪城天守閣 2008 「テーマ展 描かれた大阪城・写された大阪城」
- ・ 大庭重信・清水和明 2010 「徳川初期の大阪城・城下町出土陶磁器の現状と課題」『関西近世考古学研究—消費地からみた国産陶磁器の出現と展開—』18 関西近世考古学研究
- ・ 大庭重信 2011 「大阪城・城下町の鍛冶生産—近世初頭の鍛冶遺構調査（NW10—4次）を中心に—」『関西近世考古学研究』19 関西近世考古学研究
- ・ 財団法人 大阪府文化財調査研究センター 1995 「大阪城跡の調査」5

- ・財団法人 大阪府文化財調査研究センター 1996 『大坂城跡の発掘調査』 6
- ・財団法人 大阪府文化財センター 2002 a 『大坂城跡発掘調査報告』 I
- ・財団法人 大阪府文化財調査研究センター 2002 b 『大坂城址』 II
- ・財団法人 大阪府文化財センター 2006 『大坂城址』 III
- ・財団法人 大阪府文化財センター 2008 『堺環濠都市遺跡』 I (SKT959地点)
- ・大阪歴史博物館 2014 『大坂遺産 難波の宮—遺跡を読み解くキーワード—』
- ・川村紀子 2010 『江戸時代大阪におけるミニチュア土製品の一考察』 『大阪歴史博物館 研究紀要』 第8号 財団法人 大阪市文化財協会
- ・九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』
- ・小林和美 2002 『大阪陸軍幼年学校について』 『大坂城跡発掘調査報告』 I 財団法人 大阪府文化財センター
- ・佐藤 隆 1998 『実年代資料 大阪』 『第12回関西近世考古学研究会大会発表要旨』 関西近世考古学研究会
- ・佐藤 隆 2008 『大坂本願寺に関する考古学資料—特別史跡大坂城跡における発掘調査成果から—』 『大阪歴史博物館 研究紀要』 第7号 財団法人 大阪市文化財協会
- ・橋山 洋 1995 『近世大坂出土の土師質土器編年、素描』 『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
- ・財団法人 瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006 『江戸時代のやきもの—生産と流通—記念講演会・シンポジウム資料』
- ・財団法人 瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006 『江戸時代のやきもの—生産と流通—』
- ・土岐市美濃陶磁歴史館 2000 『大坂城出土の桃山陶磁 豊臣期のやきもの』
- ・土岐市美濃陶磁歴史館 2008 『桃山時代の茶陶生産』
- ・藤沢良祐 2002 『瀬戸・美濃大窯編年の再検討』 『研究紀要』 第10輯 財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター
- ・松尾信裕 1994 『豊臣期大坂城の規模と構造—発掘調査から推定される豊臣期大坂城三ノ丸の範囲—』 『大阪市文化財論集』 財団法人 大阪市文化財協会
- ・松尾信裕 2005 『近世大坂の発掘調査と地域史研究』 『日本歴史』 第690号 日本歴史学会編
- ・松尾信裕 2014 『近世城下町の誕生と拡大』 『大阪上町台地の総合的研究』 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪市文化財研究所・大阪歴史博物館
- ・森 親 2003 『～小倉名物～‘三官館’の壺』 『葦火』 106号 (財) 大阪市文化財協会

なお、本文中では、財団法人 大阪市文化財協会を市文協、公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所を大文研、財団法人 大阪文化財センターを大文セに省略している。

表5 土製玩具類 観察表

図版番号	掲載番号	地区	第Ⅲ区画	第Ⅳ区画	遺構番号 遺構種類	種別	器形	種別	成形	色調(釉色)	高さ・長さ (cm)	幅(cm)	奥行・厚さ (cm)	備考
18	801	1区	2C	7j	1091土坑	土 人 形 人 物	力士	土師質	型合せ	にぶい黄橙	5.0	最大 3.3	最大 1.3	足欠損
18	802	1区	2C	7j	1089土坑		女	土師質	型合せ	にぶい黄橙	4.6	最大 4.5	最大 2.3	孔 0.4cm
18	803	1区	2D	7a	第3-3層 (3-2層混 じる)		おぼこ	土師質	型合せ	にぶい橙	5.8	最大 3.8	最大 1.6	足部分割離
18	804	2区	2C	6j,6a	2011土坑		虚無僧	土師質	型合せ	にぶい橙	5.4	最大 2.2	最大 1.8	孔 0.4cm
18	805	1区	2C	7j	1091土坑		天神	土師質	型合せ	にぶい橙	[4.6]	最大 4.5	最大 2.4	顔部欠損
18	806	1区	2C	7j,8j	第3-3層		人形	軟質灰 胎陶器	型合せ	浅黄橙 (明緑灰)	[4.4]	[3.5]	[0.9]	顔部半身欠損 孔 0.4cm 馬に乗る
18	807	1区	2D	7a,8a	第3-3層		人形	軟質灰 胎陶器	型合せ	灰白 (明緑灰)	[6.0]	[2.9]	0.5	半身欠損 中空 孔 0.4cm
18	808	1区	2C	7j,7a	1160土坑		人形	軟質灰 胎陶器	型合せ	淡黄 (明緑)	[5.0]	2.5	1.6	頭、右手欠損 籠を持つ
18	809	1区	2C	7i,8i	第3-3層		西行	土師質	型合せ	にぶい橙	[5.8]	2.7	2.2	顔部欠損 笠を背負う 5mm大の長石含む
18	810	1区	2C	7j,7a	第3-2層		西行	土師質	型合せ	にぶい黄橙	[4.7]	最大 3.6	最大 2.6	顔部欠損 笠を持つ
18	811	2区	2D	4a	2074溝		恵比寿	土師質	型合せ	橙	4.4	最大 2.9	最大 1.9	胴を持つ 孔 0.3cm
18	812	2区	2D	5a	2072土坑		不明	土師質	型合せ	にぶい橙	8.4	最大 4.1	最大 2.3	顔笠をかぶる 孔 0.9cm
18	813	2区	2C	5j	2025土坑		力士か	土師質	型合せ	にぶい橙	[6.8]	4.3	最大 2.1	上部欠損 孔 0.5cm
18	814	1区	2D	7b	第4層上面		漁師	土師質	型合せ	にぶい黄橙	5.8	最大 4.4	最大 1.6	魚籠を持つ 孔 0.3cm
18	815	1区	2C	7j	1091土坑		地蔵尊	土師質	型合せ	にぶい橙	[8.7]	最大 3.4	最大 2.7	顔部欠損 孔 1.5cm
18	816	1区	2C	8i,8j	第3-4-1層		大黒	土師質	型合せ	にぶい橙	6.4	最大 4.0	2.6	小壺を持ち米俵に載る 孔 1.3cm
18	817	1区	2C	7j	第3-4-2層		布袋	土師質	型合せ	にぶい橙	5.1	最大 4.6	最大 3.6	彩色わずかに残る 中空
18	818	1区	2D	7a	1081土坑		太夫	土師質	型合せ	浅黄橙	[9.5]	最大 5.3	3.4	顔部欠損 中空 孔 0.5cm
18	819	1区	2C	7j	1091土坑		蛇	土師質	型押し	にぶい橙	1.3	徑 2.5	0.6	スス付着か 裏面凹凸
18	820	1区	2C	7i	第3-3層		鳥	軟質灰 胎陶器	型合せ	橙 明赤褐 (明緑)	4.4	5.8	0.8	片面欠損 中空 孔 0.3cm
18	821	2区	2D	6a,b	2079土坑	魚	軟質灰 胎陶器	型合せ	橙 明赤褐 (黄緑)	3.0	5.5	0.5	片面欠損 中空	
18	823	1区	2C	7j	1091土坑	鳥	土師質	型合せ	にぶい橙	[3.5]	6.1	最大 2.6	顔部孔 0.2cm 体部孔 0.3cm × 2	
18	824	1区	2D	7a	第3-3層 (3-2層混 じる)	鳥	土師質	型合せ	にぶい黄橙	3.4	[2.6]	[1.7]	片羽欠損 孔 0.3cm	
18	825	1区	2C	7j	1091土坑	鳥	土師質	型合せ	浅黄橙	6.5	[6.0]	最大 2.8	孔 1.2cm	
18	826	1区	2D	7a,8a	第3-2層	獅子	土師質	型合せ	にぶい橙	[3.5]	5.5	2.1	後足欠損	
18	827	1区	2D	8a	第3-4-1層	猿	土師質	型合せ	明緑灰	5.5	3.5	最大 3.1	孔 1.1cm	
18	828	1区	2C	7j	1091土坑	猿	土師質	手づくね	橙	7.1	5.4	5.5	両足先が欠損	
18	829	1区	2D	7b	1087土坑	馬	土師質	型合せ	にぶい橙	5.4	6.4	1.7	彩色(赤)	
18	830	1区	2D	8a	1193土坑 上層	狐	土師質	型合せ	橙	7.3	最大 4.3	最大 2.9	孔 0.9cm	
18	831	1区	2D	7a,8a	第3-2層	犬か	土師質	手づくね	灰白	[7.6]	2.5	[3.4]	顔と足欠損 中空 孔 0.6cm	
18	832	1区	2D	8a	1193土坑 上層	牛	土師質	型合せ	橙	[3.9]	7.4	2.4	後足欠損 孔 1.0cm	
18	833	1区	2C	7j	1091土坑	牛	瓦質	型合せ + 手づくね	黒	[6.2]	[15.6]	[8.8]	角と体部欠損 中空 鼻孔 0.8cm 耳孔 1.0cm × 2	
18	834	1区	2D	8b,8c	1040土坑	狐	土師質	型合せ + 手づくね	にぶい橙	14.5	5.9	5.2	前足と尾が欠損 玉を銜える	
18	835	1区	2C	6~ 9j	1092土坑	犬	土師質	型合せ + 手づくね	にぶい橙	[7.2]	[10.0]	[4.6]	下半部欠損 中空	

図版 番号	掲載 番号	地区	第Ⅲ 区画	第Ⅳ 区画	遺構番号 遺構種類	種別	器形	種別	成形	色調(緑色)	高さ・ 長さ (cm)	幅(cm)	奥行・ 厚さ (cm)	備考	
18	836	2区	2D	4.5a	2073 土坑	掘 出 遺 物	馬	土師質	型合せ+ 手すくね	橙	[4.9]	8.3	4.1	頭部欠足欠損 孔0.4cm	
18	837	1区	2D	8a	第3-4-1層		土瓶	陶器	轆轤	灰白 (暗赤褐)	2.1	[3.1]	[2.7]	1/2欠損 底部窪陥	
18	838	1区	2C	7j	1089 土坑		鉢	陶器	轆轤	灰白 (灰黄褐)	[2.5]	[3.7]	[1.7]	1/2欠損	
18	839	2区	2C	5j	2025 土坑		碗	磁器	轆轤	灰白 赤褐	1.2	口径 2.2	底径 0.8	色絵 高台一部欠損	
18	840	1区	2C	7a,8	第3-4層		小杯	磁器	轆轤	灰白 赤褐 暗赤褐	2.4	[2.7]	[1.5]	色絵 3/4欠損	
18	841	1区	2C	7j	第3-4-2層		皿	軟質施 釉陶器	轆轤	橙 黄橙 (明緑)	1.4	5.5	2.2	内面から口縁に施釉 底部糸切り痕	
18	842	1区	2C	7j	第3-4-2層		蓋	軟質施 釉陶器	轆轤	橙 黄橙 (明緑)	2.6	最大径 4.4	底径 2.7	底部糸切り痕	
18	843	2区	2C, 2D	5.6, 5.6a	2025 土坑		蓋	軟質施 釉陶器	轆轤	橙 (明緑)	3.5	最大径 4.1	底径 1.9	縁跡は口縁のみ 底部糸切り痕	
18	844	1区	2D	8a	1193 土坑		蓋	陶器	型押し+ 手すくね	にふい橙 (暗緑)	2.1	径 2.8	1.7	つまみ部分あり	
18	845	2区	2D	4a	2074 溝		煙管	軟質施 釉陶器	手すくね	(明黄褐 にふい赤 褐)	[5.6]	径 0.8		火皿径1.1cm 一部欠損	
18	846	1区	2D	7a,8a	第3-3層 肩部(2層 混じる)		掘 出 遺 物	土師質	手すくね	浅黄橙	1.5	最大径 3.2			孔0.7cm
18	847	1区	2D	7a,8a	1151 土坑			蓋	土師質	型押し	橙	1.3	径 5.2	0.6	つまみ部分が花の形
18	848	1区	2C	7j	第3-3層 風			蓋	土師質	型押し	橙	[0.8]	径 5.6	0.6	1/2欠損 つまみに銅
18	849	1区	2D	8a	第3-4-1層			鉢	軟質施 釉陶器	轆轤	橙	3.2	口径 3.8	底径 1.7	内面から口縁に施釉 底部糸切り痕
18	850	1区	2C	7j	1091 土坑			羽釜	土師質	手すくね	にふい橙	2.3	最大径 3.5	0.4	
18	851	1区	2C	7j,8j	第3-3層			蓋	土師質	手すくね	にふい黄橙	1.1	径 3.1	0.5	つまみ部分あり
18	852	1区	2C	7j	1091 土坑			鉢	軟質施 釉陶器	轆轤+型 押し	にふい黄橙 (黄)	[1.9]	[4.1]	[3.8]	口縁欠損
18	853	2区	2D	4a	2074 溝			用途不 明	土師質	型押し	にふい橙	2.1	径 6.1	0.6	見込に「左近」の文字 口縁孔0.2cm
18	854	1区	2D	7a,8a	第3-2層			灯明具	軟質施 釉陶器	轆轤+手 すくね	灰白 (浅黄)	1.8	口径 4.0	底径 2.7	内面の施釉 孔0.7×0.4cm
18	855	1区	2D	8a	西側側溝			播鉢	土師質	手すくね	橙	2.5	[4.7]	[5.0]	1/3残存
18	856	1区	2D	7b	1087 土坑	土鍋	施釉陶 器	轆轤	灰白 (に ふい赤褐)	4.4	口径 7.1	底径 2.7	把手2か所 3足あり 内面に付着物あり		
18	857	1区	2D	7b	1087 土坑	鉄釜	土師質	型合せ	橙	3.9	最大径 9.2	底径 4.6	3足		
18	858	1区	2D	8a	1193 土坑	急須	陶器	型合せ+ 手すくね	淡黄 灰白 (暗緑)	7.6	6.2	[5.9]	蓋、注口、把手欠損		
18	859	1区	2D	7b	1087 土坑	甕	土師質	板造り	橙	5.2	15.5	6.0	3連 内側にスス		
18	860	1区	2D	8a	第3-4-1層	掘 出 遺 物	横	土師質	型合せ	にふい黄橙	[1.9]	4.1	[6.5]	一部欠損	
18	861	1区	2D	7a	第3-2層		神興	土師質	型合せ	にふい橙	[3.2]	2.0	1.9	頭頂部と屋根一部欠損 孔0.5cm	
18	862	1区	2C	7j	1091 土坑		神社・ 狛犬	土師質	型合せ	にふい橙	[4.2]	4.1	1.9	頭頂部欠損 スス付着 孔0.4cm	
18	863	1区	2C	7i	第3-4-2層		塔	土師質	型合せ	橙	4.8	1.7	1.7	五重塔 屋根一部欠損 孔0.3cm	
18	864	1区	2C	7j	1089 土坑		屋形船	土師質	型合せ	浅黄橙	4.1	[8.2]	2.4	一部欠損	
18	865	1区	2C	7j	第3-4-2層		神興	土師質	型押し	浅黄橙	[4.7]	3.6	3.4	頭頂部欠損 中空 孔0.2cm×4	
18	866	1区	2D	8b,8c	1040 土坑		家	土師質	型合せ	にふい黄橙	4.5	5.4	[1.8]	片蓋欠損 中空 孔0.2cm	
18	867	2区	2C, 2D	5.6ja	2025 土坑		家	土師質	型合せ	にふい黄橙	5.2	6.2	3.5	一部欠損 屋根に孔0.2cm	
18	868	1区	2C	7j	1089 土坑		太鼓	土師質	型合せ	黄灰	[6.6]	6.8	[2.3]	片面欠損 彩色(赤褐) 巴紋 中空 孔0.5×0.3cm	

図版 番号	掲載 番号	地区	第Ⅲ 区画	第Ⅳ 区画	遺構番号 遺構種類	種 別	器 形	種 別	成 形	色調(釉色)	高さ・ 長さ (cm)	幅(cm)	奥行・ 厚さ (cm)	備 考
18	869	1区	2D	8a	1193土坑 上層	碁石	塔の屋根 椽か	軟質胎 袖陶器	型押し	橙 淡黄 (明緑)	3.7	6.9	[5.9]	5角形 裏面凹凸
19	870	1区	2D	8c	石列掘方及 び46アゼ		碁石	土師質	手づくね	にぶい橙	1.9	1.9	0.7	
19	871	1区	2D	8c	石列掘方及 び46アゼ		面子	土師質	手づくね	にぶい橙	1.9	1.5	1.0	
19	872	1区	2D	8c	石列掘方及 び46アゼ		面子	土師質	手づくね	にぶい橙	1.7	1.5	0.7	
19	873	2区	2D	5a	2081土坑	泥 面 子	面子	土師質	型押し	浅黄橙	2.9	2.9	0.8	「二」か
19	874	2区	2D	5a	2081土坑		面子	土師質	型押し	にぶい黄橙	3.1	3.0	最大 0.8	「水」か 裏面凹凸
19	875	1区	2D	8a	第3-2層		面子	土師質	型押し	にぶい橙	3.8	4.0	1.1	家紋か
19	876	1区	2C	7j	第3-3層		面子	土師質	型押し	にぶい橙	4.0	3.9	1.4	「蔵」
19	877	1区	2D	7a	第3-2層		面子	土師質	型押し	浅黄橙	4.6	4.6	1.1	「水」か 裏面凹凸
19	878	1区	2D	7a,8a	第3-3層 胴部(2層 混じる)		独楽	土師質	型押しか	にぶい橙	4.5	4.5	1.9	棒刺孔 0.3cm 裏面尖る
19	879	1区	2D	7a,8a	第3-2層		楕	土師質	型押し	にぶい橙	2.9	2.4	0.8	裏面凹凸
19	880	1区	2D	8a	1193土坑 上層	楕	土師質	型押し+ 手づくね	にぶい橙	3.2	3.2	1.6	彩色(赤褐)	
19	881	2区	2D	5a	2072土坑	楕	土師質	型押し	にぶい橙	3.6	[2.6]	0.6	裏面大きく凹む 目・耳の孔 0.2 cm	
19	882	1区	2C	7j	1089土坑	芥 子 面 子	人物	土師質	型押し	浅黄橙	3.3	2.8	0.5	裏面大きく凹む
19	883	1区	2C	7j	1089土坑		人物	土師質	型押し	にぶい橙	3.0	2.8	0.5	裏面凹凸
19	884	1区	2D	7b	1081土坑	そ の 他	山状	土師質	型押し	橙	2.9	2.4	0.7	裏面凹凸 片耳欠損
19	885	1区	2D	7a,8a	第3-3層		人物	土師質	型押し	灰白	3.7	1.8	0.6	裏面浅く凹む
19	886	1区	2C	8i,8j	第3-4-1層		人物	土師質	型押し	にぶい橙	6.4	4.6	0.6	裏面大きく凹む 鼻先が欠損
19	887	2区	2D	5a	2072土坑		般若か ダルマ か	土師質	型押し	浅黄橙	2.4	3.8	0.5	裏面に孔 0.3cm
19	888	1区	2C	8j	第3-4-1層	ダルマ か	土師質	型押し	灰白	2.4	2.3	1.0	裏面凹凸	
19	889	1区	2C	7j	1091土坑	面 撰	花	土師質	型打ち	にぶい橙	4.1	[3.1]	0.6	1/3欠損
19	890	1区	2C	7i,8	第3-4層		人物	土師質	型打ち	にぶい橙	4.1	[3.2]	0.7	
19	891	1区	2C	7j	1091土坑		人物	土師質	型打ち	にぶい橙	4.7	3.2	0.8	
19	892	2区	2D	5a	2072土坑		城	土師質	型打ち	にぶい黄橙	6.1	4.3	1.0	
19	893	1区	2C	7i,8j	第3-3層		埴 面	埴面	軟質胎 袖陶器	手づくね	灰白 浅黄 (明緑)	[2.4]	[5.2]	最大 2.3
19	894	1区	2C	7j	1091土坑	鈴	鈴	土師質	手づくね	にぶい黄橙	3.6	径 3.0		中空 孔 0.4cm
19	895	2区	2C	4j	2013土坑		鈴	土師質	手づくね	灰白(暗灰)	4.2	径 3.2		中空 鈴軸 孔 0.3cm

[]は残存確

表6 骨角製品 観察表

図版番号	掲載番号	種別	器形	調査区名	第III区画	第IV区画	遺構番号 遺構種類	高さ・長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
19	421	骨角製品	双六の駒(蓋)	1区	2C	7j,8j	第3-4層	0.2	[1.6]	0.2	
19	422	骨角製品	双六の駒	1区	2D	8a	第3-4-1層	1.1	2.4	0.5	
19	905	骨角製品	横櫛	1区	2D	8c	右列掘方及び46アゼ	[7.9]	[1.0]	0.5	
19	906	骨角製品	櫛払い	1区	2C	7j	第3-4-2層	[8.4]	最大1.8	最大0.5	
19	907	骨角製品	櫛秤か	2区	2C, 2D	5.6j, 5.6a	2025土坑	[5.9]	0.4	0.4	
19	908	骨角製品	櫛秤	1区	2D	8b,8c	1040土坑	[5.2]	0.4	0.4	
19	909	骨角製品	櫛秤か	2区	2C	6j	2015土坑	[11.3]	最大0.6	0.5	
19	910	骨角製品	櫛	2区	2D	6a,b	2079土坑	[13.1]	最大1.0	最大0.6	
19	911	骨角製品	双六の駒の蓋	2区	-	-	2397ピット	0.5	[2.0]	最大0.5	
19	912	骨角製品	双六の駒	1区	2D	8a	西側側溝	1.0	2.5	最大0.8	

[]は残存値

表7 金属製品 観察表

図版番号	掲載番号	種別	器形	調査区名	遺構番号 遺構種類	第III区画	第IV区画	高さ・長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
21	925	鉛製品	火縄銃の玉	2区	第6層	2C	4j	1.4	1.3	1.3	
21	926	鉛製品	インゴット	2区	2038溝最上部	2C	4j	[5.2]	[4.4]	0.4	
21	927	金属製品	置物(盤)	2区	2005土坑	2C	6j	2.7	8.5	最大6.2	
21	928	金属製品	小刀柄	2区	2308井戸	2C	5j	[7.0]	1.4	0.4	
21	929	金属製品	小刀柄	1区	1089・1091土坑	2C	7j	[9.4]	1.5	0.5	
21	930	金属製品	棒金具の天井金	1区	第3-1層	2D	8b	3.9	2.3	0.2	中孔2.7×1.0cm
21	931	金属製品	櫛	1区	1085井戸	2D	7a	4.0	最大1.3	0.3	
21	932	金属製品	櫛	1区	1092土坑	2C	6~7j	8.1	最大1.0	0.2	
21	933	金属製品	櫛	1区	第3-3層	2C	7j	[11.3]	最大0.4	最大0.3	
21	934	金属製品	ピンセットか	1区	第3-4-2層	2C	7j	13.8	最大0.4	0.2	
21	935	金属製品	不明棒状製品	2区	2005土坑	2C	6j	12.6	最大0.6	最大0.8	
21	936	金属製品	用途不明	1区	1193土坑	2D	8a	[8.9]	0.4	0.1	
21	937	金属製品	用途不明	1区	1155土坑	2D	7a,8a	[11.3]	0.8	0.2	
21	938	金属製品	杓子	1区	1087土坑	2D	7b	[15.0]	[9.3]	1.6	
21	939	金属製品	座金具	1区	第3-2層	2C	7j	2.2	径2.2	0.2	
21	940	金属製品	座金具	1区	1085井戸	2D	7a	1.6	径2.0	0.1	
21	941	金属製品	不明円形製品	2区	2079土坑	2D	6a,b	5.1	5.1	0.2	
21	942	金属製品	煙管(権首)	2区	2013土坑	2C	4j	6.0	口径1.0		火口径1.6cm
21	943	金属製品	煙管(権首)	1区	第3-4-2層	2C	7j	4.4	口径1.0		火口径1.4cm
21	944	金属製品	煙管(吸口)	1区	第3-4-1層	2D	8a	6.0	口径1.1		吸口側の径0.5cm

[]は残存値

表8 ガラス製品 観察表

図版 番号	掲載 番号	調査 区名	第Ⅲ 区画	第Ⅳ 区画	遺構番号 遺構種類	種 別	器 形	色 調	高さ・長 さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備 考
23	949	1区	2D	8a	第3 面検出時	ガラス製品	容器	薄緑	[2.1]	[3.1]	[1.2]	口縁部か 細かい文様
23	950	1区	2D	8b	1062土坑	ガラス製品	容器	—	[2.9]	[5.2]	[2.9]	底部片 カットガラス
23	951	1区	2C	7j	1089土坑	ガラス製品	容器	浅黄	[1.1]	[5.8]	[3.1]	型押しによる文様
23	952	1区	2C	7j	第3-2層	ガラス製品	容器	灰白	[1.8]	[3.2]	[2.3]	底部の一部残存 「D」あり
23	953	2区	2C	6i	2006土坑	ガラス製品	ポッペン	薄緑	[6.4]		径0.5	管状のもの
23	955	1区	2D	8c	第3-1層	ガラス製品	ワインボト ル	暗灰黄 紺	[9.2]		径8.0	底部凹む
23	956	2区	2D	5a	2072土坑	ガラス製品	ワインボト ル	青緑	[4.5]	[14.1]	[13.5]	底部凹む

[]は残存値

版 图



1 1区 調査区西壁断面 北東から
3 1区 調査区東西断面 南から

2 1区 調査区南北断面 南東から
4 1区 西肩部整地層断面 北から



5 2区 調査区南北断面 東から
7 2区 調査区北壁断面 南から

6 2区 調査区東壁断面 北東から
8 2区 東側第7・8層 北から



1 1区 第3-5層上面・第4層上面全景 南から



2 1区 第3-4層上面全景 北から
4 2区 第4層上面西側 南から

3 3区 第4層上面東側 南西から
5 2区 2005土坑周辺 北東から



1 1区 1070土坑断面 西から
3 1区 1151・1152土坑 南東から

2 1区 1091土坑断面 南から
4 2区 2005土坑断面 西から



5 2区 2025土坑断面 東から
7 3区 3010土坑断面 南から

6 2区 2013土坑断面 西から
8 3区 3009土坑断面 南から



1 1区 基盤層上面全景 南東から



2 1区 1175土坑 東から



3 1区 北西互溜り検出状況 北東から



4 1区 1177土坑断面 南から



5 1区 1178土坑断面 西から



1 2区 第6層上面全景 南から



2 2区 第6層上面東端 全景 南か



3 2区 欄列5検出状況 南から



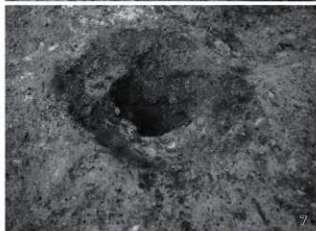
4 2区 2111石組み検出状況 南から

図版 6 徳川初期の遺構



1 2区 2033・2034炉、2035土坑検出状況 北から
3 2区 2033炉断面① 東から

2 2区 2033・2034炉完掘状況 北から
4 2区 2033炉断面② 東から



5 2区 2036炉検出状況① 東から
7 2区 2036炉完掘状況 北から

6 2区 2036炉検出状況② 東から
8 2区 2036炉断面 南から



1 2区 2053炉周辺 南西から
3 2区 2053炉断面 南西から

2 2区 2053炉周辺 羽口出土状況 南から
4 2区 2053炉完掘状況 南から



5 2区 2269土坑検出状況 南から
7 2区 2018土坑断面 東から

6 2区 2019土坑断面 東から
8 2区 2063・2332・2362ピットの関係 西から



1 2区 第7層上面全景 北から



2 2区 第7層上面東端全景 南から



3 2区 2038溝南隣遺物出土状況 西から



4 2区 2038溝 遺物出土状況 南から



1 2区 2100溝遺物出土状況 南から
3 2区 2160土坑断面 西から



2 2区 2105溝と石列 西から
4 2区 2268井戸断面 西から



5 2区 柵列11周辺 北から
7 2区 柵列13 東から



6 2区 2311ピット断面 南から
8 2区 2314ピット断面 南から



1 2区 第8-1層上面全景 北から



2 2区 第8-1層上面東半 南から



1 2区 2184ビット礎石検出状況 西から
3 2区 2182ビット礎石検出状況 西から

2 2区 2184ビット断面 西から
4 2区 2182ビット断面 西から



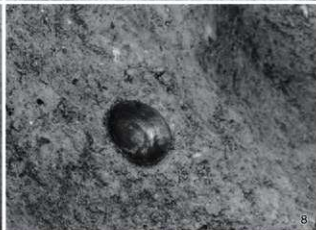
5 2区 2181ビット断面 東から
7 2区 2199ビット断面 北から

6 2区 2181ビットの切り合い 東から
8 2区 2199ビット完掘状況 北から



1 2区 2144土坑断面 北から
3 2区 2243土坑断面 南から

2 2区 2162土坑断面 西から
4 2区 2242土坑断面 南から



5 2区 2161土坑断面 東から
7 2区 2308井戸断面 東から

6 2区 2267溝断面 東から
8 2区 2308井戸土師質土器皿出土状況 北東から

1 2区 2100溝他断面
東から



2 2区 2038溝他断面
北から



3 2区 2157・2158溝断面
北から





1 2区 基盤層上面全景 北東から



2 2区 基盤層上面東端 南から



3 2区 2357ピット断面 西から



4 2区 2358ピット断面 西から



1 2区 横列17・18 東から



2 2区 2378ピット断面 南から



3 2区 2362ピット断面 西から



4 2区 2373土坑断面 西から



5 2区 2386土坑断面 南から



6 2区 2300土坑断面 東から



7 2区 2119土坑断面 南から



1 2区 2310堰状遺構完掘状況
北から



2 2区 2310堰状遺構断面
北東から



3 2区 2426土坑断面
南から



1 2区
掘立柱建物3棟出状況
南から



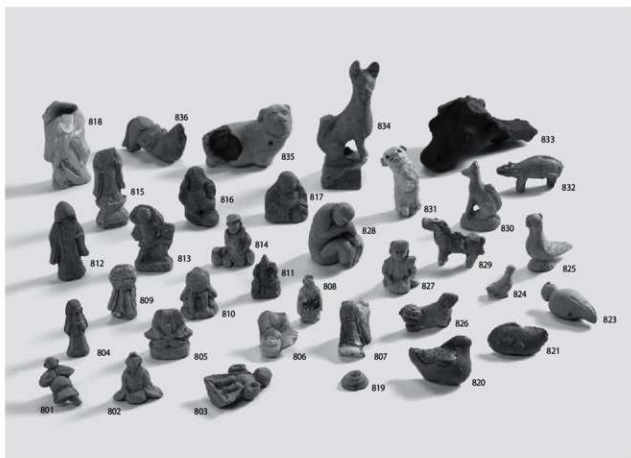
2 2区
掘立柱建物1・2棟出状況
南西から



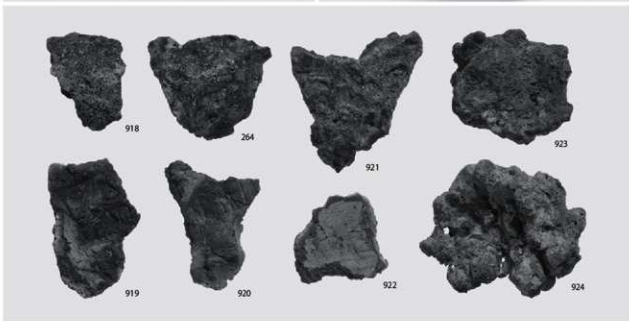
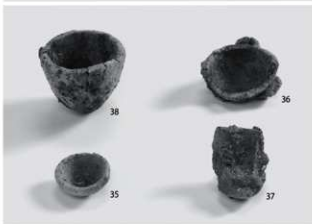
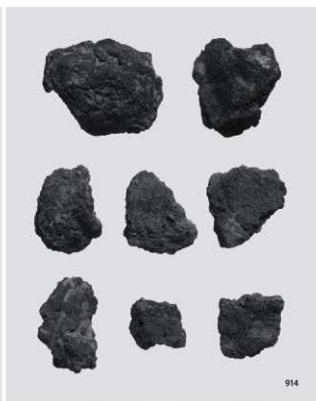
3 2区 2523ピット断面 北西から

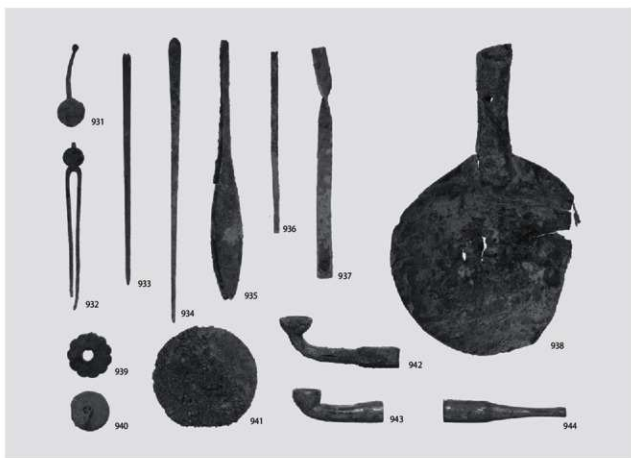
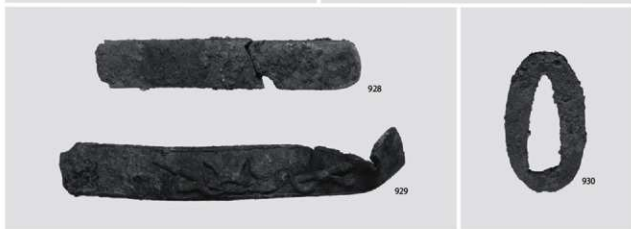


4 2区 2501ピット断面 北東から

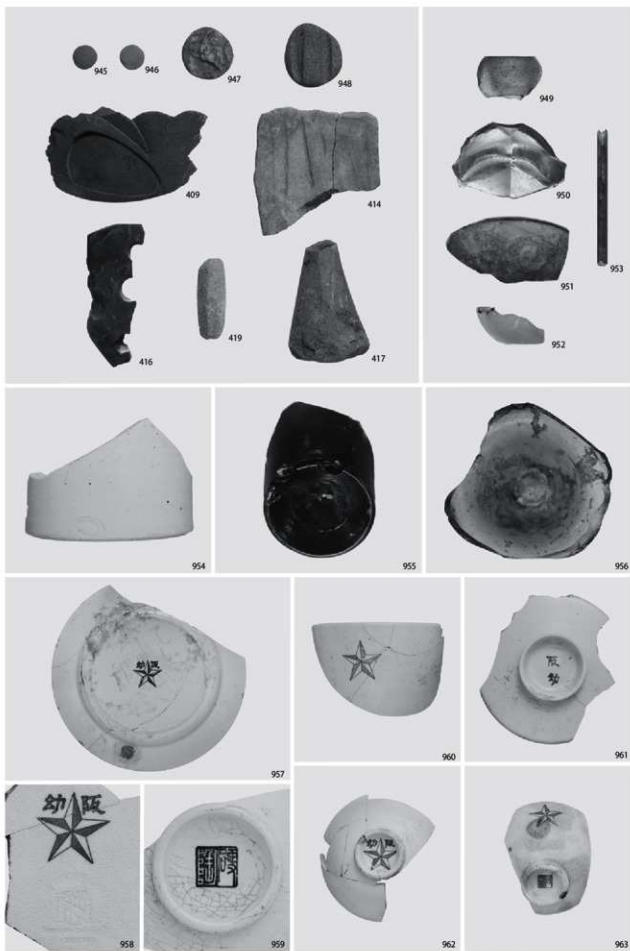












報告書抄録

ふりがな	おおさかじょうあとろ							
書名	大坂城跡 5							
副書名	大手前立体駐車場建設工事に伴う大坂城跡発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第254集							
編著者名	島崎久恵							
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL072(299)8791							
発行年月日	2015年3月20日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
おおさかじょうあとろ 大坂城跡	おおさかじょう 3-01-01 大阪府大阪市 しゅうおうくにおおてまえ 中央区大手前	27128	24	34° 41′ 05″	135° 31′ 05″	2013. 8. 1 ～ 2014. 3. 31	1590 ㎡	大手前立体 駐車場建設
なほのみやま 難波宮跡	さらやうめ ちのい 3丁目地内		27					
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構		主な遺物	特記事項		
大坂城跡 難波宮跡	城郭	安土・桃山時代	礎石・櫓列・ビット 土坑・井戸・溝 堀状遺構		国産陶器・青花・青磁・ 白磁・土師質土器・瓦質 土器・土製品・瓦・石製 品・金属製品・銭貨	豊臣前期の堀状遺構 や豊臣期の区画施設 を検出		
	城郭	江戸時代	ビット・土坑・鍛冶炉 道路状遺構		近世陶磁器・土師質土器 瓦質土器・土人形・瓦 石製品・金属製品・ 銭貨・ガラス製品	近世の廃棄土坑から 多数の遺物が出土。 徳川初期の鍛冶工房 や道路状遺構を検出		
	集落	古代	竪立柱建物		須恵器・土師器	竪立柱建物の検出		
要約	<p>今回の調査地は大坂城三の丸の西端にあたり、南半には埋没谷が位置する。谷内部は調査対象外となり、丘陵部での調査となった。</p> <p>調査では古代と考えられる竪立柱建物を検出、正方位に近い建物と西に振る建物がある。</p> <p>豊臣前期には堀状遺構を検出した。また、豊臣期を通して、南に位置する谷の屑口、調査区東端で区画施設を検出した。その他、豊臣後期の井戸なども検出、当該期の屋敷地と考えられる。</p> <p>徳川初期には鍛冶炉を複数検出、一番が徳川大坂城再興に際しての鍛冶工房であったと推定できる。</p> <p>徳川前期以降は、多くの廃棄土坑を検出、17世紀後半～幕末の多種多様な遺物が出土した。また、土坑の分布より、屋敷地の区画を復原した。</p>							

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第254集

大坂城跡5

大手前立体駐車場建設工事に伴う大坂城跡発掘調査報告書

発行年月日 2015年3月20日

編集・発行 公益財団法人 大阪府文化財センター
〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 株式会社 明新社
〒630-8141 奈良県奈良市南京終町3丁目464番地